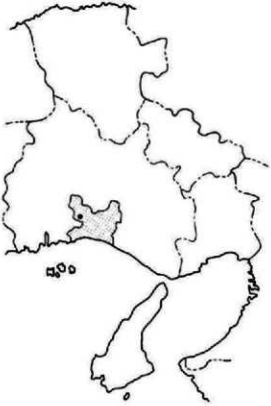
姫　路　市

太市中古墳群（おおいちなか）

－一般国道29号改築事業　発掘調査報告書－



2003年3月

兵庫県教育委員会

太市中古墳群　遠景（西から空中写真）

太市中古墳群　遠景（南から空中写真）

平成5年度（930161）調査区　全景（上空から）

平成6年度（940202）調査区　全景（上空から）

平成５年度調査区
(930161)

古墳群　全景
(南西から)

1・2・8・10号墳
(南西から)

7・8・9・10号墳
(南西から)

巻頭写真図版 4

平成6年度調査区
(940202)

古墳群　全景
(南西から)

4・5・6
・12・13号墳
(北東から)

5・6・12・13号墳
(南西から)

2号墳　石室内遺物出土状況（左：全景／右：アップ）

3号墳　石室内遺物出土状況（左：全景／右：アップ）

4号墳　石室（左：全景／右：玄門）

4号墳　石室内遺物出土状況（左：全景／右：アップ）

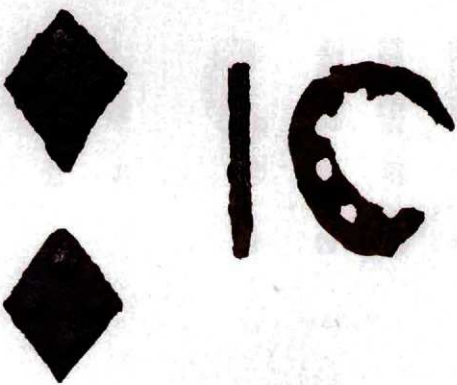
6号墳　第1床面遺物出土状況（左；全景／右；アップ）

6号墳　第2床面遺物出土状況（左；全景／右；アップ）

9号墳　石室内遺物出土状況（左；全景／右；アップ）

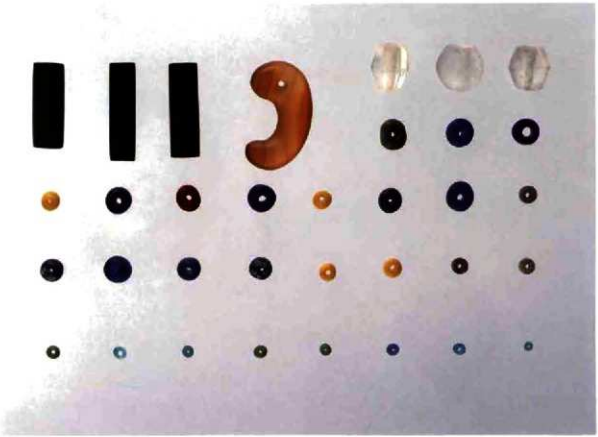
10号墳　石室内遺物出土状況（左；全景／右；アップ）

土器　4号墳出土　須恵器杯蓋・杯身



金属器　6号墳出土　鐙・鏡付飾金具

金属器　2・6・8・9・10号墳出土　耳環



玉類　6号墳出土　勾玉・管玉・切子玉・小玉

例　　言

1．本書は、兵庫県姫路市太市中に所在する『太市中古墳群』の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は建設省姫路工事事務所（当時）の、整理作業は国土交通省姫路国道工事事務所の、それぞれ委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。

3．発掘調査は平成５・６年度に実施した。調査にかかる作業は、株式会社神崎組と委託契約を締結して行なった。また平成８年度に施工に伴って古墳群の一部に影響が出たことから、損壊状況を把握するための調査を行なった。

4．調査現場での遺構実測・写真撮影は、各調査員が分担して行なった。

5．整理作業は平成13～14年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。一部の金属器保存処理は㈱元興寺文化財研究所に処理作業を、遺物写真は㈱イーストマンに撮影を、それぞれ委託した。

6．本書に使用した方位は、国土座標Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P）を使用した。また方位は座標北を指す。

7．本書に掲載した図のうち、遺跡分布図には国土地理院発行２万５千分の１地形図「姫路北部」「竜野」図幅を使用した。遺構図については、現地で調査担当者が実測した図面を基に作成した。

8．発掘調査・整理作業に際しては、姫路市教育委員会　文化財課文化財係をはじめ、下記の方々のご指導・ご助言を受けた。記して感謝いたします。

高瀬要一・永井信弘・中浜久喜・土生田純之・森本　徹・呂　智栄・李　子文・渡辺智恵美

9．本書の作成に当たっては兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所整理嘱託員の補助を得た。また執筆は調査担当者で分担し、担当箇所を目次に明示している。編集は柏原が行なった。

10．本報告にかかる出土遺物ならびに記録写真、関係書類は埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会魚住分館・福崎分館において保管している。

凡　　例

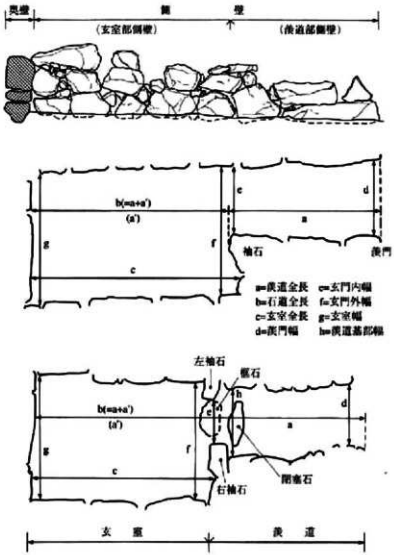
1．遺物は種別ごとに通し番号とし、金属器はM、玉類はT、石器・石製品はＳを冠して区別した。

2．土器は種別によって断面の表現を変え、須恵器を黒塗り・土師器を白抜きで示した。

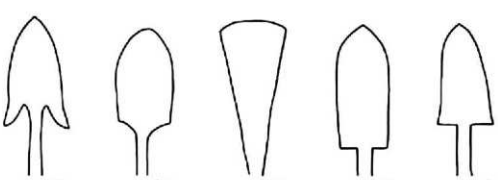
3．横穴式石室の部位名称は、凡例１の通りとする。なお４号墳は石室の形態が異なるため、名称の示す部位が若干異なっている（凡例１下）。

4．遺物の法量については、巻末の一覧表に一括した。なお、土器の計測部位は凡例３の通りとする。また金属器・玉類で変則の形態をなすものについては、便器的に最大規模の部分を「全長」、直交する最大規模を「幅」とそれぞれ呼称した。

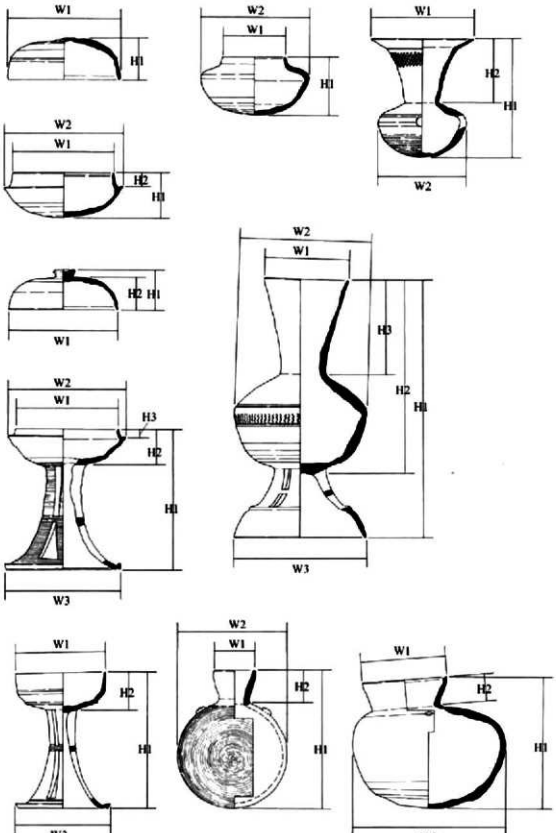
5．鉄鏃の型式は、鏃身の平面形から分類し、「柳葉・圭頭・方頭・五角・三角」の名称を用いた（凡例２）。また鏃身に対する篦被の長さが２倍を超えるものについて「長頸鏃」の名称を用いた。



凡例1　横穴式石室　部位名称



凡例2　金属器　計測部位


W1
H1
W2
W1
H1
W1
H2
H1
W2
W1
H2
H1
W2
W1
H2 H1
W1
W2
W1
H3
H2
H1
W3
W2
W1
H3
H2
H1
W3
W1
H2
H1
W3
W2
W1
H2
H1
W1
H2
H1
W2

凡例3　土器　計測部位

本文目次

第1章　調査の経緯と経過
第1節　調査に至る経過 ……（柏原正民）……（1）
第2節　平成5年度の調査 ……（柏原）……（1）
第3節　平成6年度の調査 ……（柏原）……（2）
第4節　損壊状況調査 ……（長濱誠司）……（3）
第5節　整理作業 ……（柏原）……（5）

第2章　位置と環境
第1節　遺跡の位置 ……（柏原）……（6）
第2節　周辺の遺跡 ……（柏原）……（6）
第3節　太市中古墳群の認識経過……（柏原）……（9）

第3章　発掘調査の成果
第1節　古墳群の立地 ……（柏原）……（13）
第2節　1号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（13）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守徳男）……（17）
第3節　2号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（18）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（24）
2．金属器 ……（柏原）……（30）
第4節　3号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（31）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（34）
2．金属器 ……（柏原）……（35）
第5節　4号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（35）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（45）
2．金属器 ……（柏原）……（49）
3．玉類・石製品 ……（柏原）……（49）
第6節　5号墳
Ⅰ　遺構 ……（深井明比古）……（54）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（62）
2．金属器 ……（柏原）……（63）
第7節　6号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（63）

Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（74）
2．金属器 ……（柏原）……（84）
3．玉類・石製品 ……（柏原）……（93）
第8節　7号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（94）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（95）
第9節　8号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（96）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（103）
2．金属器 ……（柏原）……（103）
3．玉類・石製品 ……（柏原）……（105）
第10節　9号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（105）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（114）
2．金属器 ……（柏原）……（115）
3．玉類・石製品 ……（柏原）……（116）
第11節　10号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（119）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（125）
2．金属器 ……（柏原）……（128）
3．玉類・石製品 ……（柏原）……（128）
第12節　12号墳
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（129）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（134）
第13節　13号墳
Ⅰ　遺構 ……（濱井）……（137）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（138）
第14節　木棺墓
Ⅰ　遺構 ……（柏原）……（138）
Ⅱ　遺物　1．土器 ……（井守）……（139）
2．金属器 ……（柏原）……（140）

第4章　太市中古墳群出土耳環の分析……（141）
財団法人　元興寺文化財研究所　渡辺智恵美

第5章　まとめ
第1節　出土土器について ……（井守）……（153）
第2節　古墳の構造について ……（柏原）……（157）

挿 図 目 次

第1図　平成5年度　現地説明会……2
第2図　平成6年度　成果報告会……2
第3図　太市中2号墳　石室損壊状況……4
第4図　周辺の遺跡……8
第5図　太市中古墳群　調査前の状況……9
第6図　太市中古墳群周辺の遺跡分布状況……10
第7図　太市中古墳群　全体図……12
第8図　1号墳　墳丘（検出後）……14
第9図　1号墳　石室平面……15
第10図　1号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン……16
第11図　1号墳　石室墓壙平面（石材除去後）……17
第12図　1号墳　出土土器……17
第13図　2号墳　墳丘（検出後）……19
第14図　2号墳　石室平面……20
第15図　2号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン……21
第16図　2号墳　石室内遺物出土状況……22
第17図　2号墳　石室墓壙平面、開口部石材……23
第18図　2号墳　出土土器①……25
第19図　2号墳　出土土器②……27
第20図　2号墳　出土土器③……28
第21図　2号墳　出土金属器……29
第22図　3号墳　墳丘（検出後）……32
第23図　3号墳　石室、遺物出土状況、墓壙……33
第24図　3号墳　出土土器……34
第25図　4号墳　墳丘（検出後）……36
第26図　4号墳　石室平面……37
第27図　4号墳　石室右側壁・玄門立面、床面……38
第28図　4号墳　石室奥・右側壁立面、床面（礫床）…39
第29図　4号墳　石室内遺物出土状況……41
第30図　4号墳　周溝内遺物出土状況……42
第31図　4号墳　石室墓壙平面（石材除去後）……43
第32図　4号墳　出土土器①……46
第33図　4号墳　出土土器②……47
第34図　4号墳　出土土器③……48
第35図　3・4号墳　出土金属器……50
第36図　4号墳　出土金属器②……51
第37図　4号墳　出土玉類①……52
第38図　4・6号墳　出土玉類……53
第39図　5号墳　墳丘（検出後）……56
第40図　5号墳　石室平面、墳丘外護列石平面……57
第41図　5号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン……58
第42図　5号墳　石室内遺物出土状況……59
第43図　5号墳　石室内組み合わせ式箱形石棺……60
第44図　5号墳　石室・石棺墓壙平面……61
第45図　5号墳　出土土器……62
第46図　6号墳　墳丘（検出後）……65
第47図　6号墳　石室平面……66
第48図　6号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン……67
第49図　6号墳　石室内遺物出土状況　第1床面（土器）…68
第50図　6号墳　石室内遺物出土状況　第1床面（金属器）…69
第51図　6号墳　石室内遺物出土状況　第2床面……71
第52図　6号墳　閉塞石状況、石室排水溝平面……72
第53図　6号墳　石室墓壙平面（石材除去後）……73
第54図　6号墳　出土土器①……75
第55図　6号墳　出土土器②……77
第56図　6号墳　出土土器③……78
第57図　6号墳　出土土器④……79
第58図　6号墳　出土土器⑤……81
第59図　6号墳　出土土器⑥……82
第60図　6号墳　出土土器⑦……83
第61図　6号墳　出土金属器①……85
第62図　6号墳　出土金属器②……87
第63図　6号墳　出土金属器③……88
第64図　6号墳　出土金属器④……89
第65図　6号墳　出土金属器⑤……90
第66図　6号墳　出土玉類②……91
第67図　6号墳　出土玉類③……92
第68図　6号墳　出土玉類④……93
第69図　7号墳　石室平面・側壁立面……95
第70図　7号墳　出土土器……95
第71図　8号墳　墳丘（検出後）……97
第72図　8号墳　石室平面……98
第73図　8号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン……99
第74図　8号墳　石室内遺物出土状況……100
第75図　8号墳　石室墓壙平面（石材除去後）……101
第76図　8号墳　出土土器……102

第77図　8・9・10号墳　出土玉類、石製品 ……104
第78図　9号墳　墳丘（検出後） ……106
第79図　9号墳　石室平面 ……107
第80図　9号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン …108
第81図　9号墳　石室内遺物出土状況 ……109
第82図　9号墳　石室墓壙平面（石材除去後） ……110
第83図　9号墳　出土土器① ……112
第84図　9号墳　出土土器② ……113
第85図　9号墳　出土土器③ ……114
第86図　9号墳　出土金属器① ……117
第87図　9号墳　出土金属器② ……118
第88図　10号墳　墳丘（検出後） ……120
第89図　10号墳　石室平面 ……121
第90図　10号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン …122
第91図　10号墳　石室内遺物出土状況 ……123
第92図　10号墳　石室墓壙平面（石材除去後） ……124
第93図　10号墳　出土土器 ……126
第94図　5・8・10号墳　出土金属器 ……127
第95図　12号墳　墳丘（検出後） ……130
第96図　12号墳　石室平面、閉塞石状況 ……131
第97図　12号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン …132
第98図　12号墳　石室内遺物、石室墓壙平面 ……133
第99図　12号墳　出土土器 ……134
第100図　13号墳　石室平面、石室墓壙平面 ……135
第101図　13号墳　石室奥・側壁立面、遺物出土状況 ……136
第102図　13号墳　出土土器 ……137
第103図　木棺墓　平面・遺物出土状況 ……139
第104図　木棺墓　出土土器 ……139
第105図　木棺墓　出土金属器 ……140
第106図　寸法測定箇所 ……142
第107図　耳環各部の名称 ……142
第108図　2号墳　M5　分析図 ……142
第109図　2号墳　M6　分析図 ……142
第110図　2号墳　M7　分析図 ……143
第111図　2号墳　M8　分析図 ……143
第112図　2号墳　M9　分析図 ……144
第113図　2号墳　M10　分析図 ……144
第114図　2号墳　M11　分析図 ……144
第115図　5号墳　M55　分析図 ……145
第116図　6号墳　M72　分析図 ……145
第117図　6号墳　M129　分析図 ……146
第118図　8号墳　M131　分析図 ……146
第119図　9号墳　M148　分析図 ……146
第120図　9号墳　M149　分析図 ……146
第121図　9号墳　M150　分析図 ……147
第122図　10号墳　M160　分析図 ……147
第123図　10号墳　M161　分析図 ……148
第124図　10号墳　M161　分析図 ……148
第125図　10号墳　M163　分析図 ……148
第126図　10号墳　M164　分析図 ……149

表　目　次

表1　太市中古墳群の古墳把握経過 …… 11
表2　材質から見た耳環の分類 ……149
表3　各古墳から出土した耳環の内訳 ……150
表4　耳環の法量 ……152
表5　耳環の分析結果と検出元素 ……152
表6　出土土器集計表 ……154
表7　古墳概要表 ……161
表8　出土土器観察表 ……162
表9　出土金属器法量表 ……172
表10　出土玉類法量表 ……175

巻 頭 図 版

巻頭写真図版1　調査区の周辺
上：太市中古墳群　遠景（西から　空中写真）
下：太市中古墳群　遠景（南から　空中写真）
巻頭写真図版2　調査区の全景
上：平成5年度調査区　全景（上空から　空中写真）
下：平成6年度調査区　全景（上空から　空中写真）
巻頭写真図版3　平成5年度調査区
上：古墳群全景（南西から）
中：1・2・8・10号墳（南西から）
下：7・8・9・10号墳（南西から）
巻頭写真図版4　平成6年度調査区
上：古墳群全景（南西から）
中：4・5・6・12・13号墳（北東から）
下：5・6・12・13号墳（南西から）
巻頭写真図版5　石室・石室内遺物出土状況①
左上1：2号墳　石室内遺物出土状況全景
左上2：3号墳　石室内遺物出土状況全景
左下1：4号墳　石室全景
左下2：4号墳　石室内遺物出土状況全景
右上1：2号墳　石室内遺物出土状況アップ
右上2：3号墳　石室内遺物出土状況アップ
右下1：4号墳　石室玄門
右下2：4号墳　石室内遺物出土状況アップ
巻頭写真図版6　石室・石室内遺物出土状況②
左上1：6号墳　第1床面遺物出土状況全景
左上2：6号墳　第2床面遺物出土状況全景
左下1：9号墳　石室内遺物出土状況全景
左下2：10号墳　石室内遺物出土状況全景
右上1：6号墳　第1床面遺物出土状況アップ
右上2：6号墳　第2床面遺物出土状況アップ
右下1：9号墳　石室内遺物出土状況アップ
右下2：10号墳　石室内遺物出土状況アップ
巻頭写真図版7　出土遺物①
上：土器　4号墳出土　頂部器杯蓋・杯身
下：金属器　6号墳出土　鉄・銅付飾金具
巻頭写真図版8　出土遺物②
上：金属器　2・6・8・9・10号墳出土　耳環
下：玉類　6号墳出土　玉類

写 真 図 版

写真図版1　1号墳①
上：古墳全景（南から）
中：開口部～石室内部（南から）
下：墓壙全景（南から）
写真図版2　1号墳②・2号墳①
上：石室近景（南西から）
中：石室　左側壁（西から）
下左：2号墳　開口部土坑（南から）
下右：同　アップ（南から）
写真図版3　2号墳②
上：古墳全景（南から）
中：開口部～石室内部（南から）
下：石室　奥壁（南から）
写真図版4　2号墳③
上：石室内部（南から）
中：石室内遺物出土状況　全景（南から）
下：石室内遺物　奥壁付近（南から）
写真図版5　2号墳④
上左：開口部石材棚設土坑（南から）
上右：石室内遺物　袖部付近（東から）
中：墓壙　石室断ち割り（南から）
下：墓壙　西側石基底（南から）
写真図版6　3号墳①
上：古墳全景（南から）
中：古墳全景（西から）
下：石室近景（南から）
写真図版7　3号墳②
上：石室内部（南から）

中：石室内遺物出土状況　全景（南から）

下：墓壙全景（南から）

写真図版8　4号墳①

上：古墳全景（南から）

中：古墳全景（東から）

下：古墳全景（北から）

写真図版9　4号墳②

左上：石室全景（南から）

左下：石室全景（北から）

右上：石室　玄門付近（南から）

右中：石室　奥壁（南から）

右下：石室　袖部～玄門（北西から）

写真図版10　4号墳③

左上1：石室　羨道基部　閉塞石（南から）

左上2：石室　羨道部　閉塞石除去（南から）

左下1：石室　玄門　左・右の袖石（北から）

左下2：石室　玄門　枢石（北から）

右上1：石室　玄門付近（北から）

右上2：石室　右側壁（東から）

右下1：石室　左側石（西から）

右下2：石室　縫目（南西から）

写真図版11　4号墳④

上：石室内遺物出土状況　全景（西から）

中：同　奥壁～右側壁付近（東から）

下：同　左側壁付近（南西から）

写真図版12　4号墳⑤

左上1：石室内遺物　玄門付近（北から）

左上2：石室内遺物　左袖部コーナー（西から）

左下1：石室内遺物　左側壁中央（西から）

左下2：石室内遺物　奥壁左コーナー（南西から）

右上1：石室内遺物　奥壁付近（南から）

右上2：石室内遺物　右袖部コーナー（北から）

右下1：石室内遺物　検出作業（左側壁付近）

右下2：石室内遺物　奥壁右コーナー（南東から）

写真図版13　4号墳⑥

左上：墓壙内遺物出土状況（北から）

左下：墓壙全景（南から）

右上1：周溝内遺物　上層（東から）

右上2：周溝内遺物　下層（東から）

右下1：墓壙北半部（南から）

右下2：墓壙正面　開口部～奥壁（南から）

写真図版14　5号墳①

上：古墳全景（南から）

中：石室全景（南から）

下：羨門～石室内部（北から）

写真図版15　5号墳②

上：羨門　閉塞石（南から）

中：墳丘　外護列石　西側面（西から）

下：墳丘　外護列石　北西側面（北から）

写真図版16　5号墳③

左上：石室内　箱式石棺　蓋石（北から）

左下：石室内　箱式石棺　蓋石（南から）

右上：石室内　箱式石棺　棺身（北から）

右下：石室内　箱式石棺　棺身（南から）

写真図版17　5号墳④

左上：石室内遺物出土状況　北半（北から）

左下1：石室内遺物　土器

左下2：石室内遺物　耳環

右上：石室内遺物出土状況　南半（南から）

右下：石室内遺物　羨門付近（南から）

写真図版18　6号墳①

上：古墳全景（南から）

中：古墳全景（東から）

下：石室全景（南から）

写真図版19　6号墳②

左上1：石室　羨門　閉塞石（南から）

左上2：石室　羨門　閉塞石（上から）

左下1：石室　羨門　閉塞石除去後（南から）

左下2：石室　玄門～羨道（北から）

右上1：石室　右袖石（北から）

右上2：石室　右側壁（北東から）

右下1：石室　左側壁（北西から）

右下2：石室　奥壁（南から）

写真図版20　6号墳③

左上：遺物出土状況　第1床面（北から）

左下：同　（南から）

右上：遺物出土状況　第2床面（北から）

右下：同　（南から）

写真図版21　6号墳④

左上1：第1床面遺物　玄門付近（北から）

左上2：第1床面遺物　奥壁付近（南から）

左下1：第1床面遺物　奥壁左コーナー

左下2：第1床面遺物　奥壁右コーナー

右上1：第1床面遺物　袖部コーナー

右上2：第1床面遺物　上器・鉄刀

右下1：第1床面遺物　耳環・鉄鏃

右下2：第1床面遺物　土器

写真図版22　6号墳③

左上1：第2床面遺物　奥壁付近（南から）

左上2：第2床面遺物　馬具

左下1：第2床面遺物　羨道部（北から）

左下2：第2床面遺物　玉類

右上1：第2床面遺物　奥壁付近（東から）

右下1：第2床面遺物　玉類

右下2：第2床面遺物　玉類

写真図版23　6号墳④

上：前庭部　排水溝（南西から）

中：周溝　墳丘東側カット面（北東から）

下：墓壙全景（南から）

写真図版24　7号墳

上：古墳全景（南から）

中：石室　左側壁残欠（西から）

下：墓壙　残存部全景（南から）

写真図版25　8号墳①

上：古墳全景（南から）

中：古墳全景（東から）

下：墓壙全景（南から）

写真図版26　8号墳②

上1：石室　奥壁（南から）

上2：石室　右側壁（東から）

左下1：石室　玄門～羨道（北から）

左下2：前庭部　石列（南から）

右下1：石室　右袖石（北東から）

右下2：石室　左側壁（西から）

写真図版27　8号墳③

上1：石室内遺物出土状況　全景（南から）

上2：石室内遺物　奥壁付近（南から）

左下1：石室内遺物　羨道左側壁（西から）

左下2：石室内遺物　土器

右下1：石室内遺物　玄門左側壁（西から）

右下2：石室内遺物　管玉

写真図版28　9号墳①

上：古墳全景（南から）

中：石室全景（南から）

下：開口部～石室内部（南から）

写真図版29　9号墳②

左上1：石室　右側壁（東から）

左上2：石室　玄門～奥壁（南から）

左下1：石室　羨道～右側壁（南東から）

左下2：墓壙全景（南から）

右上1：石室　左側壁（南西から）

右上2：石室　羨道　全景（南から）

右下1：開口部　排水溝　全景（南から）

右下2：墓壙全景（東から）

写真図版30　9号墳③

左上：石室内遺物出土状況　全景（南から）

左中：石室内遺物　馬具

左下：石室内遺物　土器

右上：石室内遺物出土状況　全景（南から）

右中：石室内遺物　玄室内部（北から）

右下：石室内遺物　玄門付近（南から）

写真図版31　10号墳①

上：古墳全景（南から）

中：石室全景（南から）

下：墓壙全景（南から）

写真図版32　10号墳②

上：石室　奥壁（南から）

左上：石室　右側壁（南東から）

左中：石室　右側壁（東から）

左下：石室　右側壁（北東から）

右上：石室　左側壁（南西から）

右中：石室　左側壁（西から）

右下：石室　左側壁（北西から）

写真図版33　10号墳③

左上：石室内遺物出土状況　全景（南から）

左中：石室内遺物　開口部付近（東から）

左下：石室検出作業風景（南から）

右上：石室内遺物出土状況　全景（南から）

右中：石室内遺物　左側壁中央（西から）

右下：石室内遺物　左側壁中央（東から）

写真図版34　12号墳①
上：古墳全景（南から）
中：石室全景（南から）
下：墓壙全景（南から）
写真図版35　12号墳②
上：羨門～石室内部（南から）
中：石室近景（南西から）
下左：石室　右側壁（南東から）
下右：石室　左側壁（南西から）
写真図版36　12号墳③
左上：石室内遺物出土状況　全景（南から）
左中：羨門　閉塞石（南から）
左下：石室内遺物　玄室内部（北から）
右上：石室　礫床（北西から）
右中：羨道　閉塞石（北から）
右下：石室内遺物　奥壁右コーナー（南東から）
写真図版37　13号墳①
上：古墳全景（南から）
中：前庭部～石室内部（南から）
下：石室全景（南から）
写真図版38　13号墳②
左上：石室全景（南から）
右上：墓壙全景（南から）
中：石室内遺物　閉塞石付近（北から）
下：石室　検出作業
写真図版39　木棺墓
上左：検出状況全景（北東から）
上右：出土遺物　平瓶
中：遺物出土状況（北東から）
下：完掘状況（北東から）
写真図版40　出土遺物　土器①
写真図版41　出土遺物　土器②
写真図版42　出土遺物　土器③
写真図版43　出土遺物　土器④
写真図版44　出土遺物　土器⑤
写真図版45　出土遺物　土器⑥
写真図版46　出土遺物　土器⑦
写真図版47　出土遺物　土器⑧
写真図版48　出土遺物　土器⑨
写真図版49　出土遺物　土器⑩
写真図版50　出土遺物　土器⑪
写真図版51　出土遺物　土器⑫
写真図版52　出土遺物　土器⑬
写真図版53　出土遺物　土器⑭
写真図版54　出土遺物　土器⑮
写真図版55　出土遺物　土器⑯
写真図版56　出土遺物　土器⑰
写真図版57　出土遺物　金属器①
写真図版58　出土遺物　金属器②
写真図版59　出土遺物　金属器③
写真図版60　出土遺物　金属器④
写真図版61　出土遺物　金属器⑤
写真図版62　出土遺物　金属器⑥
写真図版63　出土遺物　金属器⑦
写真図版64　出土遺物　金属器⑧
写真図版65　出土遺物　玉類①
写真図版66　出土遺物　玉類②
写真図版67　出土遺物　玉類③

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道29号改築事業は、揖保郡太子町上太田から姫路市石倉までの全長2.9kmにわたる道路（姫路西バイパス）建設事業である。太子竜野バイパスの太子上太田料金所から分岐して北上、姫路市太市中・相野を経て、山陽自動車道の姫路西インターチェンジ、さらに国道29号線に接続する。国道29号線の混雑解消、山陽自動車道・国道２号線と太子竜野バイパス間の連絡を目的として、建設省近畿地方建設局（当時）が計画・実施を進めてきた。

事業計画路線の決定とともに、路線内の埋蔵文化財について、建設省と兵庫県教育委員会で取り扱いの協議がすすめられた。既知の埋蔵文化財包蔵地との照合に加えて、昭和61年５月13日に分布調査を実施した結果、路線内において10箇所の埋蔵文化財包蔵地が明らかとなった。この後、用地買収の進捗に合わせて確認調査を行い、包蔵地の実態把握と今後の取り扱いに関する協議を継続した。

平成３年度の協議で、No10地点（太市中古墳群）の取り扱いが話し合われた。これまでの踏査によって古墳群の存在が予想されるものの、樹木の繁茂によって状況把握が不十分なため、建設省の直接執行による伐木を実施後に、県教育委員会が現地立会して調査範囲を決定することを取り決めた。ところが伐木作業に重機が使用され、古墳が存在する斜面に切り盛りした重機進入路が造られたため、古墳の損壊を招くことになった。平成４年４月に建設省から連絡を受け、埋蔵文化財調査事務所が現地の踏査を行ったところ、石材が散乱するなか７基の古墳を確認した。現地の状況を踏まえ兵庫県教育委員会では、建設省に対して埋蔵文化財破壊に至る顛末書の提出を求め、破壊に至った経過を明らかにして再発防止に努めるよう申し入れた。

その後、古墳の取り扱いについて協議が再開された。古墳が存在する部分は、地形上の制約から工法変更等による現状保存は困難との結論に達した。また確認調査が未了な状況では、埋蔵文化財の取り扱い範囲が確定できないことから、平成５年度には太市川に面した南部の全面調査と、丘陵の上部にあたる北東部の確認調査を実施することになった。

第２節　平成５年度の調査

建設省近畿地方建設局　姫路工事事務所長より、発掘調査の依頼（平成５年９月10日付　建近姫一調第70号）が提出され、平成５年11月２日から平成６年３月25日の期間、発掘調査を実施した。全面調査区は太市川右岸から丘陵の裾部まで、1,161㎡で行った。また確認調査は、大きくカットされる丘陵上部に試掘溝（トレンチ）を２本設定して実施した。

確認調査は、地形観察だけでは判断できない古墳の有無を明らかにし、古墳群の範囲を確定する目的で、確認トレンチ２本を設定した。その結果、遺構・遺物ともに確認できず、古墳群の範囲が丘陵裾部の周辺にとどまると判明した。

また全面調査では、人力によって現地表面から墳丘および古墳築造時の基盤層までに堆積する土を排除した。続いて墳丘および周溝・埋葬主体部を検出し、遺物の出土状況に注意を払いつつ掘り下げた。

第1図　平成5年度　現地説明会

その過程で、写真撮影・遺構実測を実施して、埋蔵文化財の記録に努めた。なお、2号墳については、石室の左側壁から奥壁にかけて事業地の外にあたることから、土地所有者の承諾・協力を得て、石室の床面ならびに壁面の状況を一括して調査することができた。

調査区内で検出した古墳は、6基を数える。大半が墳丘の盛り土を失い、石室も基底石付近だけが遺存する状態であった。それぞれの古墳では、石室内部を中心に遺物が残存し、土器・金属器・玉類が出土した。

調査が終盤を迎えた平成5年3月3日には、株式会社パスコに委託して古墳群全体の空中写真撮影を実施、また平成5年3月6日に、地元住民を対象として現地説明会を開催した。100名ほどの参加があり、調査した古墳の状況や出土遺物の一部について、見学いただいた。

掘削・記録作業の完了後は、周辺の地形測量を行なった後、石室の石材と墳丘を除去して構築状況の考究に努めた。なお2号墳は石室を分断する形で破壊されることから、工法変更による保存を再度検討すべく、事業地外にあたる部分を埋め戻しただけで調査を終えた。

《平成5年度　発掘調査体制》　遺跡調査番号　930161

調査担当　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

調査第1班　主査　井守徳男　　技術職員　柏原正民

第3節　平成6年度の調査

古墳の分布状況が把握できたことをうけて、残る範囲の発掘調査依頼が提出（建設省近畿地方建設局姫路工事事務所長　平成6年3月17日付　建近姫一調　第16号）された。これに基づき、前年度調査区の北東にあたる丘陵の中腹2,032㎡において、全面調査を実施した。調査期間は平成6年6月13日から平成6年12月27日である。

基本的な作業は平成5年度と同様で、人力による掘削で墳丘もしくは基盤層を露出させたのち、遺構検出、掘り下げ、遺物の検出と取り上げを順次実施した。また途中、写真撮影や実測図撮影などの記録も適宜行なっている。

前年度より高い位置での調査となり、周辺には岩盤の露頭が多数見られることから、崩落の危険に最大限の配慮を払いつつ調査を進めた。調査区では、6基の古墳と1基の中世墓を検出、玄室内を中心に、土器・金属器・玉類などが検出された。

第2図　平成6年度　成果報告会

平成6年10月18日には、株式会社パスコに委託して古墳群全体の空中写真撮影を行った。また調査成果の公開については、現地に安全上の問題があることから、発掘調査状況の公開を断念し、太市公民館において、遺物の展示とスライド上映による成果報告会を開催した。平成6年11月23

日、地元住民を中心に150名の参加を得た。

個別古墳の記録や、調査区全体の地形測量が終了した後は、石材ならびに墳丘の除去を行なった。なお2号墳は路面との法面の角度が急峻になることから、現地保存は困難との結論に達した。このため、調査区外の石材については保護措置を講じ、西半分の墳丘および石材を撤去した。

《平成6年度　発掘調査体制》　遺跡調査番号　940202

調査担当　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

調査第1班　主査　深井明比古　　技術職員　柏原正民

第4節　損壊状況調査

2年次にわたる太市中古墳群の全面調査が終了し、本体工事が佳境に入った平成8年4月12日、地元住民より太市中2号墳が破壊を受けていると埋蔵文化財調査事務所に通報があった。2号墳は第3章第3節に記述しているとおり、墳丘東半および石室の奥壁と東側壁の部分が民有地にあたるため、建設省との協議により、現状保存されることになっていた。同日午後に職員を派遣し、現地にて建設省・本体工事業者を同席させて状況の確認と、破壊に及んだ経緯について説明を受けた。そして応急処置として保護のためのシート養生を行い、新たに掘削しないよう指示をした。4月17日当事務所において建設省より再度事情説明を受け、崩落が進まないよう保存処置を講ずること、また2号墳の損壊状況を詳細に調査する必要があることを申し入れた。

以上の経緯を経て、平成8年5月14日・15日に、2号墳の損壊状況調査を行うことになった。

2号墳は発掘調査終了時に、残存する石室壁面を保護するため、単管4本を打ち込み横板を入れ、壁との隙間に土嚢を4～5段積み上げて補強した。また東側壁は石室内にせり出していたため、石材をワイヤーロープで固定していた。また最終的に残土を用いて石室内を埋め戻していた。

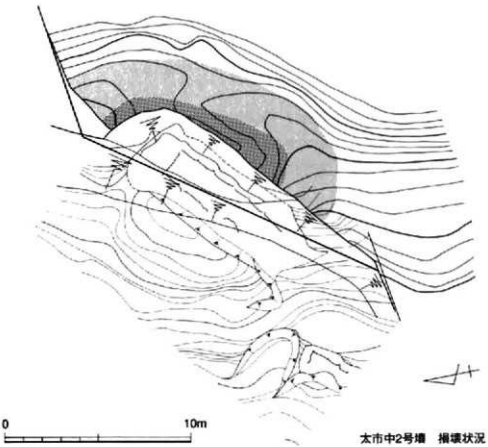
調査に先立って現状を確認したところ、橋脚工事に際して、作業ヤード確保のため民有地側に掘削範囲を広げていた。その結果、掘削が2号墳の保存部分に及ぶことになり墳丘が擦状に削られ、石室の石材の大半は撤去されていることが判明した。

調査は、石室内の埋め戻し土と墳丘からの崩落土を除去することから開始した。その後、石室内を精査し、発掘調査時作成した実測図と対比して石材と床面の残存状況を確認した。また墳丘の残存状況を確認するため、2号墳周辺の等高線測量を最後に行った。

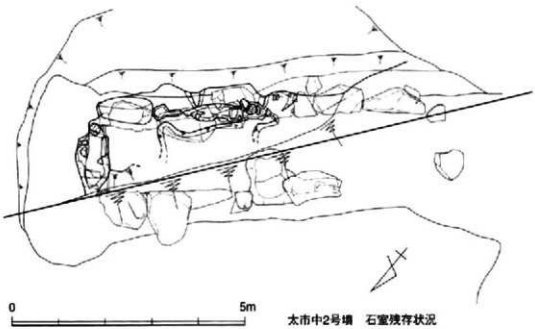
玄室は、東側壁のうち奥壁側の基底石を1石のみ確認できた。ただしこの石材も原位置を動いているとみられ、墳丘側に約5cm程度の空洞が確認できた。また発掘調査時には基底石の上に2段目の石材が積まれていたが亡失している。奥壁を含め他の石材は撤去され確認できない。基底石を据えた掘方とみられる凹部と根固めと思われる礫を若干検出したのみである。床面は側壁沿いが辛うじて残存しているものの大半の部分は本発掘終了時よりも下がっており、削平を受けていることが判明した。

羨道は、ほぼ全域が橋脚工事の掘り方として掘削され、墓壙・床面とも消滅している。この掘削は石室のみにとどまらず墳丘裾の一部に達している。

古墳群の大半の古墳が消滅した中で2号墳は、部分的ながら保存されたにもかかわらず、それが破壊される結果となった。なお残存した墳丘や石室部分は改めて処置を施して現地で保存されている。



太市中2号墳　損壊状況



太市中2号墳　石室残存状況

第3図　太市中2号墳　石室損壊状況

《損壊状況調査体制》 遺跡調査番号 960076

調査担当　兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

調査第１班　調査専門員　西口和彦　　技術職員　長濱誠司　　研修員　岡　昌秀

第５節　整理作業

金属器と脆弱な状態の土器をのぞいた出土遺物は、発掘調査と平行して洗浄・出土情報の注記を行った。また石室床面から採取した土壌も、採集・水洗して微細な遺物の採集に努めた。調査時に作成した実測図や写真記録等の整理も、適宜実施した。

調査成果の取りまとめに伴う本格的な整理作業は、平成13年度～平成14年度に埋蔵文化財調査事務所で実施した。作業内容は、平成13年度が接合補強・実測、脆弱遺物の保存処理・出土品の写真撮影など、平成14年度が遺構図・遺物実測図などの整図などである。また整理作業と平行して報告書の執筆・編集を行い、調査成果を公にした。

なお、脆弱遺物の保存処理については、出土した状況や形状観察を埋蔵文化財事務所で実施した後、処理作業を元興寺文化財研究所に委託して行った。

《整理作業体制　平成13年度》

整理作業担当	整理普及班	主　任	深江英憲
	企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
	調査第１班	主　査	深井明比古
	調査第２班	主　任	柏原正民
保存処理担当	整理普及班	技術職員	岡本一秀
非常勤嘱託員	池田悦子・八木和子・香川フジ子・西口由紀・村上京子・木村淑子・藏　幾子・鈴木まき子・宮野正子・前川悦子・大仁克子・板東明子・西岡敬子・岡田祥子・早川有紀		
日々雇用職員	高野佐智子		

《整理作業体制　平成14年度》

整理作業担当	整理保存班	主　任	深江英憲
	企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
	企画調整班	主　査	深井明比古
	調査第２班	主　任	柏原正民
非常勤嘱託員	池田悦子・八木和子・岸野奈津子・村上京子・前川悦子		

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置

遺跡の所在地である姫路市は、兵庫県の西部の中核都市で、面積274.57km²、人口480,147人（平成14年10月1日現在）[1]を擁する「中核市」である。市域は「エ」の字を思わせ、南部は市川・夢前川が形成する沖積平野（姫路平野）が瀬戸内沿岸まで広がり、北部は書写山・雪彦山など中国山地の東端を構成する播但山地にあたる。中心市街は姫路平野のほぼ中央に位置する。世界遺産である姫路城を中心に形成された城下町が基礎となっている。

太市中古墳群は市域の北西部、姫路市太市中に所在する。大津茂川中流域にあたり、丘陵に囲まれた平野部に水田が広がる農村地域である。西脇・石倉・（太市）中・相野の４集落が明治22年に合併して太市村を形成、さらに昭和29年姫路市に合併されて、現在に至っている。明治期より孟宗竹の栽培・出荷が盛んで、近年では筍の産地としても知られている。余部から相野を経て綾坂にいたる東西路（現在の県道姫路上郡線）は古代山陽道のルートに比定され、当地が大市（邑智）駅家の推定地にあたる。「オオイチ」の地名は、「邑智里」として播磨国風土記に見え、応神天皇による口伝「吾は狭き地と思ひしに、こはすなわち大内なるかも」が地名の由来と伝えられる。現在の中心集落は太市中で、ＪＲ姫新線の太市駅や郵便局・農協・太市小学校などが集まる。

古墳は集落の南方、青山・城山丘陵から派生する丘陵の北西斜面上に立地する。古墳の正面には孤立山丘である馬山が対置し、その間を大津茂川とその支流である太市川が流れて、小規模な谷状平野が形成される。

太市周辺の丘陵は播但山地の南端に当たり、「城山花崗岩」と呼ばれる播磨花崗類の岩脈によって形成されている。流紋岩からなる周辺の丘陵地とは、特徴を異にする。太市中古墳群は、花崗岩の風化したマサ土を基盤層としており、花崗岩の露頭があちこちで検出されている。また検出した石材には花崗岩の特徴が見られることから、古墳の石材としても利用されたと考えられる。

1）姫路市ホームページ（http://www.city.himeji.hyogo.jp/）のデータを参照した。

第２節　周辺の遺跡

太市中古墳群の周辺には、北西1.5kmに西脇古墳群、北1.5kmに中後瀬遺跡、南西8.5kmに亀田遺跡などが存在する。これらの遺跡は山陽自動車道や姫路西バイパスの建設に関連して発掘調査されたもので、成果が公刊されている。また大津茂川中・下流域の遺跡については、『亀田遺跡』で詳述されていることから、本書では時代ごとの様相を略述するにとどめる。

なお、時代に続く数字は、遺跡地図の番号に対応した遺跡名を指す。

Ⅰ　旧石器時代（15・27）、縄文時代（16・47）

旧石器時代の遺跡は散布地で、遺物の採集によって遺跡の存在を認識しただけの状況である。また縄文時代の遺跡も、大半が遺物の出土だけを確認したにとどまっている。内容の明らかな遺跡として、太

市から南西5kmに位置する東南遺跡がある。数度にわたる発掘調査では、縄文時代後期～晩期の住居址・土坑・ピット・溝跡などが検出されている。

Ⅱ　弥生時代（2・4・28・42・43・45・46・47・48・57・61・63）

前期では、平方遺跡（47）で住居址が確認されているが、状況の判明している遺跡は少ない。遺跡の数・規模ともに増大するのは中期に入ってからで、大津茂川流域では上太田亀田遺跡（43）、川島遺跡などが中核的な集落を形成する。独立丘陵の頂部にある埴特山遺跡は、高地性集落として家島群島の遺跡を含めた広域な挑望関係が指摘されている。これらの集落は後期前半に衰退し、後期後半には新たな集落が登場する。上太田茶屋ノ前遺跡（42）で庄内並行期の遺物が出土している。また弥生時代末には、箱式石棺を主体部として採用する墳丘墓・墳墓が築造される。黒岡山墳丘墓・笹山墳墓群・埴特山5号墳などが知られている。

Ⅲ　古墳時代（1～3・12・13・15・23・24・26・27・30～34・36～44・47・49～56・58～60・62）

大津茂川の下流にあたる姫路市勝原区には、丁瓢塚古墳が存在する。バチ形の前方部を有し、県下最古級の前方後円墳として知られている。主体部は竪穴式石槨と見られ、竹管文土器が採集されている。周辺の前期古墳には、方形の竪穴式石槨に合わせ蓋壺埴を納めた山戸4号墳、埴特山1号墳、竪穴式石室から銅縁二神二獣鏡・鉄器・鋼鏃・筒形銅器・玉類などが出土した松田山古墳（50）がある。中期古墳は現在のところ、黒岡山古墳群（58）中に1基が知られているが、明確な前長墓は比定しがたい。

後期には、丘陵裾部を中心に多数の古墳群が築かれ、造墓活動の活性化がわかる。その多くは横穴式石室を有する古墳で、群集して存在するものが多い。大津茂川下流の丁3次調査1～3号墳は、九州系統の横穴式石室を持ち、6世紀前～中葉の横穴式石室導入期の様相を示すものとして注目される。6世紀中葉以降になると、城山の南西麓部に黒岡古墳群、天神山古墳群（59）、山田大山古墳群（60）、山田古墳群（62）などが連綿と存在する。太市中古墳群（1）の北西には、破除神社西古墳（12）が単独で存在するほか、7世紀にかけて営まれた西脇古墳群（13）がある。また南部にも終末期の群集墳である、内山戸古墳群（37）、上太田古墳群（44）などがみられる。

青山から太市を経て峰相山麓にかけては、峰相山古窯址群と総称される50基余りの須恵器窯跡がある。姫路市の青山（39～41・49）を中心に6世紀後葉より生産を開始するが、7世紀にはいって生産の中心が太市に移り、桜紳ダム周辺に数多くの窯（30・38）が営まれている。

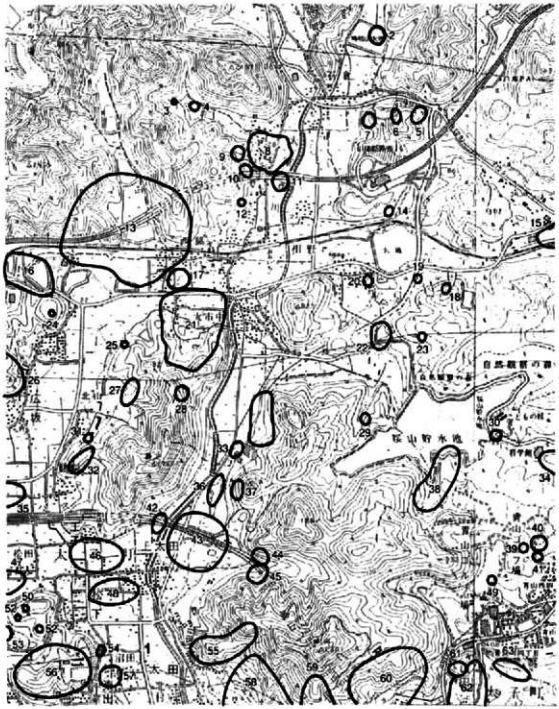
この時期の集落として、亀田遺跡、境谷遺跡（33）、瓢箪池遺跡（36）、南柳遺跡（53）などがあるが、大津茂川流域に視野を広げても調査例は少なく、実態の不明な遺跡が多い。

Ⅳ　奈良～平安時代（5～10・14・17～22・29・33・38・47）

官衙関係では、古代山陰道の太市駅家と推定される向山遺跡（21）がある。播磨国府系瓦である、長坂寺式・古大市式の軒丸が出土している。

寺院跡では、白鳳時代に遡る上太田廃寺が知られる。塔心礎・礎石群が現存し、法起寺式の伽藍配置を持つと考えられている。向山遺跡の北西にある西脇廃寺（17）でも、塔心礎が遺存するほか、須恵器・瓦の散布がある。

峰相山古窯址群は、8世紀に大津茂川上流へと生産拠点を移し、相野から峰相山麓にかけて、多くの



1．太市中古墳群　2．峰相大池遺跡　3．観音寺1号墳　4．横池遺跡　5．赤坂1号窯跡　6．赤坂2号窯跡　7．赤坂3号窯跡　8．観音寺遺跡　9．観音寺2号窯跡　10．観音寺窯跡　11．中後瀬遺跡　12．破盤神社西古墳　13．西盤古墳群　14．大池4号窯跡　15．長池遺跡　16．鹿の子池遺跡　17．西脇廃寺　18．大池1号窯跡　19．大池2号窯跡　20．大池3号窯跡　21向山遺跡（太市駅家跡）　22．殿清水池窯跡　23．口池ノ崎古墳　24．丸山古墳　25．鹿脇墳丘遺跡　26．広坂古墳群　27．向池遺跡　28．畑井山遺跡　29．桜峠4号窯跡　30．桜峠2号窯跡　31．北山古墳　32．鶴飼古墳群　33．境谷遺跡　34．大池古墳　35．松尾遺跡　36．甑草池遺跡　37．内山戸古墳群　38．桜峠窯跡群　39．青山4号窯跡　40．青山3号窯跡　41．青山5号窯跡　42．上太田茶屋ノ前遺跡　43．上太田亀田遺跡　44．上太田古墳群　45．裏ノ谷遺跡　46．王子遺跡　47．平方遺跡　48．松ケ下遺跡　49．青山2号窯跡　50．松田山古墳　51．柳山古墳　52．坊主山古墳　53．南畑遺跡　54．沼田古墳　55．城山古墳　56．月生山1号墳　57．沼田遺跡　58．黒岡古墳群　59．大神山古墳群　60．山田大山古墳群　61．山田小丸山遺跡　62．山田古墳群　63．山田桃山遺跡

第4図　周　辺　の　遺　跡

窯を造り続けた。須恵器の生産が中心だが、灰原の一部が発掘された赤坂1号窯（5）は瓦陶兼業窯、殿清水窯跡（22）・上伊勢2号窯跡は、瓦専業窯と考えられている。焼かれた瓦は、近隣の寺院や駅家、大阪の四天王寺や京都の大宅廃寺などで出土している。

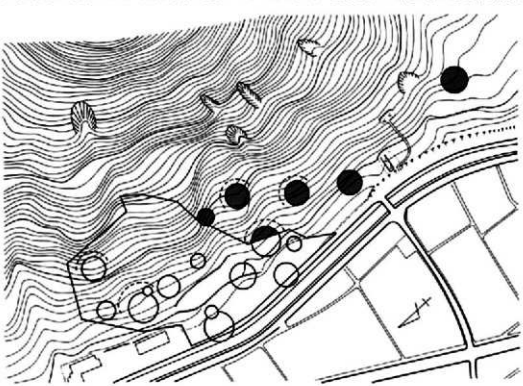
V　中世以降（11・25・35・42・43・53）

古代末から中世には、拝保川下流の段丘面を中心に、荘園としての開発が進む。11世紀初頭には成立していた鵤庄は、大和の法隆寺領として文書・絵図が豊富に残り、当時の状況が良好に把握できる。このほか、中世の集落である福田片岡遺跡・宮脇遺跡・中後瀬遺跡（11）、神社の基壇跡が検出された春日神社遺跡などがある。

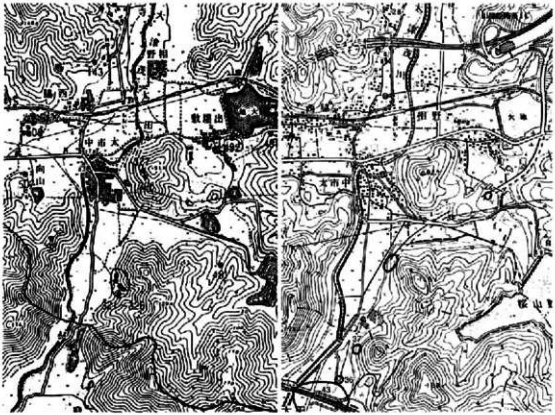
第3節　太市中古墳群の認識経過

太市中古墳群は、古墳時代後期の群集墳として、早い段階より認識されてきた。今回の発掘調査では13基の古墳を確認したが、調査区外にも隆起が点在し、本来の古墳群はさらなる広がりをもつことは明らかである。これまでの認識過程を整理し、調査で明らかとなった古墳と、既存データとの位置関係などを整合する。

調査地周辺は、小字名の「手塚」が示すとおり、塚のある場所として古くから認識されていたが、近世以前の地誌類には、古墳の存在を示唆する記述はみられなかった。太市周辺に存在する古墳についての管見でもっとも遡る記述は、明治44年発刊の『太市村郷土誌』に見られる。「太市村ノ古跡」の項には、「太市村ノ古墳　里人ハ穴居時代ノ遺物ナリトセンガ、今ハ□古墳ナルヲ聞ク」と記し、具体的な



第5図　太市中古墳調査前の状況



第６図　太市中古墳周辺の遺跡分布状況（Ｓ＝1/25,000に改変）　右：文献②／左：文献③

場所は不詳ながら、「太市中村ニ三個所」あると記す。また、石室の状況についても触れ、「巨石ヲ以テ四方ヲ囲ミ堅牢ナル様、一見穴居ノ跡トミルベク。入口ノ穴ト見ルベキモノ南北ニ１箇所ブツ明キ居レリ」と紹介している[1]。こののち関連する記述は再び姿を消し、太市周辺の古墳が広く認識されるのが、第２次世界大戦以後のことと考えられる。

昭和41年から、兵庫県全域の埋蔵文化財包蔵状況を総括する『兵庫県埋蔵文化財特別地域　遺跡分布地図及び地名表』（以下、『分布地図及び地名表』）の刊行が始まった。第２集に収められた「姫路市」の部には、太市中１号墳～７号墳が掲載されている。また同書の地名表には、「横穴式石室を主体部にもつ後期古墳」と記述され、埋蔵文化財包蔵地としての認識が確立した[2]。

その後は大きな改変が加えられることなく、姫路西バイパスの事業予定地となり、昭和61年に埋蔵文化財の分布調査が行なわれた。以後の経過は、第一章で触れたため再述しないが、樹木の繁茂が著しく、地形の観察が困難であったことが、正確な状況の把握を欠する結果となってしまったことは遺憾である。なお各古墳の認識経過については、表１に整理した。

平成５・６年の発掘調査に前後して調査区周辺を踏査したところ、周辺でさらに数基の古墳状隆起を確認した（第５図）。これらの状況を『分布地図及び地名表』と比較した結果、掲載された古墳は調査範囲の南側にあたる小規模な谷周辺において把握されていることが判明した（第６図）。今回調査した古墳群は、『分布地図及び地名表』に掲載された古墳（太市中１～５号墳）とは異なるものである。

古墳群の立地する丘陵は、裾部を竹林に開墾した段階で大きく改変されている。このため、墳丘の隆起が認められない古墳も少なくない。また基盤層に含まれる花崗岩が部分的な露頭をみせ、石室との峻

別を一層困難にしている。このように現地の踏査のみでは、正確な数ならびに位置を把握するのは困難であり、最新のデータを集約した『兵庫県遺跡地図』[3] では、「太市中古墳群」全体の範囲を指摘するにとどめている。

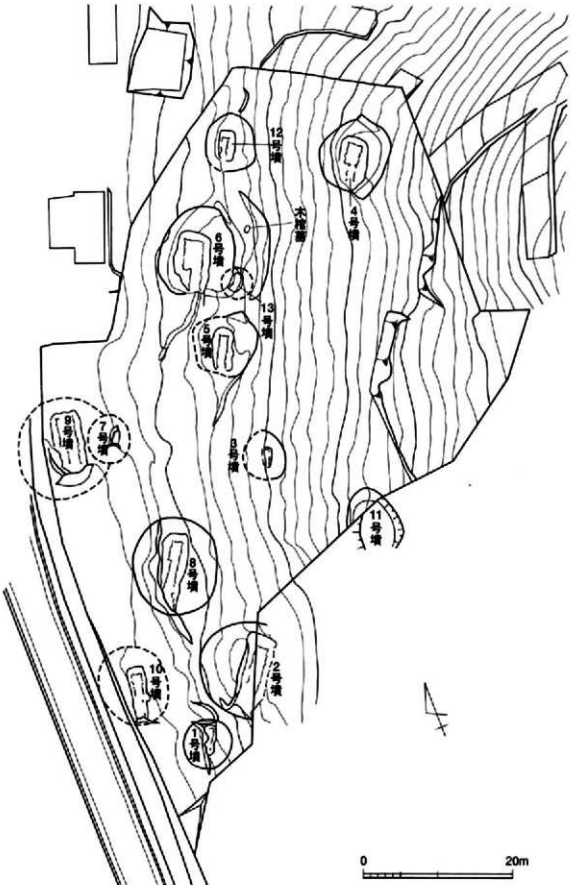
なお今回の発掘調査では、『分布地図及び地名表』の番号を踏襲せず、調査にあたって認識できた順番に古墳名を付与した。このため、1～5号墳の名称については、今回調査したものとの重複が起きていることを指摘し、今後の調査によって、再度整理が必要であることを明記しておきたい。

1）『太西村郷土誌』太市尋常高等小学校　明治44年
なお、引用した部分の原文に句読点はなく、編者が補註した。
2）『兵庫県埋蔵文化財特別地域　遺跡分布地図及び地名表』第2輯　兵庫県教育委員会　昭和41年
3）『兵庫県遺跡地図』兵庫県教育委員会　平成12年

表1　太市中古墳群の古墳把握経過

古墳名	1966	調査前の把握	発掘調査	備考	
(1号墳)	古墳状隆起？	――	――	現状保存	調査区外
(2号墳)	古墳状隆起？	――	――	現状保存	調査区外
(3号墳)	古墳状隆起？	――	――	現状保存	調査区外
(4号墳)	古墳状隆起？	――	――	現状保存	調査区外
(5号墳)	古墳状隆起？	――	――	現状保存	調査区外
1号墳	――	――	平成5年度	記録保存	本報告
2号墳	――	隆起・石室	平成5年度	記録保存	本報告
3号墳	――	――	平成6年度	記録保存	本報告
4号墳	――	石室露出	平成6年度	記録保存	本報告
5号墳	――	石室露出	平成6年度	記録保存	本報告
6号墳	――	石室露出	平成6年度	記録保存	本報告
7号墳	――	石室露出	平成5年度	記録保存	本報告
8号墳	――	石室隆起？	平成5年度	記録保存	本報告
9号墳	――	石室露出	平成5年度	記録保存	本報告
10号墳	――	――	平成5年度	記録保存	本報告
11号墳	――	古墳隆起？	――	現状保存	調査区外
12号墳	――	――	平成6年度	記録保存	本報告
13号墳	――	――	平成6年度	記録保存	本報告

1966：『兵庫県埋蔵文化財特別地域　遺跡分布地図及び地名表』第2輯　兵庫県教育委員会（1966）に登載された古墳。
調査前の把握：全面調査を開始する直前（1992年）の現地立会等により把握された古墳。



第7図　太市中古墳群　全体図

第３章　発掘調査の成果

第１節　古墳群の立地

太市中古墳群は、城山山塊の北西に位置する。南向きの丘陵裾部から鞍部の平坦面を範囲とする。調査前には、丘陵の裾部に雑木が茂り、鞍部は孟宗竹の林として利用されていた。分布調査では数基の墳丘と石室を確認していたが、具体的な状況が不鮮明なまま、伐木作業に伴って地形の改変を受け、状況が著しく損なわれた。このため発掘調査に先立って地形測量を実施し、地形改変が行われる前の状況把握に努めた。

丘陵の裾部では、標高40m前後に顕著な古墳状の隆起が１箇所みられたほか、石材の集積を１箇所で確認した。また周辺では人為的とみられる平坦面が点在し、西脇古墳群や内山戸古墳群など低墳丘の古墳が丘陵斜面から確認されていることを考慮して、調査の対象に加えた。鞍部は階段状に造成され、２～３段の石垣が造られていた。これらは竹林を設けた際に造られたもので、墳丘の隆起や石室の一部が、露出して石垣の上下に点在していた。標高17.5m以下は平坦なまま、太市川に接する。造成されて倉庫などが設けられ、川沿いは道路状になっていた。

発掘調査の結果、検出した古墳は13基を数える。このうち、11号墳は、墳丘裾の一部を検出したにとどまる。また後世の遺構として、木棺墓を１基検出した。

12基は標高16～32m・北から南へ100mの範囲で帯状に連なっている。南部では１・２・８・10号墳がまとまりをみせ、中央部は丘陵裾に３号墳、平坦面に７・９号墳がある。また北部では、丘陵裾に５・６・12・13号墳が、最も高所の丘陵中腹に４号墳が存在する。丘陵の斜面でみられた石材の集積は、岩盤に含まれる花崗岩が露頭したもので平坦面も古墳より新しい時期に設けられたことが判明した。調査範囲よりも北側には、小規模な谷が入り込んで、地形からみても分断されている。確認調査の結果、古墳の存在が認められなかった。

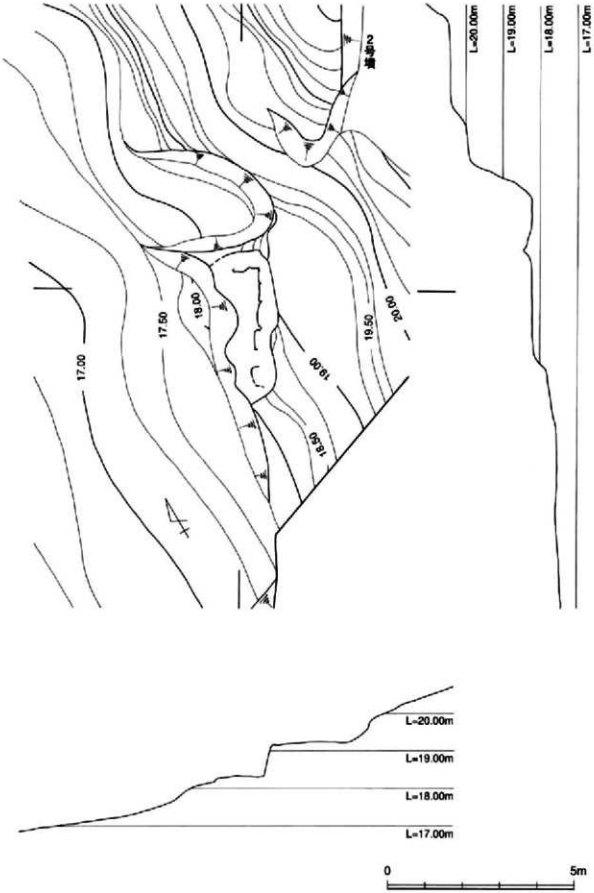
主体部はすべて横穴式石室で、開口方向はいずれも南を向けている。いずれも基底石付近だけ石材が残り、いくつかの石室は石垣に取り込まれていた。内部は後世の攪乱等で乱されていたものの、良好な状態の遺物が出土した。

墳丘・周溝・排水溝などの付属施設については、造成や攪乱による地形改変の影響を受けて、遺存状態が悪い。また墓道などを推定できる微細な地形の起伏も失われていた。

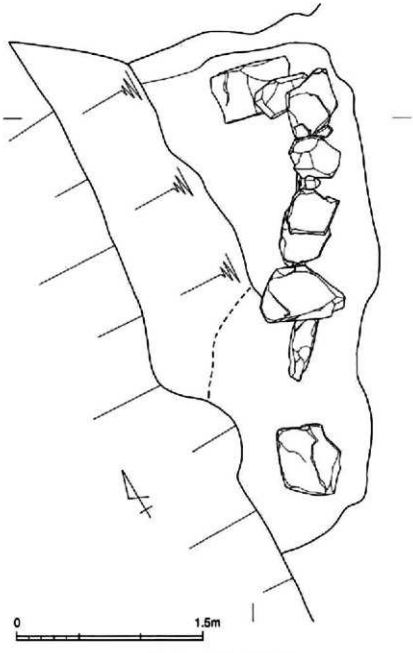
第２節　１号墳

Ⅰ　遺構

調査区のもっとも南部、標高19m付近において検出された。北東部に２号墳が近接する。調査前には斜面を削って造成された石垣に取り込まれていた。西半分が消失し、東半分でも墳丘の隆起は失われていたが、丘陵斜面を円形に造成した痕跡が残存する。直径10m程度の円墳と考えられる。



第8図　1号墳　墳丘（検出後）



第９図　１号墳　石室平面

１．主体部〔第９図〕

横穴式石室は南西へ開口する。石室の西半分が消失し、奥壁６２号墳にともなう攪乱坑によって上面が失われる。袖の有無は確認できないが、残存する左側壁は直線をなす。無袖の小規模な横穴式石室を想定しておく。

２．墓壙〔第11図〕

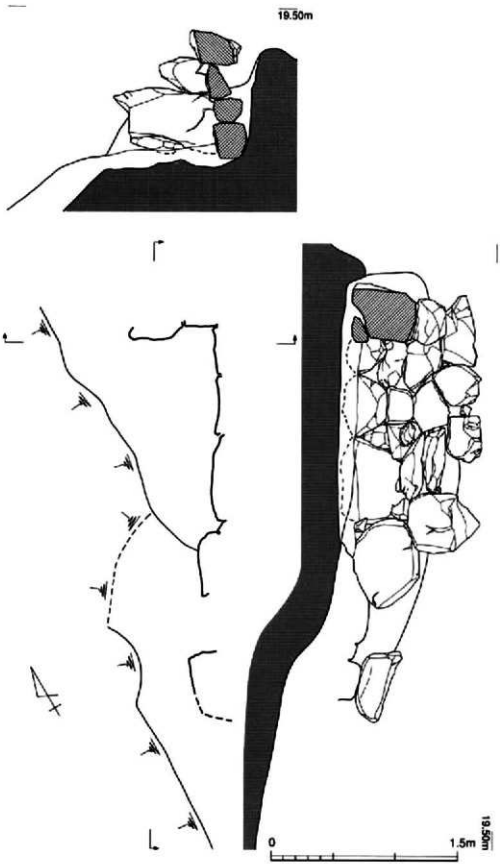
石室に沿って畝状に検出された。奥壁の表面は攪乱坑で削り取られ、底部付近だけが僅かに残存する。規模は、長軸4.12m、短軸が1.59mである。左側壁の中央が最深部にあたり、8.45mを測る。底面は平坦だが、開口部付近では地山に含まれた岩盤が隆起して、起伏をみせていた。

石材の廻り方は設けずに、墓壙の周壁に沿って基底石を並べ、その前面を床面で挟み込んで安定させていた。

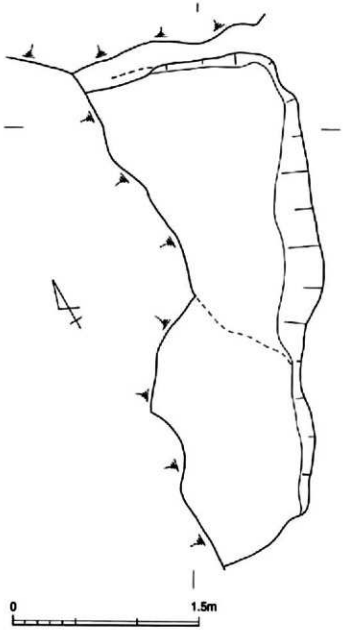
３．石室〔第10図〕

奥壁から玄室の左側壁が残存する。規模は、全長が3.05m、幅0.69m、左側壁から推定した主軸方向はN31°Eと考えられる。石室の内部は、流入土で充填されていた。

奥壁は横長の石材を基底石として用いる。不安定な面を下部とし、長方形の詰石で安定させて埋設する。２段目は人頭大の礫が１つ残っていた。左側壁は奥壁の前面に接続する形で延びる。石材の規模にはばらつきがあり、基底石から様々な形状の礫を組み合わせて壁体を構成する。側壁の先端付近には岩盤の隆起がかかり、石材を岩盤の上に直接積み上げている。残存する壁面は直線で、石材の状況をみても、羨道との境界は確定できなかった。



第10図　1号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



第11図　1号墳　石室基礎平面（石材除去後）

4．床面（第10図）

基盤層を削って整形した墓壙の上面に、黄褐色のロームブロック混じりシルトを敷き詰めて床面とする。検出した床面は、奥・側壁の周辺だけ僅かに残存する。後世に削平を受けた影響から壁面へ向けて傾斜をなし、遺物も存在しない。

5．開口部

石室の先端付近は、後世の攪乱で大きく改変されている。羨門を失うほか、前庭部や墓道の状況も検出することができなかった。

Ⅱ　遺物

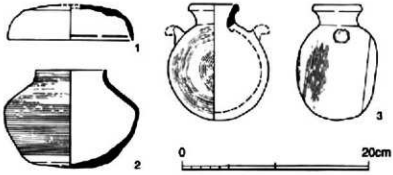
古墳に伴う遺物として、床面に近い石室内流入土に含まれていた土器が3点存在する。その他に遺物は出土しなかった。

1．土器（第12図）

石室の残存状況が悪く、1号墳に伴う土器は、須恵器（坏H蓋・短頸壺・提瓶）が3点のみである。

須恵器　1は、古墳時代を通して一般的にみられる、身受けのための立ち上がりのある坏身と蓋のセットからなる坏Hの蓋であるが、セットとなる坏H身は出土していない。天井部は扁平で、口縁部との境界は不明瞭である。口縁端部の内面には、浅い凹線状の段を付けている。天井部外面には1／3程度の範囲で、回転ヘラ削り調整が行われている。

2は、短頸壺である。肩部が屈曲気味の体部に、境界の不明瞭な短い口縁部を付ける。



第12図　1号墳　出土土器

体部はカキ目、底部は回転ヘラ削り調整されている。3は、小型の提瓶である。短く外反する口縁部は、外方に肥厚して丸い端面を作る。器壁が厚く法量の割には重量感があり、体部はカキ目調整が施されている。肩部には、先端が欠損している鉤状の把手が付いている。

第3節　2号墳

Ⅰ　遺構

調査区の南部、西へ延びる丘陵の先端に位置する。調査前には明瞭な墳丘の隆起と主体部の横穴式石室を確認することができた。標高22m付近に占地し、墳丘の東部は調査区外へと続く。西に10号墳、南西に1号墳があるほか、南方の調査区外にも、古墳状の隆起がいくつか認められる。

墳丘は調査した古墳の中で、もっとも良好な残存を保っていた。丘陵斜面を造成して基部とし、その上面に盛り土を行なう。盛土は最高0.85mを測り、黄褐色シルトを堅固に叩き締めて構築する。地山の直上では、炭化物を微かに含んだ黒褐色のシルトを検出した。墳裾部分は基盤層の形状に伴い、岩盤が数カ所で露出している。

墳丘は円形で、南北13m、東西14mを測る。西側墳裾からの高さは1.86mであった。東半部にあたる調査区外では、墳丘に沿って凹地が巡り、周溝の存在する可能性が高い。

1．主体部（第14図）

横穴式石室は墳丘のほぼ中央に位置する。開口部を南西に向け、袖石と側壁の上部および天井石を失う。右側に袖を持つ横穴式石室で、床面は1面が検出した。遺物の大半は、後世に持ち出され、開口部西側の土坑に投棄されていた。

2．墓壙（第17図）

奥壁と左側壁は調査区外のため、上面の検出を奥壁から右側壁にかけて行った後、調査範囲にあたる右側壁の基部のみ石材を除去して下部を確認した。上面は長方形を呈するが、奥壁部分で規模を増している。なお、調査区外の墓壙と奥壁・左側壁の基底部掘り方については、施工の際に破壊され、築造当初の状況が不明のままに消失（第1章第4節）した。

右側壁の基底は、周壁に沿って幅8mの溝状に掘り方を設ける。底面は石材の下部形状に合わせて凹凸を設け、不安定な部分には拳大の石材を詰めている。掘り方の先端は、奥壁コーナーから6.6mで収束し、左側壁の羨道先端とほぼ一致する。

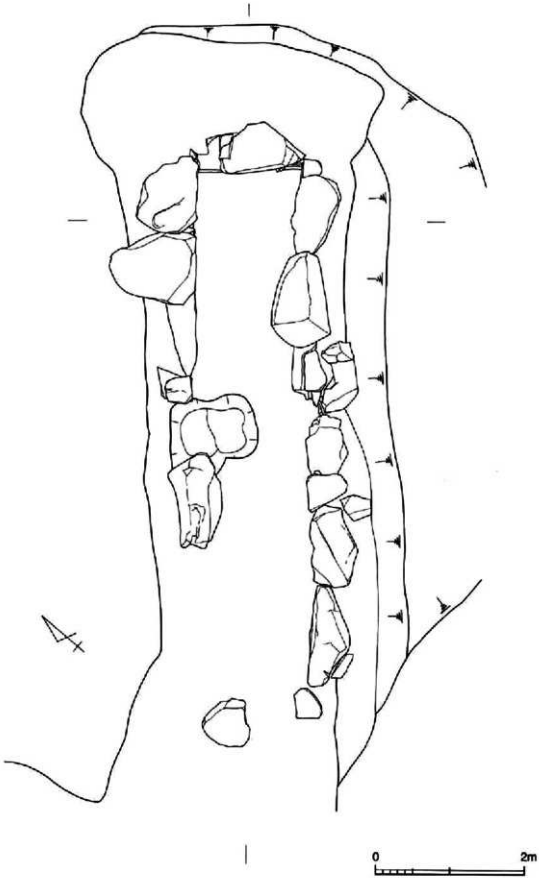
3．石室（第15図）

全長6.85mで、主軸はN50°Eに向ける。袖石が抜き取られるほか、羨道の右側壁でも石材の大半が消失している。

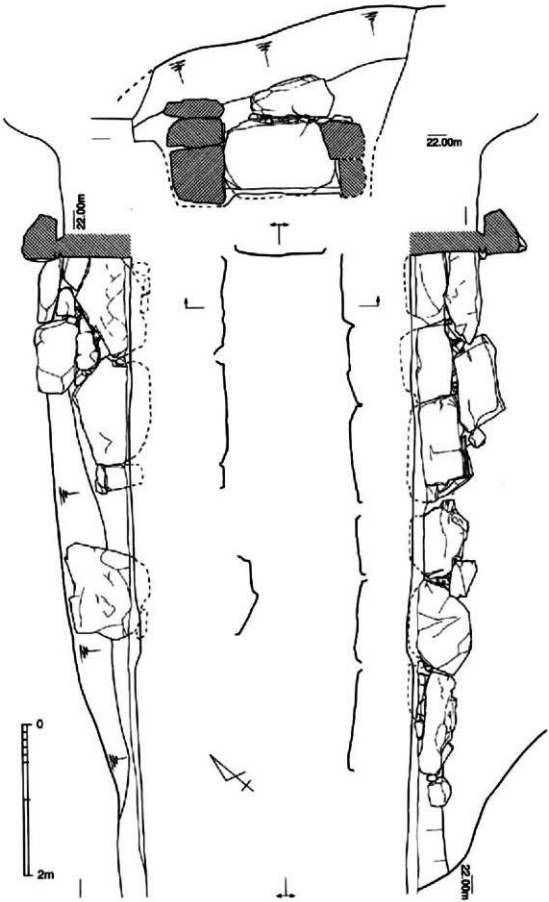
玄室は全長3.2m・幅1.55mを測る。両者の比率は1：2で、均整のとれた長方形を呈する。奥壁は長方形の石材を基底石に用い、2段目は人頭大の礫が1つだけ残存する。石の間には、拳大の礫を詰めて接合面を整える。

側壁は、奥壁を挟み込む格好で接続する。奥壁に接する部分のみ2段目が残り、他は基底部だけが検出された。左側壁の基底は、3つの石材で構成される。袖石に接する部分のみ小さい石材を用いて、規模を調整している。袖石の位置には石室内部に突出した穴がみられ、墓壙周壁にかけて大きく広がる抜

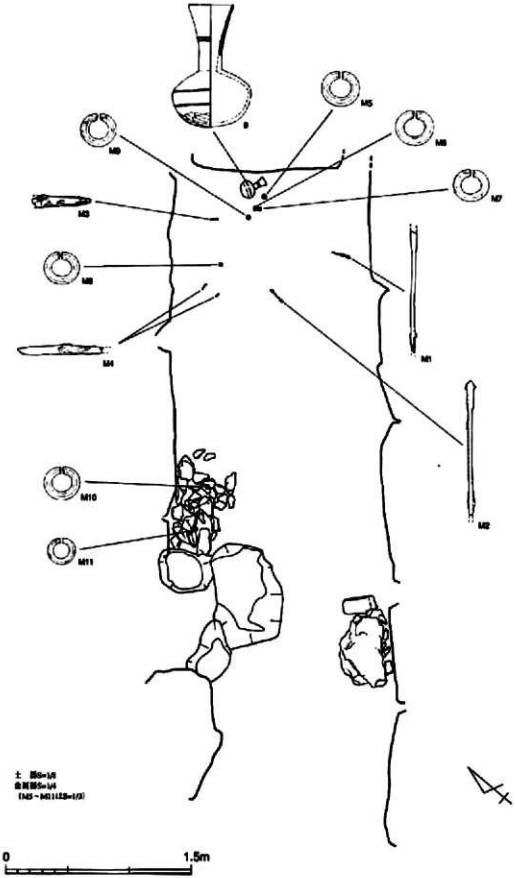
第13図　2号墳　墳丘（検出後）



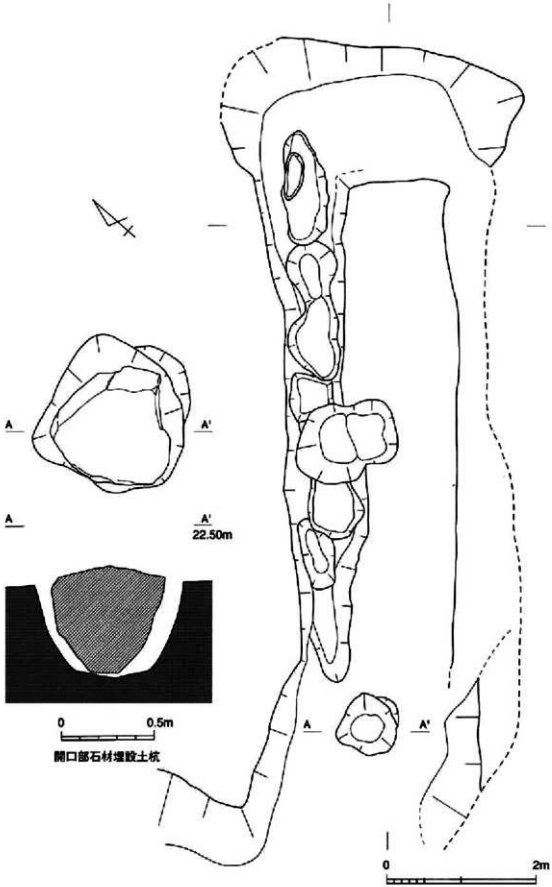
第14図　2号墳　石室平面



第15図　2号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



第16図　2号墳　石室内遺物出土状況



第17図　2号墳　石室墓墳平面（石材除去後）、開口部石材埋設土杭

き取り痕と判明した。羨道に連なる石材の差びから、袖部の突出幅は少ないと考えられる。右側壁は均等な規模の石材を３つ並べて基底とする。上面の高さを合わせて、２段目との設置面を整えている。

羨道は、袖をなす右側壁が１つだけ残り、状況を知る手がかりも少ない。左側壁は基底石の３つが残存する。玄門に近い２つは玄室と同じ規模の石材で、三角形の詰石が残存する。扁平な先端の石材は、不安定な面を詰石で安定させて堤設する。続く石材は人頭大の礫に変化することから、この付近が羨門をなすと判断した。全長3.65m、残存する幅1.35mを測る。羨道の床面は平坦で、排水溝や閉塞石は検出できなかった。

４．床面（第16図）

検出した床面は１面で、直上まで後世の流入土がおよぶ。流入土からは古墳に伴う遺物とともに、後世の陶磁器や釘、銅銭などが出土した。

床面上では、奥壁周辺と袖部右コーナーから遺物が検出されたが、出土量は少ない。奥壁付近では、奥壁正面において完形の長頸壺（９）と耳環（Ｍ５～Ｍ７・Ｍ９）がまとまり、奥壁の前方では鉄鏃（Ｍ１・Ｍ２）、刀子（Ｍ３・Ｍ４）、耳環（Ｍ８）といった金属器が散らばった状態で出土した。また袖部右コーナーでは、床面に敷き詰められた礫の上から耳環（M10～M11）が出土した。これらの礫は、羨道基部の左側壁でも検出されている。礫床の残欠と考えられるが、設けられた範囲は判然としない。ただ、出土状況から後世に顕著な攪乱を受けたことは明らかで、遺物を持ち出す際に、礫床が消失した可能性も考えられる。

５．羨門・前庭部（第17図）

左側壁の基底石だけが残存するため、羨門の状況を把握することは困難である。前庭部では、右側壁から聞き気味にカット面が延びる。攪乱坑の方向に延びるため、後世に改変された結果生じた可能性がある。また墓道の痕跡は、検出できなかった。

前庭部の床面において、平面台形の石材を検出した。平面0.66m×0.63mで、深さ0.57mを測る。ほぼ同じ規模の据り方を摩り、平坦な面が顔を出す程度まで堤設していた。意図的に配置したもので、同様の施設は４号墳でも検出されている。

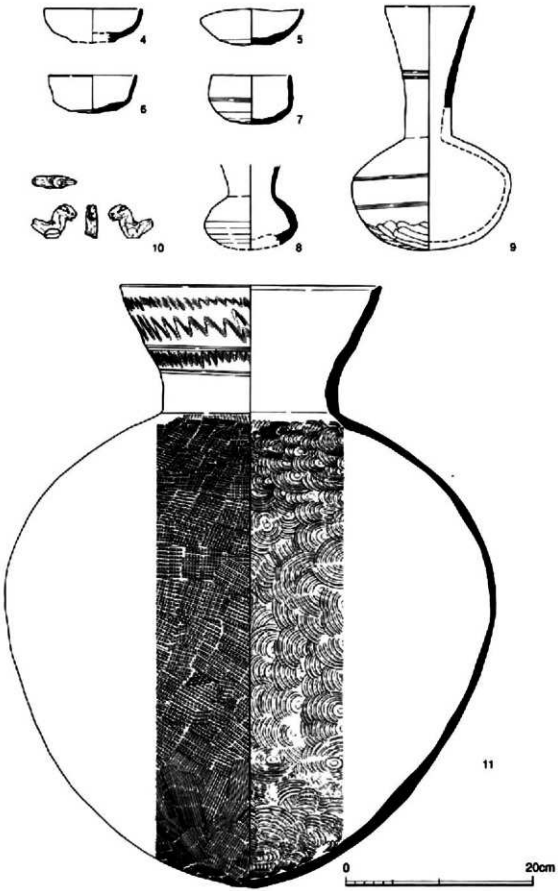
開口部の右下方にあたる１号墳石室の背後から、後世に造られた土坑を検出した。墳溝をＵ字形に掘りくぼめたもので、最深２ｍを測る。内部からは遺物が大量に出土した。石室内部から持ち出した遺物を投棄したと考えられる。

Ⅱ　遺物

１．土器（第18～20図）

おおむね石室内と石室前方の土坑から出土したもので、その他、前庭部と墳丘からものが少数ある。量的には土坑から出土したものが多く、２号墳全体の３／４を占めている。

石室内出土の土器（４～11）は、須恵器（坏Ｉ・坏Ｇ・椀・長頸壺・装飾付須恵器小像・甕）が８点ある。土坑出土の土器（12～21・23～41）は、須恵器（坏Ｈ・坏Ｉ・坏Ｇ・椀・高坏・短頸壺蓋・長頸壺・直口壺・鼎・平瓶・横瓶・甕）が29点ある。その他、墳丘から須恵器坏Ｉ（22）１点があり、合計38点である。



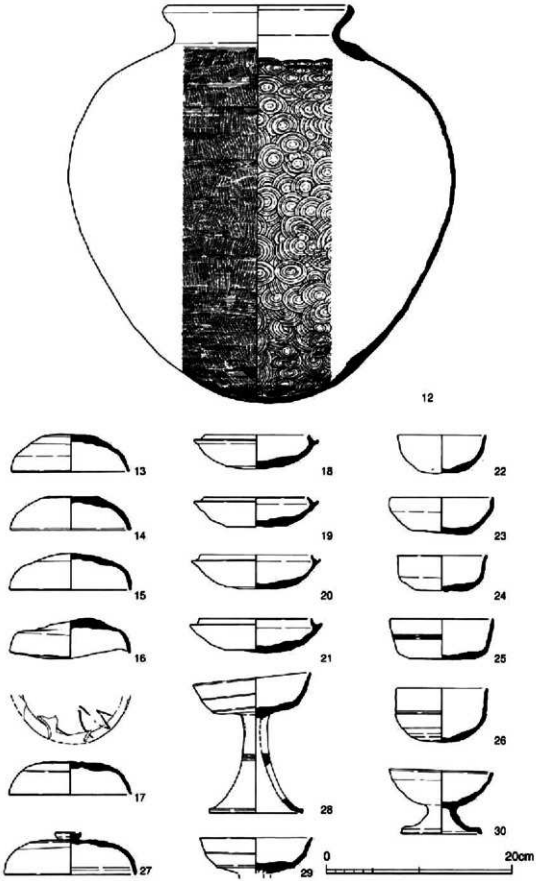
第16図　2号墳　出土土器①

A　石室内出土の土器

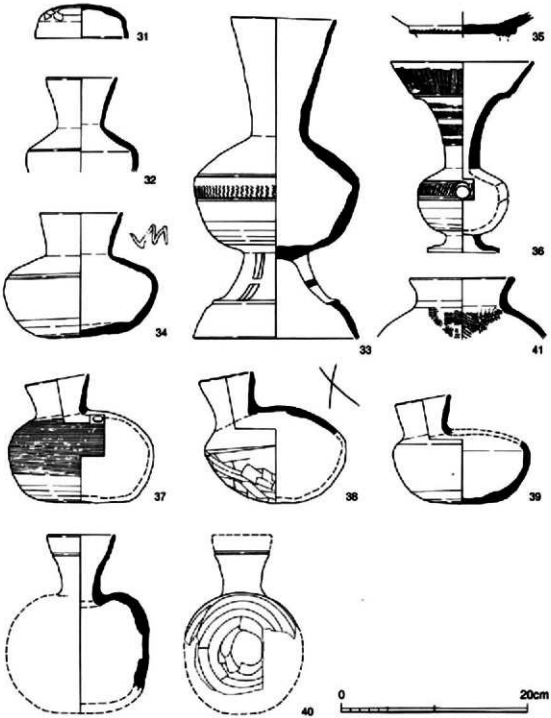
須恵器　4・5は、古墳時代以来の坏H蓋を逆転させたような器形で、本報告書では坏Ⅰと呼ぶことにする。太市中古墳群出土の坏Ⅰは、口径11cm、器高3.5～4.0cm前後の法量で、いずれも底部外面は、ヘラ切りのまま不調整である。底部内面は、仕上げナデを施すものと施さないものとがある。4は残存率が悪く、5は大きく歪んでいることから、復元口径に不安がある。6は、扁平な底部から屈曲して真っ直ぐ延びる口縁部をもつ坏で、坏Gと呼ぶことにする。太市中古墳群出土の坏Gは出土点数が3点と少ないが、口径10cm、器高4cm前後のものである。一般的に坏Gとされる器種は、宝珠つまみを付け、身受けの返りを有する蓋がセットとなるが、太市中古墳群ではセットとなる蓋は出土していない。また、いずれもヘラ切りのまま不調整か、ヘラ切り後ナデ調整を施しているだけである。通常、底部外面には回転ヘラ削りされるものが多いことから、坏Gとするにはいささか躊躇される器種ではあるが、この地域で生産されたものの特徴なのであろう。6は、太市中古墳群出土のこの種の須恵器中では、最も坏G身の器形に類似している。7は、丸底気味の底部に直立する深い口縁部を付けるもので、椀とした。口径10cm未満であるが、器高が5cmを超え、径高比率が大きい器形である。底部と口縁部の境界には、凹線が巡らされている場合が一般的である。底部外面は回転ヘラ削り調整され、全体に丁寧な作りのものが多い。底部の1／2程度まで回転ヘラ削りが及んでいる。8・9は長頸壺である。8は小型の長頸壺としたが、残片であり復元形態に問題が残る。扁平な体部に広口の外反する口縁部を付けるらしい。体部下半は、丁寧に回転ヘラ削り調整されている。9は、石室内床面から出土した完形品で、肩部が僅かに屈曲する体部を有し、肩部と底部上半に、凹線を1条ずつ巡らせている。丸底気味の底部は、静止ヘラ削り調整が行われている。細く長い口頸部の中央には、近接して2条の凹線が巡らされている。10は、装飾付須恵器に付いていた小像のうちの1体で、馬を表現したものであろう。鞍器の形態は明らかでないが、後述の壺片（35）は、その可能性がある。残存する体長4.7cm、体高3.5cm、最大幅1.1cmの小型品で、棒状の粘土塊を折り曲げて、頭部と首部を形成している。頭部には眼孔・鼻孔・口腔が刺突によって表現され、先端が欠損しているが、粘土塊を貼り付けた耳と粘土塊を引き延ばしたタテガミ等、馬の特徴が良く表現されている。他に小瓮・小壺等は検出されていない。11・12は、甕である。11は、器高63.8cm、胴径52.5cmの大型甕で、頸部にはいびつな波状文が3段に巡らされ、最下段の波状文の上下には、凹線が各1条巡っている。体部外面には擬格子叩き目痕、内面には同心円叩き目痕を残す。12は、器高42.5cm、胴径41.6cmの中型甕である。端部が内傾する短い口縁部を付けている。体部外面は擬格子叩きの後、部分的にカキ目調整されている。体部と口縁部の接合面、底部と体部の接合部の器壁は、厚いまま残されている。

B　土坑・墳丘出土の土器

須恵器　13～21は、古墳時代以来の蓋受けの立ち上がりをもつ坏身と蓋のセットからなる、坏Hである。坏H蓋（13～17）は5個体あり、天井部は扁平で、口縁部との境界も不明瞭である。口径12.5～13.0cm、器高3.5～4.0cmほどで、天井部外面はヘラ切りのまま不調整を基本とし、口縁端部は丸く収めている。内面には仕上げナデを施しているのも多い。17の天井部外面には波形状のヘラ記号が刻まれている。坏H身（18～21）は4個体にすぎないが、浅く扁平な底部に、矮小化した内傾する立ち上がりを付けている。底部外面はヘラ切りのまま不調整が基本で、内面には仕上げナデを施しているものもある。口径11～12cm、蓋受けの口径13～14cm、器高3.5cm、立ち上がりの高さ0.6～0.7cmほどで、蓋の口径とは合致しているので、蓋坏がセットとなっていたと考えられる。以上のように、2号墳の坏Hは、太市中古墳

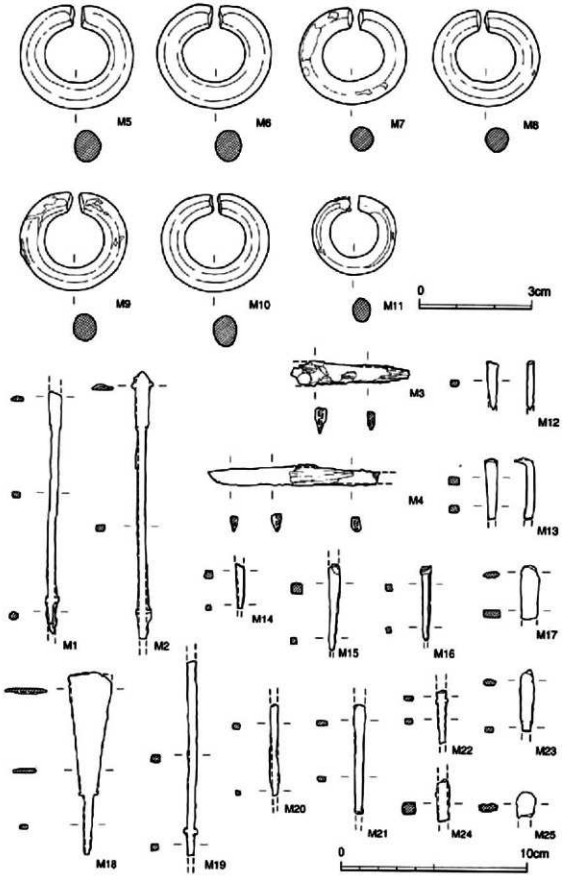


第19図　2号墳　出土土器②



第20図　2号墳　出土土器③

群出土の坏Hでは最も法量が小型で、立ち上がりも緩小化したものであることから、最も新しい一群であると位置づけられよう。22・23は、坏Iである。22は、羨道付近の表土中から出土のものである。口径が9.3cmと小さく、通常の坏Iとは法量が異なる小型品で、椀形を呈している。23は、法量が石室内出土のものと大差がない。ヘラ切りのまま不調整であるなど、手法にも共通性がある。24・25とも坏Gとしたが、器種判断に不安がある。24は、平底の底部から湾曲しながら直立する口縁部を付け、口縁端



第21図　2号墳　出土金属器

部を強かに外反させている。底部外面はヘラ切りのまま不調整である。25は、口径が大きく、口縁部中位に凹線を巡らせているなど、他の坏Gとは異なる特徴があり、椀とすべきかもしれない。26は、椀である。石室内出土の7に比べ、法量がやや大きいものの、丸底気味の底部に直立する口縁部を付け、境界に1条の凹線を巡らせているなど、形態的には大差ない。底部の1／2程度を回転ヘラ削り調整されている。27～30は、高坏とそれに伴う蓋である。27は、中窪みの扁平なつまみを付ける蓋で、有蓋高坏の蓋であろう。ただし、セットとなる有蓋高坏は、2号墳では確認されていない。天井部と口縁部の境界は、強かに屈曲させている程度で不明瞭である。口縁端部内面には浅い凹線が巡っている。28～30は、無蓋高坏である。28は、完形品で、扁平な底部に外方に開く口縁部からなる坏部に、上下2段の長方形透かしを2方に幸つ長脚が付く。坏部には、底部との境界付近と口縁部中位に、それぞれ突出する鈍い稜を付けている。脚部は、上下の透かし間に2条の凹線を巡らされている。29は、坏部の残片であるが、形態的には28に似ている。脚部は剥落痕から2方透かしであったことが判る。30は、坏Ⅰ形の坏部に短脚を付けている。31は、口径が9.9cmと小型品で、端部が面を作っていることから短頸壺の蓋としたが、壺自体は確認できなかった。天井部と口縁部の境界を屈曲させ、天井部外面は静止ヘラ削り調整されている。32・33は、長頸壺である。32は、体部の下半を欠損しているが、肩部の屈曲するものであろう。比較的短い口縁部を付け、底部と肩部の境界には、凹線を巡らせている。33は、算盤珠形の体部に、2段3方に透かしが穿たれた、2段に屈曲する脚台を付ける。体部には凹線間に波状形のスタンプ文を押圧する特異な施文が行われている。34は、提瓶のような扁平な壺体部に、短く外方に開く口縁部を付ける例の少ない壺で、直口壺とした。体部は肩部に凹線が1条巡らされ、扁平な底部は回転ヘラ削り調整が行われている。肩部には波状のヘラ記号が刻まれている。35は、脚付壺の底部付近の破片である。壺底部と脚部との接合面には、三角形状の突帯が巡らされ、ヘラ状工具による刻み目が施されている。石室内で出土している小像（10）の親鬱となる壺の可能性がある。36は、短い脚台付の鍋である。受け口状になる口縁部の径は、壺体部径を大きく凌駕している。体部中央には凹線間に列線文を飾り、口縁端部と頸部下半を除く口頸部には、縦方向にハケ目調整痕が明瞭に残っている。脚台は高さ1.9cmで、大きく外方に開き、端面を作っている。平瓶は、3個体出土している。37は、平底に体部が丸味をもち、ボタン状の把手を付けている。底部は回転ヘラ削り調整され、体部上半はカキ目調整されている。口縁部は比較的短く、径が大きい。38は、倒朝形の体部に、細く長い口縁部を付けている。底部は広範囲に静止ヘラ削り調整が施されている。39は、扁平な体部のもので、肩部は屈曲気味である。底部は回転ヘラ削り調整されている。40は、体部の過半を失っているが、小型の横瓶であろう。粘土板を充填した片側は、丁寧な回転ヘラ削り調整が施されている。反対側の体部は欠損しているが、球形となるのであろう。口縁部は僅かに受け口状を呈し、凹線で区切られている。41は、短く外反する口縁部をもつ壺の破片である。端部は肥厚せず、水平の端面を作っているだけである。

2．金属器（第21図）

石室からの出土など共伴が明らかなもの（M1～17）と、後世の移動により開口部の土坑で出土したもの（M18～25）、あわせて25点が出土した。鉄製品には武器・農工具が、銅製品には装身具（金銅・銀製も含む）のほかに、石室内流入土中から出土した釘・銅鏡がある。

A　石室内出土の金属器

武器　長頸鏃が2点出土した。M1は鏃身の先端と茎の基部を欠損する。鏃身は細身だが、M2と同形の可能性もある。施鉸の関部は棘をなし、木質が付着する。M2は茎の基部を欠損する。鏃身は長大

な主頭で、先端が三角形に近い。鞆被関部には棘を持つ。

農工具　刀子がある。M３は茎部分のみ残存し、全体に木質が付着する。M４は、基の先端を欠損する。柄部分は木質で覆われているが、上部に関が認められる。

装身具　耳環で、石室内部から７点が出土した。すべて太身の形態で、M５・M６・M11が銅芯金板貼、M７・８が銅芯銀板貼、M９・M10が銅芯銀板貼鍍金の技法で製作されている。成分や法量の関係に基づくセット関係については第４章に譲り、石室内での出土位置について触れると、大きく３つの範囲にまとまっていた。M５～７・M９の４点は、奥壁正面の床面上から検出した。南北に４個が並び、M７とM６は近接する。M８はいくぶん距離をおいて左側壁に近い床面から検出した。最も近接するM９とは0.45m程度の間隔がある。またM10とM11は、右袖のコーナー付近に残存する礫床の残欠上において検出した。両者は0.35m程度の距離を持っている。ただし出土した石室床面の状況などから、原位置保つものとは考えがたい。石室のある程度を覆っていたと考えられる礫床が、きわめて限定された位置にあることや、再利用が頻繁に行われていることなどから、後世に移動した可能性が高い。

その他　石室の流入土から釘と銅銭が出土した。釘は６点を数え、釘頭または先尖部を欠損する。釘頭が残存するもので、M12・M16は端部に打撃を加えて肥厚させ、M13はL字に折り曲げている。M17は幅広の平釘で、打撃によって丸くした釘頭付近が残存する。M14・15は先尖部付近が残存し、釘頭の形状は不明。また図化しなかったが、銅銭が４点出土した。それぞれ種が異なり、永乗通宝・熙寧元宝・天聖元寶・景徳元寶である。

B　土坑出土の金属器

武器　すべて鉄鏃である。M18は方頭の鏃身を持ち、右上端を僅かに欠損する。基は完全に残存し、関部は僅かに輪を持つ。M19は長頸鏃の茎部分で、明瞭な突出の輪がみられる。M22も類似する形態だが、棘付近だけが僅かに残存する。M21は断面方形の棒状で、両端を失う。片側に肥厚がみられることから、鏃の基上部と考えられる。M23・25は、小型の鏃身部と考えられるが、残存部位が僅かで断定できない。M24も断面が方形で、鞆被の一部の可能性がある。

第４節　３号墳

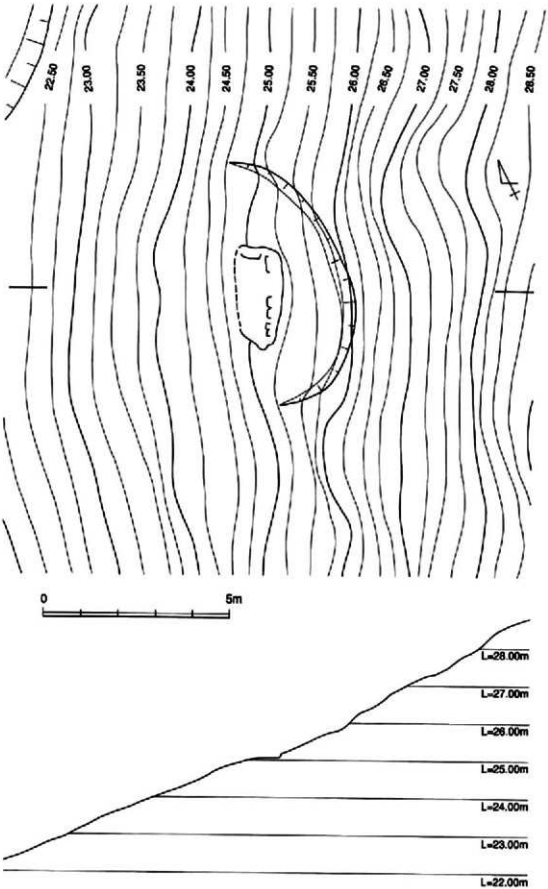
Ⅰ　遺構

調査区のほぼ中央において検出した。標高25m付近の緩斜面に築かれ、北西には５号墳が、南東には８号墳が位置する。調査前には墳丘の隆起や石材の集積などみられなかったが、調査中の掘削によって、古墳の存在が明らかとなった。

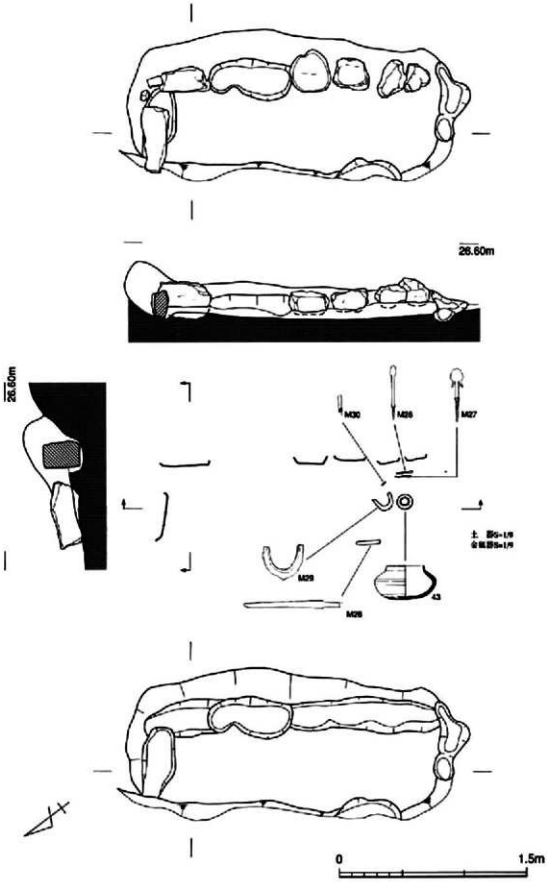
周辺は地形の流失が著しく、主体部である横穴式石室も西半分が失われている。東側では、墳丘と丘陵を区画するカット面が径６ｍの弧状に検出できた。墳丘盛土は完全に消失しているが、石室奥壁との距離から、カット面よりも一回り小さいと考えられる。

１．主体部（第23図）

横穴式石室は奥壁と左側壁の基底石だけが残存する。小規模の石室と考えられるが、袖の有無など石室構造は十分に把握できなかった。床面からは残存状態のよい遺物が少量出土している。



第22図　3号墳　墳丘（検出後）



第23図　3号墳　石室、遺物出土状況、墓墳

2．墓壙（第23図）

長方形を呈し、斜面下方に接する西半分が消失する。全長2.75m、残存する短軸1.07m、最深部は奥壁の右コーナー付近で0.43mをそれぞれ測る。墓壙の周壁は斜め外方へ開く。

石室の奥・側壁は、墓壙の周壁沿いに幅2.5mの溝を設けて据えつける。左側壁の前方では、石室内に突出する石材の痕跡が検出された。石材を抜き取る際に生じたものか、閉塞石など石室に伴う石材の痕跡か判然としないが、検出した墓壙の南辺とは一致する。また右側斜面の縁で落ち込みの一部を検出したが、側壁の掘り方とする確証は得られなかった。

3．石室（第23図）

奥壁と東側壁の基底石だけが残存する。西側では墓壙ごと石材が消失して、袖の有無を判断することはできなかった。全長2.15mで、主軸はN37°Eに向ける。

奥壁は長方形の石材を基底石とする。側壁との隙間は、掘り方の状況から、後世の攪乱で西側にずれたと考えられる。左側壁は奥壁の側面に接する形で接続する。基底石として人頭大の石材を5つ検出したが、後世に2つ程度抜き取られている。

羨道については、明瞭な状況を把握できなかった。残存する石材が小さい点からみて、玄室と羨道の境界が不鮮明な小さい石室であった可能性が高い。なお、排水溝ならびに閉塞状況を示すものは検出できなかった。

4．床面（第23図）

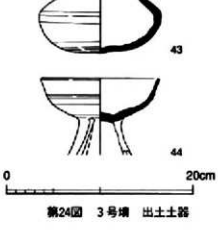
玄室の床面は1面で、開口部付近から土器・金属器を検出した。左側壁前方から鉄鏃（M28・M29）と不明品（M30）、その西側で須恵器の短頸壺（43）とU字形の鋤先（M29）を検出した。また崩落部分に近い床面上から鉄刀（M26）がそれぞれ出土した。

なお、奥壁部分から南へ1.5mの範囲には遺物が残存せず、大きな空間が広がる。

5．開口部

地形の流失などの影響から、前庭部並びに墓道の存在を確認できなかった。

Ⅱ　遺物



第24図　3号墳　出土土器

1．土器（第24図）

石室の残存状況が悪く、3号墳に確実に伴う土器は、須恵器（短頸壺）1点のみで、古墳周辺から出土している須恵器（坏H身・高坏各1点）2点は、3号墳に伴うものかどうかは明らかでないが、便宜的に3号墳に含めることにする。

須恵器　42は、体部が扁平な坏H身であろう。立ち上がりは緩小化している。残存率が悪く、復元口径は不安がある。43は、唯一、石室内から出土している完形品の短頸壺である。扁平な体部に内傾気味の短い口縁部を付けている。底部外面は丁寧な回転ヘラ削り調整が行われ、底部内面は仕上げナデを施している。44は、無蓋高坏である。脚部は下半を欠損しているが、短脚の1段3方長方形透かしであろうか。ただし、やや脚部の

長いものであろう。坏部は口縁部と底部の境界を凹線状の段によって区切っている。

2．金属器（第35図）

5点の金属器が出土した。すべて鉄製品で、武器・農工具・不明品がある。いずれも石室内の床面において検出した。

武器　刀と鏃がある。刀はM26である。片刃で、茎尻を欠損する。刃身は柄下から幅を減じて、半分程度からは平行に延びる。切先より1／3は反り返った状態で出土した。茎は上下に関を持ち、目釘孔は残存しない。鏃にはM27・M28がある。M27は柳葉の鏃身だが、幅広で側面から逆刺にかけて極端に湾曲する。篦被関部には僅かな棘を持つ。茎は長く、上端に木質が残存する。M28は長頸鏃で、茎の先端を欠損する。圭頭の鏃身は鋤状で、篦被関部は僅かな棘をなす。茎の上端に木質が付着する。

農工具　鋤先がある。M29はU字形の鋤先で、断面V字形の浅い袋部を持つ。その他、形態の不明なものが1点ある。M30は断面長方形の薄い棒状で、残存する先端に向けて厚みを減じる。

第5節　4号墳

Ⅰ　遺構

調査区の東部に位置する。調査した古墳では最も高所の、標高32m付近において検出された。西へ広がる丘陵斜面の僅かな緩傾斜部分に占地し、急な斜面を隔てた西側20m付近に、12号墳・6号墳・13号墳が立地する。主体部は横穴式石室で、調査前には円形の平坦面の中央に、石材の集積が確認できる状況であった。

墳丘は丘陵の斜面を削りだした平坦面に、盛土を加えることで構築する。斜面に接した南側が流出して変形するが、墳裾のラインからほぼ円形と考えられる。検出した墳丘の規模は南北9.21m、東西7.86mを測る。墳丘高は南側の墳裾から3mであった。

墳丘の北側は、丘陵斜面を削り込んだ平坦面と周溝がある。いずれも墳丘を造成する土砂の確保とともに、丘陵斜面から墳丘を区画する意図がうかがえる。

1．主体部（第26図）

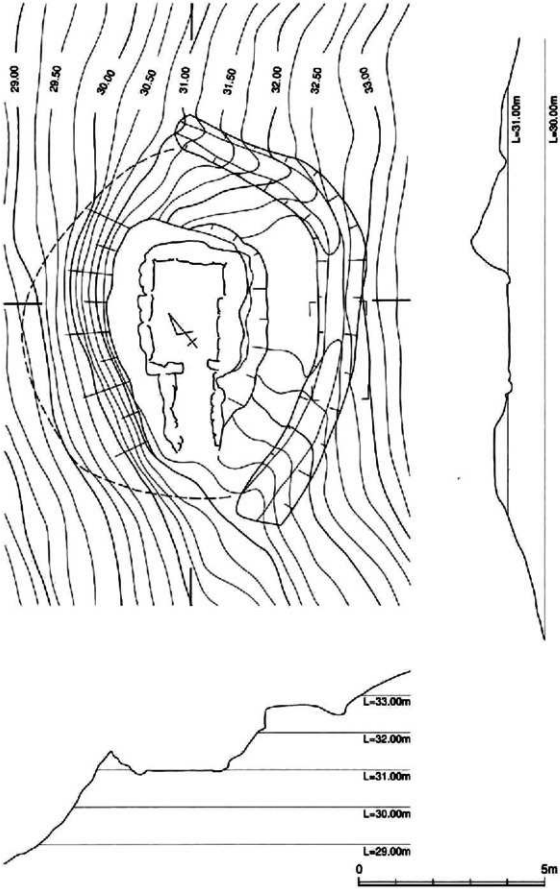
横穴式石室は墳丘の中央に位置し、南西へ開口部を設ける。奥壁と左右側壁の基底部付近が残存、天井石は検出できなかった。石室の上部は後世の地形改変などで崩れ落ち、残存する側壁も歪曲して斜面下方に傾いた形で検出された。石室流入土には、落ち込んだ人頭大の石材が多数含まれていた。

両袖式の横穴式石室だが、平面規模や構造に特異な点がみられる。床面には礫床を施し、上面からは土器を中心に、整然とした状態で遺物が出土した。

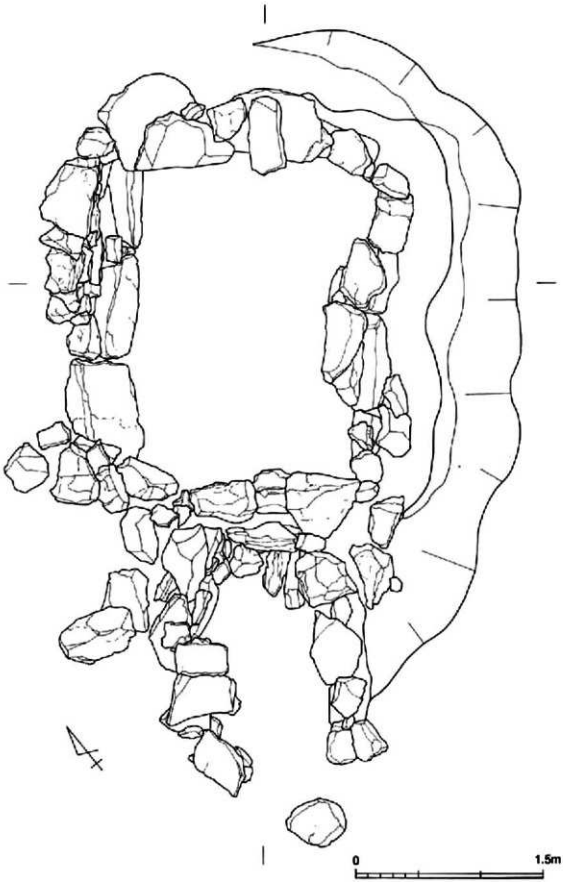
2．墓壙（第31図）

玄室の墓壙は、長軸3.56m・短軸3.48mで、平面は方形を呈する。最深部は奥壁の右コーナー付近にあたり、1.03mを測る。また羨道部分には、長軸1.80m・短軸1.56mの掘り方を個別に設ける。

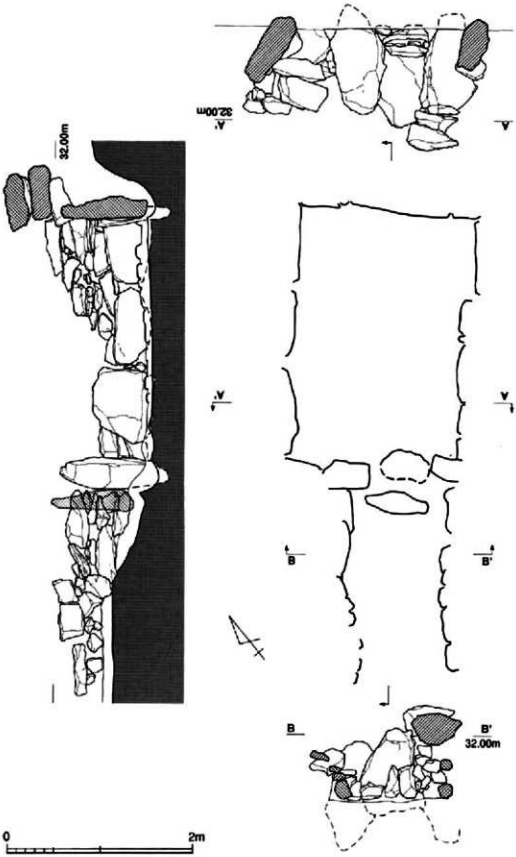
玄室の墓壙周壁は、底部から斜め上方に緩やかに開きながら立ち上がる。基底部付近で角度を変え、さらに底面から0.6m付近でも小段を設けている。墓壙の底面は平坦で、黄褐色のシルトを敷き詰めて礫床を敷設する。礫床上面とのレベル差は0.16mである。周壁沿いに幅1.2m前後の溝を巡らせて石室の基底部および袖石、框石を据える。断面は、東側壁から奥壁・左側壁がコの字形で平坦なのに対して、



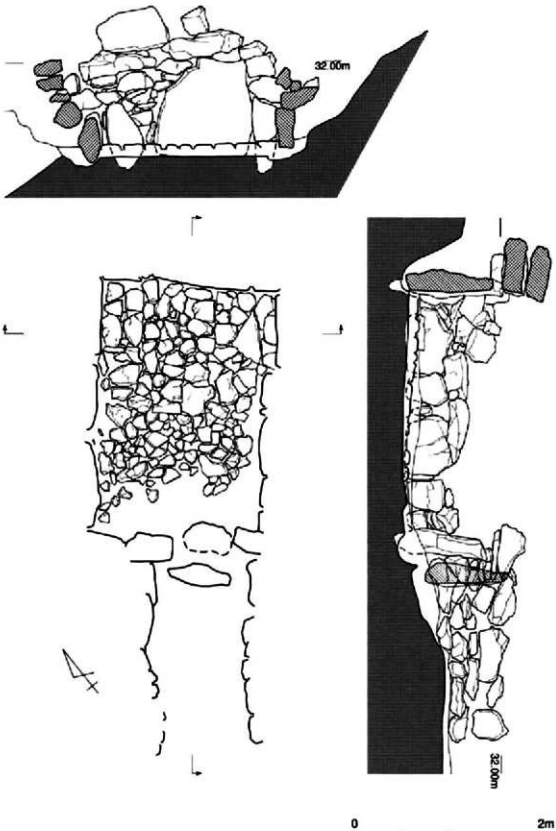
第25図　4号墳　墳丘（検出後）



第26図　4号墳　石室平面



第27図　4号墳　石室右側壁・玄門立面、床面プラン



第28図　4号墳　石室奥・左側壁立面、床面（棚床）

西側壁のみV字形に切り込んで形成する。また奥壁の両コーナーおよび両袖石は、特に深い掘り方で設置する。

3．石室（第27・28図）

全長は5.01mで、主軸をN38°Eに向ける。玄門は石室の中軸に設けられず、東側へと偏って取り付く。羨道の先端は流出が激しく、様子をとどめていない。

玄室は全長2.55m・幅1.86mを測る。両者の比率はおよそ3：2となり、他と比べてすづまりのプランである。奥壁は中央に大きい石材を据え、その周囲に小さい石材を積み上げている。中央の石材は奥壁の中央でなく、玄門からみて正面に配置される。左右で積まれた石材は、側壁とのコーナー部分に縦長の石材を立て、小さい石材で隙間を埋めて構成する。壁面は垂直を保つが、平面では僅かながら両コーナーが前にせり出している。側壁と奥壁のつなぎ部分は、左右で状況が異なる。右側壁が奥壁を遮る形で立つのに対して、左側壁は奥壁に接続する形で隅を形成する。隅の上部では、石材の亡失と石室自体の歪曲によって、不明な点が多い。持ち送り構造の有無は、確認することができなかった。

左右の側壁は、石材の大半を失い、基底石付近だけが僅かに残存する。基底石は平坦な板石で、横長に並べた上に人頭大の石材を積み上げている。左側壁は4枚の板石を並べ、袖石に接する部分には人頭大の石材を詰めている。右側壁は3枚の板石で基底石を構成する。

玄門では、2つの長大な石材を左右に並べて袖石とする。袖部は右側が長く、側壁コーナーと袖石の間に礫を積み上げて壁とする。袖部幅は、右袖が0.83m・左袖が0.25mを測る。袖石は内側に突出して入り口を形成し、床面には平坦な石材を配して框石とする。框石の上面は閉塞石掘り方の底面と一致する。袖部幅0.65m、框石の高さ0.10mである。框石の上面からは、4つの詰め石を挟んで板石がもう1枚置かれていた。閉塞石を支えるための石と考えられる。

両袖石の外側では、長さ1.16m・幅0.58mの石材を立てて、閉塞石とする。羨道の床面に楕円形の掘り方を設けて据え、検出段階では、閉塞石の裏側にさらに裏込めの石材が5つみられた。

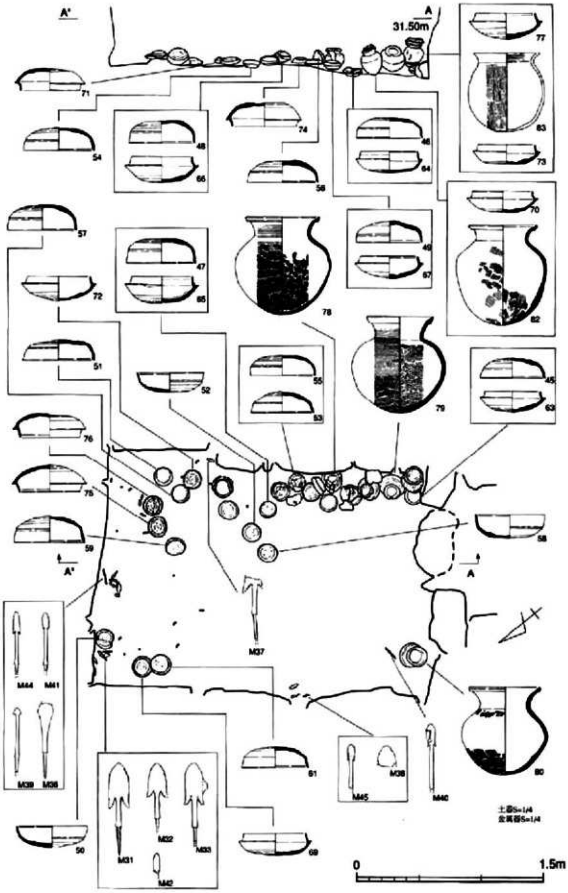
羨道基部は玄室よりも一段高くなり、先端部分に向かって緩やかな傾斜を持つ。基部は1.00m、框石上面と開口部付近のレベル差は0.38mを測る。側壁は幅1.0mで、ほぼ並行のまま先端にいたる。開口部付近は流失が著しいため、羨門の位置は明確にしがたい。小さめの石材を積み上げて形成するが、石が玄室よりも小さめで、積み方も粗雑であった。

4．床面（第29図）

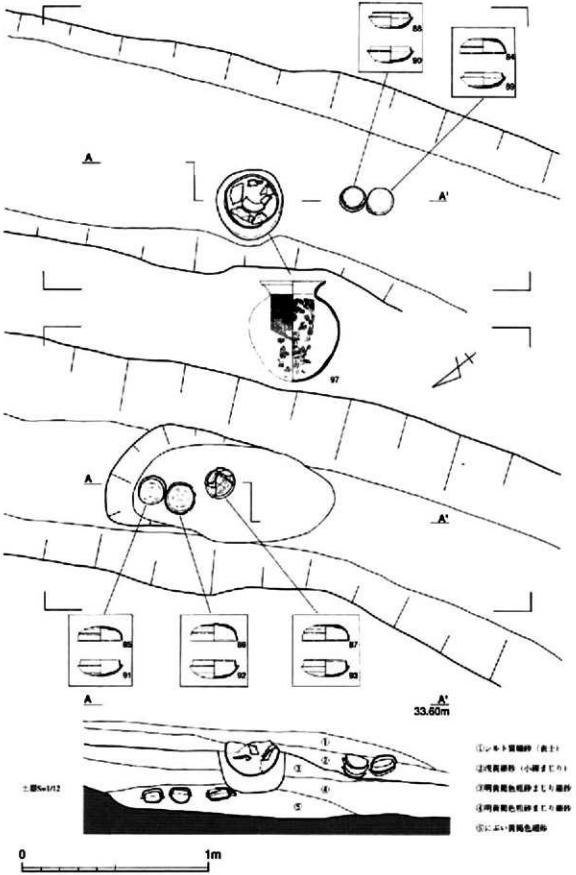
床面は1面で、検出した土器・金属器・玉は、すべて同一面から出土された。床面には礫床が敷設される。玄門付近を除く床面におよび、奥壁付近に板状の石を、玄門に近い部分に拳大の礫を、それぞれ隙間なく敷き詰める。

土器は主に左側壁沿いの床面を中心に検出された。なかでも左袖石から左側壁の中央にかけては、隙間なく土器が密集する。左側壁のコーナーでは須恵器坏H身（73）の口縁に丸底の土師器甕（83）が乗り、さらにその口縁を須恵器坏H身（77）で塞ぐ。また須恵器甕（82）の口縁にも、須恵器坏H身（70）が乗った状態で検出された。

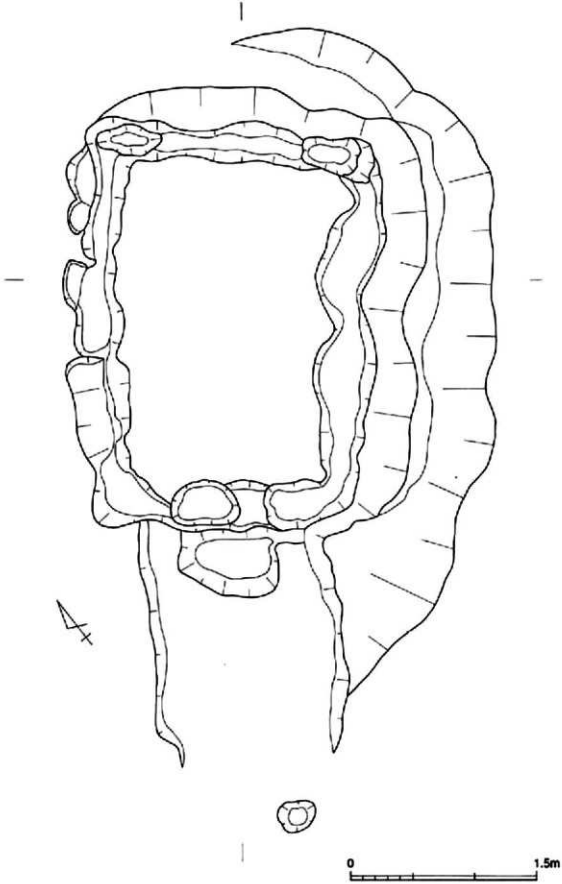
検出された土器の大半は須恵器の坏Hで、蓋と身が合わせ口となっていたものは、4セットある。このうち石室の中央付近で検出されたセット（蓋：47・身：65）の身内部からは、ベンガラと貝が検出された。ベンガラは土器に流入した土壌と混交し、貝がこれらの土壌に埋もれた状態であった。貝についてはチョウセンハマグリとの教示を、京都大学大学院の中原　計氏からうけている。二枚貝の1枚だけ



第29図　4号墳　石室内遺物出土状況



第30図　4号墳　周溝内遺物出土状況



第31図　4号墳　石室墓墳平面（石材除去後）

が残存するが、全体に融解がすすみ、かなり脆弱な状態にある。また土器内の土壌からは貝殻の破片が検出されているが、どのような状態で埋納されていたのかを推定するにはいたらなかった。なお、他のセットからは、内容物を確認できなかった。

金属器は玄室の各所から検出されたが、全体に周壁沿いからの検出である。鏃と刀子が主体で、馬具や武具は残欠も含めて確認できなかった。また玉類は、大半が礫床の間に落ち込む形で検出された。奥壁付近に分布するが、広範囲に散らばり、連結状況を把握できる状態ではない。

床面の中央には土器群がなく空間になっているが、棺台や木棺の存在を示すものは確認できなかった。

整然とした出土状況が、埋納した状態をとどめているかについては疑問が残る。セット関係を保つ遺物を除けば、大半の蓋が内面を上に向けた状態で検出されていることや、寡少な金属器、玉類の広範囲な分布など、不自然な点もみてとれる。遺物が避けたような状態で石室の中央に広い空間があることは、造墓時の片づけに起因するものと理解し、埋葬直後の状態は保持していないと考える。

5．開口部（第26図）

開口部より南側は地形の流失がみられ、前庭部や墓道などの存在は確認できなかった。また遺物も出土していない。

開口部の前面では、羨道の中心に埋納された石材が検出された。上面が平坦で、上径が0.48m×0.40m、深さ0.28mである。逆円錐形の掘り方に据えられ、2号墳の開口部で検出されたものと同様、石室に関連する石材と考えられる。

6．周溝（第25・30図）

周溝は墳丘の東部1／2弱を取り囲んで、円弧を描く。北側の墳丘中心軸部分で幅1.14m・深さ0.25mを測る。両端はそれぞれ斜面によって収束し、消失する。周溝の埋土は4層で構成され、局部的に層厚を変えながらも、平行の堆積状況を呈する。底面は小さな起伏を除けば、ほぼ平坦であった。

墳丘中心軸からやや南側で、土器がまとまって出土した。上下2層から検出され、いずれも置かれた状態を保っている。

上層土器群は、第2層の上面において検出された。甕1点と坏4点が出土した。坏は2個体ずつが重ねられ、北から甕（97）・坏H（88と90のセット）・坏H（84と89のセット）の順で直線に並ぶ。坏は、中央が身2つを正位置に重ね、南のセットは蓋・身を合わせ口とする。いずれも内容物はみられなかった。甕は形に合わせた円形の掘り方に据えられていた。

下層土器群は、第5層の中から検出された。上層遺物とのレベル差は0.3mである。坏H6点で構成され、合わせ口の蓋と身が3セット並べられる。北から順に85と91、86と92、87と93で、いずれも蓋を上にした状態で置かれていた。最も南側のセットは、上層の甕を据える掘り方と近接し、その影響によって破損したとみられる。

下層土器群の周囲は浅い土坑状で、第5層が単一の堆積をなすことから、周溝の底面に土坑へ設けて土器を配置、埋めたものとみられる。また上層の土器群は全体を囲む掘り方がなく、構成する土器のセットにも違いがあるものの、甕を土坑状の掘り方に据えるなど、同様の意図で配置したと考えられる。これらの遺物は、墓周辺で行われた祭祀に伴う性格が想定でき、ある程度の時間差をもって、ほぼ同じ位置で祭祀が行われた状況を示すものであろう。

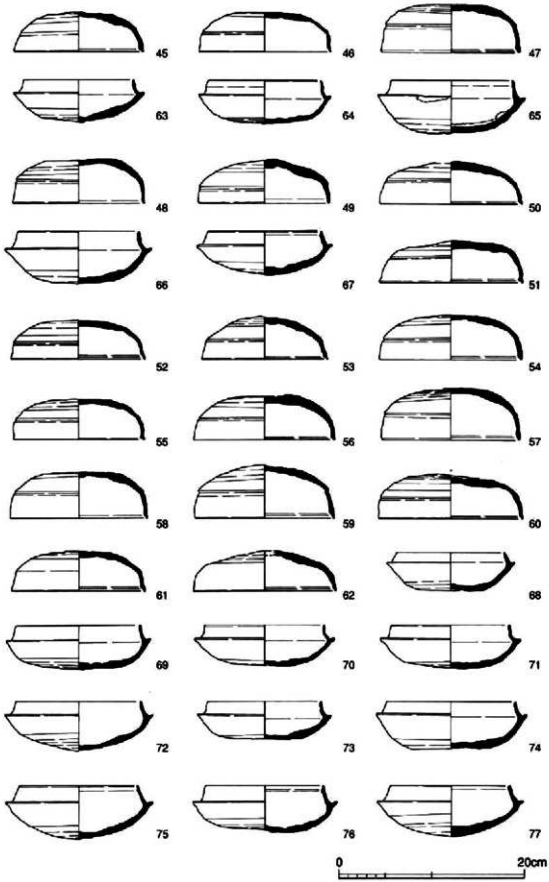
Ⅱ　遺物

1．土器（第32～34図）

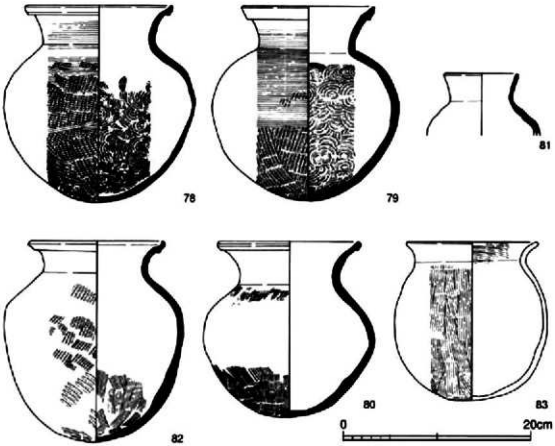
出土位置によって、石室内と墳丘付近のものとに大きく分けることができる。石室内から出土したもの（45～83）には、須恵器（坏H・壺）と土師器（甕）、墳丘・周溝等から出土したもの（84～97）には、須恵器（坏H・壺・甕）がある。4号墳出土の須恵器の器種構成は、坏H・壺・甕の少数の器種に限定され、他の古墳と差異が存在する特徴がある。なお、石室内から出土したものの多くは玄室内床面として、また、周溝では上下2層で取り上げられているのは、前節でふれたとおりである。

A　石室内出土の土器

須恵器　45～77は、古墳時代以来の蓋受けの立ち上がりのある蓋と身のセットからなる坏Hである。坏H蓋は18個体、坏H身は15個体が確認された。そのうち、蓋坏5セットが組み合った状況で出土（45と63・46と64・47と65・48と66・49と67）している。ただし、47と65、49と67の蓋坏のセットは、胎土・焼成とも酷似していて、組み合った状態で焼成されたと考えられるが、45と63、46と64、48と66のセットは、胎土・焼成が異なっていて、石室内副葬時にセットとして組み合わされたものであろう。坏H蓋（45～62）は、天井部が扁平なもの（45～56・58・60～62）が多く、径高指数が大きく、天井部が丸味をもつもの（57・59）は少ない。口径13.4～15.2cm、器高4.1～5.6cmほどの範囲にあり、口径は14～15cm、器高は4～5cm前後のものが多い傾向がみられる。天井部と口縁部の境界は、突出して鋭い稜を作るもの（57・59）と、浅い凹線を巡らせるもの（45～56・58・60）と不明瞭なもの（62）の3形態がある。口縁端部は、内類して浅い凹線状の段をなすものが大半で、ほかに平坦なもの（46）がある。凹線状の段をもつものにも明瞭なものと、退化して不明瞭なものがあり、後者のものが多い。天井部外面は1／2ほどの範囲で、すべて回転ヘラ削り調整が施されている。内面は、回転ナデ、仕上げナデ、指おさえ等によって同心円叩き目痕がナデ消されているものがあるが、同心円叩き目痕が明瞭に残されているも半数程度存在する。坏H身（63～77）は、底部が丸味をもつもの（67・75・77）と、扁平なものとが共存する。蓋受けの立ち上がりの端部が丸く収められているものが過半を占めるが、立ち上がりの端部が内類して端面を作り、凹線状の段を巡らせるもの（67・75・76）がある。77は、凹線状の段が省略された方形の端面をなすものである。底部が扁平なもので、端部を肥厚させて段を付けるもの（76）は1点だけある。口径は11.7～13.6cm、蓋受けの口径は13.5～15.9cm、器高4.1～5.6cm、立ち上がりの高さ1.1～1.9cmの範囲で、口径12～13cm、器高4.5～5.5cm、立ち上がり高1.5～2cm前後のものが多い。68は、口径が11.5cmと小さく、立ち上がり高も1.1cmと短く、底部外面は、例外的なヘラ切りのまま不調整のもので、他の坏H身とは異なる法量、手法のものである。外縁部のみ回転ヘラ削り調整するもの（73）各1点を除くと、底部の1／2～1／3程度の範囲で、回転ヘラ削り調整が行われているのが通例である。内面は蓋と同様、同心円叩き目痕の残ものが多くみられる。なお、65にはベンガラが付着し、なかにチョウセンハマグリが残存していた。また、内面に付着物が残されているもの（49・67のセット）、ヘラ記号の刻まれたもの（50）、天井部に鉄鎌（第35図M35）が付着した蓋（50）等がある。78～83は、中型の広口壺（78～80）、小型の壺（81）である。78・79は球形の体部に、外反する口縁部を付ける。端部は外方に肥厚させて、端面を作っている。いずれも、体部外面は擬格子叩き目の後、カキ目調整を行い、内面には同心円叩き目痕を残す。80も、球形の体部をもつが、やや扁平な感がある。体部内面には結土の輪積痕とともに、成形時のユビナデ痕が明瞭に残っている。外面は擬格子叩き目痕を残すが、内面に



第32図　4号墳　出土土器①



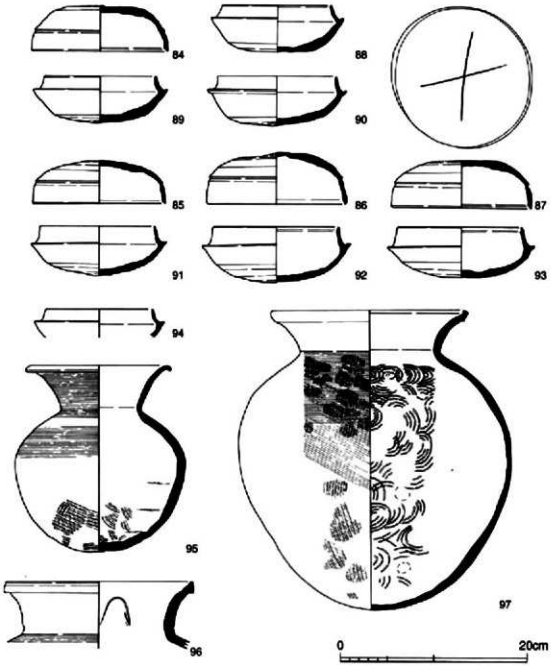
第33図　4号墳　出土土器②

は同心円叩き目痕はみられない。口縁端部は外方に丸く肥厚させている。81は、真っ直ぐ外上方に延びる口縁部を付ける小型の直口壺であろう。82は、長胴形のもので、口縁部の形状も加味して壺とした。体部は80と同様、輪積み痕、ユビナデ痕、板ナデ痕等成形時の痕跡を残している。外面には擬格子叩き目痕がみられる。口縁部は短く外反して、端部を外方と上方に肥厚させて端面を作っている。

土師器　83は、短く外反する短い口縁部に、最大径がやや下位にある長胴の体部をもつ完形品の甕である。古墳出土の完形品は少なく、全形の判明するものとして貴重である。体部外面、口縁部内面はハケ目調整されている。体部内面には指頭圧痕とユビナデ痕が残る。

B　周溝等出土の土器

須恵器　84～94は坏Hである。墳丘表土出土の坏H身（94）を除き、周溝の東部から出土したもので、上層（84と89セット・88・90）と下層（85と91・86と92・87と93のセット）として取り上げられている。ただし、石室内出土のものと同様、85と91、86と92の蓋坏は、胎土・焼成が酷似しているが、84と89、87と93のセットは、胎土・焼成が異なっている。上層の坏H蓋（84）は天井部が扁平気味で、天井部と口縁部を分ける鈍い稜は、きわめて不明瞭で、凹線状のものに近い。端部は内傾する段を付けている。下層の坏H蓋（86・87）は、天井部は扁平であることには変わりがないが、天井部と口縁部の境界には、鈍い稜を突出させている。口縁端部は内傾する段を作るもの（87）、内傾する面を作るもの（85）、丸く収めるもの（86）があり、微妙な差異がみられる。天井部外面は、1／2～1／3程度が回転ヘラ削り



第34図　4号墳　出土土器③

調整されている。内面には石室内出土のものにみられた同心円叩き目はナデ消されていて、痕跡を残していない。87の天井部には「×」形のヘラ記号が刻まれている。上層の坏H身（88～90）は、口径11.4～12.7cm、受部径13.9～14.7cm、器高4.9～5.3cmで、立ち上がりの高さは1.5～1.7cmである。底部は扁平気味で、内傾する立ち上がりの端部は、すべて丸く収められている。底部外面の回転ヘラ削りの範囲は、1／3～1／4程度である。下層の坏身H（91～93）は、上層のものより底部は丸味をもち、立ち上がりの内傾度は浅く、端部に段を作るもの（92・93）がある。91の立ち上がりは、中程で僅かに外方屈曲させ、端部付近で再度、内方に屈曲させながら端部を鋭く収めている特徴があり、石室内出土の坏H身

(64・65) と類似している。底部外面は、1／2～1／3程度の範囲で、回転ヘラ削り調整が施されていて、上層のものより削りの範囲が広い。内面は上層のものと同様、同心円叩き目痕はナデ消されている。以上のように、周溝内出土の坏Hは、必ずしも個体数が多くはないものの、上層と下層で形態・法量・調整手法に僅かに差異が認められる。94は、墳丘周辺から出土している坏H身の破片で、端部は丸く収められている。95は、球形の体部に大きく外反する口縁部を付ける広口壺で、法量は石室内出土のものと良く似ている。口縁端部は斜下方に屈曲させている。口縁部・体部上半の外面は、カキ目調整され、体部下半は擬格子叩き目痕がナデ消され、底部付近にのみ痕跡を残している。内面には、下半部にのみ同心円叩き目痕を残している。96・97は甕である。96は、口縁部の破片で、端部は肥厚して外傾する端面を作る。内面には逆U字形のヘラ状工具による痕跡がみられる。97は、器高31.7cmの中型品である。短く外反する口縁部は、端部を上方に肥厚させ、端面を作っている。体部外面は擬格子叩きの後、カキ目調整され、内面は同心円叩き目痕が残る。

2．金属器（第35・36図）

24点のすべてが鉄製品である。墳丘の埋土から出土したM54を除いて、石室の床面から出土した。

武器　すべて鏃である。M31～34・37は柳葉の鏃身をなす。M31は逆刺が幅広で外反も僅かである。M32・M33は逆刺が外反する。M33は箆被関部が台形で、径も茎とは明瞭に異なる。M34・M37は鏃身の大半を失うが、片側の逆刺が残存する。M34が外反気味、M37が直線的に延びる。M35は坏蓋の天井部外面に付着して検出され、鏃身だけが残存する。逆刺はみられないが、上部の形状は柳葉に近い。M38は鏃身の先端付近と考えられるが、残存部位が僅かなため形式の比定を避けたい。

M40～46は長頸鏃で、幅の狭い柳葉を持つ。M31～53が石室床面、M54が墳丘の埋土から出土した。いずれも矮小化した逆刺を持つ。鏃身の側面は湾曲せず、直線に近い。箆被関部は、基部より茎を失うM40が直角、M41が台形、M44が棘を有する。

M42・M43・M46は鏃身の一部だけが残存する。いずれも幅の狭い柳葉と考えられる。M36は鏃身の先端を欠損する。平面は菱形に近く逆刺しがみられないため、主頭に比定した。緩やかに連続して箆被にいたる。M39は三角の鏃身を持つ長頸鏃で、箆被の関には明瞭な突出の棘をもつ。

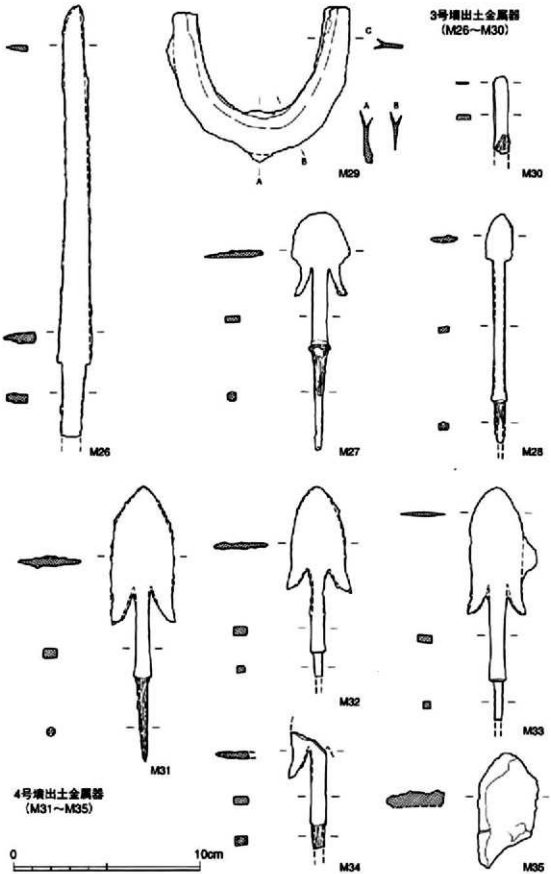
このほか小片化したもので、鏃の一部と考えられるものがある。M47～50は長頸鏃で、箆被から茎が残存する。箆被関部は、M48が楕端の台形、他は僅かな台形を呈する。M51は断面方形の棒状、M52は断面楕円形の軸状を呈し、前者が箆被、後者が茎の一部に比定した。

農工具　刀子が1点出土している。M53は刀子の刃部および柄元が残存、柄元から茎は木質に覆われている。片刃だが刃・背ともに切先に向かって幅を減じる。柄元は上下に関を持つ。茎の先端は欠損し、目釘穴は見当たらない。

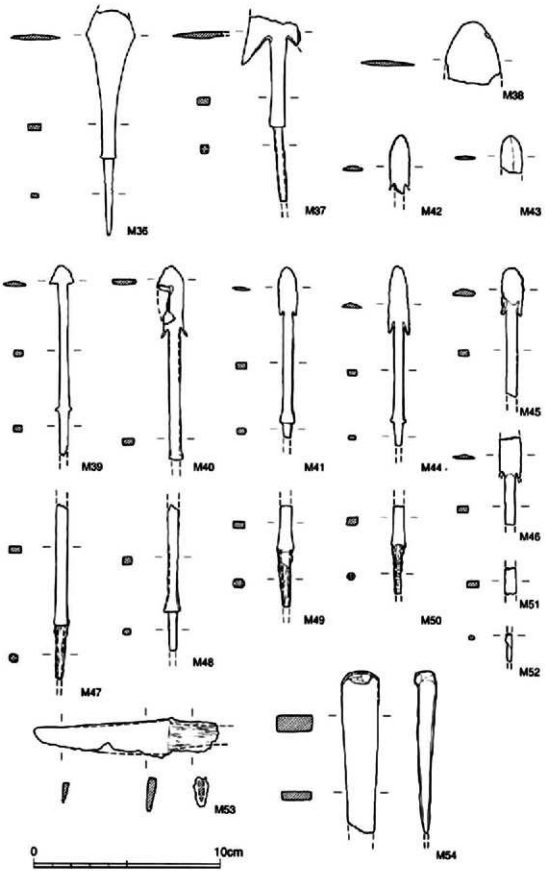
その他　墳丘の埋土から小形の鑿とみられる鉄製品（M54）が1点出土した。残存する一端は肥厚して、中央に打撃痕がある。断面は長方形だが、先端に向かって幅・厚みともに規模を減じる。古墳に伴う遺物ではなく、後世に使用されたものであろう。調査区の各所には花崗岩の露頭があり、過去に加工用石材として利用されていたようで、調査においても矢穴を使って割られた石材が検出されている。M54は小さいことから、露頭する石を切り出す鑿とは考えがたいが、石材として調整するために用いられた可能性がある。

3．玉類・石製品（第37～38図）

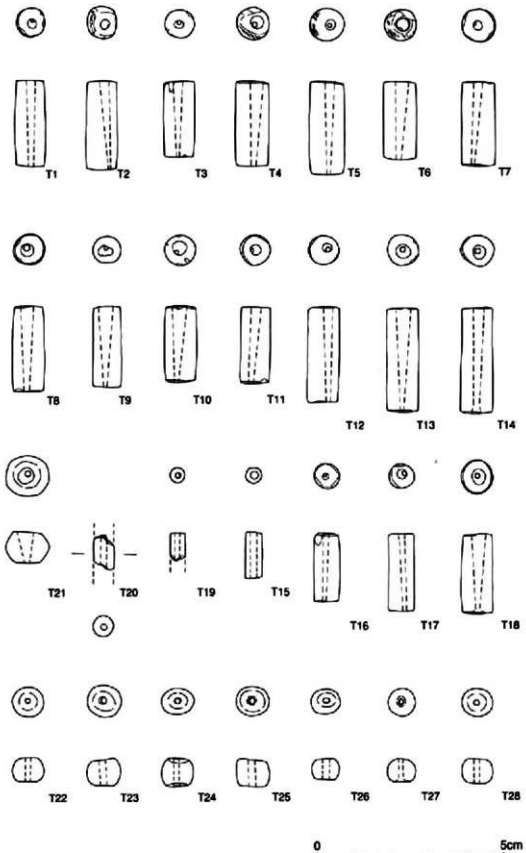
43点の玉類が出土した。種別は管玉と小玉、算盤玉が出土している。いずれも石室の羨床上において



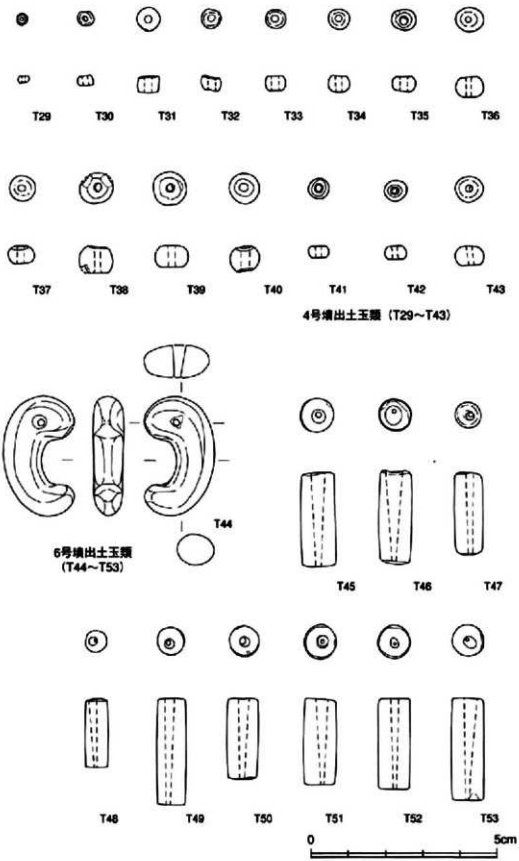
第35図　3・4号墳　出土金属器①



第36図　4号墳　出土金属器②



第37図　4号墳　出土玉類①



第38図　4・6号墳　出土玉類

検出した。

T1～T20は管玉である。全体に残存状況はよく、一端を欠損するT19と両端を欠損するT20を除いて、完形の状態で出土した。長さ2～3／径1cm前後のものが主流だが、T15・T19・T20は細身の管玉である。いずれも円柱状に石材を加工しているが、T4・T13など岩質のよくないものは、側面に面取りの整形痕をとどめている。T2・T4～6の上面には擦痕が明瞭に認められるほか、片側穿孔の貫通部分にあたる下面の孔周囲を面取りするものが多い。T9は3度にわたって開けなおし、孔に歪みが生じている。大半は硬質の碧玉で、深緑を呈する。T2・T3・T15ではマーブル状に節理が認められるほか、T1・T4・T10・T11では砂粒の含有がある。T16・T20は軟質のグリーンタフを使用している。

T21は算盤玉である。平面は楕円形、側面は六角形をなす。側面の中央には明瞭な稜があり、上部からの片側穿孔を施す。碧玉で深緑色を呈する。

T22～T43は小玉である。脆弱な状態のT38以外は、完形で出土した。直径0.3～0.9cm／厚さ0.2～0.8cmとバラツキが著しい。平面は円形を指向するが、側面形は円筒形から太鼓形に近いものまで、バラエティに富む。材質は大半がガラス製で、内部に気泡があるものや、上下の平面に擦痕の残るものがある。T29・T30は石材を加工した白玉である。色調はガラス製の玉が藍色～緑色、石製の玉が赤色を呈する。

第6節　5号墳

Ⅰ　遺構

調査区のほぼ中央部にあり、丘陵斜面から太市川左岸に接する平坦部への傾斜変換部に位置する。標高23m付近にあたる。

調査前から、1m程の高まりをもって認められていた。掘削を行うにしたがい、周溝や列石を内包する墳丘を供えた、主体部が横穴式石室の古墳であることが判明してきた。

1．主体部（第40図）

墳丘のほぼ中央付近に無袖式の横穴式石室の主体部をもつ。開口方向はN35°Eである。横穴式石室は基底石の1段を残すのみで、天井石を含む上部は消失している。石室の検出状況などから、後世に撤去されたものであろう。石室中央から奥門寄りに、組み合わせ式の石棺が1基設置されている。床面には副葬品は少なく、耳環と土器が僅かに出土したにすぎない。

2．墓壙（第44図）

墳丘のほぼ中央部に位置する。長軸5.7m、短軸2.7mで、平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方は山側にあたる東側を掘削する一方、西側は浅く掘り込まれている。墓壙埋土は2層からなり、石室基底部設置に際し、裏込めされたことがわかる。なお、石材は基底部のみ残存していることから2段目以上の石材の積み方は不明で、盛り土方法との関係も不明である。奥壁部分と両側壁部分の石室基底部には石材を設置するための掘り方が残る。両側壁部には浅い溝状の掘り方や個別の石材に合わせる掘り方も有する。墓壙の最深部はその中央付近にあたり、0.9mを測る。断面では2層の堆積が残存し、0.45mの厚みで盛り土がみられる。

周溝は幅1.5mで、北西から南東方向に直線的に掘削したのち、折れ曲がり、南南西方向に掘削して

いる。古墳東辺を南に掘削した掘り方は、古墳の南端から南方7mまで、丘陵側をカットしている。なお断面形は緩やかな逆台形を呈し、茶褐色シルト混じり細砂層などがレンズ状に堆積する。

3．石室（第41図）

石室は無袖の横穴式石室で、全長4.5m、幅が羨門付近で1.08m、石室中央付近で1.05m、奥壁付近で1.22mを測る。平面形は石室奥から羨門付近にかけて東方向に若干湾曲している。また石室全体の石材損失が著しく、西側の一部で2段みとめられた箇所もあるが、ほとんどが石室基底部1段だけが残存していたにすぎない。

奥壁は西部の1段のみ残存しており、中央および東部では裏込め石が残存していた。奥壁全体はおよそ2あるいは3列の石材で構成されていたと考えられる。

側壁は石材の長辺を水平方向に用いる。すべての石材が周辺で採取できる花崗岩で、規模は0.25mから1.1mまで、ばらつきがある。掘り方底部付近では、基底部の隙間に小型の石材が詰めており、一般的な手法を用いている。

右側壁では中央から羨門寄りに大型の石材がある他は小型で、1段或いは2段残存していた。左側壁には大型石材が1段のみ残存しており、小型石材のものは2段残存していた。

4．床面（第42図）

床面は断ち割りの結果、1面を検出した。遺物の出土状況としては全体に希薄で、耳環が2点、鉄製品1点と土器類がみられた。

石室中央のやや南寄りで、組み合わせ式の箱形石棺（第43・44図）が存在した。規模は長軸長1.55m、短軸長0.75m、高さ0.45mと小型のものである。内部規模は長軸長0.87m、短軸長0.33m、高さ0.29mで長軸の方向は石室開口方向と一致する。石棺の小口は1石で、北側の小口は外方に倒れていた。側壁は比較的大きい石材2つとそれを安定させるための小石によって構成されている。なお奥壁寄りの天井石および側壁に大きな石材を用い、南寄りの天井石は比較的小さい。なおこの石棺内部からの遺物はなかった。この石棺は小規模であることや、石室内の位置関係から考えて、追葬時に設置されたものと考えられる。

石棺以外の埋葬主体としては明確な痕跡はなかったが、奥壁付近の床面に散在する石材が棺台の可能性があることなどことから、木棺が設置されていたことが考えられる。また床面では石室内から延びる排水溝はなかった。

この他、開口部に大型石が1枚立てられており、閉塞を行う状況様子を確認した。また石室内の閉塞石基部からは土師器の坏（105）などの遺物が出土した。これらの遺物は最終追葬時期を示すものと考えられる。

5．前庭部（第39図）

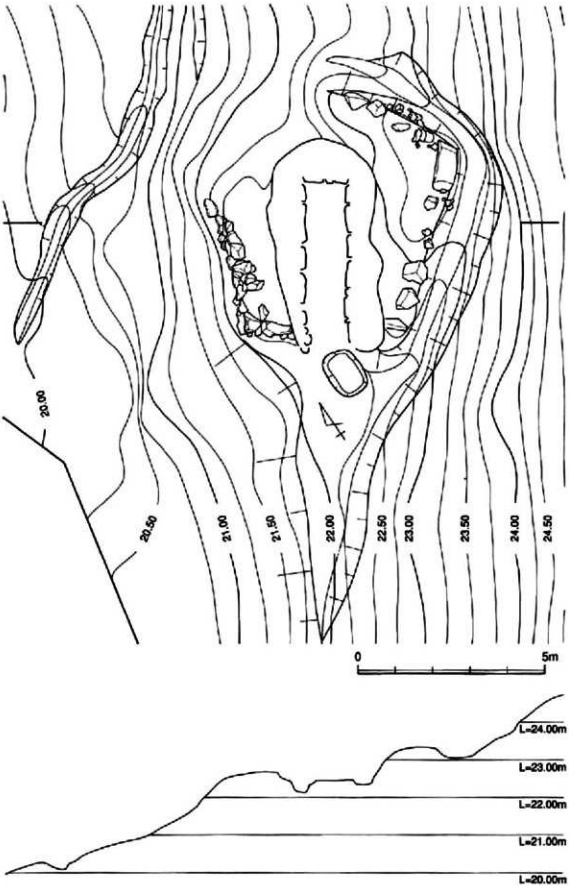
石室南の開口部では後世の攪乱が土坑状にみられるが、東側の周溝の延長である掘削が続き、長さ7.5m、最大幅2.5mの前庭部がある。前庭部から南に続く墓道が存在した可能性も高い。

出土遺物はなかった。

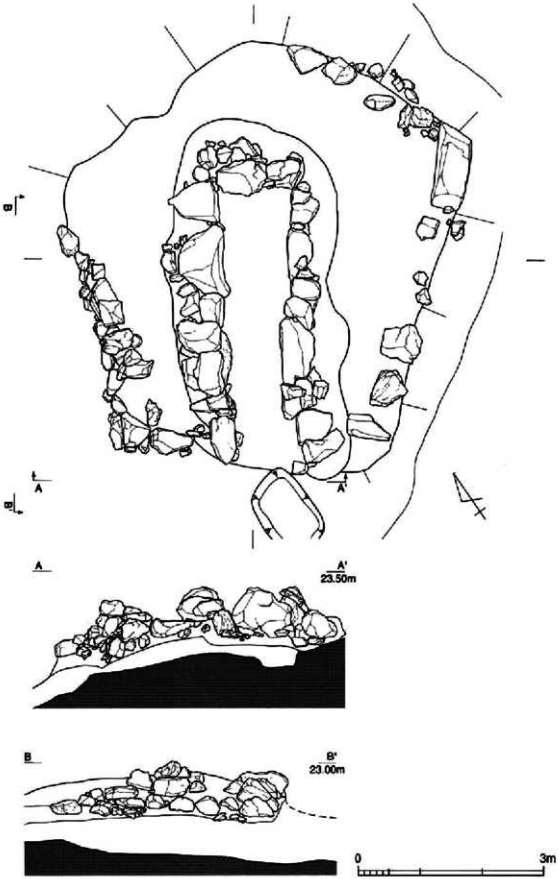
6．墳丘及び外護列石（第39・40図）

石室と同様、墳丘の上部大半が失われており、僅かに残る墳丘断面からは淡茶褐色礫混じりシルト層および淡灰褐色シルト質細砂層の盛り土が確認できたにすぎない。

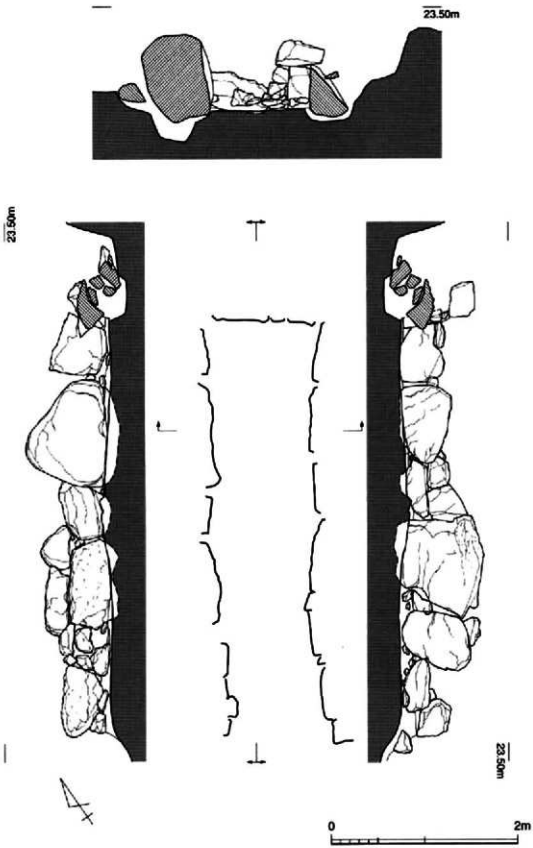
墳丘残存部分では、墳丘外縁に並ぶ石列を確認した。平面形は羨門付近の南側がほぼ直線的で、東端



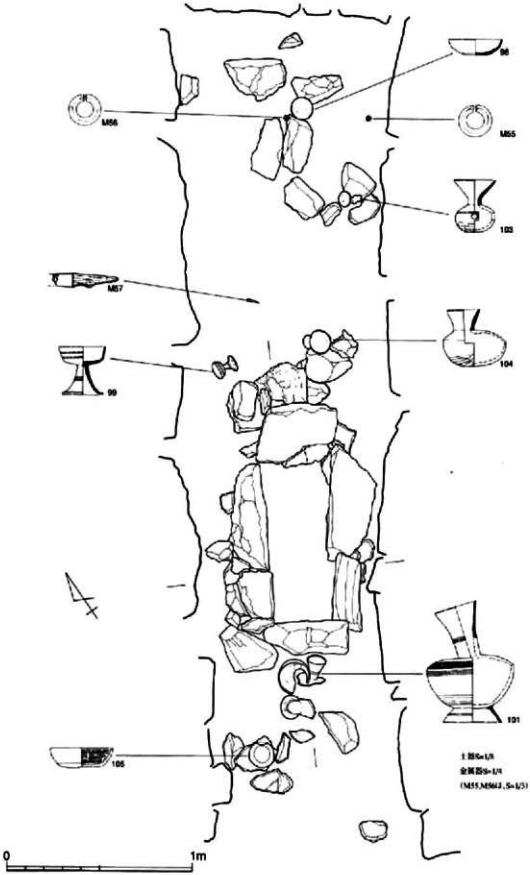
第39図　5号墳　墳丘（検出後）



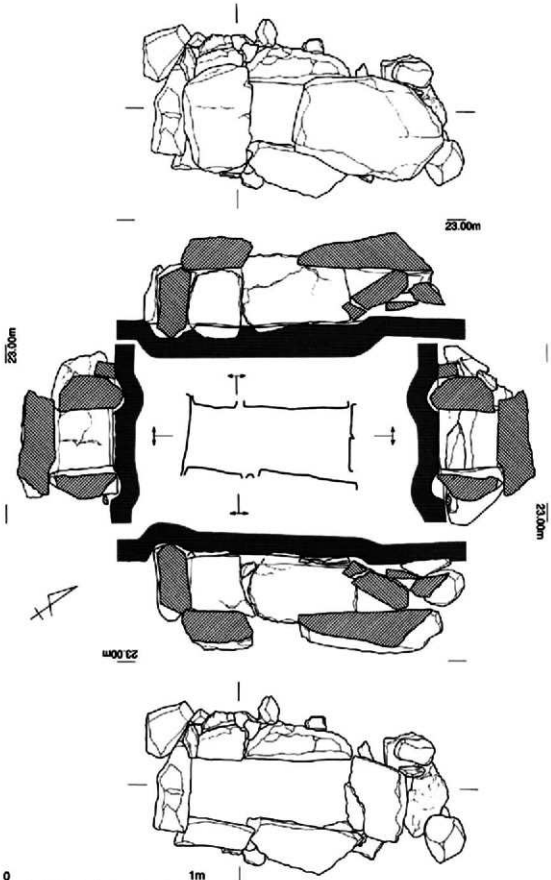
第40図　5号墳　石室平面、墳丘外護列石平面



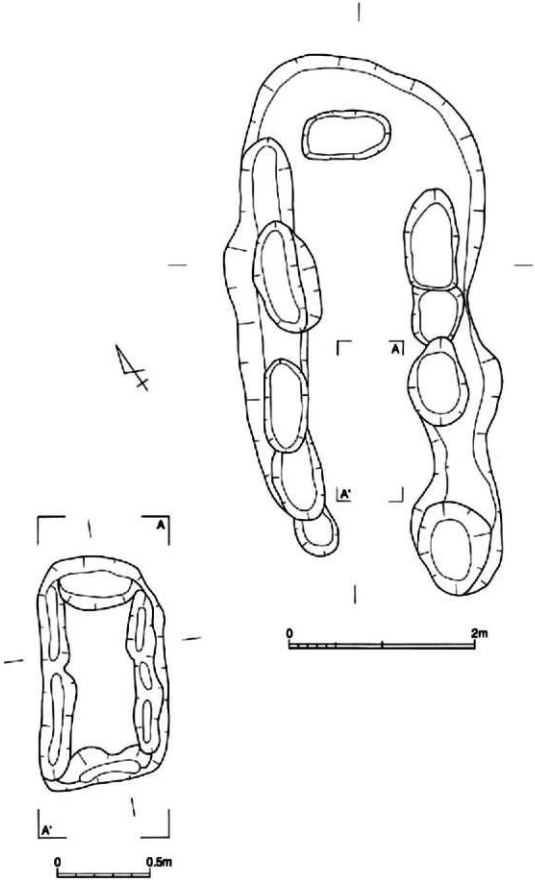
第41図　5号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



第42図　5号墳　石室内遺物出土状況



第43図　5号墳　石室内組み合わせ式箱形石棺



第44図　5号墳　石室墓壙平面（石材除去後）、石棺墓壙平面

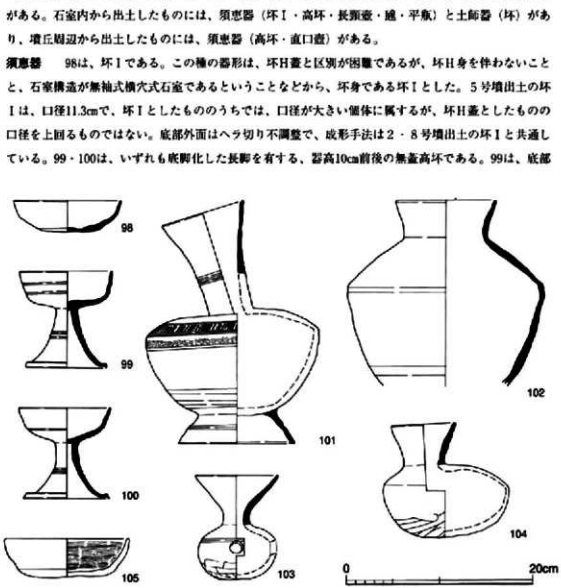
から角度をもって延びている。東側では北方向に面をもった状況がうかがえるものの、北端付近における石材の残存状況が極端に悪い。西側は東側より残存状況が悪く、石列の様子は伺えない。石材の積み方は西側で3段を積んでいるが、他では1石のみの残存であった。北半部では検出されていないが、早い段階で亡失された可能性もあり、築造当初の状況を知るには今後の検討を要する。これらは外護列石状の施設と考えられ、墳丘の流出を防ぐ根固め石といった役割も想定している。墳形との関係については、残存状態が悪く不明な点も多いが、石室正面観をもつことや東西辺が直線的に開くことなどから円形というよりむしろ方形あるいは多角形の可能性がある。

Ⅱ　遺物

1．土器（第45図）

石室内から出土したもの（98・99・101・103～105）と、墳丘周辺（100・102）から出土したものとがある。石室内から出土したものには、須恵器（坏Ⅰ・高坏・長頸壺・甕・平瓶）と土師器（坏）があり、墳丘周辺から出土したものには、須恵器（高坏・直口壺）がある。

須恵器　98は、坏Ⅰである。この種の器形は、坏H蓋と区別が困難であるが、坏H身を伴わないことと、石室構造が無袖式横穴式石室であるということなどから、坏身である坏Ⅰとした。5号墳出土の坏Ⅰは、口径11.3cmで、坏Ⅰとしたもののうちでは、口径が大きい個体に属するが、坏H蓋としたものの口径を上回るものではない。底部外面はヘラ切り不調整で、成形手法は2・8号墳出土の坏Ⅰと共通している。99・100は、いずれも底脚化した長脚を有する、器高10cm前後の無蓋高坏である。99は、底部



第45図　5号墳　出土土器

から屈曲して直立気味の口縁部をもつ坏部で、坏Gとしたものに形態が類似し、口縁部に2条の凹線を巡らしている。100は、坏Iに類似した形態の坏部で、口縁部と底部の境界は不明瞭で、口縁部と底部の境界を凹線で区切っている。脚部は透かし孔がないのが特徴で、大きく外方に開く脚部の中位に2条の凹線を巡らし、端部は下方に肥厚させて端面を作っている。101は、短い脚台部の付く長頸壺である。焼け歪みのため口頸部は赤いているが、26cmほどの器高であったと復元できる。壺体部は肩が屈曲する算盤形を呈し、肩部に凹線を挟んで、列点文と波状文を上下に加飾している。脚部は高さ3.2cmほどで、中位に凹線と段を有し、外方に踏ん張っている。102は、外反気味の短い口縁部を付けていることから直口壺としたが、体部は肩部を鋭く屈曲させる例の少ない壺である。肩部には擬格子叩き目痕がみられる。底部は欠損しているが、残存する部分で回転ヘラ削りがみられる。底部は丸底になるのであろうか[1]。103は、一般的な受け口状の口縁部ではなく、漏斗形に大きく開く口縁部のみを付ける甑である。体部径は8.3cmと小型で、肩部には凹線を1条巡らしている。底部外面は静止ヘラ削り調整されている。この種の漏斗形の口縁部をもつ甑は、播磨地域では三木市和田神社遺跡・姫路市大池2号窯・同西脇31号墳・佐用郡三日月町高畑2号墳等に類例がある[2]。104は、肩部が僅かに屈曲する例明形の体部に、外反する短い口縁部と付ける完形の平甕で、把手及び加飾はみられない。底部は静止ヘラ削り調整を行っている。

土師器　105は、土師器の坏である。扁平な底部から外上方に延びる口縁部は、端部で僅かに内湾している。内面には横方向の7本単位のハケ目を明瞭に残している。底部外面は成形時の凹凸を残しているままである。

1）森内秀造によれば、この種の器形は加古川市・志方窯跡群では7世紀後半に出現するという。奥丹後地域とされる白沢5号窯の底部は丸底で、後続する白沢3・5号窯（残丹V・平城1段階）では平底化している。なお、森内は、この器形を短脚窯に分類している。
森内秀造・淺江英俊『白沢3・5号窯』兵庫県教育委員会　平成11年3月

2）岸本一宏・松岡千寿『和田神社遺跡』兵庫県教育委員会　平成13年3月
永井保弘『播磨地域における古墳時代須恵器の変遷』（小谷遺跡（巻6次）一屋内ゲートボール場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一）加西市教育委員会　平成7年3月
森内秀造・西口圭介他『西脇古墳群』兵庫県教育委員会　平成7年3月
兵庫県教育委員会編『高畑古墳（第1・2号墳）出土品』『平成8年度指定　兵庫県文化財調査報告書』　平成9年8月

2．金属器（第94図）

出土した金属製品は3点で、すべて石室の内部から出土した。農工具の刀子1点と、装身具の耳環2点である。

M55・M56は太身の耳環で、形状や規模が酷似する。銅芯金板貼技法で製作され、箔が一部で剥離を起こしている。いずれも奥壁に近い部位から出土した。M55は奥壁左コーナーの側壁床面から、M56は石室中央の棺上から検出された。

M57は刀子で、柄元から茎にかけて残存する。茎は下部に撥角の関を有し、全面に木質で覆われる。

第7節　6号墳

1　遺構

調査区の北西部、標高22m付近に位置する。丘陵斜面の裾部にあたり、南に5号墳・北に12号墳があるほか、周溝の掘土を切り込んで13号墳が立地する。調査前には明瞭な墳丘の隆起がみられ、中央で主

体部が土坑状の落ち込みとなって確認できた。主体部は横穴式石室で、墳丘の裾を周溝が取り巻く。

墳丘は丘陵の斜面を削りだした平坦面に、盛土を行うことで構築する。盛土は削平を受けた平坦な状態で検出され、斜面に接する西側も大きく流失したことがわかる。墳丘は石室の開口する南側が直線で、北から南にかけては不整の円形を呈する。検出した墳丘の規模は南北11.5m、東西9.01mを測る。墳丘高は西側の墳裾から2.5mであった。

墳丘の北側は、丘陵斜面を大きく削り込んだ平坦面がある。墳丘造成の土砂確保、丘陵斜面から墳丘を区画する目的で設けられ、法尻からは幅2.3mで犬走り状の平坦面が続く。この平坦面は墳丘の基盤と一致し、後世には粗土を切り込んで木棺墓が設けられる。

1．主体部（第47図）

横穴式石室は墳丘の中央から僅かに西寄りに位置し、南西に開口部を設ける。玄室から羨道にかけて、奥壁と左右側壁の基底部付近が残存する。右側に袖を持つ横穴式石室で、調査した古墳の中では最大の平面規模を持つ。床面は２面検出し、土器・金属器・玉類の豊富な遺物が出土した。

2．墓壙（第53図）

平面は、歪な五角形を呈する。長軸7.59m・短軸4.78m、最深部は奥壁右コーナー付近で1.55mを測る。周壁は直線に近く、底面から0.85m付近で小段を設けていた。墓壙の底面は平坦だが、東から西へ緩やかな傾斜を持つ。石材の掘り方は、周壁沿いを溝状に掘りくぼめて形成する。断面はコの字形で底も平坦だが、袖石と奥壁の下部が一段深く掘り方を設ける。

3．石室（第48図）

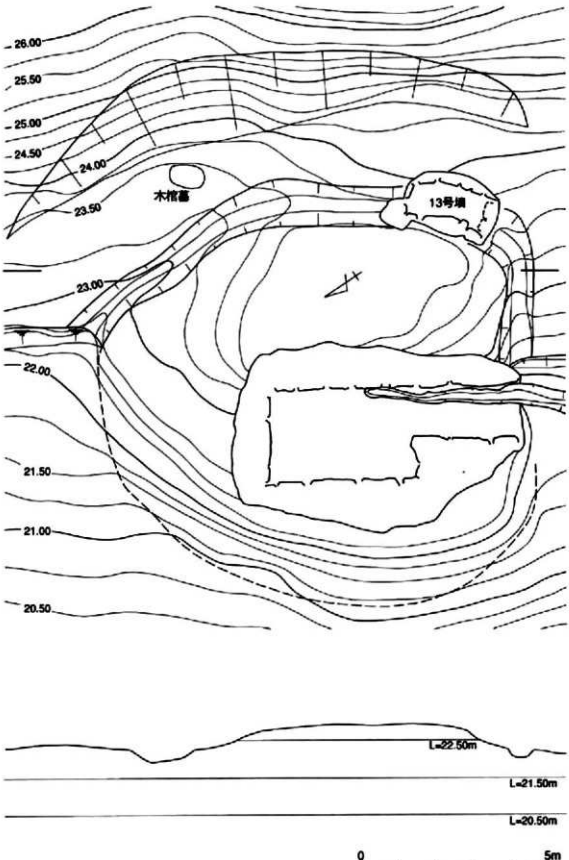
全長6.80mで、主軸はN32°Eに向ける。羨道は東側に偏って取り付き、開口する付近に流失・変形があるものの、羨門は残存している。

玄室は全長3.97m・幅2.43mを測る。両者の比率はおよそ１：１．６で、いくぶんずんぐりな長方形を呈する。壁体は、奥・側壁ともに石材の組み合わせで構成する。奥壁は基底石から２段分が残存する。基底石として左側に横長の板石を、右側には小さめの石を２段積み上げる。２段目は逆に左側に長大な石を、右側に小さい石を配する。各石材の不揃いな部分を、うまく組み合うように、石材を配置している。側壁は、左右ともに奥壁を挟み込む形で配置される。左側壁のコーナー付近が僅かに３段目をとどめる以外は、基底石から２段分が残るにすぎない。両側壁とも、基底石として多少大きい石材を用いるものの、それほど大きな規模の差はみられない。段ごとに高さを揃え、形状に起因する凹凸を詰め石で整えた後に、次の段を積み上げている。袖石は右側壁から1.11m突出する。基底石として２つ、２段目には長大な台形の石材１つで構成する。

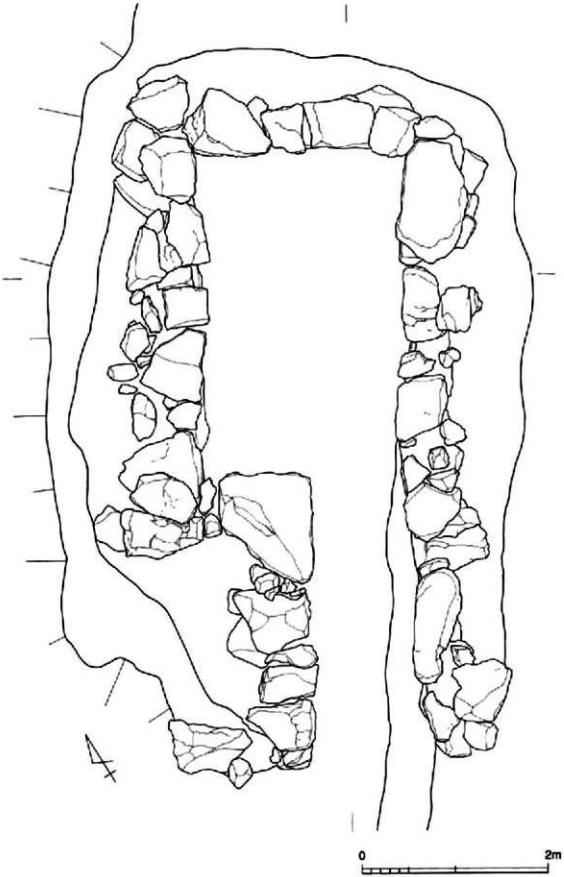
羨道は左側壁から直線で延びる。周壁は２段分が残存し、袖部での幅1.25mで長さ2.83mを測る。玄室との間で、用石の特徴に差異は認められず、床面も同じ高さを保つ。玄門付近のから羨道にかけての左側壁沿いには、排水溝が１条存在する。開口部に向けて幅が大きくなり、石室外へと続く。羨道の入り口付近では、人頭大の礫が敷き詰められて確認された。石室の閉塞に用いられたもので、ほぼ羨道全面の床面に及び一部は羨道の前面を覆っていた。検出面の上面が第１床面とほぼ一致することから、初葬（第２床面形成時）に閉塞された基底部は動かさずに、追葬（第１床面の形成）を行った可能性がある。検出中に、羨門部付近から須恵器坏H蓋（117）、礫の中から須恵器高坏（160）を検出した。

4．床面（第49～51図）

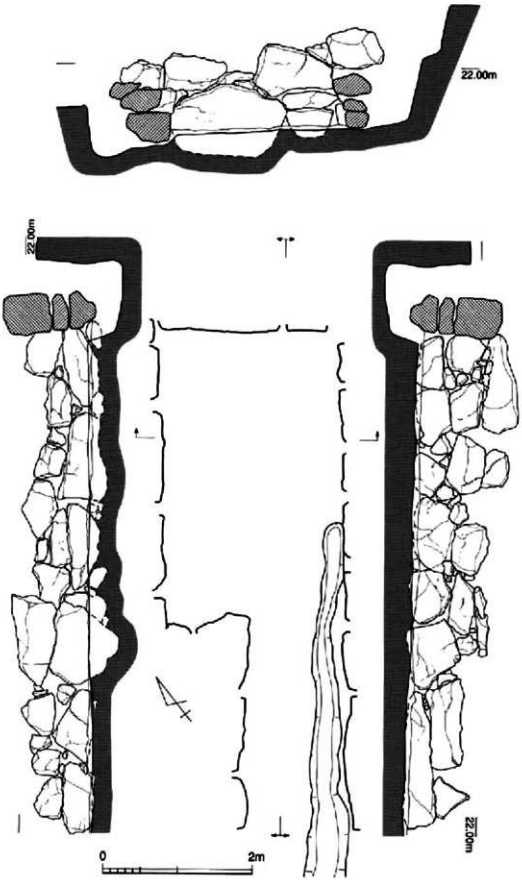
玄室の床面は２面検出した。石室流入土を除去後に現れた面を第１床面、薄い同層（鈍い黄褐色礫ま



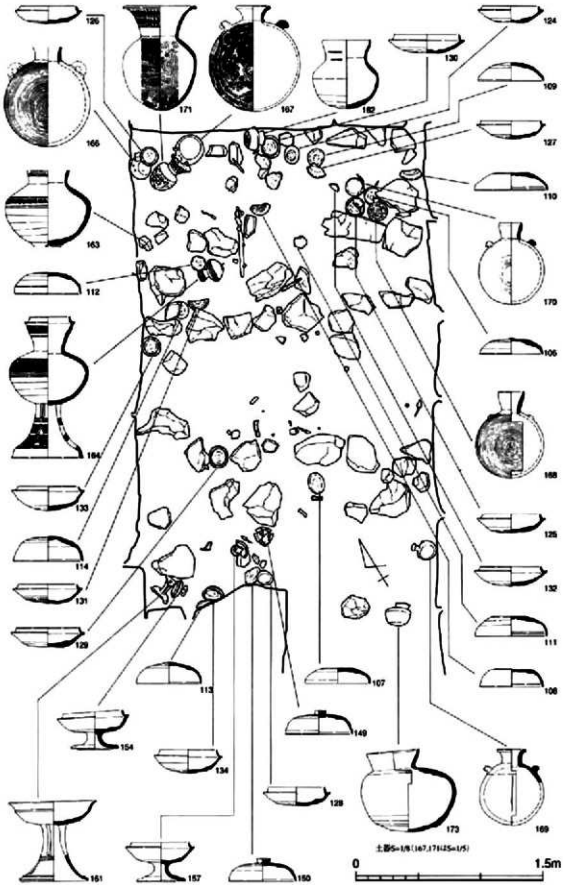
第46図　6号墳　墳丘（検出後）



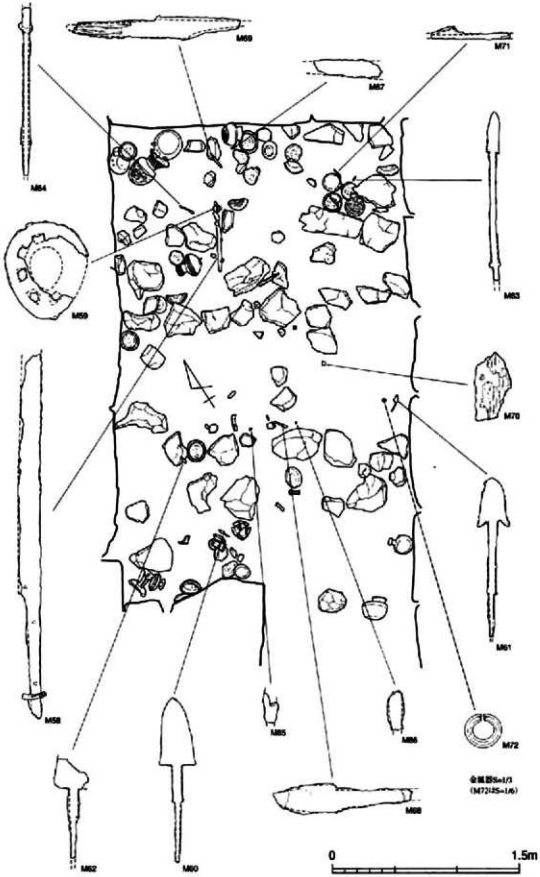
第47図　6号墳　石室平面



第48図　6号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



第49図　6号墳　石室内遺物出土状況　第1床面（土器）



第50図　6号墳　石室内遺物出土状況　第1床面（金属器）

じりシルト）を挟んで10～15cm下部に存在する面を第２床面と呼称する。

第１床面　直上にまで後世の流入土がおよぶ。古墳に伴う遺物とともに、瓦質土器・土師器などが含まれていた。土器は玄室のほぼ全面から出土したが、残存状態のよいものは袖石と奥壁の付近に集中していた。袖石ではコーナー付近に高坏２点（154・161）が重なり合って出土したほか、横に並んだ坏Ｈの蓋（113）と身（134）がいずれも壁面に口を接する形で検出された。奥壁付近では右コーナー付近に、合わせ口の状態で出土した壺（171）と提瓶（167）や、提瓶（166）、坏Ｈ身（126）が集まり、奥壁にそって中央付近まで壺（162）、坏Ｈ身（130・124）、坏Ｈ蓋（109）が並ぶ。また石室左コーナーの前方、礫に囲まれた部分にも坏Ｈ蓋（106・110）、坏Ｈ身（125）・提瓶（168・170）が集中してみられた。

金属器は奥壁右コーナーの前方で、銀象嵌鉄地鍔（M59）を伴う鉄刀（M58）がみられたほか、鉄鏃・刀子・耳環など（M60～M72）が玄室の広範囲に散らばって検出された。またガラス小玉（T54）が１点だけ出土した。

玄室の各所にある礫は、床面の上面に直接並べられているが、いくつかは短軸に平行の直線をなし、周囲から遺物の出土もみられることから、屍床仕切石と考えられる。なお奥壁付近をのぞいて、第２床面には及ばない。

第２床面　調査した古墳の中で最も多数の遺物が出土した。出土遺物の中心は土器で、奥壁付近と羨道基部の床面に集中する。

奥壁付近は集中範囲が２箇所存在する。左コーナー付近では、方形に並ぶ礫の中央から坏Ｈ身（136・142・143・135）と坏Ｈ蓋（120・118・115）が出土した。また奥壁右コーナーから１ｍ前方において、坏Ｈ身（145・141・144・140・139）と坏Ｈ蓋（123）が、まとまってみつかっている。奥壁周辺には顕著な礫の集積がみられ、右コーナー前方の土器群においても、多少まばらな礫の間に落ち込んで遺物が検出されている。また玄門から羨道に向けて、直線で土器が連なる。羨道左側壁沿いに集中する坏Ｈ（116・122・137）、高坏（155）は、排水溝に落ち込んだ遺物である。

金属器は土器ほどの集中をみせず、鉄鏃・刀子・耳環などが、玄室各所に散らばって検出された。大型品では、馬具の轡（M128）が玄室中央付近から、一対の鐙が玄室中央（M126）と右側壁沿い（M127）に分かれて検出された。

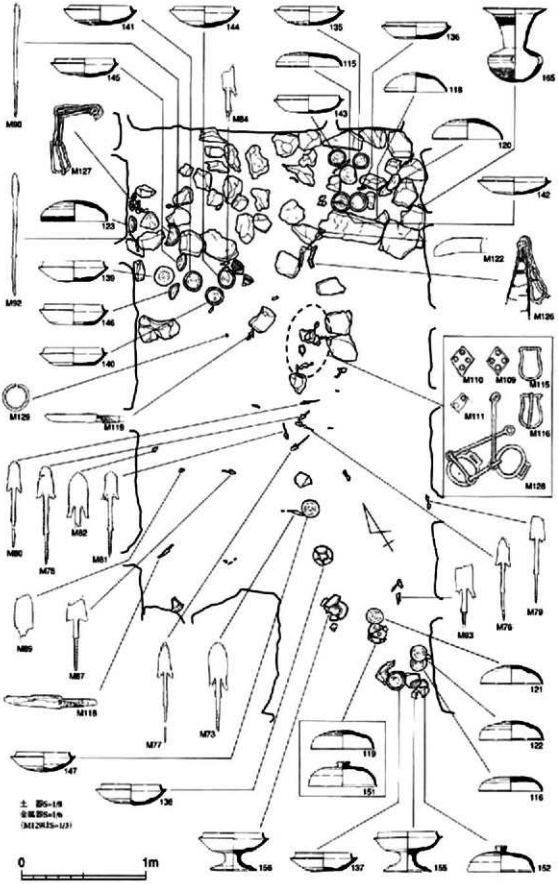
玉類は轡と鉄鏃５点（M75～M77・M80・M81）を結んだラインの右側床面から検出した。連結した状況はとどめず、広範囲から散らばって検出された。

２つの床面から出土した土器の形態には、極端な型式差がみられない。しかし屍床仕切石と考えられる礫が第１床面にのみ据えられることや、同層によって出土遺物のほとんどが明確に帰属を分ける状況を根拠として、２つの埋葬床面を設定した。なお床面から検出した出土遺物のうち、袖石付近で出土した高坏脚部（159）だけが、両面から検出されている。

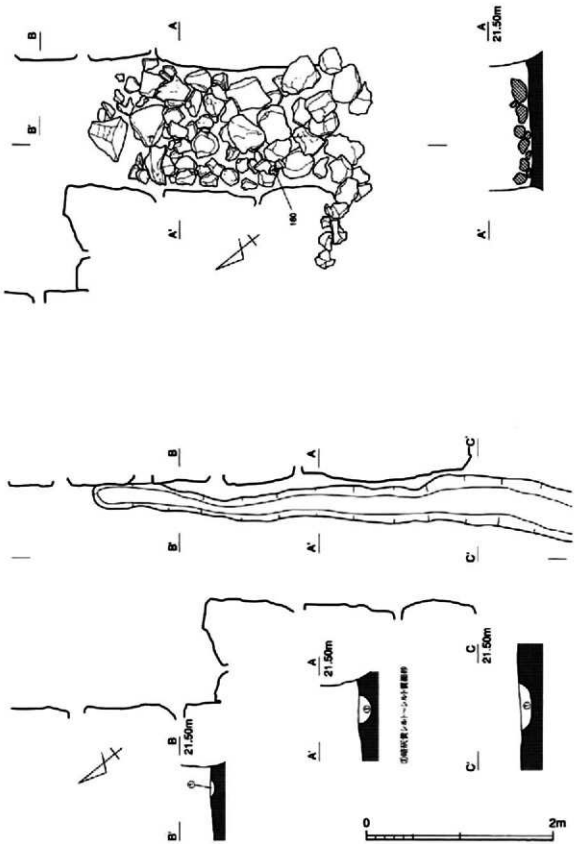
出土遺物では、土器と比較して金属器・玉類の出土量が少ない。特に第１床面で出土した小玉は１点しかなく、各床面から出土した耳環も形態差を呈するものの、それぞれの面で１点づつ出土するなど、不自然な点がみられる。直上まで流入土が及ぶ第１床面は後世の攪乱による影響が高いが、第２床面の遺物も埋葬時の状況をとどめていると言いがたい。追葬時に第１床面の構築にともなって、状況に乱れが生じた可能性を指摘しておきたい。

５．羨門・前庭部（第52図）

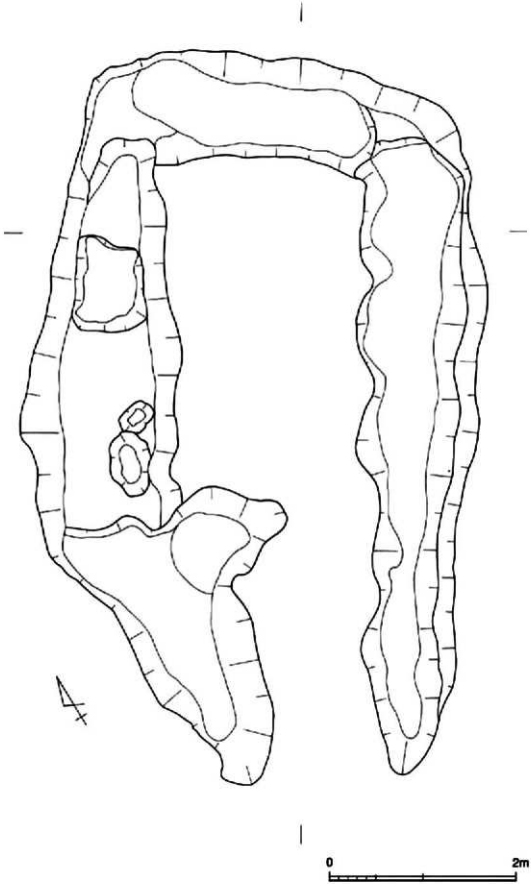
羨門は周溝の内法と一致し、羨道側壁から墳丘に沿って石材が１石づつ左右に開く。閉塞石の先端が



第51図　6号墳　石室内遺物出土状況　第2床面



第52図　6号墳　閉塞石状況、石室排水溝平面



第53図　6号墳　石室墓墳平面（石材除去後）

羨道前面の一部を覆う。

前庭部は、後門の幅に斜面上方の左部を開口部に合わせてカットして形造る。石列はなく、カット面が斜面に沿って1.85m延び、収束されて消失する。中央には、石室内部から排水溝が続き、5号墳の背後を避けるようにクランクしながら10mほど延びる。幅は前庭部で0.53m・最大幅を呈する5号墳と近接する部分で0.80m、南端付近で0.60mである。前庭部付近では、埋土に多数の土器が含まれていた。出土状況に企画性がなく、残存状況も悪い。意図的に埋納されたものではなく、後世に石室から持ち出されたものであろう。

なお明瞭な墓道は検出できなかった。排水溝に沿って延びる僅かな凹面が、痕跡と考えられる。

6．周溝（第46図）

墳丘の東部1／2を取り囲む。開口部側の南部は直線を描き、直角に近い屈曲をもって東墳裾に至る。さらに6mほど直線で延びた後、緩やかに南に向かって弧を描く。幅は、南辺が0.85m、東辺が0.24mをそれぞれ測る。両端は、南辺が前庭部の段差、西辺が後世の攪乱による段に、それぞれ取り付いて消失する。周溝の断面はレンズ状を呈し、褐灰～灰黄灰色シルト質細砂が堆積する。

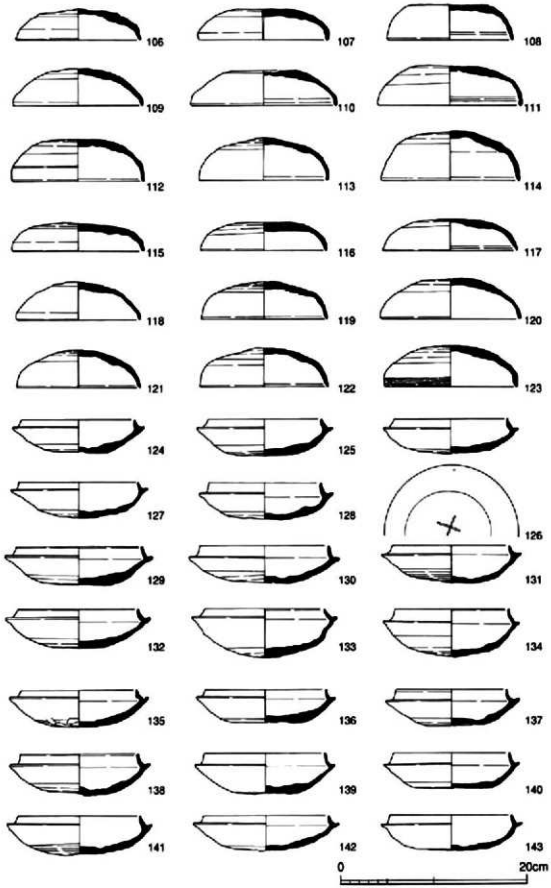
Ⅱ　遺物

1．土器（第54～60図）

今回の調査で出土した土器のうち、約30%を占める多量の土器が出土している。6号墳出土として確認できた土器は、すべて須恵器から構成され、93個体ある。そのうち石室内出土の須恵器（坏H・高坏・脚付長頸壺・脚付有蓋壺・広口壺・直口壺・装飾付壺・甕・提瓶・平瓶・甕）は69個体あり、主として上下2層（上層を第1床面、下層を第2床面）に分離して取り上げられているほか、若干のものが閉塞石付近と床面上層の堆積土（石室内流入土）から取り上げられている。土器の出土状況では、玄室中央部の空白部分を挟んで、奥壁付近と玄門部付近の2カ所に集中している。その他は、石室外の前庭部、周溝・墳丘上等から出土した須恵器（坏H・広口壺・甕・提瓶・横瓶・甕）である。

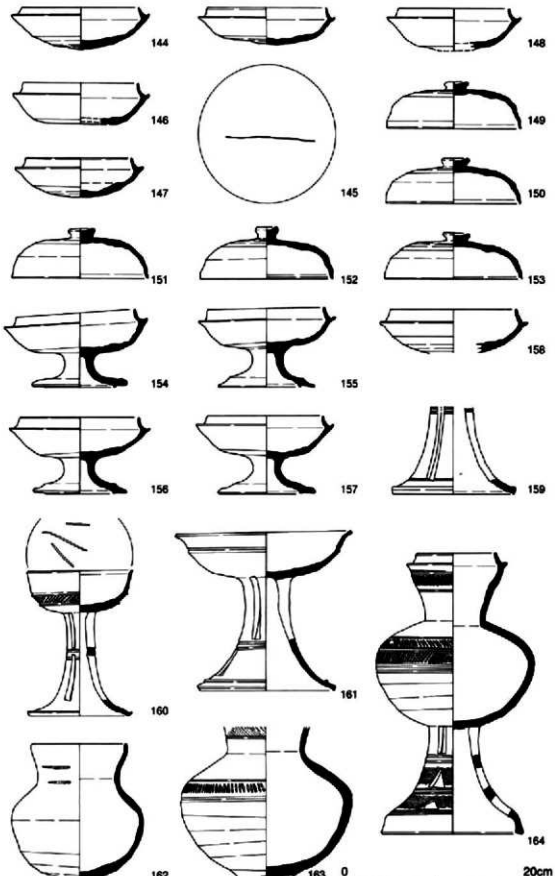
A　石室内出土の土器

須恵器　106～148は、坏Hである。第1床面として取り上げられている坏H蓋は9個体（106～114）、坏H身は11個体（124～134）で、第2床面として取り上げられている坏H蓋は8個体（115・116・118～123）、坏H身は13個体（135～147）である。一方、出土状況では、奥壁付近出土のものが多く、玄門部付近では坏H蓋が6個体（第1床面：106・113、第2床面：116・119・121・122）、坏H身は6個体（第1床面：128・129・134、第2床面：137・138・147）で、少ない傾向がある。石室内出土の坏H蓋（106～116・118～123）は、天井部が扁平で、口縁部と天井部の境界が不明瞭なものが多い。例外的に第1床面出土の112は、天井部と口縁部の境界に浅い凹線を巡らせている。口縁端部は丸く収めているものが多い。なかに、凹線状の浅い窪みを巡らせるもの（108・110・111）、内傾する鈍い端面を作るもの（114・117・119・121・122）がある。第1床面の坏H蓋は、口径13.4～15.4cm、器高3.3～5.2cm、第2床面の坏H蓋は口径13.1～14.7cm、器高3.0～4.4cmの範囲内にある。第1床面のものは口径13cm台のものが多く、15cm前後の大型のもの（110・111・114）が少数含まれている。第2床面では口径15cmを超えるものは存在しないことが、僅かに特徴として指摘できるであろうか。天井部外面は回転ヘラ削りするものが多いものの、ヘラ削りの範囲は狭く、外縁部にのみヘラ削りを施すものもみられる。なお、口



第54図　6号墳　出土土器①

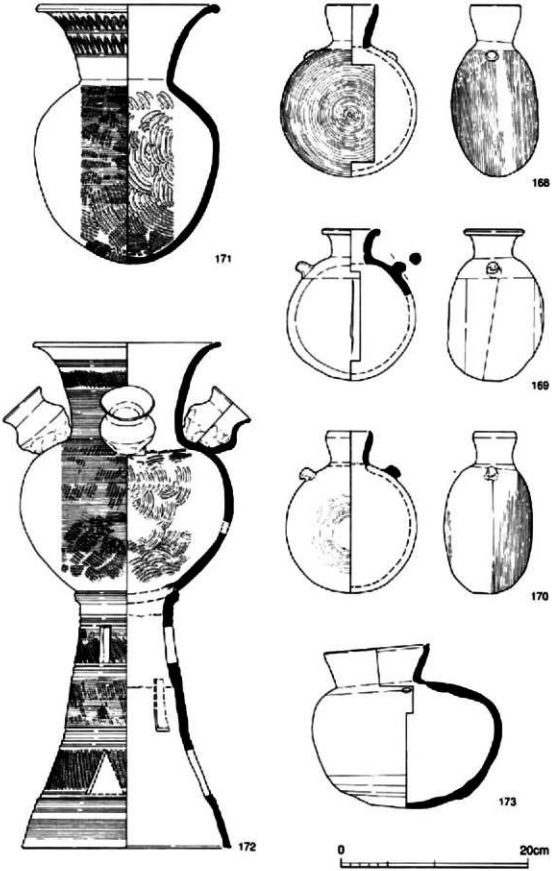
径13cm台の小型のもののうち、少数のもの（106・109・118）にヘラ切りのまま不調整のものが存在する。内面には仕上げナデを施すものが一般的であるが、同心円叩き目痕を残すものも存在する。123は、口縁部外面に横方向のハケ目調整を施している例の少ないものである。109の口縁部外面、120の天井部外面にはヘラ記号が刻まれている。坏H身も底部は扁平なものが多い。体部の形状が丸味をもち、器高が比較的深いもの（133・134）、皿形を呈し、器高の浅いもの（125～128・131・132・135・141・142・144・147）、平底状の底部から緩やかに外方に開くもの（124・129・130・136～140・145・146）などが混在する。立ち上がりは内傾して短小傾向が著しく、端部は、丸く収めているものと尖っているものがある。底部外面は狭い範囲で回転ヘラ削りを施しているものが一般的であるが、静止ヘラ削りのもの（135）、ヘラ切り後にナデ調整しているもの（139・142・143）が少数みられる。第1床面では口径11.9～13.7cm、受部径13.9～15.9cm、器高3.5～5.1cm、立ち上がり高0.7～1.3cmで、第2床面のものは口径11.3～13.3cm、受部径13.5～15.5cm、器高3.5～4.4cm、立ち上がり高0.8～1.3cmの範囲内にあり、口径12～13cm、器高3～4cm、立ち上がり高1cm前後ものが一般的である。あえて、その差異を挙げるとすれば、第1床面に僅かに法量が大きなものが存在するということになろうが、両者に明確な差異をみいだすことはできない。126・145の底部外面には、ヘラ記号が刻まれている。149～161は、高坏とそのセットとなる蓋である。扁平な中窪みのつまみを付ける蓋（149～153）が5個体あり、有蓋高坏の蓋であろう。154～158は有蓋高坏で、5個体確認でき、脚部の存在するもの（154～157）は、すべて短脚のものである。160・161は、無蓋高坏でいずれも長脚である。ほかに脚部だけのもの（159）がある。高坏は、蓋・短脚の有蓋高坏等、同形態のものが第1床面（149・150・154・157）と第2床面（151～153・155・156）として、それぞれが取り上げられている。そのうち、蓋（152）は、高坏（155）とセットとして取り上げられている。なお、出土位置の判る高坏は、すべてが玄門付近に限定され、奥壁付近の一群にはみられないことが注意される。蓋（149～153）は、形態・法量に類似点が多い。口径は14.0～14.7cm、器高4.8～5.5cmほどで、扁平な天井部から緩やかに湾曲する口縁部を付けていて、天井部と口縁部の境界は僅かに屈曲がみられ、端部は鈍く内傾する端面を作っている。つまみは中窪みの扁平ものが多いが、152は、やや高いつまみとなっている。有蓋高坏（154～158）は、脚部の欠損している158を除き、形態・法量が酷似している。法量・胎土・焼成等からみて、先にふれた蓋がセットになるのであろう。坏部は扁平な底部に、緩やかに内湾する体部からなる。蓋受けの立ち上がりは内傾して、端部を丸く収めている。坏部の法量は、口径12.3～12.7cm、受部径14.6～15.1cm、器高4.2～4.4cm、立ち上がり高1.1～1.2cmと規格的なもので、坏H身と形態・法量との大差がない。底部外面は回転ヘラ削り調整が行われ、内面は仕上げナデが施されているが、同心円叩き目痕を一部残す。脚部は高さ4cmほどの短脚で、透かし孔はみられない。裾部を大きく外方に拡げ、脚端部に近い箇所で下方に肥厚させた突出部を作る特徴的なものである。158は、復元口径がやや大きいもので、他の4個体とは異なる形態のものかもしれない。長脚の高坏（159～161）のうち、形態の確認できるものは無蓋高坏である。160は、一般的な形態のもので、坏部には2段に突出する稜を付け、その間を列点文を巡らせている。口縁端部の内面には、内傾する端面がみられ、内面には小字形のヘラ記号が刻まれている。脚部は2段の長方形透かしが3方に穿たれている。161は、浅い皿形の底部に稜をもって、大きく外湾する口縁部を付ける大型の坏部をもつ類例の少ない無蓋高坏である[11]。坏底部外面は、丁寧な回転ヘラ削り調整が行われ、内面には同心円叩き目痕が残る。脚筒部は太く、脚端に向かって緩やかに外反し、端部付近で外面を肥厚させた突帯が巡る。透かしは2条の凹線を挟んで、上下2段に長方形のものが交互に穿たれている。159は、脚下半部で、



第55図　6号墳　出土土器②

第56図　6号墳　出土土器③

長方形2段3方透かしのものであろう。162は、直立気味に延びる口縁部の上半が内湾する壺で、直口壺としておく。底部は回転ヘラ削りによって調整されている。横方向に2条のヘラ状工具による刺みが頸部付近にみられる。163は、脚付の壺である。口縁部と脚部は欠損しているが、長方形の透かし孔がみられる。壺肩部と頸部には、凹線間に列線文を飾っている。164は、壺受けの立ち上がりのある脚付の壺である。口縁部は大きく外反し、端部の丸く短い立ち上がりを付けている。壺受け部の下方には凹線間を波状文で飾る。体部は倒卵形を呈し、肩部には凹線間を2段に方向を違えた斜行列線文を巡らせ、底部は肩部付近まで回転ヘラ削りが行われている。脚部は脚端部を内方に屈曲させ、水平の端面を作る。脚筒部は凹線によって3区画され、上段は長方形、中・下段は三角形の透かしを3方に穿ち、三角形透かしの穿たれた中・下段は、波状文で飾っている。165は、口縁部径が体部径を僅かに上回る中型品の甕である。口縁部は受け口状ではなく、外上方に屈曲して真っ直ぐ延びるもので、屈曲部に凹線が巡り、端部は丸く収めている。頸部上半には波状文を施文している。体部は扁平で肩部に1条の凹線を巡らしている。底部は肩部付近まで回転ヘラ削り調整を施したのち、下半をカキ目調整している。166～170は、

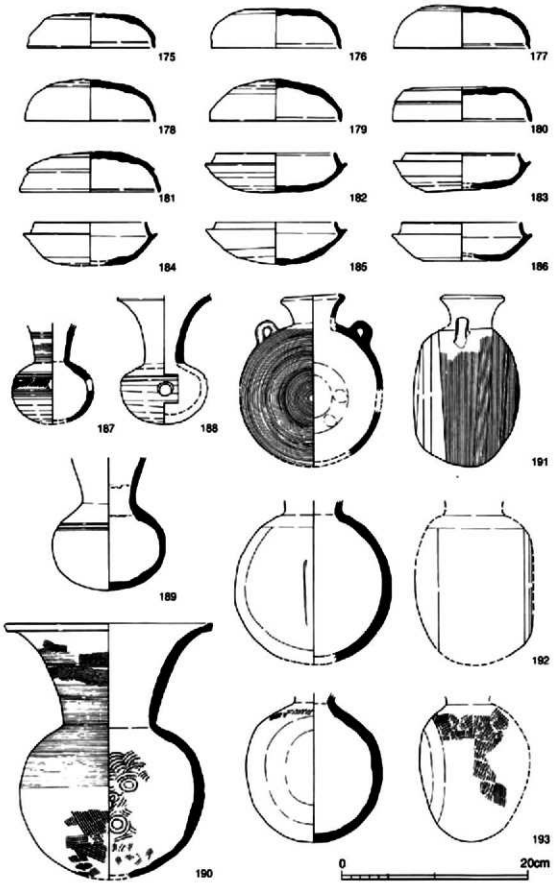


第57図　6号墳　出土土器④

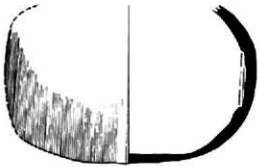
提瓶で5個体あり、いずれも第1床面からの出土である。胴径が14cm前後の小型品（168～170）、18.5cmの中型品（166）と24.4cmの大型品（167）の3種がある。168は、短く外方に真っ直ぐ延びる口縁部に、扁平な体部が付く。把手はボタン状のもので、全体をカキ目調整する。166は、環状把手が付くもので、体部全体に丁寧なカキ目調整が施されている。167は、短く外反する口縁部に、端部を肥厚させて端面を作る。体部は鈎状把手が付くもので、粘土板が充填される球形を呈する体部片側には櫛格子叩き目痕が残り、その部位にのみカキ目調整が施されている。169は、外湾する口縁部に、鈎状把手を付ける。体部側面に縦方向にヘラ記号が刻まれている。170は、短く真っ直ぐ延びる口縁部をもち、端部は内傾気味に収める。短い鈎状把手を付ける。171は、口頸部が長く外反する広口の壺で、端部は丸く肥厚させている。頸部には凹線間を波状文2帯で加飾している。体部外面は櫛格子叩きの後、カキ目を施している。内面には同心円叩き目が全体に残る。172は、装飾付壺である。長い脚台の付く広口壺の体部屑に、小壺を4個配している。壺底部付近が欠損していることから脚部とは直接接合しないが、図上で復元して示している。親器となる脚付広口壺は、長く外反する口縁部には2条づつの凹線間に波状文が巡る。頸部下半から体部にかけて、カキ目調整されている。壺底部と脚部の接合部には方形の短い突帯が付き、長い筒部を3区分した器台状の脚部となる。脚部は端部を僅かに内方に屈曲させるもので、2条づつの凹線によって3区分された筒部には、上段・中段に長方形、下段に三角形透かしが3方に交互に配されている。また、上段・下段には波状文、中段には列線文で飾られている。体部屑には4個の子壺が配されているが、いわゆる鍔状の突帯は付かない。柴垣勇夫氏、山田邦和氏分類のⅢ－1－a形式に該当する[1]。子壺は、口径5.2cm、器高5.9cmで、体部下半は内外面とも指ナデ痕が残る。173は、大型の平瓶である。口縁部径は大きく、端部が内湾して端面を作る。体部高は高く、底部は回転ヘラ削り調整している。屑部に小さなボタン状の把手を付けている。174は、口縁部片の形状から甕と判断した。端部を外方に肥厚させている。

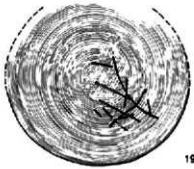
B　前庭部・墳丘出土の土器

須恵器　175～186は、前庭部及び墳丘周辺出土の坏Ⅱである。蓋が7個体、身が5個体ある。そのうち、175～178・182～185は、前庭部からの出土で、それ以外は墳丘周辺からの出土である。形態的には石室内出土の坏Ⅱと大差ないが、180・181は、天井部と口縁部の境は凹線を巡らせるか、後が突出し、口縁端部は浅い段をなす端面を付けるなど、石室内・前庭部出土の坏Ⅱ蓋とは形態が異なる。いずれも墳丘周辺からの出土品であり、181は、4号墳からの混入品の可能性がある。坏Ⅱ蓋では、端面を作るもの（177・179）と丸く収めるものの両者がみられる。前庭部出土のものは、口径13.5～14.5cm、器高3.6～4.6cmほどで、すべて天井部外面は回転ヘラ削り調整、内面は仕上げナデ調整を施している。坏Ⅱ身では、底部が丸味をもつもの（185）と扁平なもの（182～184・186）の両者があり、立ち上がりの端部はすべて丸く収められている。前庭部出土のものは、口径12～13cm前後、器高4cm台、立ち上がり高0.8～1.3cmで、底部外面は回転ヘラ削り調整、内面は仕上げナデ調整が施されている。前庭部出土の坏Ⅱは、石室内出土の坏Ⅱと形態・法量とも明確な差異はみいだしがたいが、坏Ⅱ蓋の口縁端部に凹線上の段を作るものが含まれているなど、僅かに古相を示しているとみることもできよう。187～189は、甕である。187・188は、口縁部を欠損しているが、受け口状のもので、いずれも口縁部径が体部径を上回るものであろう。187は、球形の体部の肩を凹線と列点文で飾り、頸部にも凹線を2条巡らせている。188の体部は扁平で、体部屑に凹線を巡らせている。189は、残存部分では体部に円孔がなく、甕とは断定できない。やや大型の球形を呈する体部をもち、肩部に2条の凹線を巡らせている。190は、広口壺

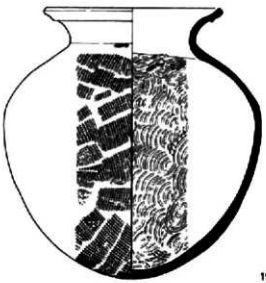


第58図　6号墳　出土土器⑤

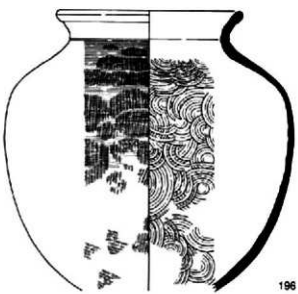




194



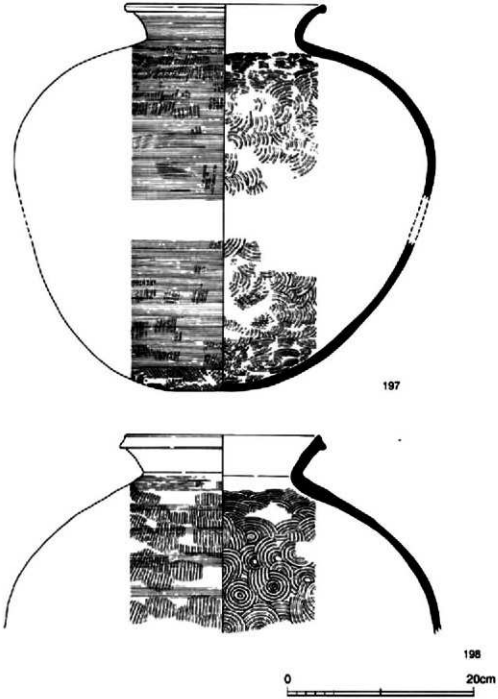
195



196

0 20cm

第59図　6号墳　出土土器⑥



第60図　6号墳　出土土器⑦

である。石室内出土の広口壺に比べると、体部はほぼ球形を呈する。口縁端部は上方に肥厚させ、端面を作っている。頸部には凹線間に不整な波状文が巡っている。頸部から体部外面上半はカキ目調整され、体部外面下半と内面には叩き目痕が残る。191～193は、提瓶である。191は、ほぼ完存品で、短く外方に延びる口縁部の端部を内方に肥厚させ、外傾する端面を作る。体部の粘土板充填する側は、カキ目調

整されている。環状の把手を付ける。192・193は、体部の破片である。192は、体部に縦方向のヘラ記号があり、石室内出土の169と共通している。193は、体部外面に叩き目痕を残している。194は、横瓶の体部の破片で、中型品であろう。カキ目調整された側面にヘラによる刻みが複数条存在する。195～198は、甕である。中型のもの（195・196）と大型品（197・198）がそれぞれ２個体ある。195は、口縁端部を外方に肥厚させ、方形の面を作る。196は、端部を丸く肥厚させている。197は、器高に対し胴径が上回るものである。198は、体部の下半を欠損している。口縁端部は外傾する端面を作る。

1）同形態のものが、龍野市・中井鴨池廃跡にある。
井守徳男・渡辺昇・高島知恵子『中井古墳群・中井鴨池廃跡』兵庫県教育委員会　昭和62年３月
2）橋爪弟夫・野末浩之『古代の造形美　須恵器展』愛知県陶磁資料館　平成７年、山田邦和『装飾付須恵器および特殊須恵器の研究』『須恵器生産の研究』学生社　平成10年１月

２．金属器（第61～65図）

総数72点を数える。すべて石室の内部から出土しており、第１床面（M58～72）と第２床面（M73～M129）からそれぞれ検出した。大半が武器・馬具・農工具の鉄製品で、装身具・武器に多少の銅製品（金銅も含む）が存在する。

A　石室第１床面検出の金属器

武器　刀・刀装具と、鏃がある。刀・刀装具は、刀と鍔が出土した。他の刀装具はみられなかった。M58は片刃の直刀で、刃先の１／３程度を欠損する。片関で関は撫角をなす。目釘穴は２箇所認められ、茎尻は大きく変形するが、隅切尻と考えられる。茎尻付近には、M59の象嵌が一部融着している。M59は鍔で、側面では２条の条線間に蔓文を配した銀象嵌を施す。鉄製で倒卵形を呈し、同じく倒卵形を呈する中央孔の周囲に透かし孔が５つ残存する。破損が著しく本来の形状・数量は不明だが、方形の孔を８つ程度配していたと考えられる。象嵌は全体の１／４が残存するほか、一部が刀の茎に付着していた。側面以外の部位から、象嵌は認められない。

鏃は全容が残存するもののほか、形状から鏃身と考えられるものがある。M60は三角形の鏃身を持つが、下部の側面に僅かな屈曲があり、柳葉の影響もうかがわせる。M61は柳葉だが、逆刺の外反は僅か。篦被の関はいずれも台形を呈する。M62は鏃身部の先端付近、３／５を欠損する。残存した部位から三角形の鏃身に比定した。M63・M64は長頸鏃である。M63は鏃身の下端が僅かに逆刺状をなす。関部には鞆がある。M64は全身を錆に覆われ、鏃身の先端を欠損する。関には鞆が認められる。M65・M66は微細な破片だが、残存状態から鏃身部と考えられる。

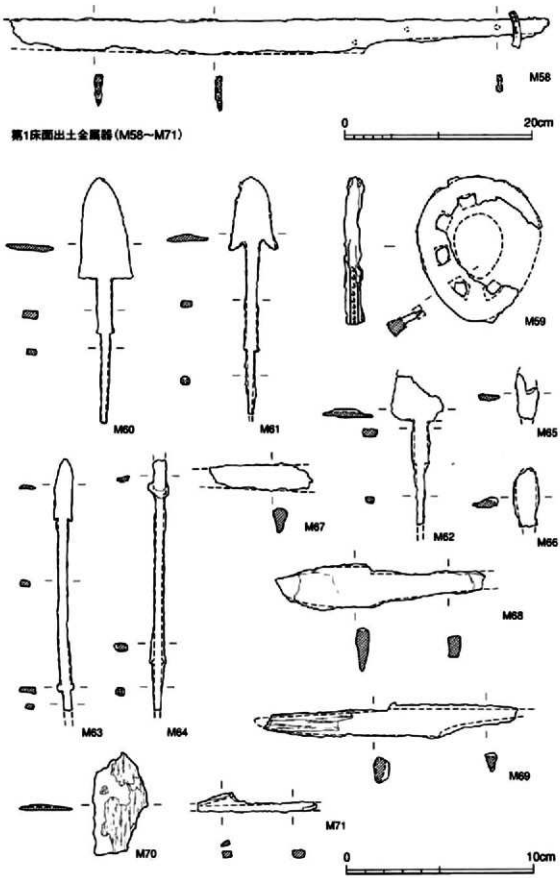
農工具　刃子が３本検出された。M68は短い刃を持ち、上下に関を持つ。上は角・下は撫角をなす。茎（尻）部欠損し、目釘穴は残存しない。M69は刃子で全体を木質に覆われている。刃先・茎の先の一部を欠損する。M67は刃の一部のみが残存する。

装身具　耳環が１点出土した。M72は太身の耳環で、完形に残存する。銅芯銀板貼鍍金技法により製作される。この面において他に耳環は検出できなかった。

その他　不明品が２点存在する。M70は板状で、片面に木質が残る。M71は断面方形の棒状品で、二股に分かれる枝元部分にあたる。いずれも残存部位が僅かなため器種は比定できなかった。

B　石室第２床面検出の金属器

武器　すべて鉄鏃である。柳葉の鏃身をもつものが最も多い。M73・M82・M83は、いずれも大きめの鏃身に短い頸部が接続し、台形の篦被関部を持つ。M82は逆刺の先端が山切りになる。M83は茎に糾による結縛痕跡が認められた。M84は鏃身部と茎を欠損するが篦被の長さから、同様の形態を呈するも



第61図　6号墳　出土金属器①

のであろう。

M74～81は短い鏃身に長めの篦被を持つ形態で、鏃身の形態が判明したものでは最多であった。逆刺が幅広で短く外反も少ないことや、篦被関部の形態が台形をなすなど、個体ごとの形態差は少ない。

M85・M86は細身の鏃身で、逆刺が矮小化する。篦被関部はM85が台形だが突出が著しい。M86は輯を有する。M87は鏃身部の1／3が欠損する。鏃身は三角をなす。篦被の関は僅かに台形である。M88は鏃身の尻部が直線で、五角型を呈する。篦被の関は台形で、茎には木質が残る。M89は鏃身部のみが残存する。鏃身の尻部が鈍角をなすことから、圭頭に分類した。

M90～93は長頸鏃である。M90～93はいずれも細身の片刃箭と考えられ、篦被関部には輯がみられる。M93は長い篦被のみが残存し、台形の関がある。

M94～98は、篦被から茎にかけてのみ残存する。篦被関部には輯がみられるが、M96は台形に近く、片側が僅かに棘状をなす。M97も台形に近く、突出が僅かである。M98は篦被関部で折り重なり、融着する。M99は茎の下部で、紐による結縛痕跡がある。M100は鏃身部のみ残存する。M101は篦被もしくは茎の一部だが、小片のため判別できない。M102は棘の上部で折れて茎のみ残存する。

馬具　轡・鐙・鉸具・飾金具と、その一部と考えられる破片がある。轡は1点出土した。M128は環鏡板付轡で、銜を中心に左右の鏡板と引手が連結した状態で出土した。銜と鏡板が完全に融着している。銜は2連、銜先で引手と鏡板を直接結合している。鏡板は楕円系の環体に方形の立聞がつく。

鐙は兵庫鎖と鉸具の連結したものが2点と、吊金具の一部と考えられる小片が出土した。M126は2連兵庫鎖の両端に、鉸具と鐙吊金具が接続するもので、コの字に融着して出土した。兵庫鎖は扁平にした環状の鉄線を2つ折りにして、折った谷部に鉸具をつなぐ。鉸具には差し金が装着されていた。反対側は同じ形態の鎖がつながり、さらに鐙の吊金具へ連なる。鐙吊金具はU字形を呈し、肥厚した環状の連結部から、板状の鐙壷吊部につながる。鐙壷吊部の内面には木質が付着し、2.5～3.5cm間隔で釘金が認められる。釘金は7本確認でき、うち3本は良好な状態で残存する。三角錐形の木製鐙壷を装着していたと考えられるが、吊り金具が鐙壷の下端まで環状に巡っていたかわからない。M127も鉸具と2連兵庫鎖が結合する同じ構造だが、吊金具は環状の連結部のみが残存する。M103～105も鐙吊金具の一部と考えられる。M103・104は差し金が1つづつ残存、いずれも片面に木質が付着する。

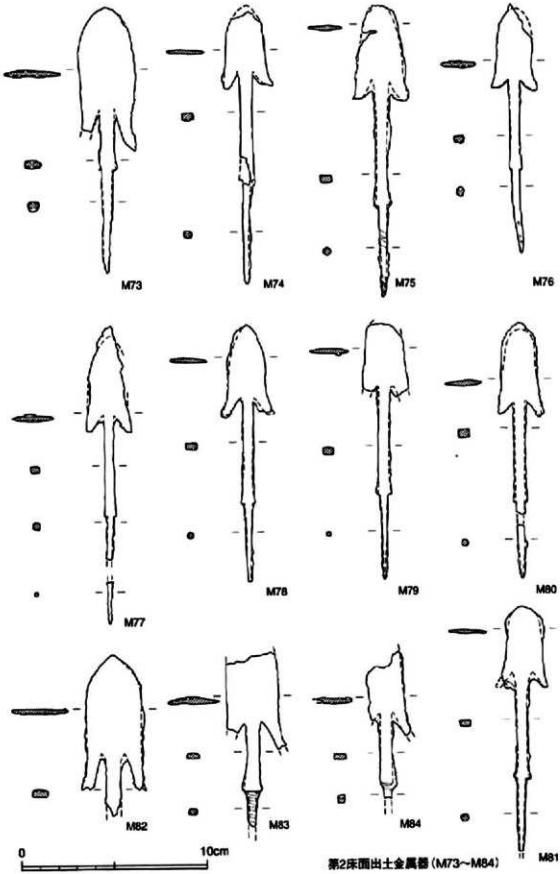
飾金具は飯付の飾金具で、4点出土した。M108は長方形の鉄板に2つの鋲が平行で施される。M109～M111は菱形の鉄板に4本の鋲をつけた飾り金具で、M111は半分を失う。残存する鋲頭は花弁状に加工して銀箔を施す。

鉸具は4点出土した。M113とM114は大型の鉸具で、それぞれ1／2が残存する。直接の接点がないことや石室の出土位置が離れていることから接合を避けたが、形状や規模から同一個体の可能性は高い。M115・M116は形状が類似しており、対を成すものであろう。M116には釘金が残存する。

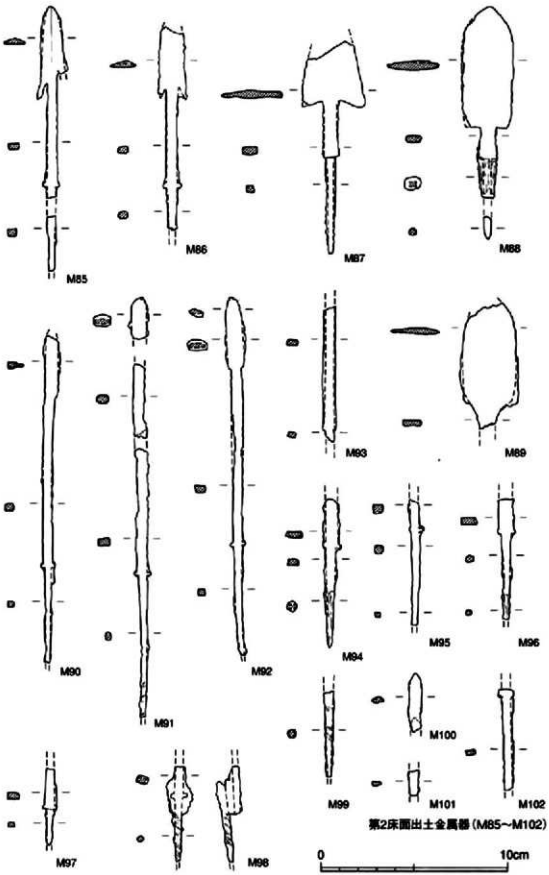
農工具　刀子が4点、鎌が1点出土した。M118～M121は刀子で、残存状態にばらつきがある。M118・M119は大きい刃部を持つ。M118は上下に関を持ち、木質に覆われている。M119も上下に関がみられ、茎には木質が付着する。M121は長い茎と刃の基部のみ残る。M120は小形の刀子の茎尻部で、下方の関が僅かに残存する。M122は鎌で、歯刃の先端付近にあたる。

装身具　耳環がある。M129は細身の耳環で、銀製無垢の耳環である。この面において、検出した耳環は1点のみである。

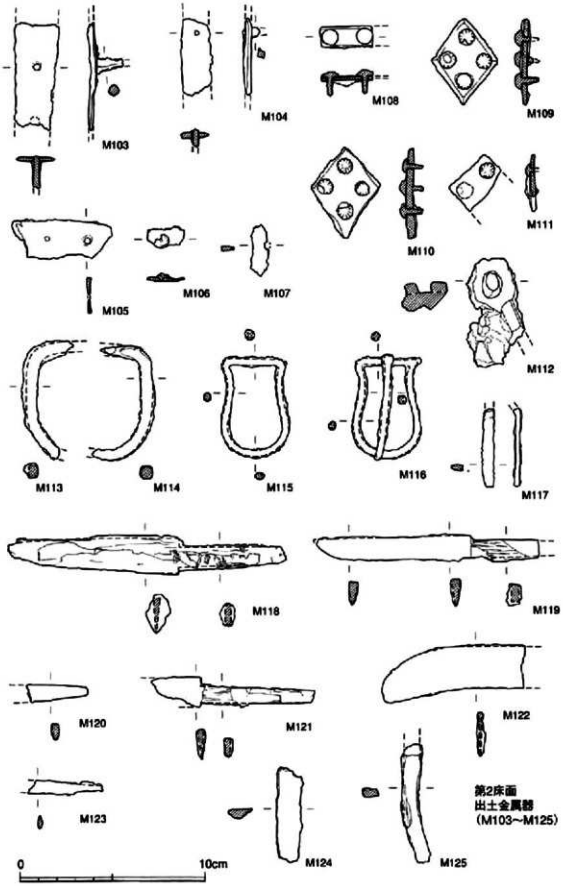
その他　細分化した金属器が数点出土した。M106・M107は不定形の金属板で、M106には鉄漿が1



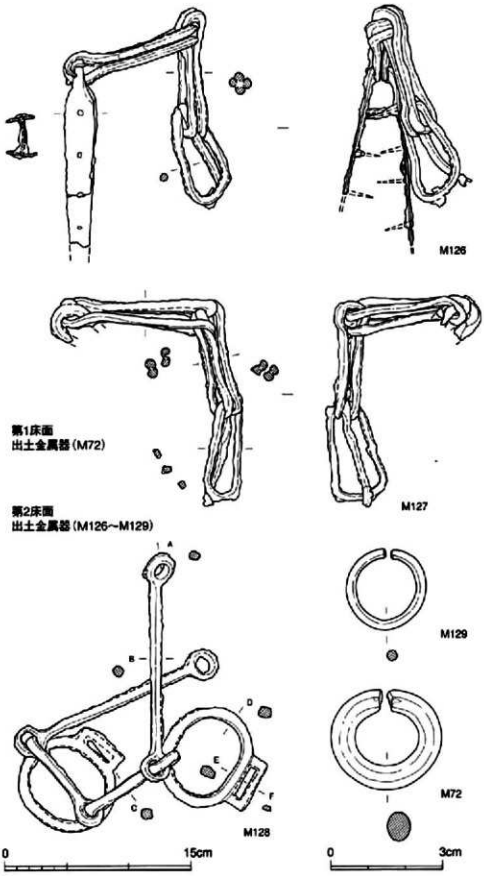
第62図　6号墳　出土金属器②



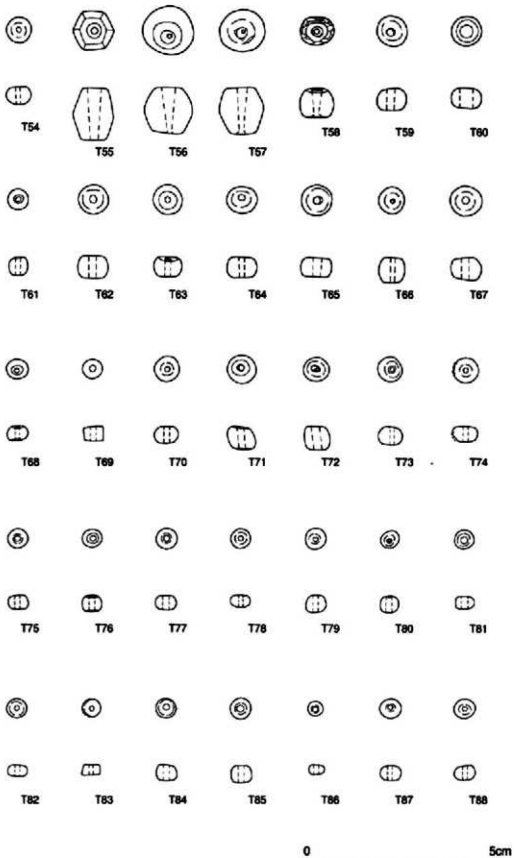
第63図　6号墳　出土金属器③



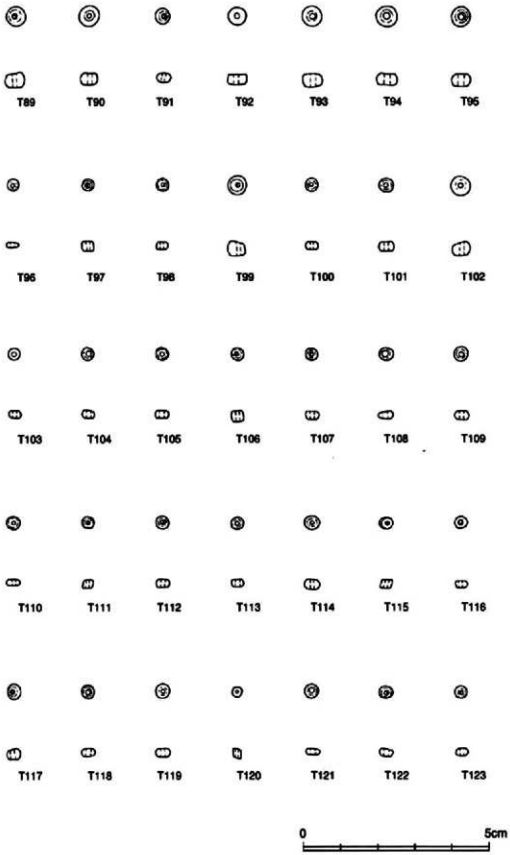
第64図　6号墳　出土金属器④



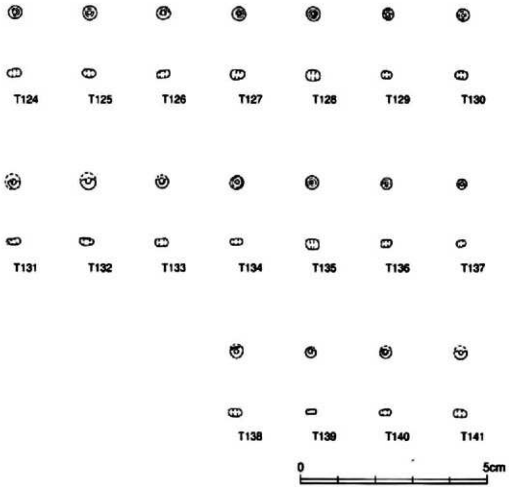
第65図　6号墳　出土金属器⑤



第66図　6号墳　出土玉類②



第67図　6号墳　出土玉類③



第68図　6号墳　出土玉類④

点・M107には鋲穴が1点みられる。M112は環状の一端がみられるが、補修れで変形している。M117は一端に直角の剥離痕がある。鞍金具の一部と考えられる。M123は板状の細片で、周状の屈曲を持つ。M124は周辺をすべて欠損する。断面は三角形を呈する。M125は断面が方形で棒状を呈する。

3．玉類・石製品（第38・66～68図）

今回調査した古墳の中で最多の43点が出土した。種別は勾玉・管玉・切子玉・算盤玉・小玉とバラエティに富む。第1床面から検出したのは小玉1点のみで、他は第2床面からの出土である。

T44は勾玉である。側面はいわゆる定形勾玉だが、頭と尾の屈曲が強くコの字形に近い。全長3.2cm（うち頭部長1.1cm）で、頭部の幅1.9cm・最大厚0.85cmを測る。断面はやや扁平である。半透明な茶褐色を呈するメノウ製で、縦方向に沿った節理が数条認められる。各面は丸く仕上げられるが、屈曲の著しい尾部の内面のみ、平坦面を残す。穿孔は左側面からのみ施され、孔径は左側面0.35cm／右側面0.15cmである。

T45～T53は管玉である。T47をのぞいて、完形の状態で出土した。いずれも石材を円柱状に加工する。T48はやや細身で、他は径1cm前後の規模をなす。いずれも片側からの穿孔である。T47は軟質の

グリーンタフを使用しており、復元は可能だが、脆弱な状態にある。他は深緑を呈する硬質の碧玉で、岩質によって色の濃淡や砂粒などの含有が認められる。

T55は切子玉である。水晶製で透明度は高い。上下の平面は横長の六角形を呈する。側面は12面にカットされ、稜線は明瞭である。穿孔は片側から施される。

T56・T57は水晶製の算盤玉である。T56は側面が六角形をなすが、中央の稜は鈍磨する。内包する不純物は少ないが、側面を中心に整形時の擦痕跡が顕著で、透明度が低い。T57は中央の稜線が明瞭で、透明度もいくぶん高い。いずれも片側から穿孔を施す。

T54・T58～T141は小玉である。T131～T133、T138～T141を除き、完形で出土した。規模は直径0.25～0.9cm／厚さ0.12～0.77cmと多様だが、直径0.3～0.4cm／厚さ0.2～0.3cmと、直径0.5～0.6cm／厚さ0.3～0.5cmの範囲に顕著な集中をみせる。

平面は円形を指向するが、楕円形となるものが多く、側面も円筒形から太鼓形に近いものまで、バラエティに富む。大半がガラス製で、石材を使用するものは5点である。

ガラス小玉は、藍～群青色系を呈するものが目立つ大きめの玉と、コバルトブルー～エメラルドグリーン系に混じって黄色を呈するものも目立つ小さめの玉にわかれる。不純物を含むものが多く、整形時に生じた気泡もみられる。T64は透明度がなく赤褐色を呈するが、気泡の存在からガラス製に分類した。

また石材を使用するもののうち、T58は小玉、T69・T83・T92は臼玉である。T58は薄緑色の碧玉を円柱に整形し、側面に面取りを重ねて太鼓形に整える。T69・T83・T92は滑石製である。

第8節　7号墳

Ⅰ　遺構

調査区の西部、標高18m付近に位置する。丘陵の先端部分で、西側には9号墳が近接する。12号墳から8号墳を経て1号墳に連なる後世の造成部分にあたり、調査前には崖面に組み込まれた石垣状に、石室の一部が確認できる状態であった。

周辺の地形が大きく改変されているため、墳丘や付属施設は消失し、石室の残存状況も極めて悪い。

1．主体部（第69図）

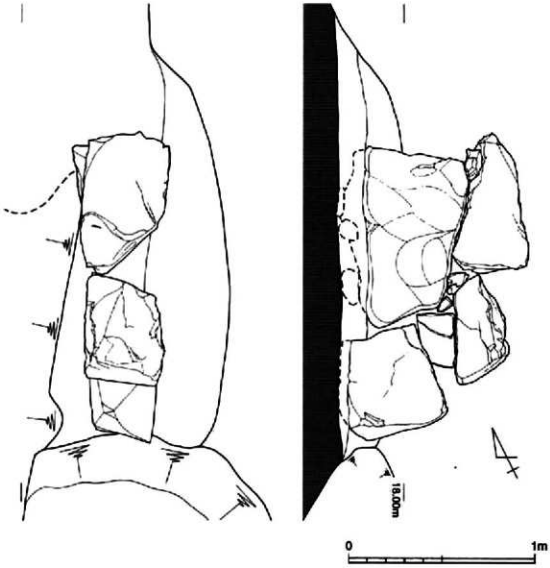
横穴式石室だが、石材の大半を消失している。左側壁の一部と思われる石組みが基底から2段分残存するが、奥壁との連接や開口部の状況は全く失われている。

2．墓壙（第69図）

石材の背後に、ごく一部だけ残存する。長軸2.1mで、上面を大きく削平されているため、本来の深度はわからない。北側では検出したラインが石室側に弧を描くが、石室の位置を推定することは難しい。周壁は斜め上方に立ち上がり、石材の基底部で溝状の掘り方を設け、下部に平坦な礫を詰めて安定を図っていた。

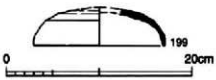
3．石室（第69図）

残存する石材の全長は1.55mを測る。他の古墳や周辺の地形から、開口方向は南西と考えられる。基底石2つ分と2段目の石材が残る。基底石は大きさの異なる石材を並べ、不足する部分に小ぶりな石材を足して、2段目との設置面を整える。整体の残存高は0.88mであった。



第69図　7号墳　石室平面・側壁立面

床面は、緩やかな傾斜を持って検出された。後世の削平による影響と考えられる。



第70図　7号墳　出土土器

Ⅱ　遺物

石室の基底部付近から土器が1点出土した。その他に、関連が考えられる遺物は出土していない。

1．土器（第70図）

須恵器　石室の残存状況が悪く、坏H蓋の破片が1点、確認できるだけである。199は、天井部と口縁部の境界は不明瞭で、扁平な天井部は、外面をロクロ右回りの回転ヘラ削り、内面を仕上げナデ調整している。

第9節　8号墳

Ⅰ　遺構

調査区の南部、丘陵の緩斜面にあたる標高19m付近に位置する。西側の斜面は後世の石垣造成によって削り取られ、崖状をなす。南に1・2・10号墳がまとまって存在、北には多少距離を置いて7・9号墳や3号墳がある。調査前に墳丘の隆起を確認することはできなかったが、主体部が土壙状に落ち込み、石材の一部が露出していた。

墳丘は周辺の地形改変によって、大きく損なわれている。主体部の周辺は周辺に僅かな起伏が残るに過ぎず、墳丘の範囲や形状を復元するのは困難である。他の古墳同様、基部として丘陵を整形した上に盛土を加えて構築したと考えられるが、盛土は完全に失われているほか、古墳に伴う整形部分や周溝などの付属施設も検出できなかった。

1．主体部（第72図）

片袖の横穴式石室で、南に開口部を設ける。大半は基底石だけの残存だが、欠損する箇所がなく、平面規模のほぼ全容が把握できた。両側壁の奥壁に接する部分と、羨道の一部において、2～3段目の石材が残っていた。

2．墓壙（第75図）

平面が長方形で、長軸9.05m・短軸3.97mを測る。周壁は、石材の裏面と近接しつつ、斜め上方へ立ち上がる。最深部は奥壁の中央で、0.75mである。石室基底石の据り方は、周壁沿いに幅1.2m前後、深度0.1～0.15mの溝を巡らせ、奥壁のみ深い据り方を設ける。奥壁据り方は、検出した平面が1.4m×0.5m、墓壙床面からの深度が0.18mである。

3．石室（第73図）

全長6.33m、主軸をN32°Eに向ける。石室の上部を失うほか、開口部付近では右側壁の先端まで崖面が迫り、基底石の一部が消失している。

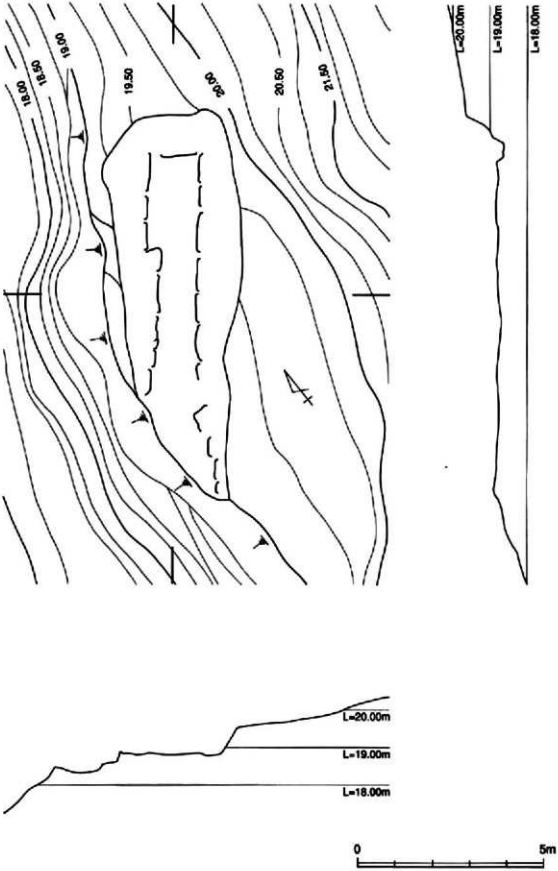
玄室は長さ2.55m・幅1.32mの長方形で、両者の比率がおおよそ2：1をなす。奥壁は上部の尖った石材1つが残存する。面が不揃いな右側壁との連接部分には、拳大の礫をつめて調整する。奥壁は両側壁に挟まれる形で連接する。

左右の側壁は、3つの自然石を直線に並べて基底石とする。壁体は形状の不揃いな部分をうまくかみ合わせて構成される。袖石は立柱上の石材を用い、右側壁から0.4m内側に突出する。

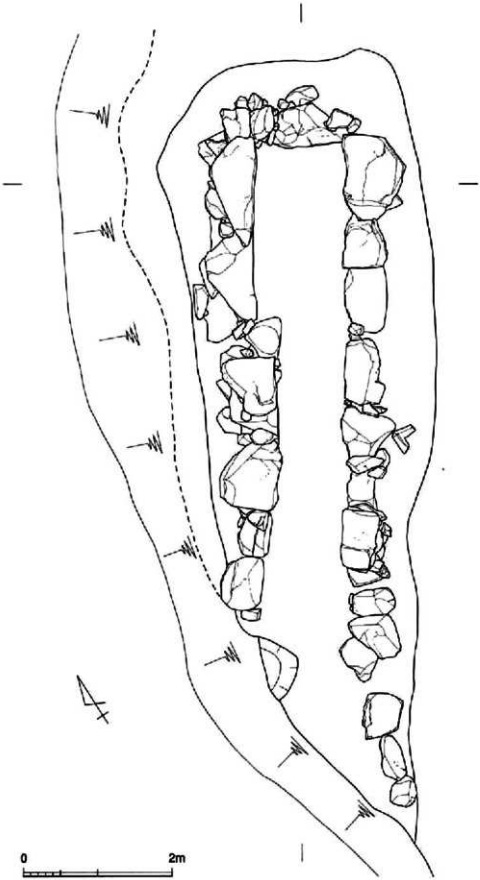
羨道は、基部が玄室と同じ大きさの石材で、開口部に近い部分で小さい石へと変化する。左側壁が顕著に見られ、玄門から3つ東の石材に寄りかかる形で人頭大の礫を3石積み上げていた。右側壁では積み上げた状況こそみられないが、ほぼ同じ位置で基底石の大きさが変化することから、この部分を羨門と考えておきたい。上記に基づいた規模は、全長3.05m・幅0.95mである。なお床面のレベルは玄室から一定で、平坦な状態を保って検出された。

4．床面（第74図）

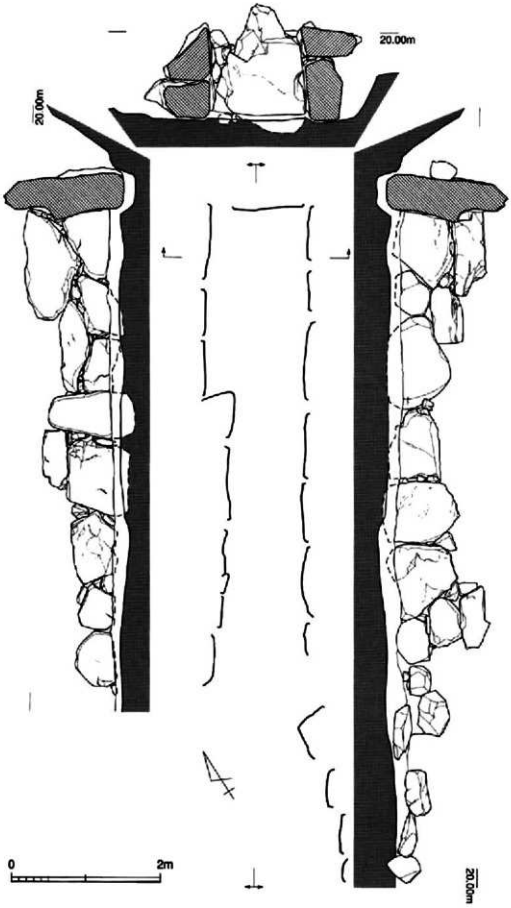
玄室から羨道にかけて、単一の面から土器・金属器・玉類が検出された。また床面の直上を覆う後世の流入土からは、古墳に伴う遺物とともに近世の土師器釜や染付け茶碗が含まれ、後世に再利用が行われた事実を裏付けている。



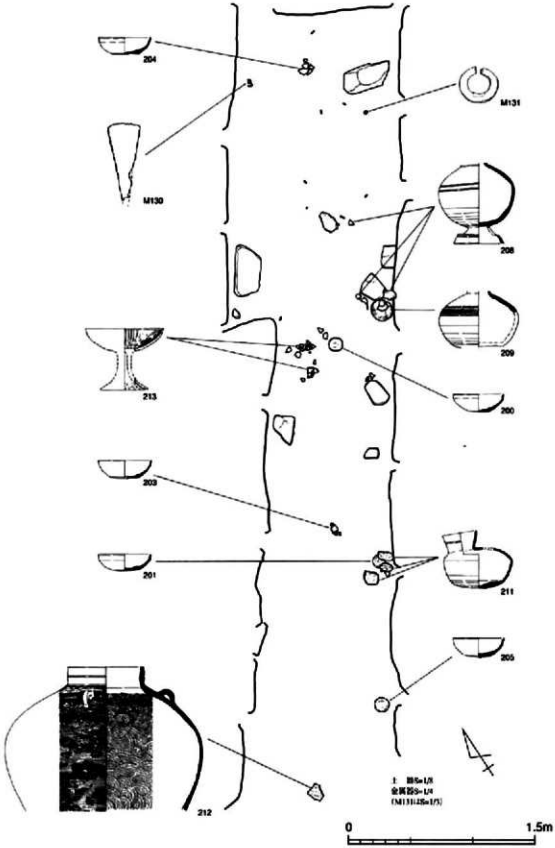
第71図　8号墳　墳丘（検出後）



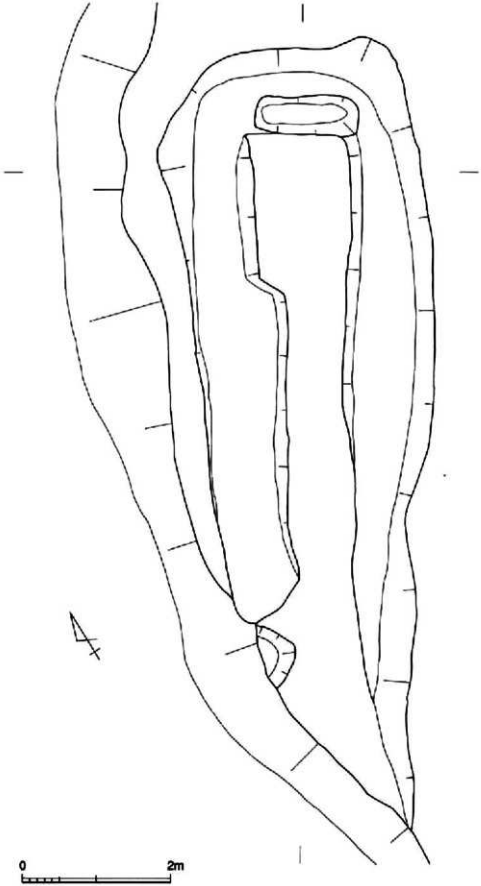
第72図　8号墳　石室平面



第73図　8号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



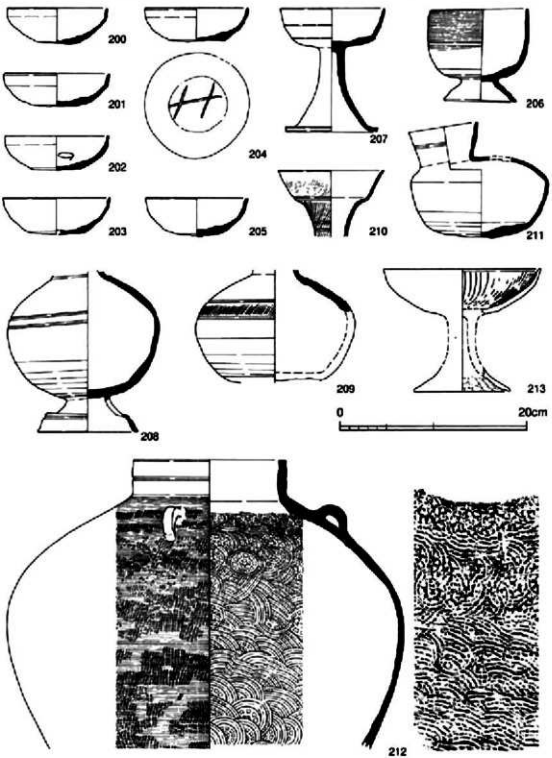
第74図　8号墳　石室内遺物出土状況



第75図　8号墳　石室墓墳平面（石材除去後）

出土遺物は少なく、床面における位置も周壁の基部付近に散在する状態であった。金属器（M130・M131）と玉類（T142～T150）はすべて玄室から出土したが、土器は玄室中央で須恵器の坏Ⅰ（204）、玄門の左側で須恵器の台付長頸壺（208・209）がみられたにすぎない。羨道では、基部から破片化した土師器高坏（213）と完形の坏Ⅰ（200）があるほか、左側壁沿いに須恵器の坏Ⅰ（201）と平瓶（211）、羨門付近からも須恵器の坏Ⅰ（205）が出土した。

石室流入土の状況や寡少な遺物量、まばらな出土状況などから、後世の撹乱によって埋葬時の状況が



第76図　8号墳　出土土器

大きく損なわれていると判断できる。

5．前庭部（第72図）

羨道の全面から、前庭部と考えられる人頭大の石が、列状に検出された。全長３ｍで、右側壁沿いは後世の削平によって失われ、石の抜き取り痕跡だけが残る。羨道に比べて基底石の配置が乱雑で、先端に向かってハの字を呈する。先端付近の流入土から、須恵器の高坏（207）が出土した。

なお排水溝や、遮蔽する墓道は確認できなかった。

Ⅱ　遺物

1．土器（第76図）

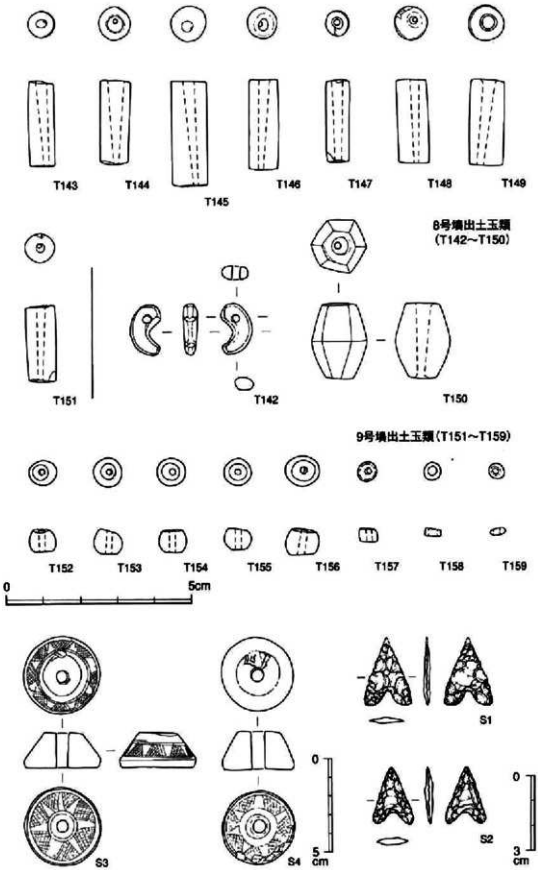
いずれも石室内から出土しているが、各個体の出土位置には明確なまとまりがない。玄室内から出土したものは、坏Ⅰ（204）・台付椀（206）・長頸壺（208・209）等の須恵器があり、羨道からは須恵器の坏Ⅰ（200・201・203・205）・平瓶（211）・三耳付壺（212）と土師器の高坏（213）がある。

須恵器　200～205は、坏Ⅰ蓋を逆転させたような形態の坏Ⅰで、６個体確認できた。口縁端部を屈曲させるもの（200～202）と、口縁部が外上方に延びるもの（203～205）の２種が存在する。いずれも口径11cm前後、器高3.7cm程度の小型品で、底部外面はヘラ切りのまま不調整である。内面は仕上げナデ調整するもの（201～203）としないものがある。202の口縁部内面、204の底部外面には、ヘラ記号が刻まれている。206は、台付椀である。深い椀部に短い脚台が付く。口縁部外面中位には凹線が巡らされ、その上部は端部まで丁寧なカキ目が施されている。脚部は僅かに段を有している。207は、底脚化した長脚の無蓋高坏である。坏部は、扁平な底部から屈曲して外上方に延びる口縁部を有する。底部と口縁部の境界と、口縁部中位に段状の突出がある。脚部には凹線等の加飾はみられず、脚端部は端面を作るだけである。208・209は、いずれも口頸部を欠損しているが、脚付の長頸壺である。208は、球形の体部で、外面肩部には２条の凹線を巡らせている。脚部は下半部を内方に屈曲させた段を有し、長方形２方透かしを穿っている。209は、やや扁平気味の体部で、肩部には凹線間に列線文を巡らせている。底部は、広範囲に回転ヘラ削り調整を施している。210は、受け口状を呈する鉢の口縁部片である。外面には縦方向のハケ目が明瞭に残っている。頸部には２条、口縁部と頸部の境界に１条の凹線が巡らされている。ハケ目痕を残すのは、２号墳出土の鉢（36）と共通している。211は、平瓶である。肩部が屈曲する扁平な体部に、広口の短い口縁部を付け、中程には凹線が１条巡らされている。底部外面は回転ヘラ削り調整が施されている。太市中古墳群出土の平瓶のうちでは、後出的要素を有している平瓶であろう。212は三耳付壺である。短く直立する口縁部をもつ大型の壺で、肩部に環状の把手を３カ所に付けている。体部下半は欠損しているが、胴部最大幅は42.4cmで、器高もそれに近いとみられる。口縁部は水平の端面を作り、中位に凹線が巡っている。体部外面は擬格子叩きの後、カキ目調整が行われている。内面は中心が星形となる車輪文叩き目が施されている例の少ないものである。

土師器　213は、高坏であろう。直接、接合しない坏部と脚端部であるが、出土状況・胎土等から同一個体と判断した。坏部は緩やかに内湾しながら外上方に延び、端部は僅かに外方に拡張し、内傾する面を作っている。内面には放射状暗文を施している。ハ字形に拡がる脚端部の内面には、指頭圧痕が残っている。

2．金属器（第94図）

武器の鉄鏃と装身具の耳環で、いずれも石室の内部から出土した。



第77図　8・9・10号墳　出土玉類、石製品

M130は鉄鏃で、玄室奥壁の右コーナー付近から、破断した状況で出土した。残存する鏃身は、精美な二等辺三角形を呈する。

M131は太身の耳環で、銅芯銀板貼鍍金技法で製作される。部分的に箔が剥離する。この他に耳環は出土しなかった。

3．玉類・石製品（第77図）

9点の玉類が出土した。勾玉・管玉および切子玉があり、ガラス小玉等は検出できなかった。すべて石室内の床面上において検出したが、散らばった形で検出され、連結の状況を示すものはない。

T142は小形の勾玉である。平面はいわゆる定形勾玉だが頭部の膨らみは少なく、断面も扁平である。全長1.4cm（うち頭部長0.7cm）で、頭部の幅0.8cm・最大厚0.4cmを測る。ガラス製と考えられるが、不透明な水色を呈し、茶褐色の不純物を多く含んでいる。穿孔は右側面から施される。

T143～T149は管玉である。長さ2.2～2.8cm／径0.65～0.95cmで、幾分ばらつきがみられる。円柱状に石材を加工した標準的な形態で、片側から穿孔する。石材は硬質の碧玉で、T143が濃い緑を呈するほかは、深緑色をなす。

T150は切子玉である。水晶製で、上下の平面は不正な六角形をなす。側面は12面にカットされ、稜線は明瞭である。透明度は高いが、局部に黒色の鉱物が含まれている。片側からの穿孔である。

第10節　9号墳

Ⅰ　遺構

太市川に接する調査区の西端部で検出した。丘陵の先端部分に占地し、標高は17m²を測る。7号墳が近接するほか、北部に5・6号墳、南部に8号墳が立地する。調査前には僅かな隆起の中央に土坑状の落ち込みがみられ、横穴式石室の一部が露出する状況であった。

墳丘は丘陵を削り出した基部に、盛土を加えて構築するが、盛土自体は流出していた。また基部も後世の削平等によって変形し、僅かな高まりとして石室の周囲に残る状態であった。周溝などの付属施設も検出できず、築造当初の墳形を把握する手がかりは少ない。

1．主体部（第79図）

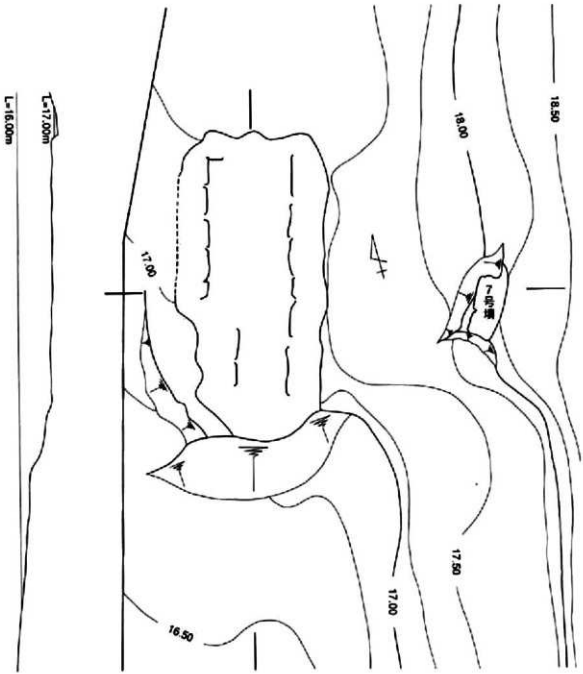
片袖をなす横穴式石室で、南に開口部を設ける。石材の亡失が著しく、奥壁と袖石を失うほか、周壁も袖部右コーナーを除いて、基底石1段分だけが残存している。石室の床面は1面が残存していたが、直上に堆積する後世の流入土にも多くの遺物が含まれ、攪乱による影響が顕著である。

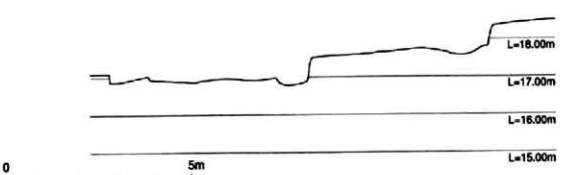
2．墓壙（第82図）

長軸7.32m・短軸4.06mで、平面は石室と相似した片袖を持つ方形である。上面が大きく削平され、最深部を測る左側壁の中央付近でも0.28mにすぎない。残存する限りにおいて、周壁は直立する。石室基底石の掘り方は、周壁沿いに幅1m前後の溝を巡らせて形成する。深度が0.15～0.25mと浅く底面も平坦だが、抜き取り痕跡が極端に深い奥壁と袖石は、局部的に深く掘り下げていた可能性もある。

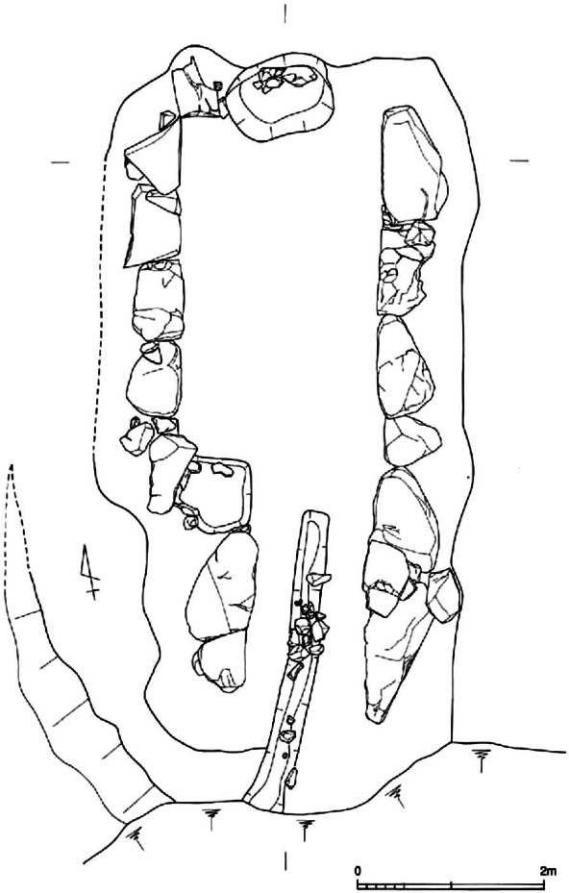
3．石室（第80図）

全長は6.40m、主軸をN10°Eに向ける。羨道は左側壁から直線に延びるが、開口部付近の地形改変が著しく、墳丘も残存しないため、羨門の位置を明確にしがたい。

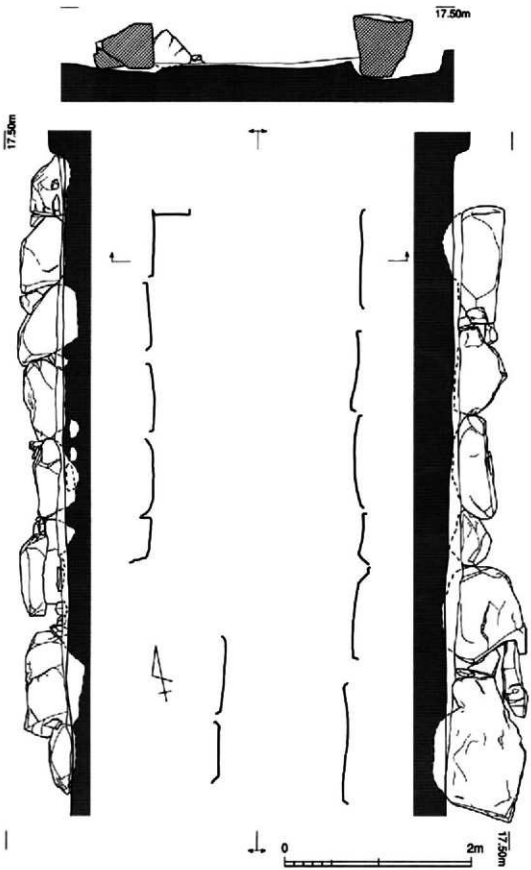




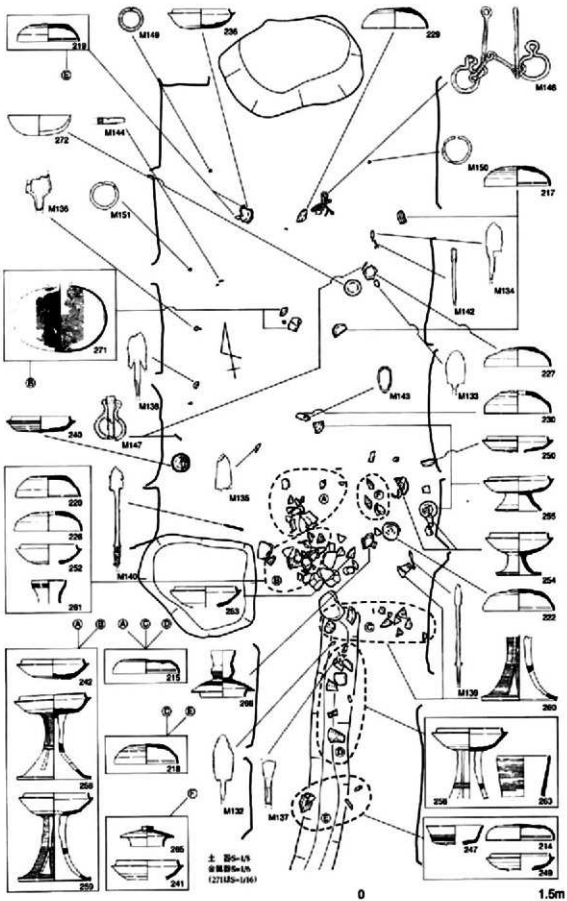
第78図　9号墳　墳丘（検出後）



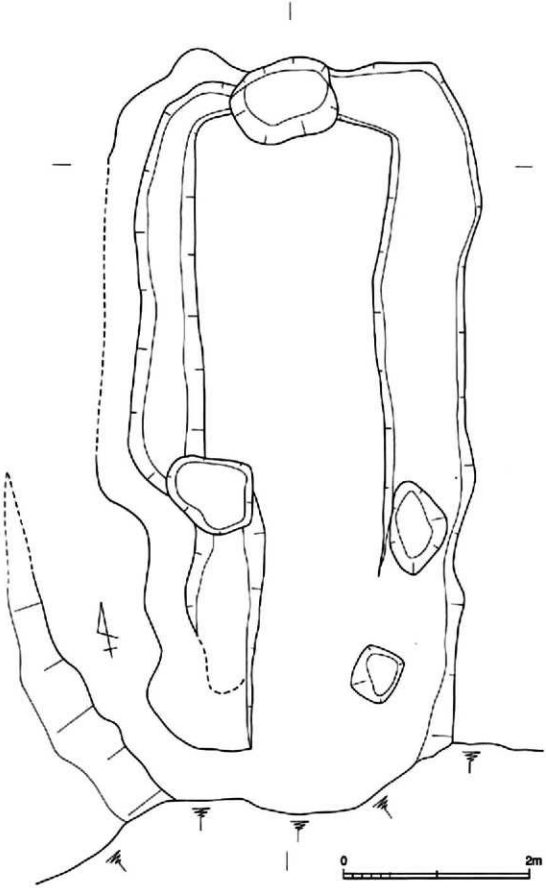
第79図　9号墳　石室平面



第80図　9号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



第81図　9号墳　石室内遺物出土状況



第82図　9号墳　石室墓墳平面（石材除去後）

玄室は長さ3.58m・幅2.23mを測り、周若の比率はおよそ3：2である。奥壁は後世に抜き取られ、右コーナーをなす石材のみが残存する。中央に残る抜き取り坑の内部からは、裏込めに使用されたと考えられる礫がまとまって検出できた。抜き取り坑は東西1.15m・南北0.72m・検出面からの深さ0.25mで、かなり大規模の石材を奥壁の中央に据えていたと考えられる。北周壁が僅かにオーバーハングするが、石室を構築する時点の形状か、抜き取る際に変形したものか明確ではない。また左側壁とのコーナーには0.6mの空間があり、この部分にも石材を立てた可能性がある。

側壁は、横長の石を基底に並べて構成する。残存する石材の上面は均衡が保たれ、欠けた部分に詰石を加えて設置面を整えた状況もいくつか残っている。袖石は抜き取られた石の痕跡から単一の石材で構成されていた可能性が高い。袖の規模は、玄室ならびに羨道の石側壁が示すプランから、0.8mほどの突出と推定できる。

羨道は左側壁と一連で壁体を構成するが、大型の石材を組み入れている。長さ2.50m、袖部での幅は1.4m前後と推定される。敷面は羨道と同じ高さを保ち、中央部分に排水溝が1条存在する。幅0.33m・深さ0.15mで、全長10mまで検出したが、開口部付近の削平で消失している。断面は逆台形で、内部から土器とともに、拳大の礫が検出された。羨道の中央部にまとまっていることから閉塞石の残欠と考えたい。

4．床面（第81図）

玄室の床面は1面で、土器・金属器・玉・石製品が同一面から検出された。床面の直上を覆う後世の流入土からも多数の遺物が出土し、いくつかは床面出土のものと接合できるなど、後世の攪乱による混交が著しい。

土器は玄門付近に集中して検出された。破片化したものが多く、他の古墳に比べて残存状態はよくない。奥壁付近と玄門や羨道で検出した遺物が接合するなど、破片化したのちに石室の各所へ散らばった状況を示している。

金属器は土器と比べて玄室全体に広く分布する。少量で残存状態も悪く、大型品は奥壁よりの玄室中央から出土した馬具の轡（M146）があるに過ぎない。ただ付近からは鞍（M147）や、刀装具の責め金具（M143）が出土していることから、埋葬時には鞍や刀が副葬されていたと考えられる。

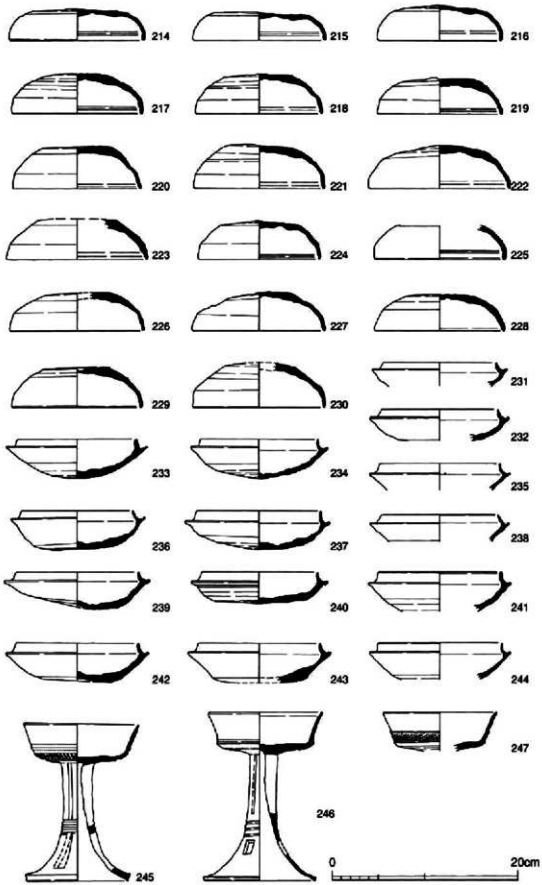
玉類は羨門付近を中心にみられるが、連結の状態などは確認できなかった。出土した点数も管玉1点（T151）、ガラス小玉8点（T152～T159）と少ない。

以上の状況から検出した床面には、後世の攪乱による影響が顕著といえよう。また出土した遺物の残欠状況から、副葬後に持ち出された遺物が相当数あると考えられる。

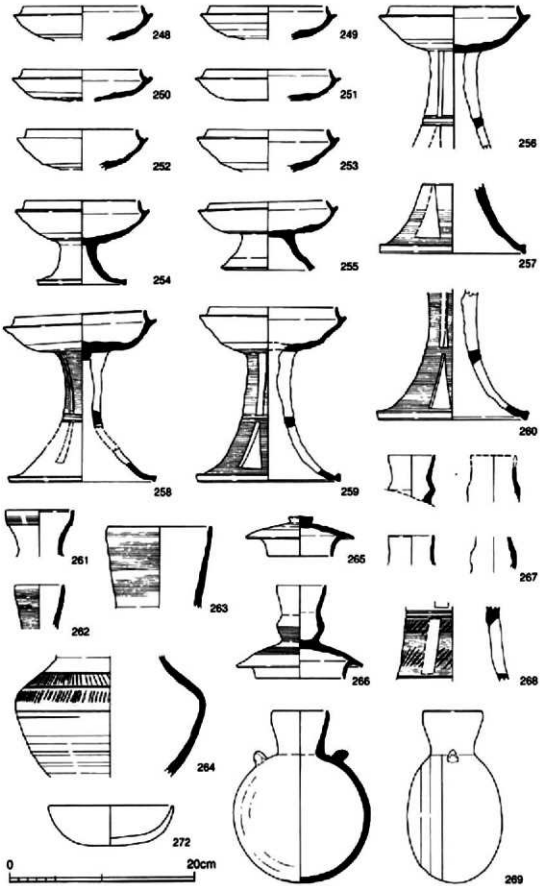
なお床面の検出作業を開始した直後に、盗掘を受けて一部の遺物が持ち出されている。被害が明らかなものは玄門付近に集中した土器群で、完形の土器が数点失われていることを付記しておく。

5．開口部

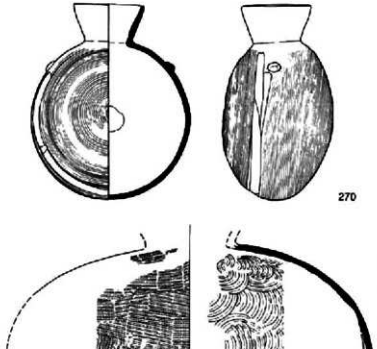
石室の前面は大きく削平され、前庭部並びに墓道の状況を示すものは残存しない。石室内から延びる排水溝も、傾斜に伴って南西へ屈曲をみせはじめるが、削平によって消失する。削平部分の埋土には遺物が含まれているが、古墳に伴うと考えられる遺物が少なく、後世の遺物が中心をしめる。



第63図　9号墳　出土土器①



第84図　9号墳　出土土器②



第85図　9号墳　出土土器③

Ⅱ　遺物

1．土器（第83～85図）

石室外出土のものが4個体（228・231・232・245）存在するが、多くは石室内出土のものである。石室内は後世の攪乱のため、多くの土器は細片となっていて良好な出土状況を示していないものの、比較的多くの須恵器（坏H・高坏・子持蓋・装飾付壺・壺蓋・壺・提瓶・横瓶）のほか、土師器（坏）が1個体確認できた。

須恵器　214～244は、坏Hである。蓋は17個体、身は14個体あり、多くは石室内出土のものである。石室内の遺物残存状況から、蓋と身がセットとして出土したものはない。蓋は、口径13～15cm、器高3～5cmのもので、扁平な天井部から湾曲して口縁部を付け、口縁端部を屈曲させているものが多い。蓋のうち、形態的特徴で最も差異が認められるものは、口縁端部内面の凹線の有無である。内面に凹線を巡らせるものには、明瞭な沈線状を呈するもの（224・225）と、凹線が浅く鈍いもの（214～223）とがある。そのほか、凹線を巡らせないもの（226～230）がある。天井部外面は、回転ヘラ削り調整を施しているものが一般的である。ただし、削りの範囲は、天井部の1／4程度と狭くなっているものが多く、なかに、天井部外縁を粗く回転ヘラ削りするものが含まれている。内面には同心円圧痕目痕を残しているものが大半である。228は、天井部外面に直線状のヘラ記号が刻まれている。坏H身は、口径12～13cm前後、器高4.0～4.5cmのものが多いが、240のように、底部が扁平で器高が浅いものもある。底部の形状の判明する個体では、丸い底部をもつもの（233・234）、扁平気味なもの（236・237・239・240）、底部と口縁部の境界が明瞭なもの（242・243）がある。立ち上がりは矮小化の傾向が窺われ、多くは高さ1cm前後で内傾し、端部は丸く収めている。なかに、立ち上がりが直立し、高さ1.4cmのもの（237）が混じっているが、焼成時の歪みの可能性がある。底部外面は、回転ヘラ削り調整が施されているものが一般的である。なかに、蓋と同様、外縁部を粗く回転ヘラ削りしているもの（236・239・242）が含まれている。240は、底部全体に回転ヘラ削り調整が及んでいることから、受部下半にまで削りの痕跡がみられる特異な坏H身であるうえ、他のものに比べ器高が浅いというような形態的な相違点もみられる。245

～260は、高坏で、無蓋のもの（245～247）と有蓋のもの（248～256・258・259）とがある。無蓋高坏のうち、脚部の判明している245・246は、脚部が長脚２段３方透かしのもので、脚部の欠損している247も長脚のものであろう。245の坏部は、３条の凹線を巡らせ、その間を列線文で飾っている。246は、異形のもので、坏部は扁平な底部に、緩く屈曲する外反する口縁部を付けている。脚部の下段の透かし孔は短く、小さい長方形である。247は、２段に突出する段をもち、その間を列点文で飾っている。有蓋高坏は248～253のように、坏部のみが残存し、脚部を失っているものが多い。いずれも脚部の剥落痕がみられることから、高坏であると判断した。脚部は２形態ある。254・255は、短脚のもので、瀧斗状に大きく外反するもの（254）と、内方に屈曲して段をなすもの（255）とがある。いずれも透かし孔はみられない。長脚のもの（256・257・259・260）は、形態がよく似ている。筒部径は太く厚手で、２段３方の透かしは、上段が長方形、下段が三角形に穿たれている。ただし、カキ目調整される部位及び脚端部の形状には差異がみられる。258は、脚部の一部が欠損しているが、筒部径が細く、下段の透かしが長方形であった可能性が高い。坏部の形状は、坏日身と大差がない。口径12～14cmほどで、内傾する立ち上がりは１cm前後で、端部はすべて丸く収めている。底部外面は回転ヘラ削り調整され、内面には同心円叩き目痕を残しているものが多い。261～264は、壺頸に分類されるとみられる口縁部・体部片である。なかに装飾付壺を構成する破片とみられるもの（267・268）が存在する。261は、受け口状の口縁部片で、直立する端部には凹線が巡らされている。提瓶であろうか。262は、直立する口縁部片で、カキ目調整の後、凹線が２条巡らされている。提瓶の口縁部であろう。263は、大型の直口壺の口縁部片であろう。264は、壺の体部で、263と同一個体かもしれない。肩部は屈曲気味で、凹線間に２段の列線文が巡っている。265・266は、傘形の天井部と長い身受けの返りをもつ蓋である。直口する壺とセットとなる蓋で、稜平なつまみを付けるもの（265）は、口径10cm前後、子壺を付ける装飾付蓋（266）は、口径11.5～12cm前後の壺に付くのであろう。266は子壺を乗せるもので、柴垣勇夫氏の形式分類では、KⅡ２形式、山田邦和氏の形式分類では、Ⅱ-２形式に該当する[11]。子壺体部と蓋天井部はカキ目調整を施している。なお、同形・同大の子持壺が、確実にもう１個体存在したが、発掘調査中に何者かによって盗掘を受け、報告書に記載できなかった。267は、装飾付壺の小壺で、少なくとも４個体確認された。子持蓋の子器の可能性もあるが、整形が粗雑であり、装飾付壺の子器とみられる。268は、筒状の器台形脚部の破片である。凹線間に２段に列線文を巡らせ、３方長方形透かしを穿っている。267の装飾付壺と同一個体となる脚部であろうか。269・270は、提瓶である。269は内傾する口縁端部をもつ中型品で、鈎状とボタン状把手の中間的な形状を呈する突起状の把手を付ける。270は、短く外方に開く口縁部をもつ中型品で、体部は全面にカキ目調整が施されている。肩部にはボタン状の把手が付く。271は、口縁部と体部の一部を欠損しているが、横瓶であろう。胴部側面には円板が充填された痕を残す。体部外面は擬格子叩き、内面には同心円叩きで成形されている。

土師器　272は、椀状を呈する坏で、口縁端部は丸く収めている。器表の摩滅が著しく、調整方法は不明である。

11）６号墳、註２）と同じ。

２．金属器（第86・87図）

26点の金属器が出土した。M146のほかは石室床面から、M146は墳丘検出中に出土した。武器・馬具・農工具がみられる。大半が鉄製品で、武器の一部と装身具に、他の材質を用いたものがある。

武器　鏃と刀装具がある。刀装具は銅製の責め金具が1点出土している。M143は断面方形の銅線を環状にしたもので、環の一部を欠損する。刀本体、鍔や他の刀装具はみられなかった。

鏃は短い篦被の形態と、長頸鏃に大別できる。篦被が短い鏃はM132～M138で、形態の鏃身がバラエティに富む。M132は五角の鏃身をなす。尻部が直線で、鏃身関部が直角となる。篦被関部は台形である。M133も五角形に近いが、鏃身の尻から関部にかけて撫角をなす。M134は圭頭形の鏃身と考えられるが、篦被の位置は歪んで鏃身の中心を通らない。篦被の関は方形をなす。M135は三角形とみられる鏃身のみ残る。M136は鏃としてはかなり規模が大きい。三角形をなす鏃身の基部が残存する。M137は方頭の鏃身を持ち、矢柄の装着部分はソケット状となる。M138は鏃身が柳葉形で、方形の篦被に軸状の茎がつく。

長頸鏃はM139～M142である。M139は細身の鏃身を持つ。篦被関部は錆膨れにより棘状をなすが、台形とみられる。M140は鏃身の痛みが激しい。茎には矢柄の一部と装着時の結縛痕跡が残る。M141・M142は断面三角形の鏃身を持ち、微弱な鎬が中央に認められる。

馬具　轡と鞍が1点づつ出土した。M146は素環鏡板付轡である。歪んで融着するが、主要な部品は揃っている。銜は2連で、銜先と鏡板・引手は揺軸によって連結する。銜先で引手と鏡板を結合している。鏡板は素環の中央を挟れさせて、環体と立聞を形作る。M147は鞍で、環状の緣金に足が組み合わせたものである。緣金は挟れ、足の絡む部分を平坦に整形する。足は断面方形の板を折り曲げて絡める。足はL字に屈曲するが、緣金の挟れ部分にはまり込んだまま融着していた。座金具は出土しなかった。

農工具　刀子である。M144・M146は、茎のみ残る。M144は柄元ならびに茎尻に木質が付着する。M146は下部に関をもつ。M145は小型の刀子で、切先ならびに茎の先端を欠損する。茎には木質が残存するほか、柄元にも付着痕がある。

装身具　細身の耳環が3点出土した。奥壁周辺に散らばって検出された。M148は銀無垢の耳環である。M149・M150は残存状態が極めて悪い。芯部分が残存するが、箔など表層の有無については不明。奥壁左コーナー付近からM148、奥壁右コーナーから右側壁中央にかけてM149・M150が出土した。

その他　器種の比定が困難なものに、M151・M153・M155・M156がある。M151は棒状で一端が鏃身状に広がるが、残存状態が悪い。M152は断面円形の棒を曲げて環状としている。馬具の連結部であろうか。M154は棒状で、両端を欠損する。欠損部が屈曲していることから、轡（足）の可能性がある。M156は断面方形の棒状で、両端を欠損する。

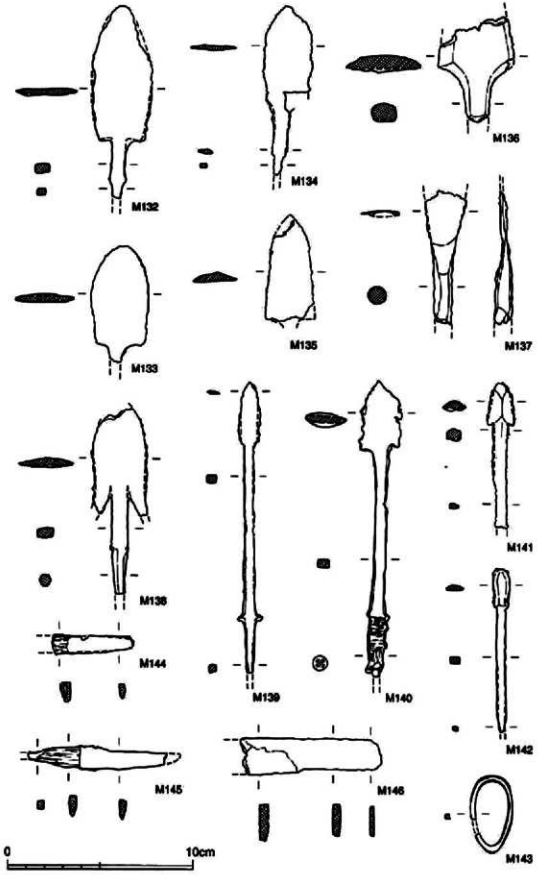
床面付近の土壌を洗浄したところ、砂鉄が検出された。量が少なく、床面における状況も確認できなかったが、床面上に敷設されていた可能性がある。

3．玉類・石製品（第77図）

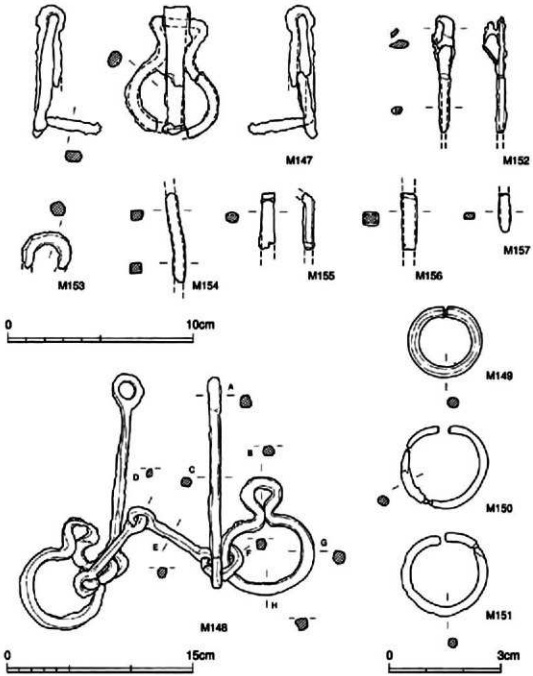
9点の玉類と1点の石製紡錘車が出土した。玉類には管玉と小玉がある。玉類と紡錘車は、石室の床面上においで検出した。また墓壙の埋土から、打製石鏃を2点検出している。

T151は管玉である。完形の状態で出土した。硬質で深緑を呈する碧玉を用いている。整備な円柱をなし、穿孔は片側からなされる。

T152～T159は小玉である。直径0.7～0.9cmを測る大きめのもの（T152～T156）と、0.4～0.5cmの小さいもの（T157～T159）がある。断面は大半が胴張りの太鼓形で、円筒形を呈するものはT157・T158のみである。材質はT158を除いてガラス製で、色調は群青～藍色のものが多い。T158は滑石の白玉で、灰色かかった緑色を呈する。



第86図　9号墳　出土金属器①



第87図　9号墳　出土金属器②

S－3は滑石製の紡錘車で、石室の床面から土器と混在した形で検出された。岩質が悪く、節理に沿って一部で亀裂が生じている以外ものの、全容をとどめている。

正円錐の頂部を落とした異径円柱を呈し、頂径2.2cm／底径4.1cm／高さ1.9cmをそれぞれ測る。中央には径0.65cmの円孔が穿たれている。側面・底面には細線刻による幾何文が配される。また文様のかからない個所には整形時の調整痕があり、傾斜部分には縦方向、僅かな円柱状の部分には横方向の擦痕がある。

S1・S2は打製石鏃である。石室の流入土中から出土し、造成時に混入したものと考えられる。いずれも凹基式石鏃で、作用部に直線、基部に深い抉りを持つ。規模はS１がいくぶん大きい。S１は全長2.45cm・全幅1.9cm・厚さ0.22cm・重さ0.8ｇを測る。抉り幅が0.9cm、抉り長は0.55cmである。S２は全長2.3cm・全幅1.63cm・厚さ0.3cm・重さ0.8ｇを測る。抉り幅が1.15cm、抉り長は0.5cmである。

第11節　10号墳

Ⅰ　遺構

調査区の南西部、標高17mの低地において検出した。丘陵の上方にあたる東部には２号墳と１号墳が、北東には急傾斜をはさんで８号墳が、それぞれ位置する。調査前には太市川右岸の平坦地で、古墳の存在を示すものはなかったが、周辺の包含層掘削とともに石材の一部が露出して、明らかとなった。

丘陵を削り出した基部に、盛土を加えて墳丘を構築すると考えられるが、盛土は完全に流出し、基部も後世の削平で著しく変形していた。石室の周囲に、僅かな高まりとして墳丘基部が残るほかには、周辺施設の痕跡も存在しない。

１．主体部（第89図）

横穴式石室は南東へ開口部する。石材の大半が消失し、奥壁付近の基底部だけがコ字形に残存する。ただし開口部にかけては、ところどころで石材が残存し、ある程度の状況を推定できる。

検出した形態は無袖の横穴式石室だが、抜き取り痕から袖石をもつ可能性も考えられる。床面からは比較的まとまった状況で遺物が出土した。

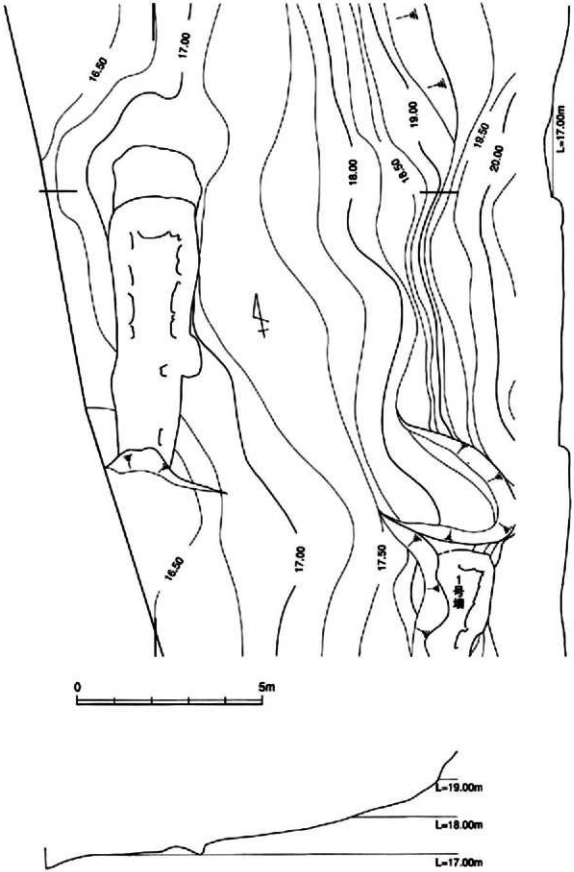
２．墓壙（第92図）

石室に沿った長方形を呈する。開口部付近が大きく削平を受けて、全長はわからない。長軸が6.70m、短軸が2.38mを測る。最深部は奥壁の右コーナー付近で、2.37mである。墓壙の周壁は直立し、石材の表面ぎりぎりに設けている。左辺の中央付近でみられる棚上の掘り込みは、石材を抜き取る際に生じたものであろう。墓壙の底面は平坦で、墓壙周壁沿いに幅0.5～0.7m・深さ0.1m前後の浅い溝を巡らせて石室基底石の掘り方とする。掘り方の底面は、石材に応じて僅かな起伏を設ける。

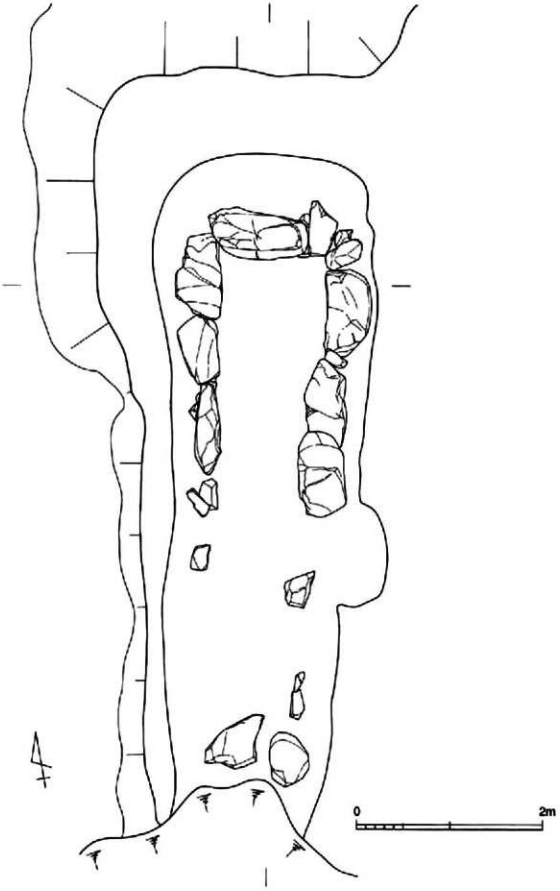
３．石室（第90図）

石材の亡失が著しく、全容を把握するのは困難な状態であった。全長が5.58mで、主軸はN10°Eに向ける。特に羨道付近では、築造当初の様相が大きく損なわれている。

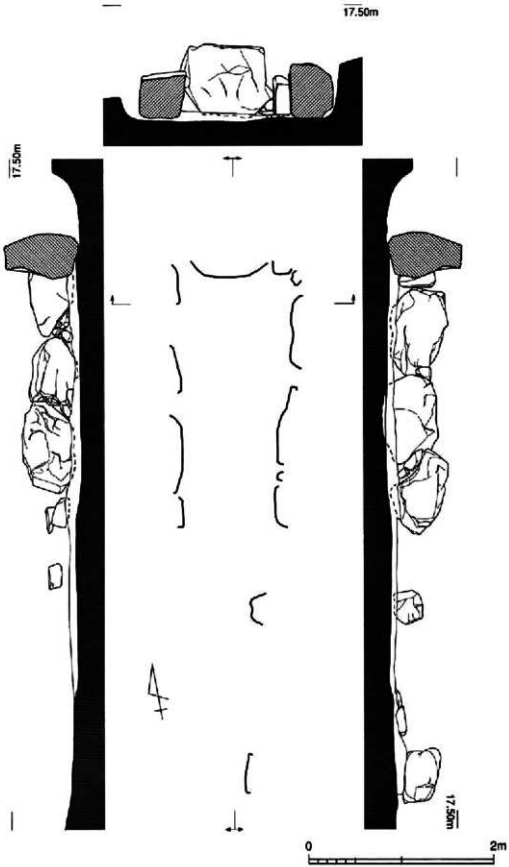
玄室は奥壁と左右の側壁の基底石だけが残存する。幅1.12m、全長は玄門付近が明瞭でないため、奥壁から左側壁の端部までの2.73mを仮に計測した。奥壁は中心に方形の石材を据え、左側壁との隙間に小さい石材を詰めて構成する。右側壁は奥壁の右辺を逃る形で接続し、開口部に向けて基底石が３つ延



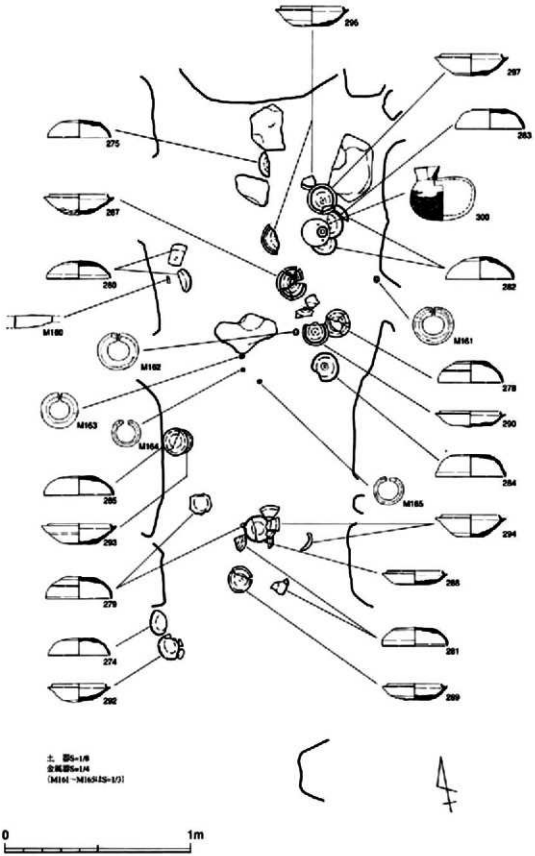
第88図　10号墳　墳丘（検出後）



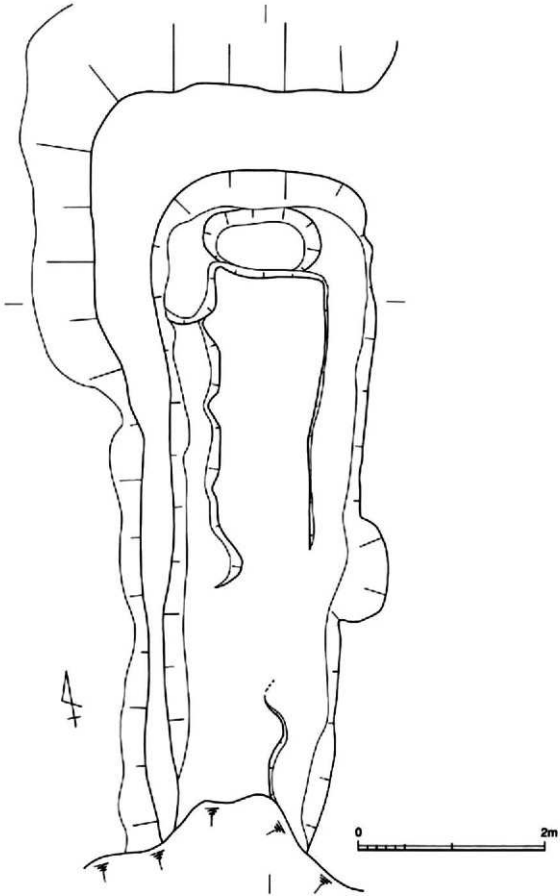
第89図　10号墳　石室平面



第90図　10号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン



第91図　10号墳　石室内遺物出土状況



第92図　10号墳　石室墓壙平面（石材除去後）

びる。石材の大きさはほぼ同じで、2段目が接する高さを揃えている。左側壁もほぼ同じ規模の石材3つと、奥壁とのコーナーに隙間を補う格好で小規模な石材を1つ揃えて基底石を構成する。

玄門から開口部にかけては、大半の石材が失われて、状況を把握しがたい。僅かに残った石材をみると、玄室の側壁より小規模なことから、羨道は小形の石材で壁体を構成していた可能性がある。袖石は遺存しないが、右側壁の墓壙は攪乱を境に屈曲をみせる。この部分に袖石があり、攪乱は袖石を抜く際に生じたと考えれば、羨道の幅が0.7mを測る左片袖の石室であったかもしれない。羨道の床面は玄室と同レベルを保ち、開口部付近は岩盤の露頂した岩盤の上に石材を敷えている。開口部の前面は攪乱によって大きく削り取られ、羨門の様子が失われていた。羨道の中央からは、薄い板石を検出した。上面は0.6m×0.55mの三角形で厚さは0.1mを測り、羨道の床面に捨て置かれている。なお排水溝ならびに閉塞状況を示すものは検出できなかった。

4．床面（第91図）

石室内から出土した土器・金属器は、すべて同一の床面で検出した。奥壁と両側壁に囲まれた範囲の全面に分布する。

土器は、奥壁の左前方と残存する側壁の端部付近にまとまりをもち、残存状態のよい坏H蓋と身が中心である。奥壁の左前方では、3段に重ねられた坏Hと平瓶の一群が目を惹く。最下段に内面を上向きとした坏H蓋を上（283）下（282）に重ね、さらに平瓶（300）を載せる。周辺には坏H身（290・287）と坏H蓋（278・284）、耳環（M160～M164）が並び、範囲を限る形で人頭大の礫が4個検出された。

開口部寄りの床面からも、坏Hがまとまって出土した。右側壁第3石沿いでは、坏H身（293）と坏H蓋（285）がいずれも口を床に伏せる形で重ねられていた。また床面中央では坏H身（294・288・289）と坏H蓋（279・280）が、いずれも口を伏せる形で検出された。残存状態が悪く、破片も散らばっている。さらに南では、右側壁の前面に回り込んで出土した坏H身（292）と坏H蓋（274）がある。石材を抜き取った段階で混入したと考えられる。

床面で検出した耳環以外の金属器は、右側壁第2石沿いで出土した刀子（M159）1点にとどまった。また玉類は検出できなかった。

床面から検出した土器は残存状態がよいものの、金属器が寡少である点や、石室内の流入土に相当数の遺物が含まれていること、石材の抜き取り時に遺物の一部が移動したことから、後世の攪乱による影響は少なくないであろう。

5．開口部

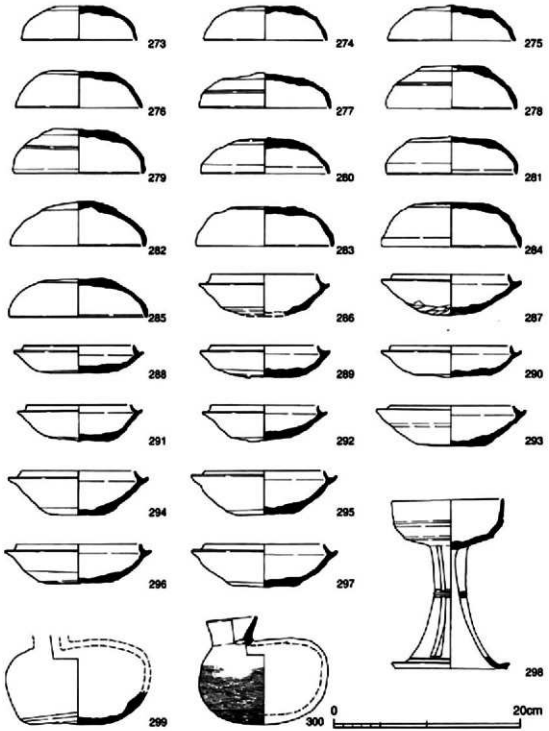
後世の攪乱で大きく削平を受け、前庭部並びに墓道の存在は確認できなかった。攪乱の内部からは、坏H身（286）が1点出土した。

Ⅱ　遺物

1．土器（第93図）

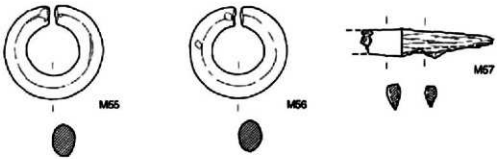
すべて須恵器（坏H・高坏・平瓶）で、大半の土器は、石室内からの出土しているものの、例外的に坏H身（286）、平瓶（299）は、石室外から出土したものである。石室内床面として取り上げられた須恵器は、奥壁に近いもの（275・278・280・282～284・287・290・296・297・300）と石室開口部に近いもの（274・279・281・285・288・289・292～294）がある。

須恵器　273～297は、坏Hである。坏H蓋（273～285）は13個体、坏H身（286～297）は12個体があり、286を除き、多くは石室内から出土している。石室中央付近の右側壁に沿った蓋（285）と身（293）を除くと、明確に蓋と身がセットとなるものは確認されなかった。坏H蓋は、口径12.2～14.6cm、器高3.6～4.7cmまでのものが含まれる。いずれも天井部と口縁部境界は不明瞭であるが、277～279は、境界に凹線が巡らしていて、天井部と口縁部が区分されている。口縁端部はすべて丸く収められている。端

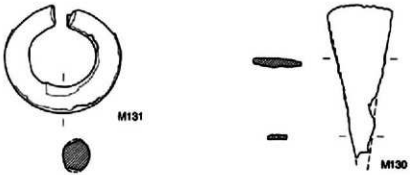


第93図　10号墳　出土土器

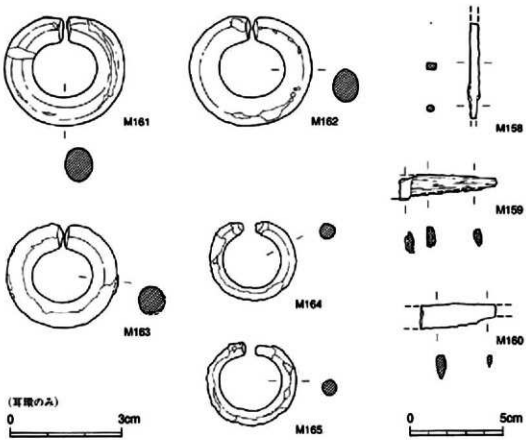
5号墳出土金属器（M55～M57）



8号墳出土金属器（M130～M131）



10号墳出土金属器（M158～M165）



第94図　5・8・10号墳　出土金属器

部は外方に開くもの（273～276）と内方に屈曲させるもの（280～285）がみられる。天井部外面は、ヘラ切りのまま不調整のものが大半を占めるが、粗い回転ヘラ削りを施すもの（280・284）が少数存在する。内面は仕上げナデを施すものがある。284の内面には、同心円叩き目痕がみられる。坏H身は、扁平なものが多く、立ち上がりは矮小化し、端部は丸いか尖り気味である。口径11.1～13.2cm、受部径13.1～15.4cm、器高2.9～4.7cmまでのものがある。立ち上がりは0.7～1.0cmほどで、矮小化して内傾している。底部外面は、ヘラ切り不調整のものと僅かにナデを施すものと、粗く回転ヘラ削り調整を行っているものがおおよそ半数ずつ存在する。287は、静止ヘラ削り調整されている。内面に仕上げナデを施しているものは、外面ヘラ切り不調整もしくはナデ調整を施しているもので、回転ヘラ削り調整のものは、仕上げナデはみられない。297の内面には同心円叩き目痕がみられる。298は、長脚の無蓋高坏である。坏部は丸い底部と直立する口縁部からなり、器高が深い椀形を呈し、2段の突出した稜を付けている。脚部は長方形2段の透かしが3方に穿たれている。脚端部は外方に屈曲させ、拡張している。299・300は、平瓶である。299は、口縁部と体部の多くを失っている平瓶の残片である。底部は扁平で、回転ヘラ削り調整されている。300は、ハ字形に開く短い口縁部に、器高の高い丸味をもった底部をもつ体部が付く。口縁部の外周にボタン状の把手が付けられている。

2．金属器（第94図）

総数8点で、鉄製の武器・農工具、金銅製の装身具がある。すべて、石室内部より出土したが、床面検出時に出土したものは少なく、石室埋土に混入した遺物ものもある。

武器　鉄鏃が1点、石室の流入土から出土した。M157は長頸鏃で、篦被から茎にかけて残存する。篦被関部は台形を呈する。

農工具　刀子2点で、M158が石室埋土から、M159が石室床面からそれぞれ出土した。いずれも柄元から茎が残存する。M158は下方に関を持ち、茎が木質に覆われている。M159は柄元付近のみが残存、下方に撥角の関を持つ。

装身具　耳環が5点、床面上から出土した。M160・M161・M162が太身の耳環で、M160・M161が銅芯金板貼、M162が銅芯銀板貼鍍金技法で、それぞれ作られる。M163は残存状態が悪いが、形態や法量等が、M164に類似する。M164は細身の耳環で、銅芯銀板貼鍍金技法で製作される。石室の中央付近から出土したが、ある程度の範囲に散らばっている。M161～M164は床面のほぼ中央でみられ、M162～M164は石室中央に置かれた棺の南側から出土した。M161は坏Hなどがまとまって出土した範囲に近接し、3つの耳環といくぶん距離を持って検出された。またM160は坏Hをはさんだ左側壁の至近から検出された。

3．玉類・石製品（第77図）

墳丘の検出中に1点の石製紡錘車が出土した。古墳が埋没する過程での堆積に含まれることから、10号墳との共伴関係は確定できない。なお石室の内部から、玉・石製品は出土していない。

S－4は滑石製の紡錘車で、頂部の穴部および底部の側面に、僅かな剥離が生じるが、残存状態はおおむね良好である。

正円錐の頂部を落とした異径円柱を呈し、頂径2.3cm／底径3.85cm／高さ2.25cmをそれぞれ測る。中央には径0.8cmの円孔が穿たれる。底面には細線刻による鋸歯文が、円孔を取り巻く形で配され、さらに円孔の周囲に径2.0cmの圏線がめぐる。圏線の内面は孔に向かって面取りを施す。側面には整形時の削り痕が残り、傾斜をなす部分には縦方向、僅かに垂下する部分には横方向の擦痕がある。

第12節　12号墳

Ⅰ　遺構

調査区の北部、標高22mの地点で検出された。南にある５・６号墳と同じく、丘陵斜面の裾部に立地する。調査前には西側の斜面が崖状に造成され、墳丘の痕跡隆起が認められなかったが、石材の上面が露出していたことから、古墳と認識した。主体部は横穴式石室で、周囲には墳丘と丘陵の整形痕跡が存在する。

墳丘は盛土部分を失い、西側の基盤層も大きく削り取られていた。しかし南北に残存する墳裾や、東側の丘陵を整形した痕跡から、南北８ｍ、東西６ｍの円墳と考えられる。墳丘高は、西側の墳裾から1.5ｍであった。

１．主体部（第96図）

小規模な石室で、天井石は検出できなかったが、奥壁と左右側壁が残存する。側壁は土圧の影響を受け、西側へ押し出される形で検出された。南西へ開口部を設け、先端には閉塞石が残存する。床面には礫床を施し、上面から遺物が良好な状態で検出された。

２．墓壙（第98図）

長軸4.18ｍ・短軸2.15ｍの歪んだ方形を呈する。最深部は左側壁の中央部分で、0.85ｍを測る。

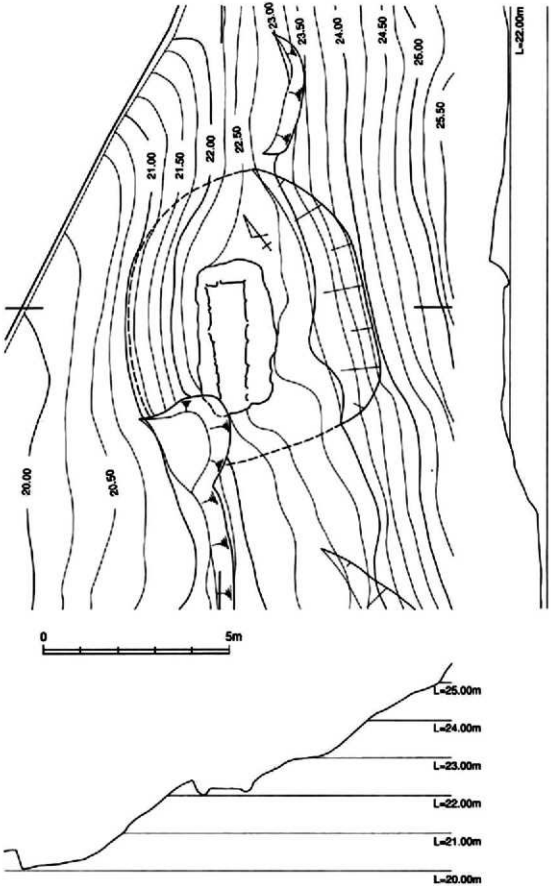
周壁は、基底部付近で角度を変えつつ、斜め上方に立ち上がる。底面は平坦で、淡茶褐色のシルトを敷き詰めて礫床を敷設する。礫床上面とのレベル差は0.15ｍである。石室基底石は、周壁沿いに幅３～５ｍ・深さ0.15ｍ前後の溝を巡らせて設置する。全体に石材の基底よりも深いため、茶褐色シルトや拳大の礫を詰めて、安定を図っていた。

３．石室（第97図）

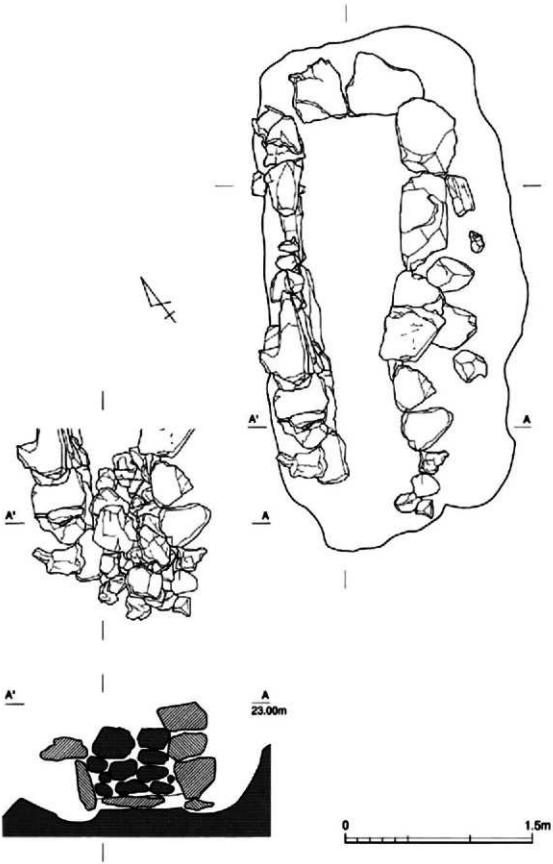
全長3.08ｍで、主軸はＮ37°Ｅに向ける。袖部を持たず、玄室と羨道の区別は明瞭ではない。石室の幅は開口部で0.65ｍ、中央で0.97ｍ、奥壁付近がもっとも広く1.0ｍをそれぞれ測る。左側壁は直線で開口部に向かうが、右側壁は奥壁コーナーから南へ1.2ｍで多少内向きとなり、開口部に向かって幅を減じている。

奥壁は、５つの石材を２列に積み上げて構成する。左列は台形の大きい石材を据え、上に長方形の石材を積み上げる。また右列は人頭大の礫を３つ用い、左列と上面の高さを揃えている。左右の側壁は奥壁を挟み込まず、奥壁の前面に接続して延びる。右側壁は基底石から２段分の石材が残る。いくぶんばらつきがあるものの、基本的には基底石と同規模の石材を積み上げている。左側壁は３～４段分の石材が残る。基本的には右側壁と同じ構築方法である。壁体は石室内部に倒れるが、丘陵上部からの土圧や後世の撹乱の影響によるものである。

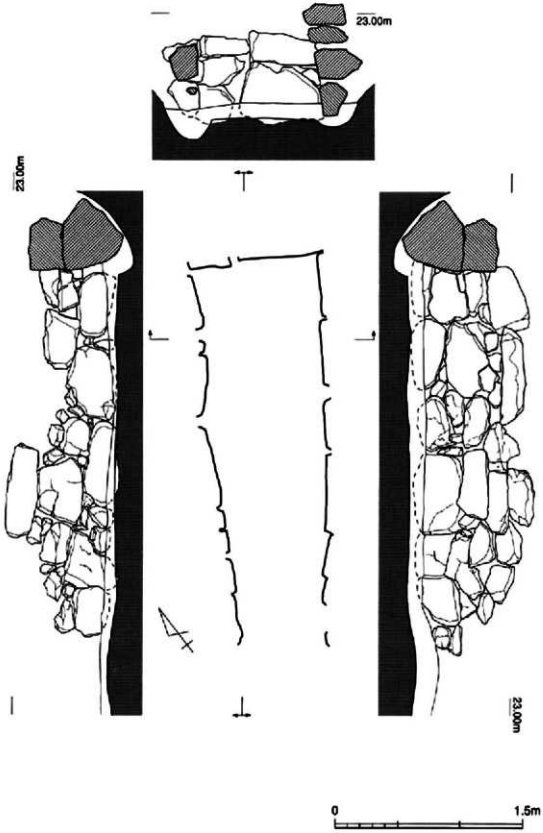
羨門付近では、礫を詰めて閉塞した状態が確認できた。羨門の前面から1.1ｍの範囲でみられ、礫床が敷かれない範囲とほぼ一致する。閉塞石の下部には床面に接して長大な板石があり、これを覆う形で拳大の礫を積む。長軸方向を山なりに積み上げて、羨門幅いっぱいに詰めている。高くなるにつれて石の規模が大きくなり、もっとも上では人頭大の石材を用いている。閉塞石の内部からは、須恵器の坏Ｈ蓋（301）と坏Ｈ身（303）を検出した。



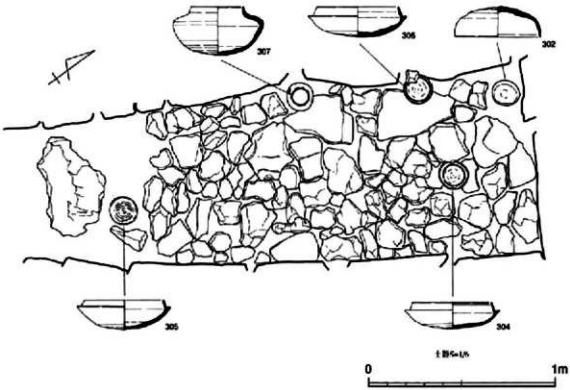
第95図　12号墳　墳丘（検出後）

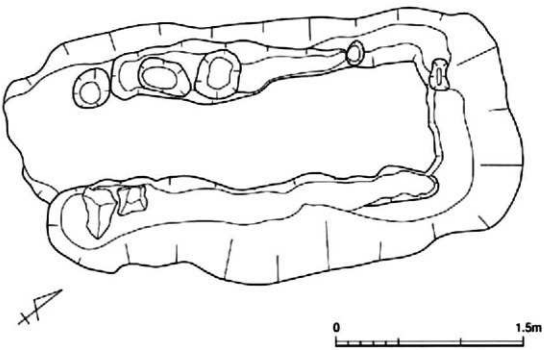


第96図　12号墳　石室平面、閉塞石状況

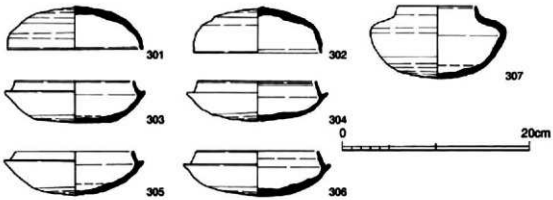


第97図　12号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン





第98図　12号墳　石室内遺物出土状況、石室墓壙平面（石材除去後）



第99図　12号墳　出土土器

4．床面（第98図）

玄室の床面は1面で、礫床が敷設される。玄門付近を除く玄室床面に、拳大の礫を隙間なく敷き詰める。礫床の上からは、土器が5点検出された。すべて須恵器で、右側壁沿いから3点、石室中央から1点、開口部付近から1点検出した。右側壁沿いでは、奥壁コーナーから開口部に向けて、内面を上に向けた坏H蓋（302）、正置された坏H身（306）、短頸壺（307）が並ぶ。石室中央では正置された坏H身（304）が、開口部では内面を伏せた坏H身（305）が閉塞石に埋もれた形で出土した。なお、金属器・玉類は検出できなかった。

5．開口部（第95図）

羨門の前面は乱れが激しく、前庭部並びに墓道の存在は確認できなかった。

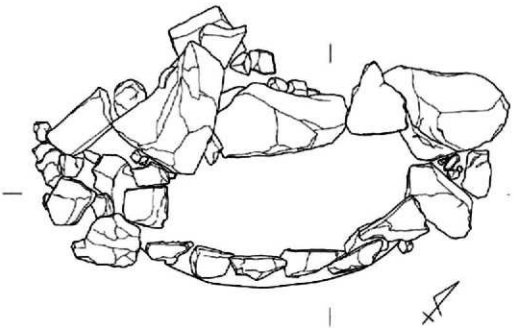
Ⅱ　遺物

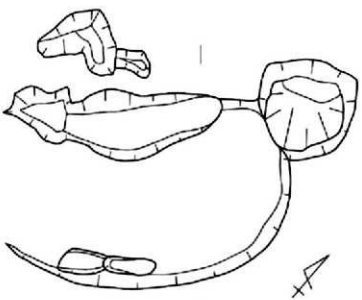
遺物は土器のみで、金属器・玉類はみられなかった。

1．土器（第99図）

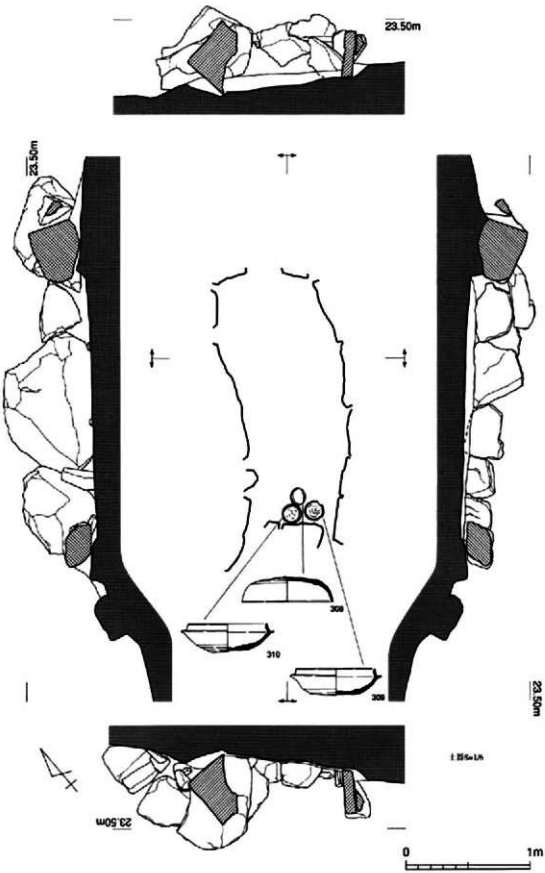
須恵器が7個体と少ないが、石室内床面上から出土したもの（302・304～307）と閉塞石中から出土したもの（301・303）がある。

須恵器　301～306は、坏Hで、蓋が2個体と身が4個体ある。いずれも石室内から出土しているが、組み合って出土しているものはない。坏H蓋は、天井部が丸味をもっているが、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。口縁端部は凹線状の段をもつもの（302）と僅かに端面を作るもの（301）がある。天井部外面の1／2程度に回転ヘラ削りが施されている。内面は仕上げナデが施され、同心円叩き目痕はナデ消されている。坏H身は、口径12.5～12.9cm、受部径14.8～15.3cmで、丸底気味のもの（305）と、底部が扁平なもの（303・304・306）とがある。立ち上がりは、1.5cmほどの比較的長いもの（304・306）と1.1cmほどの短いもの（303・305）とがあるが、内傾し端部は丸く収めている。ただし、304は、端部内面に僅かに凹部がみられる。底部外面は底部の1／3程度の範囲で、回転ヘラ削り調整が行われている。内面には同心円叩き目痕が残るものが多い。307は、肩部が屈曲する扁平な体部に内傾する短い口縁部を付ける短頸壺である。底部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向の仕上げナデ調整が施されている。坏Hとは型式に違和感があるが、いずれも石室内床面出土であり、共伴するのであろう。





第100図　13号墳　石室平面、石室基壇平面（石材除去後）



第101図　13号墳　石室奥・側壁立面、床面プラン、遺物出土状況

第13章　13号墳

Ⅰ　遺構

調査区の北西部、標高24m付近に位置する。北寄りの東方傾斜面が平坦部に変換する個所にあたり、6号墳の東周溝埋土上に造られている。

6号墳の周溝を調査する過程で、横穴式石室を主体部にもつ古墳であることが判明した。なお、周辺から墳丘や付属施設の痕跡は確認できなかった。

1．主体部（第100図）

主体部は矮小化した無袖式の横穴式石室で、開口方向はN40°Eである。横穴式石室は石室基底部の1段分が残り、他はすべて後世に撤去されている。石室内の埋葬施設は不明だが、木棺であったのかもしれない。石室床面からは後門付近で土器が少量出土したにすぎず、石室や出土品の状態から、大きく損壊をうけた古墳と言えよう。

2．墓壙（第100図）

石室の墓壙は、6号墳周溝の埋土を掘りくぼめて設置する。南西に傾斜を持つ埋土をコ字形に穿ち、床面とする。基底石の据り方は、右側壁で明瞭だが、左側壁においては一部の石材においてみられたにすぎない。

3．石室（第101図）

石室は無袖の矮小型の横穴式石室で、全長2.15m、開口部付近の幅0.7m、石室中央付近の幅0.98m、奥壁付近の幅0.8mを測る。石室の平面形は奥壁から開口部に向けて、西側へ湾曲している。石材は消失が著しく、基底部の1段分が残存したにすぎない。

奥壁は基底部の詰め石が残存していた程度であり、全貌は不明である。西側壁は中央から開口部にかけての石材が6～9mと大きく、基底部のみ残存する。左側壁は3～5mの石材で構成する。奥壁寄りに一部2段目が残存していた。

4．床面（第102図）

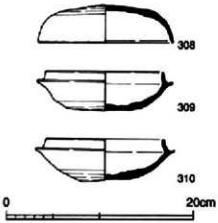
断ち割りの結果、1面のみ検出されたが排水溝などの施設はなかった。また埋葬主体の痕跡はなかったが、奥壁から1.5mの空間があることから、この部分に棺の設置が考えられる。

開口部では、人頭大の石材がまとまって検出された。石室の閉塞石とみられ、開口部から石室の外側へ9mの範囲で残存する。

遺物は石室内部の閉塞石北側にて須恵器の坏H が3点出土した。蓋（308）は内面を上に向けて、身（309・310）は正置されて検出した。

5．開口部

石室開口部の南側において、前庭部の痕跡を確認することはできなかった。ただし6号墳周溝の凹地が、墓道の役割を果たしていた可能性は高い。



第102図　13号墳　出土土器

Ⅱ　遺物

出土遺物は土器のみで、金属器や玉類は出土しなかった。

1．土器（第102図）

石室閉口部付近に置かれていた坏H蓋1個体と身2個体のみである。

須恵器　308～310は坏Hである。坏H蓋の天井部は、扁平化が著しい。天井部と口縁部の境界は不明瞭で、端部は丸く収められている。坏H身も底部は平底気味となり、立ち上がりも矮小化の傾向がみられる。蓋・身とも外面は1／3程度が回転ヘラ削り調整されている。内面には同心円叩き目痕を残すものと、仕上げナデ調整を施すものとがある。

第14節　木棺墓

Ⅰ　遺構

調査区の調査区の南西部において検出された。6号墳の北側、丘陵と墳丘を区画するカット面と周溝に挟まれた平坦面に位置し、埋土を切り込んで設けられる。

1．主体部（第103図）

木棺を用いた火葬墓で、調査区内においては同種の遺構を検出できなかった。墓壙の底面はほぼ方形だが、検出面の形状は縦長の五角形に近い。

2．墓壙（第103図）

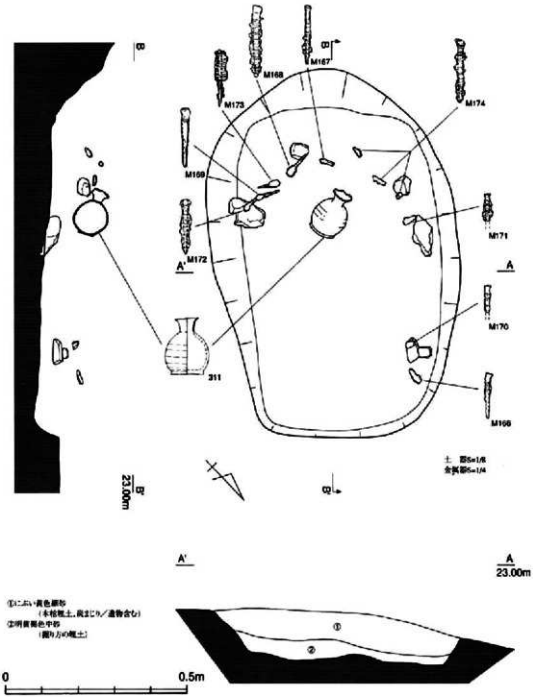
長軸を南西に向け、長軸1.02m、短軸0.68mを測る。底面は東から西にむけて傾斜を持ち、いくつかの起伏を有する。周壁は緩やかに上方へ開く。検出面が斜面であったことから、最深部は南西の周壁付近で0.16mである。

埋土は2層で、平行堆積をなす。第1層には炭化物が多く含まれ、遺物もすべてこの堆積から出土した。第2層は炭化物や遺物が認められず、検出した上面に僅かながら焼土の分布を認めたことから、墓壙の掘削後、第2層を埋めたてて底面を整えてから、木棺を設置して火葬したと考えられる。

3．埋葬主体（第103図）

木棺材の痕跡ならびに炭化物の集積などは検出できなかった。ただ、周壁沿いからは、木棺を組むために用いた釘が検出されている。位置関係から、長軸0.6m・短軸0.3m程度の棺が推測できる。底面を第Ⅱ層の上面に設置したと推定できることから、最深部での深さは0.08mで、検出した上面は、後世の削平による影響が予想される。

釘（M165～M174）は木棺の小口にあたる南周壁付近に集中し、東から西に向けて弧状に検出された。M165とM169が北西コーナー付近から出土している。いずれも底面より高い位置から検出され、棺側材をとめるために用いられたものである。また南小口の中央では、副葬品と考えられる須恵器の壺（311）が1点出土した。

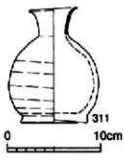


第103図　木棺墓　平面・遺物出土状況

Ⅱ　遺物

1．土器（第104図）

須恵器　311は、口径4.8cm、器高9.5cmの小型の壺である。口縁部は短く外反する頸部と、大きく外方に拡張する端部からなる。胴部は卵形で、最大径は壺体部のやや下位にあり、丁寧なナデ状の回転ヘラ削り調整が肩部付近まで及んでいる。底部は径7.1cmで、回転糸切りされている。例品は余り多くないが、



第104図　木棺墓
出土土器

森内秀造氏が志方廟跡群で壺Mに分類した器種に該当すると考えられ、森内の編年観によれば、平安京Ⅱ期に併行するとしている[1]ことから、9世紀後半頃に位置づけられよう。

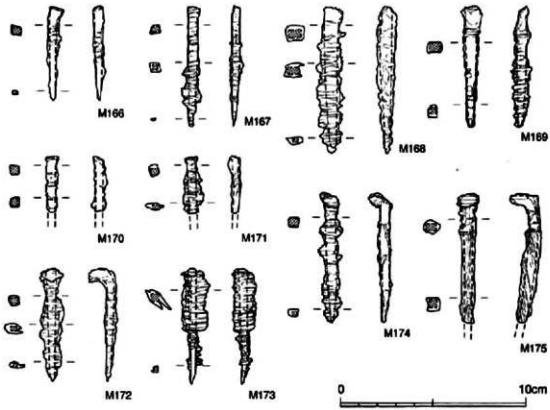
1）森内秀造・高木芳史・仁尾一人・岡本一秀『志方廟跡群Ⅱ－投松支群－』　兵庫県教育委員会　平成13年3月

2．金属器（第105図）

鉄釘が10本出土した。いずれも木質に覆われ、木棺材を緊結するために用いられたものである。断面が方形で、棒状の一端を尖らせて打ち込んでいる。釘頭の形態は2種類がみられる。

M165～M170は、打撃を加えて肥厚させるものである。M165・M166は小釘で、先端部を欠損するM169・M170も同じ形態であろう。M167とM167は大型で、M168は一端を扁平に押しつぶして釘頭としている。

M171～174は、一端を大きく折り曲げて釘頭とするものである。M171・M172は小釘、M173・M174は大型の釘である。M174は先端部を失うが、出土したものの中で最大の規模と推定される。



第105図　木棺墓　出土金属器

第４章　太市中古墳群出土耳環の自然科学的調査

第4章は公開していません

第5章　まとめ

第1節　出土土器について

今回、発掘調査を実施した12基の古墳から、古墳造営に直接関係する土器として須恵器305点、土師器4点、計309点[1]が出土した（表6）。石室の残存状況から各古墳で出土数量に差があり、4・6・9・10号墳のように比較的多くの土器が伴う古墳と、1・3・5・7・13号墳のように数点にとどまっている古墳がある。また、2号墳のように大半の土器が、石室外の土坑から出土しているものがある。

播磨地域の古墳時代須恵器については、永井信弘氏が窯跡採集資料を中心に、編年基準[2]を示している。また、太市中古墳群に近い姫路市・西脇古墳群の出土須恵器について、森内秀造氏が永井編年のⅡ期末～Ⅲ期を中心に整理を行っている[3]。ただし、太市中古墳群の出土土器は、消費地である古墳からの出土品であり、新旧型式の土器が同一埋葬に混在している可能性も捨てきれない。また、永井がいうように、永井編年で示された資料が表面採集品を中心としていることから、編年案自体になお、課題が残されていることも考慮しておく必要があろう。この節では、太市中古墳群出土土器の大半を占める須恵器について、永井編年を中心にした対応関係から古墳造営順序について整理しておくことにするが、その対応関係については、固定的なものではなく便宜的なものにならざるを得ないことを付言しておきたい。

1号墳出土土器は3点に過ぎないので、型式の特定が困難であるが、坏H蓋は口径が小型化しているものの端部が不明瞭な段をもっていること、短頸壺は器高が高く体部と口縁部の境界が不明瞭であること、提瓶は小型化が著しく退化した鉤状把手を付けていることなどの特徴から、永井編年のⅡ期2C小期～Ⅱ期3小期に該当するとみておきたい。

2号墳出土の土器は、石室内と土坑出土のものがあり、石室内出土のものは出土数量が少ないものの、坏Hを伴わず坏Iのみからなり、また、長頸壺・甕に波状文の加飾がみられることなどから、Ⅲ期1A小期のものとみておきたい。一方、土坑出土の坏には、坏Hと坏Iの両者が存在する。坏Hの法量は、蓋が12.5～13cm前後で、身が口径11～12cm、受部径13～14cmほどであることから、土坑出土の坏HはⅢ期以降に本格的に出現する坏Iと共存するものではなく、坏HはⅡ期5A小期に対応すると考えられる。なお、有蓋高坏の蓋は端部内面に凹線が巡り古相を呈しているが、その他の須恵器に共伴する型式のものが無く、古型式のものが混じったものとみておきたい。なお、坏I・坏G・椀・短脚の無蓋高坏・長頸壺・甕・平瓶等は型式的に新しい様相を示しており、石室内出土のものと同一型式内に収まるものであろう。したがって、土坑出土の土器は、石室外に掻き出された土器が一括して遺棄されたものとすれば、土坑出土古相→土坑新相・石室内の順序が考えられる。

3号墳出土の土器は3点に過ぎないが、墳丘周辺から出土している短脚の無蓋高坏のように、明らかに異型式のものが混在している。唯一石室内出土である短頸壺は、無袖式石室という点を加味すれば、Ⅱ期末～Ⅲ期初頭に位置づけられるのであろう。なお、坏H身も小片であるものの、立ち上がりの形態からみて矛盾はない。

4号墳からは土師器1点を含む53点の土器が出土している。坏H蓋の形態・調整手法では、天井部と口縁部の境が僅かに突出する鋭い稜を残すものと、凹線を巡らせているものの両者が存在する。口径は

表6　出土土器集計表

器種			1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳	9号墳	10号墳	12号墳	13号墳	計	
坏	坏H	坏H蓋	1	5		22		25	1		17	13	2	1	87	
		坏H身		4	1	22		30			14	12	4	2	89	
	坏I			4			1			6					11	
	坏G			3											3	
	椀			2											2	
	鉢									1					1	
	有蓋高坏	蓋		1				5							6	
		高坏						5			11				16	
	無蓋高坏			3	1		2	2		1	3	1			13	
	その他の高坏							1			2				3	
壺		短頸壺	蓋		1											1
		壺	1		1								1		3	
		長頸壺	蓋													0
		壺		3			1			2					6	
甕	広口甕					4		3							7	底部付還元?
	直口甕			1		1	1	1			1				5	
	甕蓋										3				3	子持蓋含む
	その他の甕			2				2			3				7	
	鉢			1			1	4		1					7	
	提瓶		1					8			2				11	
	平瓶			3			1	1		1		2			8	
	横瓶			1				1			1				3	
	壺			3		3		5		1					12	
	その他			1											1	
土師器	坏						1				1				2	
	高坏									1					1	
	壺					1									1	
計			3	38	3	53	8	93	1	14	58	28	7	3	305	
永井編年			Ⅱ期2C～3小期	Ⅱ期5A～貫期1A小期	Ⅱ期末～貫期前期	Ⅱ期1～2A小期	貫期1A小期	Ⅱ期3～4C小期	Ⅱ期4C～5A小期?	Ⅱ期末～貫期1A	Ⅱ期3～4A・B小期	Ⅱ期4C小期	Ⅱ期2B・C小期	Ⅱ期4A・B小期		
田辺編年			TK10～TK43	TK217古～新	TK217古	MT15～TK10	TK217新	TK43～TK217古	TK209	TK217～TK46	TK43～TK217	TK217古	TK10	TK209		

14～15cm前後のものが多く、口縁端部が内傾する段を作ること、天井部の回転ヘラ削りの範囲が1／2程度であることなどの特徴がある。坏H身では、高さが1.5～2.0cm前後の内傾する立ち上がりの端部は、内傾する段を有するものが若干みられるものの、大半は丸く収められている。口径は12～13cm、受部径15cm前後のものが多く、回転ヘラ削りの範囲が1／2程度であることなどの特徴があげられる。ところで、石室内出土の坏Hが型式的に混在している可能性があるなかで、注意しておくべきものに周溝出土の坏Hがある。周溝下層の坏H身は、天井部と口縁部の境の稜が鈍く突出しているものがあり、端部に段を有し、上層の坏Hに比べると、立ち上がりが高く、口径が大きい傾向があることから、下層出土の坏Hは、上層のものより古相を呈していると考えられる。こうしたことを前提とすれば、石室床面出土にも同種の形態のものが存在していることから、周溝上・下層にそれぞれ対応する可能性がある。以上のことから、4号墳出土の大半の須恵器は、永井編年のⅡ期2A小期に該当し、周溝下層出土のものを標識とする一群は、Ⅱ期1小期に遡るものと考えられる。なお、24のように口径が小さく、回転ヘラ削りが省略されている坏Hが存在するが、他のものに型式を下げるべき要素を有するものがみあたらない。この種の坏Hが他の坏Hと同型式なのか、型式差の存在と考えるか、いずれとも決しがたく留保せざるをえない。

5号墳に伴う土器量は8点と多くないが、出土の土器は坏Hがみられず、高坏は底脚化の傾向が著し

い。また、長頸壺・平瓶の体部は肩部で屈曲していることなどの特徴があり、埋葬施設が無袖式横穴式石室であることを加味すると、Ⅱ期１Ａ小期に対応するとみておきたい。さらに、蓋はⅢ期１Ａ小期の標式窯となっている大池２号窯で同形態のものが出土していることも、５号墳の土器型式を考える上で参考になるだろう。なお、形態的特徴等から、２号墳石室内出土の土器より後出的な様相を示していると考えておきたい。

６号墳からは、今回の調査における土器出土総量の30％を占める93点の土器が出土している。土器はすべて須恵器からなり、器種の構成も多種にわたっている。そのうち、約60％が坏Ｈで占められ、高坏・提瓶の出土量が多い傾向がある。その他、装飾付壺が出土していることも注目される。坏Ｈについては、第１床面出土のものに法量の大きなものがみられる傾向があるが、第２床面の出土のものと明確な差異はみいだしがたい。坏Ｈ蓋の口縁部内面に内傾する鈍い段を付けるもの、凹線状の浅い窪みを巡らせるものに混じって、端部を丸く収めるものがみられる。坏Ｈ身は口縁端部はすべて丸く収められ、底部が扁平で、立ち上がりの内傾度が著しく、高さも１cm前後ものが多い傾向がある。両床面とも法量にやや大小があり、回転ヘラ削り調整されるものが多いが、少数のものにヘラ切りのまま不調整のものが含まれていることから、型式差が存在すると考えたい。有蓋高坏では同形態のものが、第１・第２床面で混在している。提瓶も法量に大小があり、把手の形状も環状・鉤状・ボタン状のものが第１床面で混在している。また、前庭部出土のものも床面出土のものと明確な差異はみいだしがたい。こうしたことから、出土位置・層位よりも土器の形態・法量・手法を優先すると、坏Ｈの特徴から古相を呈する一群は、口径がやや小型化の傾向を示すものの、永井福年のⅡ期３小期に相当し、ヘラ切り不調整の坏Ｈ及び平瓶の存在等から、最も新しい一群はⅡ期４Ｃ期に下がるとみておきたい。

７号墳は坏Ｈ蓋が１点のみであり不明確である。口径が14cmほどで、天井部が回転ヘラ削り調整されていることから、Ⅱ期４Ｃ小期～５Ａ小期前後のものと考えられる。

８号墳からは坏Ｈが出土しておらず、坏Ｉのみで構成されていることが特徴として挙げられる。また、無蓋高坏の脚部に透かしが省略されていること、肩部で屈曲する平瓶、三耳壺の存在、放射状暗文をもつ土師器の高坏等から、Ⅲ期以降の所産である特徴を示し、Ⅲ期以降でも新しい段階に下るものを含んでいると考えられる。ただし、８号墳が片袖式横穴式石室であることから、出土土器型式と齟齬が生じていて、これらの土器が追葬に伴うものである可能性を考慮しておく必要があろう。ただし球形の体部をもち、脚台に透かしを穿っているなど古い形態をとどめている長頸壺が存在することから、Ⅱ期に該当するものと考えられ、初葬はⅡ期に遡るとみておきたい。

９号墳からは58点と、６号墳に次いで多くの土器が出土している。坏Ｈ蓋は口径14cm前後のものが多い。口縁端部はすべて丸く収められているが、内面に凹線状の窪みを巡らせるものと、凹線を巡らせないものがある。天井部外面には回転ヘラ削り調整が施されているものが一般的で、なかに外縁部にのみ回転ヘラ削り調整されているものが存在している。ただし、いずれも法量に明確な差異は認められない。坏Ｈ身は口径13cm、受部径15cm、立ち上がり高１cm前後で、端部はすべて丸く収められている。底部外面は回転ヘラ削り調整されているものが多いが、底部外縁のみが回転ヘラ削り調整されているものも少数存在する。高坏は有蓋・無蓋を問わず、長脚２段３法透かしの脚部をもち、有蓋高坏の坏部の形態・法量は坏Ｈ身と差異は認められない。提瓶は中型品で、退化した鉤状把手のものと、ボタン状把手のものがみられる。以上のような９号墳出土土器の特徴から、永井福年Ⅱ期３小期に比定でき、Ⅱ期４Ａ・Ｂ小期のものが一部含まれていると考えられる。

10号墳からは坏H・無蓋高坏・平瓶等、28点の須恵器が出土している。坏H蓋の端部はすべて丸く収めているが、天井部と口縁部の境に凹線を巡らせているものと、境界が不明瞭なものがあり、後者のものが多い。天井部外面はヘラ切り不調整のものが圧倒的に多く、確実に回転ヘラ削り調整されているものは1点のみである。なお、8は外縁部に削り痕跡が認められるが、いわゆる補助削り[7]のものであろう。法量は口径12～13cmの小型のものと、14cm前後のものの2種がある。坏H身は口径が11.5cm以下のものと、13cm前後のものとに区分できる。立ち上がりは内傾度が大きく、高さ1cmを超えるものはなく、矮小化の傾向が著しい。底部外面を回転ヘラ削りするものと、ヘラ切り不調整のものの2種がみられるものの、調整手法は形態・法量とは必ずしも一致していない。無蓋高坏は坏部に突出する稜を付ける長脚2段のものである。平瓶は体部が倒卵形を呈し、肩部の屈曲がみられないことから、この種の器形では古い形態のものであろうと考えられる。境界に凹線を巡らせる坏H蓋の存在からⅡ期2BC小期に遡る可能性があるものの、天井部外面がヘラ切り不調整であり、坏H身はそれに対応するような形態のものがみられず、調整手法を優先して、Ⅱ期4C小期以降のものではないかとみておきたい。また、他の坏Hもヘラ切り不調整のものが多く存在することから、Ⅱ期4C小期のものが主流で、法量の小型ものは、Ⅱ期5A小期まで下がるのであろう。

12号墳からは個体数は少ないが、坏H・短頸壺が出土している。坏H蓋には端部に僅かに端面を作るものと、凹線状の段をもつものがあり、坏H身にも端部内面に段をもつものがある。他のものは端部を丸く収めている。坏H身は口径12.5cm、受部径15cm前後で、立ち上がり高には1.1cmのものと、1.5cmのものがあり、僅かに差異が認められる。蓋はこれに組み合う口径のものがそれぞれ存在する。こうした特徴から、右側壁出土の坏Hが先行的、閉塞石中の坏Hが後出的要素を有するものの、全般的にはⅡ期2B・C小期に対応するものとみておきたい。なお、短頸壺は形態的に遡和感があるが、この期のものとみておきたい。ただし、石室構造が無袖式とすれば、土器型式とは矛盾していると考えられ、13号墳のように異なった石室構造であったのかもしれない。

13号墳は土器出土数が少なく、坏Hが3点のみである。坏H身は口径12.4cm、受部径14.5cm、立ち上がり高1.2cmである。蓋も1点にすぎないが、坏H身に対応する法量のもので、Ⅱ期5A小期と考えておきたい。

以上のような永井編年との対応関係が首肯できれば、発掘調査を実施した太市中古墳群の築造順序は、4号墳→12号墳→1号墳→6号墳→9号墳→13号墳・(7号墳)→10号墳→2号墳→8号墳・(3号墳)→5号墳の順であったと考えられる。ただし、調査区外に数基の古墳が存在することや、既破壊の古墳の存在も想定されることから、おおむね4号墳を端緒として、墓域を南北両方向から順次、墓造されていったのではないかと考えられよう。

最後に、装飾付須恵器について簡単に触れておきたい。調査を実施した12基の古墳中、2号墳から装飾付壺に付いていたとみられる馬の小像、6号墳から子持壺、9号墳から子持壺と子持蓋が出土している。揖保川流域における装飾付須恵器は、小丸山古墳（揖保郡揖保川町・装飾付壺4個体）・笹田古墳（揖保郡揖保川町・装飾付壺1個体）・長尾タイ山1号墳（龍野市・装飾付壺2個体）・黒岡神社古墳（揖保郡太子町・子持器台1個体）・笹山4号墳（龍野市・装飾付壺1個体）・西宮山古墳（龍野市・装飾付壺3個体）・中垣内古墳（龍野市・装飾付壺1個体）・西脇79号墳（姫路市・装飾付壺1個体）・ドンデン2号墳（姫路市・装飾付壺1個体）・姥塚古墳（揖保郡新宮町・装飾付壺1個体）・千本古墳群（揖保郡新宮町・装飾付壺1個体）等で出土例が知られている[8]。全国的にみて装飾付須恵器の分布が

多いとされる兵庫県でも、西播磨地域の中央部に位置する揖保川流域は、装飾付須恵器が多く分布する地域であるといえる。また、太市中古墳群では調査を実施した12基の古墳中、２・６・９号墳の３基の古墳から少なくとも５個体の装飾付須恵器が出土していることは注目されてよいだろう。この地域における装飾付須恵器は、小丸山古墳・長尾タイ山１号墳・西宮山古墳等の地域首長墓でⅡ期前半ごろに出現したとしても、太市中古墳群での出土状況を勘案すれば、Ⅱ期後半以降には群小古墳にもみられるようになることを示している。さらに、太市中古墳群のような横穴式石室を埋葬施設とする群集墳では、かなりの比率で装飾付須恵器が伴っている可能性が高いことが想定できるだろう。また、西脇79号墳・ドンデン２号墳のように、台付長頸壺に子壺類が付けられた装飾付壺が存在し、終末期にも、なお墓前祭祀具としての装飾付須恵器が多用されていた地域ではないかと考えられる。

1）９号墳出土の50・51の壺は、同一個体と認定した。ただし、同一個体の可能性のある２号墳の７・32、９号墳の54・55は確証がないので別個体とし、坏H及び有蓋高坏等のセットについても、別個体としている。
2）５号墳、註２）と同じ
3）森内秀造「西脇古墳群出土の土器について」『西脇古墳群－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅠ－』兵庫県教育委員会　平成７年３月
4）能田哲郎「丸神谷遺跡発掘調査報告」竹野町教育委員会　平成２年３月
5）西播磨地域出土の装飾付須恵器については、稿を改めて記したいと考えており、詳細は省略する。

第２節　古墳の構造について

今回の調査では、６世紀の中頃から７世紀の初頭にかけて営まれた古墳を12基検出した。主体部はいずれも横穴式石室で、もっとも高所にある４号墳を除いて、丘陵の裾部分に密集する。なかでも６号墳と13号墳ならびに９号墳と７号墳は、かなり接近して設けられ、緊密な関係がうかがわれる。開口方向はいずれも南西に向け、Ｓ10°Ｅに向ける９・10号墳、Ｓ50°Ｅをとる２号墳を除けば、いずれもＳ30°Ｅ～Ｓ40°Ｅを指向する。細かい差異は地形や墓道による影響を反映したものと考えられるが、現在の上太田集落を指向している点は注目できよう。

以下、調査によって得られた古墳の状況について整理し、まとめとする。

Ⅰ．外部施設

墳丘・周溝ならびに丘陵の整形面・前庭部などがある。いずれも後世の造成等により、改変を受けているほか、亡失して検出できなかったものも少なくない。

１．墳丘

基盤層を整形した後に盛土を加えて築造したと考えられるが、盛土の流失した古墳がほとんどで、わずかに残る基部を検出したにすぎない。その基部も削平によって変形し本来の形をとどめないが、円形を呈するものが主と考えられる。花崗岩の風化バイラン土からなる基盤層は、局所に岩盤の露頭を含み、２号墳や６号墳では墳丘内へ取り込んで基礎としている。また５号墳では、墳丘の外縁に配置された列石を検出した。列石の基底部分に花崗岩の露頭を組み入れている状況が観察でき、墳丘の流出を防ぐために設けられたと考えられる。

墳丘ならびに石室周辺からは遺物が散点出土しているものの、いずれも遺存状態が悪く、墳丘上での祭祀を示す状況は確認できなかった。祭祀そのものの痕跡や伴う遺物の多くは、築造当初の墳丘上面と

ともに流失したのであろう。

2．周溝

墳裾を全周するものはなく、丘陵の高所側に接する部分を区画する形で設けられている。また丘陵の急斜面に接する3・4号墳や、急傾斜を背後に控えた5・6・12号墳では、周溝とともに丘陵斜面を大きくカットした整形面がある。墳丘の整形・盛土の確保といった目的が考えられる。

4号墳の周溝では、正置された土器群が上下2層で検出された。構成する器種に違いがあるものの、墓の周辺で行われた祭祀に使用されたものと考えられる。内容物などが消失し、具体的な用法を示す証左もないが、土器の残存状態がよく形態や法量、調整手法に差異が認められることから、ある程度の時間差をもって、ほぼ同じ位置で複数回の祭祀が行われたことを示している。

3．前庭部

九州や関東の横穴式石室では発達しているが、近畿周辺では羨道・墓道との峻別に困難な場合が多い[1]。本書では、羨門から連接する墓道の付け根部分を包括して前庭部と称した。なお特異な石室形態を採る4号墳では、閉塞石の配置が玄門にあたるため、通路部分を前庭部と呼称[2]すべきかもしれないが、検出した範囲で平面規模が並行の通路状をなし、「前庭部」とは多少特徴を異にすることを鑑みて、羨道として取り扱った。

前庭部に伴う施設を検出したものは、8・2号墳である。8号墳では羨門に続いて、ハ字形に開く石列を検出した。石材の規模が極端に小さいことから、羨道の壁体ではなく前庭部の一部と判断した。ただ全容が遺存しないうえ、遺物もみられなかったことから、具体的な役割を言及するには限界がある。また2号墳でも、羨門に連なってハ字形に開く整形面が認められた。石列はみられないが、これも前庭部の一部が遺存したものであろう。なお、他の古墳では、開口部付近の地形改変が著しく、状況について判断することはできなかった。

2号墳では羨門の前面にあたる整形部分の中央に、石材を埋設した土坑が検出されている。石材は逆三角形の断面を呈し、平坦な底面が顔をのぞかせるまで埋設されていた。同様の石材埋設土坑は4号墳で検出されているほか、10・12号墳でも羨門付近の床面に板状の石材が敷かれていた。性格を明確にはしがたいが、検出した位置には羨門の中央を明示する意図がうかがえ、埋葬後の墓前祭祀に関連すると考えられる。

Ⅱ．横穴式石室

開口部付近に攪乱を受けているほか、天井部～石室上部を失い、全容をとどめるものがなかった。あくまでも限定的な状況という前提で、いくつかの特徴を整理する。

1．石室の特徴と変遷

平面規模は6号墳が最大で、以下9号墳、2号墳、8号墳が続く。6号墳と9号墳は、出土した遺物も質量ともに充実しており、群のピークを示す古墳と位置づけられる。また2号墳・8号墳では、玄室に対する羨道の長大傾向が指摘できる。平面の規模は、大局的に見て時期の降下とともに規模の縮小傾向が窺えるが、12号墳・13号墳は石室規模に対して、古式の遺物が出土していることから、単純な比例関係をなしていない。

石室の形態には、袖部を持つものと持たないものがある。袖部の存在が確認されたものは、2・4・

6・8・9号墳で、両側に突出する玄門をもつ4号墳を除けば、いずれも右片袖を持ち、周辺で一般的な横穴式石室の形態を採用している。玄室の平面規模は石室と比例して縮小し、玄室の全長に対して幅が縮小する。同時に袖の突出にも変化が現われ、6号墳が玄室幅の半分近い突出をみせる。以下、時期が新しくなるに従って突出規模は縮小するが、最も新しい所産と考えられる8号墳でも、3割近い明瞭な突出である。無袖の形態に比定した古墳のうち、確実に袖部を持たないものは、5・12・13号墳で、1・3号墳は遺存状態が悪く、袖の有無を確認できなかった。また10号墳は抜き取り穴などから片袖の可能性があり、唯一の左刷袖を持つ可能性を持つが、遺存する石材がわずかな上に、墓壙の平面形を根拠にするため、確証しがたい。12・13号墳は、石室形態に比べて、古式の須恵器が出土しているが、石室の平面形も精美な方形ではなく、片袖型石室が退化した通常の「無袖型」の石室とみるには疑問が多い。

石室の壁体構成について、基底石付近のみが残存することから、検討には限界がある。それぞれの傾向について触れるにとどめる。

奥壁は、単一の石材で構成せず、基底石から複数の石材を積み上げて構成する。基底石の用い方には2種類あり、①複数の石材を組み合わせて基底石とするもの（4・6・12号墳）と、②大型の石材を基底石とするもの（2・8・10号墳）がある。

側壁は古墳ごとに特徴の差が著しいが、③扁石状の板石を基底石とし、上部は礫を小口積するもの、④基底石と2段目は、ほぼ同規模の石材を積むもの、⑤基底石は大きいが、以上は多少小さい石材を用いるもの　がある。③は4号墳、④は6・12号墳、⑤は2・8号墳がそれぞれ該当する。その他は基底石だけが残存するため、石室構造の比定は困難である。

播磨の横穴式石室については、中浜久喜[3]によって総合的な集成に基づく編年案が提示されている。太市中古墳群の石室形態は、4号墳がA型a類、他の古墳はB型a類にそれぞれ該当する。

A型a類は、袖石や閉塞方法、玄室の壁体構成などに、播磨で一般にみられる横穴式石室とは異なる特徴を持ち、九州北部に存在する横穴式石室との共通点が指摘されている。また4号墳は複数の石材によって構成される奥壁や、扁石状の基底石に人頭大の礫を積み上げる側壁など、石室の構造上も古式の形態を保っている。

B型a類は、播磨の全域でみられる普遍的な形態とされる。石室の規模や壁面の構成における特徴に編年の画期を求めている。今回調査した古墳は、石室の上部構造を失うものが多く厳密な比定は困難だが、上記で暫見した特徴を当てはめて、編年への位置づけを図る。奥壁では、側壁の遺存状況からみても、巨石単独による構成はないと考える。基底石の大小によって2類が見られ、①を中浜分類の2類、②を3類にそれぞれ比定した。側壁は④が2類、⑤が3類におおむね該当する。上記の要素を整理すれば、6号墳＝奥壁2類・側壁2類、12号墳＝奥壁2類・側壁2類、2号墳＝奥壁3類・側壁3類、8号墳＝奥壁3類・側壁3類、10号墳＝奥壁3類に当てはめることができよう。また袖部は、突出の度合いが6→（9→2→）8で縮小し、さらに6号墳が複数の石材を積み上げる1b類、8号墳が3類を呈するなど、用石に違いを呈する。

上記の検討を整理すると、太市中古墳群の石室は4号墳→6・12号墳→（9号墳→）2号墳→（10・）8号墳の順で新しい要素が看取できる。この状況は、出土遺物による推移とも矛盾せず、太市中古墳群の石室は基本的に播磨周辺の横穴式石室と同じ傾向を持って変遷したといえよう。

2．遺物の検出状況

埋葬主体として遺存するものは、5号墳の箱式石棺のみで、他は木棺を用いていたと考えられる。石室の床面には棺台に用いられた人頭大の礫が散見されるが、棺体配置の状況を把握するまではいたらなかった。なお6号墳の第1床面では、石室の短軸方向に並行に並ぶ石列を検出、屍床仕切石の可能性がある。

石室内からは、土器を中心に多数の遺物が出土した。土器は前項で検討したとおり、遺存状態のよい遺物が多数見られたが、金属器に残欠品が多く、玉類の残存状況にも著しい偏りがみられる。いずれの古墳も副葬当初の状況は失われていると考えられる。

4号墳は、金属器の器種が鉄鏃にほぼ限定される。長頸鏃の占める割合が低く、検出した形態にも古式の特徴がみられる。一方、もっともバラエティにとんだ金属器が出土したのは、6・9号墳である。馬具の出土した古墳はこの2基だけで、他は残欠も含めて認められなかった。両者からはそれぞれ素環鏡板の轡が検出されているが、立聞の形態から6号墳が先行する。また6号墳では鐙が出土、9号墳でも鞍金具が出土しており、馬具がセットで副葬されていたと考えられる。6号墳では銀象嵌鍔付太刀が出土しているほか、9号でも刀装具（鋼製責金具）を検出しており、この2基には武具の保有も認められる。

他の古墳ではセット関係が乱れているが、武器・農工具が少なくなり、耳環の占める割合が増加する傾向にある。

3．石室の付属施設

礫床・排水溝・閉塞石を検出した。

礫床は、4号墳・12号墳で確認したほか、2号墳でも一部を検出した。2号墳は後世に石室内部を乱されている上、遺存する範囲がかなり限定されることから、築造当初より全面に敷設されていたか疑問がある。また他の古墳については、遺物の出土状況などから、敷設されなかったと考えられる。

排水溝は、6号墳・9号墳において検出した。玄門から羨道部にかけて敷設され、大型の古墳に採用されている傾向がある。6号墳では、5号墳の北西隅裾を避ける形でクランクを見せ、前庭部から古墳外へ約10m続くが、墓道を推定する数少ない手がかりとなろう。また9号墳も開口方向から西寄りに屈曲をみせている。

閉塞石は、板石を用いるものと、巨大の礫を積み上げるものがある。礫をつめて閉塞を行うものは、6・12・13号墳で、9号墳もわずかながら閉塞に用いた石が残っていた。6・12号墳では礫に覆われて残存状態のよい遺物が出土した。閉塞に際して意図的に配置されたものと考えられる。板石を用いるものは4・5号墳である。無袖の横穴式石室である5号墳は、長大な礫を立てて閉塞する様子こそ4号墳と類似するが、造営時期に隔たりがあり、直接の関連は考えがたい。ただ、同時期に築造された周辺の古墳では巨大の礫を用いて閉塞するのが一般的で、かなり特異な方法といえよう。

Ⅲ．まとめ

調査した12基の古墳は、出土遺物の示す年代感から、6世紀後半～7世紀初頭にかけて連続と築造されたことがわかる。古墳の有する規模や副葬品の保有量などに、群全体の動向が反映されていると考えられ、4号墳を初現として中心的な古墳は6号墳→9号墳→10号墳→2号墳→8号墳の推移が想定でき

る。

4号墳と類似する形態を持つ古墳として、大津茂川下流の姫路市勝原区に所在する丁3次1～3号墳がある[1]。6世紀の前葉に造営された横穴式石室で、形態の特徴から、九州北部の横穴式石室と共通点が指摘[2]されている。太市中古墳群では、同様の形態を採るものは現在のところみられないが、群の初現をなす古墳が剛岡と異なる要素を持つことは、太市中古墳群を考える上で、重要な視点といえよう。

4号墳に次ぐ時期の遺物が出土した12号墳では、石室の壁体構成や礫床などに4号墳の影響をうかがわせるものの、規模や遺物の保有量が極端に縮小しており、群中の優位を占める状況にない。続いて造営された6号墳は、規模・遺物量ともに中心的な地位を占めるが、石室構造は一変して、周辺で一般的な形態の片袖型横穴式石室を採用している。12号墳以後、4号墳の影響を残す古墳は消滅し、4号墳と6号墳の間に構造上の断絶が認められる。6号墳を造墓するにあたり石室構造に意図的な選択がなされたと考えられ、背景となる集団の変容が現れているといえよう。

規模・遺物量ともにピークを迎える6号墳とそれに次ぐ9号墳は、近接した位置に造営時期も連続した小規模古墳の13号墳と7号墳が位置する。位置関係などに密接な関連性をうかがうことができる。さらには10・2・8号墳など、片袖式の横穴式石室を有する古墳が造営される。2・8号墳では出土遺物の状況から追葬の可能性が指摘できるが、あまり形式を重複することなく、各形式の遺物が出土していることから、連続性のある活発な造墓活動が想定できる。

無袖の横穴式石室である5号墳をもって、太市中古墳群の造墓活動は終焉を迎える。今回の調査以外にも、周辺に数基の古墳が存在することから、太市中古墳群の全容を明らかにしたわけではないが、いわゆる終末期古墳が検出されなかった点に注目しておきたい。周辺では西脇古墳群や内山戸古墳群など、終末期古墳によって構成される古墳群があり、太市中古墳群の盛期がこれに先行する状況であることは、当地方における古墳群の動向を考える上で興味深い。

1）加部二生「横穴式石室の前庭について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集　平成11年3月
2）森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』111号　昭和61年8月
3）中溝久喜「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室から見た播磨－第2回播磨考古学研究集会　資料集』平成13年
4）上田哲也編「姫路　丁古墳群」東洋大学付属姫路高等学校　昭和41年1月
5）土生田純之「日本横穴式石室の系譜」学生社　平成3年3月　ほか

表7　古墳概要表

古墳名	石室				玄室								金属器・玉類						
	全長	幅	主軸方向	石室形式	全長	幅	全長/幅	礫床	閉塞	排水溝	周溝	鉄鏃	鉄刀	馬具	農工具	耳環	玉類	石製品
1号墳	3.05	0.69	N31° E	無袖？					礫									
2号墳	6.85	1.55	N50° E	右片袖	3.20	1.55	2.065	△			■	■			■	■		
3号墳	2.15		N37° E	無袖？								■						
4号墳	5.01	1.86	N28° E	両袖	2.55	1.86	1.371		板石		■	■				■	■	
5号墳	4.50	1.22	N35° E	無袖	－	－	3.689		板石	△		■						
6号墳	6.80	2.43	N32° E	右片袖	3.97	2.43	1.634		礫		■	■			■	■	■	
7号墳	－	－		？	－	－						■	■	■	■	■	■	■
8号墳	6.33	1.32	N32° E	右片袖	2.85	1.32	1.932					■			■	■		
9号墳	6.40	2.23	N10° E	右片袖	3.58	2.23	1.605				■	■			■	■	■	
10号墳	5.58	1.12	N10° E	無袖？	2.79	1.12	2.411					■			■	■	■	
12号墳	3.68	0.97	N37° E	無袖	－	－	3.175	■	礫									
13号墳	2.15	0.70	N40° E	無袖	－	－	3.071		礫									

表8　土器観察表

1号墳

No.	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
1	須恵器	坏H蓋	石室	13.3			3.7			50	良好	回転ヘラ削り(R)			
2	須恵器	短頸壺	石室	7.4	14.4		10.4			50	良好	回転ヘラ削り(L)，カキ目			
3	須恵器	横瓶	石室	4.7	10.9		12.3	2.9		100	良好	カキ目，ヘラ切り後ナデ			

2号墳

No.	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
4	須恵器	坏I	石室内流入土	10.2			3.5			15	良好				
5	須恵器	坏I	石室内流入土	10.8			3.9			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ	歪み	
6	須恵器	坏G	石室内流入土	9.2			4.0			25	良好	ヘラ切り不調整			
7	須恵器	椀	石室内流入土	8.3			5.2			75	良好	回転ヘラ削り(R)			
8	須恵器	長頸壺	石室内流入土		9.8					0	良好	体部下半回転ヘラ削り(R)			
9	須恵器	長頸壺	石室床面	9.4	16.9			25.8	13.8	100	良好	静止ヘラ削り		頸部・肩部に各2条の凹線	
10	須恵器	装飾付壺	石室内流入土	4.7			3.5			0	良好			小壺（馬）	
11	須恵器	甕	石室内流入土	27.6	52.5		63.8	13.6		50	良好	櫛状工具叩き	同心円叩き目	口縁部に3条の波状文	
12	須恵器	甕	土坑	38.6	41.6		62.5	4.0		75	良好	櫛状工具叩き後カキ目	同心円叩き目		
13	須恵器	坏H蓋	土坑	12.5			4.0			50	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
14	須恵器	坏H蓋	土坑	12.6			5.6			75	良好	ヘラ切り後ナデ	仕上げナデ		
15	須恵器	坏H蓋	土坑	12.8			3.9			50	良好	ヘラ切り不調整			
16	須恵器	坏H蓋	土坑	12.8			4.4			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ	歪み	
17	須恵器	坏H蓋	土坑	13.0			3.5			100	良好	ヘラ切り不調整		天井部外面にヘラ記号	
18	須恵器	坏H身	土坑	11.2	13.1		3.6	0.7		80	良好	ヘラ切り不調整	乱ナデ		
19	須恵器	坏H身	土坑	11.1	13.2		3.2	0.6		25	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
20	須恵器	坏H身	土坑	12.0	13.7		3.6	0.6		50	良好	ヘラ切り不調整			
21	須恵器	坏H身	土坑	12.0	14.0		3.7	0.7		75	良好	ヘラ切り後ナデ			
22	須恵器	坏I	墳丘	9.3			4.1			33	良好	ヘラ切り後ナデ			
23	須恵器	坏I	土坑	10.9			3.9			25	良好	ヘラ切り不調整		歪み	
24	須恵器	坏G	土坑	9.4			3.8			50	良好	ヘラ切り不調整			
25	須恵器	坏G	土坑	10.9			4.3			50	良好	ヘラ切り後ナデ		口縁部中位に2条の凹線	
26	須恵器	椀	土坑	9.5			5.8			15	良好	回転ヘラ削り(R)			
27	須恵器	蓋	土坑	14.0			4.5	3.8		50	良好	回転ヘラ削り(R)	端部に浅い凹線	有蓋高坏蓋	
28	須恵器	無蓋高坏	土坑	12.5		9.8	15.0	3.9		100	良好	回転ヘラ削り(R)		脚部に2条の凹線，長脚2段2方透かし	
29	須恵器	無蓋高坏	土坑	11.9				3.9		100	良好			2方透かし	
30	須恵器	無蓋高坏	土坑	10.9		8.4	6.8	3.7		50	不良				
31	須恵器	蓋	土坑	9.9			3.6			75	良好	静止ヘラ削り？	仕上げナデ	短頸壺蓋	

32	須恵器	長頸壺	土師	7.4	12.0				4.9	100	良好							頸部に1条の凹線 方形2段3方透かし、間に長方形スタンプ
33	須恵器	脚付長頸壺	土師	11.0	17.7	17.5	34.1	25.0	12.6	50	良好	回転ヘラ削り(L)						
34	須恵器	直口壺	土師	8.6	16.5		13.2	4.4		33	良好	回転ヘラ削り(R)			底部指ナデ			頸部に1条の凹線・ヘラ記号
35	須恵器	脚付壺	土師							6	良好							底部と脚部端に刺み目凸帯、透かし
36	須恵器	台付瓶	土師	15.1	9.7	7.6	20.3	11.3		50	良好	回転ヘラ削り(R)						体部外縁文、口縁部ハケ目
37	須恵器	平瓶	土師	6.8	15.5		13.7	3.8		100	良好	回転ヘラ削り(L)、カキ目						
38	須恵器	平瓶	土師	5.7	15.2		14.0	5.0		15	良好	静止ヘラ削り						頸部にヘラ記号
39	須恵器	平瓶	土師	5.7	14.6		11.5	3.7		66	良好	回転ヘラ削り(R)						
40	須恵器	横瓶	土師	7.1				6.3		15	良好	横回回転ヘラ削り(R)						
41	須恵器	壺	土師	10.7				3.0		25	良好	回転子叩き目			同心円叩き目			

3号墳

No	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
42	須恵器	坏H身	塩倉墓	13.2	14.6			9.8		10	良好				
43	須恵器	短頸壺	石室床面	7.8	13.1		7.2			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
44	須恵器	無蓋高坏	塩倉墓	12.6				4.1		15	良好	回転ヘラ削り?			脚部長方形3方透かし

4号墳

No	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
45	須恵器	坏H蓋	石室床面	13.7			4.2			100	良好	回転ヘラ削り(R)	指オサエ		63とセット
46	須恵器	坏H蓋	石室床面	13.9			4.2			100	良好	回転ヘラ削り(R)			64とセット
47	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.7			5.1			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目	赤色顔料	65とセット
48	須恵器	坏H蓋	石室床面	13.9			4.7			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		66とセット
49	須恵器	坏H蓋	石室床面	13.9			4.7			100	良好	回転ヘラ削り(R)		内面付着物	67とセット
50	須恵器	坏H蓋	石室床面	15.1			4.5			100	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目	天井部外面に鉄錆付着	
51	須恵器	坏H蓋	石室床面	15.2			4.4			100	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目、乱ナデ		
52	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.1			4.1			100	不良	回転ヘラ削り(L)	乱ナデ		
53	須恵器	坏H蓋	石室床面	13.4			4.6			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		55とセット
54	須恵器	坏H蓋	石室床面	15.0			4.7			100	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目		
55	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.0			4.2			100	良好	回転ヘラ削り(L)			53とセット
56	須恵器	坏H蓋	石室床面	15.0			4.7			100	良好	外縁部回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
57	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.6			5.5			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
58	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.7			4.9			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目、仕上げナデ		
59	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.8			5.6			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
60	須恵器	坏H蓋	石室内流入土	15.2			4.8			33	良好	回転ヘラ削り(R)	乱ナデ	ヘラ記号	
61	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.1			4.2			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目、仕上げナデ		
62	須恵器	坏H蓋	石室内流入土	15.1			4.3			100	良好	回転ヘラ削り(R)	乱ナデ		

63	須恵器	坏H身	石室床面	11.7	14.0	4.5	1.4	100	良好	回転ヘラ削り(R)		底部内面に付着物	45とセット
64	須恵器	坏H身	石室床面	12.0	14.0	4.6	1.7	100	良好	回転ヘラ削り(R)	指オサエ		46とセット
65	須恵器	坏H身	石室床面	13.0	15.6	5.6	1.7	100	良好	回転ヘラ削り(R)		内面ベンガラ・貝	47とセット
66	須恵器	坏H身	石室床面	12.8	15.5	5.6	1.8	100	良好	回転ヘラ削り(R)			48とセット
67	須恵器	坏H身	石室床面	12.1	14.3	4.7	1.5	100	良好	回転ヘラ削り(R)		内面付着物	49とセット
68	須恵器	坏H身	石室床面	11.5	13.5	4.1	1.1	100	良好	ヘラ削り不調整	同心円叩き目		
69	須恵器	坏H身	石室床面	13.3	15.4	4.7	1.6	100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目、仕上げナデ		
70	須恵器	坏H身	石室床面	12.8	14.7	4.4	1.4	100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ	歪み	52とセット
71	須恵器	坏H身	石室床面	12.6	14.8	4.7	1.5	100	良好	回転ヘラ削り(R)			
72	須恵器	坏H身	石室床面	13.2	15.7	5.2	1.5	100	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目、仕上げナデ		
73	須恵器	坏H身	石室床面	12.0	14.2	4.1	1.5	100	良好	外縁部回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		72・83とセット
74	須恵器	坏H身	石室床面	13.6	15.9	5.0	1.5	15	不良	回転ヘラ削り(L)			
75	須恵器	坏H身	石室床面	12.5	15.6	5.6	1.8	100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
76	須恵器	坏H身	石室床面	12.6	15.4	5.0	1.9	100	良好	回転ヘラ削り(R)			
77	須恵器	坏H身	石室床面	12.7	15.5	5.4	1.6	85	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ	内面に付着物	73・83とセット
78	須恵器	広口壺	石室床面	15.2	20.3	20.9	4.1	75	良好	櫛描子目呼き後カキ目	同心円叩き目		
79	須恵器	広口壺	石室床面	13.9	20.0	20.5	4.5	66	良好	櫛描子目呼き後カキ目	同心円叩き目		
80	須恵器	広口壺	石室床面	14.7	18.2	16.7	4.6	100	良好	櫛描子目呼き後ナデ	板状圧痕		
81	須恵器	直口壺	石室内成人土	7.7	12.1		2.9	50	良好			歪み	
82	須恵器	甕	石室床面	13.9	19.1	21.3	3.4	100	良好	櫛描子目呼き	底部ハケ目、指頭圧痕		70とセット
83	土師器	壺	石室床面	13.6	16.2	14.8	2.1	100	良好	体部縦ハケ目	口縁部横ハケ目		73・77とセット
84	須恵器	坏H蓋	周溝（一括検出上層）	14.4		4.8		66	良好	回転ヘラ削り(L)			89とセット
85	須恵器	坏H蓋	周溝（一括検出下層）	14.1		4.6		100	良好	回転ヘラ削り(L)			91とセット
86	須恵器	坏H蓋	周溝（一括検出下層）	14.7		5.5		100	不良	回転ヘラ削り(R)	指オサエ		92とセット
87	須恵器	坏H蓋	周溝（一括検出下層）	14.7		5.0		100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ	天井外面ヘラ記号	93とセット
88	須恵器	坏H身	周溝（一括検出上層）	11.4	13.9	4.9	1.5	40	良好		仕上げナデ		90とセット
89	須恵器	坏H身	周溝（一括検出上層）	11.9	14.3	4.9	1.5	100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		84とセット
90	須恵器	坏H身	周溝（一括検出上層）	12.7	14.7	5.3	1.7	100	良好	回転ヘラ削り(L)		底片部補	88とセット
91	須恵器	坏H身	周溝（一括検出下層）	12.2	14.4	5.2	1.7	100	良好	回転ヘラ削り(L)			85とセット
92	須恵器	坏H身	周溝（一括検出下層）	13.3	15.6	5.8	1.9	100	不良	回転ヘラ削り(R)	指オサエ		86とセット
93	須恵器	坏H身	周溝（一括検出下層）	13.2	15.5	5.3	2.0	100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		87とセット
94	須恵器	坏H身	墳全層	11.3	13.8		1.4	25	良好				
95	須恵器	広口壺	周溝	14.4	18.2	19.7	4.8	66	良好	櫛描子目呼き後口縁部・体部上半カキ目	同心円叩き目（底部）		
96	須恵器	甕	墳全層	19.9			5.5	50	良好	体部カキ目		口縁部内面にヘラ記号、歪み	
97	須恵器	甕	周溝（一括検出上層）	20.4	28.4	31.7	4.4	75	不良	櫛描子目呼き目後カキ目	同心円叩き目		

5号墳

No	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
98	須恵器	坏 I	石室床面	11.3			3.4			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
99	須恵器	無蓋高坏	石室床面	9.7		8.5	10.3	4.2		100	良好	回転ヘラ削り(R)		脚部に2条の沈線	
100	須恵器	無蓋高坏	盗掘穴	9.7		9.2	9.7	3.7		20	良好			脚部に2条の沈線	
101	須恵器	合付長頸壺	石室床面	9.0	18.4	12.3	26.1	22.9	11.3	100	良好	回転ヘラ削り(R)		口縁2条沈線、胴部四線間に列点文・波状文	
102	須恵器	蓋口縁	盗掘穴	19.5	20.6			3.9		15	良好	黄砂子吸き痕	粘土紐多目		
103	須恵器	鉢	石室床面	8.7	8.3		11.1	5.2		100	良好	静止ヘラ削り	胴部続り目	体部裏に沈線、胴部内面にヘラ記号	
104	須恵器	平瓶	石室摩面	6.7	13.3		12.3	4.4		100	良好	静止ヘラ削り			
105	土師器	坏	石室床面	13.1			4.2			100	良好		ヨコハケ		

6号墳

No	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
106	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	13.4			3.3			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
107	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	13.7			3.3			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
108	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	13.4			2.8			100	不良	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
109	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	13.8			3.9			100	良好	ヘラ切り後ナデ	乱ナデ	口縁部外面にヘラ記号	
110	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	15.4			3.7			75	良好	外縁部回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
111	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	15.1			4.2			100	不良	外縁部回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
112	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	14.0			4.5			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
113	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	13.7			4.5			100	良好	外縁部回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目、乱ナデ		
114	須恵器	坏H蓋	石室第1床面	14.7			5.2			100	良好	回転ヘラ削り(L)	乱ナデ		
115	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	14.0			3.0			100	良好	回転ヘラ削り(R)	乱ナデ		
116	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	13.4			3.0			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ	内面異物付着	
117	須恵器	坏H蓋	閉塞石上	14.3			3.4			10	不良	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
118	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	13.1			4.1			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
119	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	13.4			4.0			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
120	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	14.7			4.3			100	良好	回転ヘラ削り(R)	乱ナデ	天井部外面にヘラ記号	
121	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	13.1			4.0			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
122	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	13.6			4.2			100	良好	回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ		
123	須恵器	坏H蓋	石室第2床面	14.1			4.4			100	良好	回転ヘラ削り(R)、端部ハケ目	乱ナデ		
124	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.1	13.9		3.5	0.7		100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ	異物付着	
125	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.1	14.9		3.9	1.0		100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
126	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.1	14.2		3.7	1.0		100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ	底部外面ヘラ記号	
127	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.6	14.5		3.8	0.7		100	良好		乱ナデ		
128	須恵器	坏H身	石室第1床面	11.9	14.0		3.8	1.1		100	良好	外縁部回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
129	須恵器	坏H身	石室第1床面	13.3	15.4		4.1	1.1		100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
130	須恵器	坏H身	石室第1床面	13.7	15.9		4.0	1.3		100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目、仕上げナデ		

131	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.5	14.8		4.0	0.8		100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目			
132	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.8	15.2		4.1	0.9		100	良好	回転ヘラ削り(R)		乱ナデ			
133	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.7	15.4		5.1	0.9		100	良好	回転ヘラ削り(L)		仕上げナデ			
134	須恵器	坏H身	石室第1床面	12.1	14.4		5.1	1.3		100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目			
135	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.2	14.6		3.9	1.0		100	良好	静止ヘラ削り		乱ナデ			
136	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.9	14.6		3.5	0.9		100	良好	回転ヘラ削り(R)		乱ナデ			
137	須恵器	坏H身	石室第2床面	11.8	14.0		3.9	1.1		100	良好	回転ヘラ削り(R)		乱ナデ			
138	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.6	14.8		4.4	1.1		100	不良	回転ヘラ削り(R)		仕上げナデ			
139	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.9	14.8		4.3	1.2		100	良好	ヘラ切り後ナデ		乱ナデ		鐵物付着	
140	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.4	14.4		3.7	1.1		100	良好	回転ヘラ削り(R)					
141	須恵器	坏H身	石室第2床面	13.0	15.4		4.0	1.0		100	良好	回転ヘラ削り(L)		仕上げナデ			
142	須恵器	坏H身	石室第2床面	13.3	15.5		3.7	0.8		100	良好	ヘラ切り後ナデ		乱ナデ			
143	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.9	14.6		3.7	0.9		100	良好	ヘラ切り後ナデ		同心円叩き目			
144	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.6	14.8		4.4	0.8		100	良好	回転ヘラ削り(L)		仕上げナデ			
145	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.5	14.3		4.0	1.1		100	良好	回転ヘラ削り(R)				底部外面ヘラ記号	
146	須恵器	坏H身	石室第2床面	11.3	13.5		4.2	1.0		100	良好	回転ヘラ削り(R)		同心円叩き目、乱ナデ		鐵物付着	
147	須恵器	坏H身	石室内流入土	11.8	14.1			1.1		50	良好			同心円叩き目			
148	須恵器	坏H身	石室第2床面	12.3	14.8		4.3	1.3		50	良好	回転ヘラ削り(L)					
149	須恵器	蓋	石室第1床面	14.2			5.0	4.1		100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目		有蓋高坏蓋	
150	須恵器	蓋	石室第1床面	14.3			4.8	3.9		90	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目		有蓋高坏蓋	
151	須恵器	蓋	石室第2床面	14.5			5.2	4.2		100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目		有蓋高坏蓋	
152	須恵器	蓋	石室第2床面	14.0			5.5	4.3		90	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目、仕上げナデ			155とセット
153	須恵器	蓋	石室第2床面	14.7			6.9	4.0		100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目、仕上げナデ		有蓋高坏蓋	
154	須恵器	有蓋高坏	石室第1床面	12.6	15.1	9.8	8.2	4.2	1.2	100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目、仕上げナデ			
155	須恵器	有蓋高坏	石室第2床面	12.4	14.6	10.1	8.4	4.2	1.1	100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目、仕上げナデ			152とセット
156	須恵器	有蓋高坏	石室第2床面	12.7	14.9	9.7	8.1	4.4	1.2	100	良好	回転ヘラ削り(L)		同心円叩き目、仕上げナデ			
157	須恵器	有蓋高坏	石室第1床面	12.3	14.7	10.0	8.2	4.1	1.1	100	良好	回転ヘラ削り(L)?		仕上げナデ			
158	須恵器	有蓋高坏	石室内流入土	13.3	15.6				1.4	50	良好	回転ヘラ削り(R)		仕上げナデ			
159	須恵器	高坏脚部	石室第1・2床面			12.8				0	良好					脚部2段長方形3方透かし	
160	須恵器	無蓋高坏	開墾石内部	11.2		10.4	15.5	4.4		66	良好	回転ヘラ削り				底部内面にヘラ記号、長方形2段3方透かし	
161	須恵器	無蓋高坏	石室第1床面	15.4		14.3	17.1	4.8		90	良好	回転ヘラ削り(L)		環境に同心円叩き目		長方形2段3方透かし	
162	須恵器	底口瓶	石室第1床面	10.0	14.2		14.3	3.7		100	良好	回転ヘラ削り(R)				頸部にヘラ記号、底部に赤色顔料	
163	須恵器	脚付壺	石室第1床面		18.2					0	良好	回転ヘラ削り(L)				方形3方透かし、頸部隆線間行列線文、体部円線間に円線文	
164	須恵器	脚付有蓋壺	石室第1床面	8.3	16.9	15.0	29.9	18.4	7.3	100	良好	回転ヘラ削り(R)				三角(2)+長方形(1)透かし、体部2段列線文、口縁部波状文	
165	須恵器	瓶	石室第2床面	13.5	11.7		15.6	8.5		15	良好	回転ヘラ削り(L)、底部ケキ目				頸部に波状文	
166	須恵器	提瓶	石室第1床面		18.5					0	良好	ケキ目					
167	須恵器	提瓶	石室第1床面	6.4	24.4		27.6	3.8		33	良好	叩き目後ケキ目?		同心円叩き目			

No.	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
168	須恵器	提瓶	石室第1床面	5.2	14.4		18.3	3.6		100	良好	カキ目		体部にヘラ記号？	
169	須恵器	提瓶	石室第1床面	5.6	13.7		16.1	3.0		100	良好	カキ目			
170	須恵器	提瓶	石室第1床面	4.4	14.1		17.2	3.3		10	良好	カキ目			
171	須恵器	広口壺	石室第1床面	18.7	19.8		27.5	7.9		90	良好	擬格子目叩き後カキ目	同心円叩き目	口縁部頸部に2段の波状文	
172	須恵器	装飾付壺	石室内流入土	19.6	22.7	22.1	53.9	26.4	10.2	33	良好	擬格子目叩き目後カキ目	同心円叩き目	小壺(w6.2×H5.9) 4ヵ所	
173	須恵器	平瓶	石室第1床面	11.1	20.2		17.3	3.7		100	良好	回転ヘラ削り(R)			
174	須恵器	甕	石室第2床面	11.7						66	良好				
175	須恵器	坏H蓋	排水溝（前庭部）	13.5			3.6			50	良好	外縁部回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ		
176	須恵器	坏H蓋	排水溝（前庭部）	13.8			4.2			50	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目、仕上げナデ		
177	須恵器	坏H蓋	排水溝（前庭部）	14.5			4.6			75	良好	回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ		
178	須恵器	坏H蓋	排水溝（前庭部）	13.9			4.4			33	良好	回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ、同心円叩き目		
179	須恵器	坏H蓋	墳丘	13.9			4.4			66	良好	回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ		
180	須恵器	坏H蓋	包含層	14.7			3.6			20	良好	外縁部回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
181	須恵器	坏H蓋	包含層	14.7			4.3			15	良好	回転ヘラ削り(R)	乱ナデ		
182	須恵器	坏H身	排水溝（前庭部）	12.6	14.9		4.2	1.2		50	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
183	須恵器	坏H身	排水溝（前庭部）	12.0	14.5		4.1	1.0		75	良好	回転ヘラ削り(R)			
184	須恵器	坏H身	排水溝（前庭部）	11.9	14.1		4.6	1.3		50	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目		
185	須恵器	坏H身	排水溝（前庭部）	12.6	14.9		4.5	0.8		25	良好	回転ヘラ削り(L)			
186	須恵器	坏H身	包含層	12.7	14.7		4.1	1.4		100	良好	回転ヘラ削り(L)			
187	須恵器	𤭯	排水溝（前庭部）		8.8					0	良好	回転ヘラ削り(R)、カキ目		体部に凹線間に刺点文	
188	須恵器	𤭯	排水溝（前庭部）		9.3					0	良好	回転ヘラ削り(R)			
189	須恵器	𤭯	包含層		12.1					0	不良				
190	須恵器	広口壺	包含層	21.7	19.9		27.2	10.7		25	良好	カキ目、底部擬格子叩き目	同心円叩き目	口縁2段の波状文	
191	須恵器	提瓶	周溝	6.0	15.3		18.2			50	良好	回転ヘラ削り(L)、カキ目			
192	須恵器	提瓶	排水溝（前庭部）		16.7					0	良好	回転ヘラ削り(R)、静止ナデ		体部にヘラ記号	
193	須恵器	提瓶	包含層		14.6					0	不良	平行叩き目			
194	須恵器	横瓶	排水溝（前庭部）		27.7					0	良好	カキ目		側面にヘラ記号	
195	須恵器	甕	包含層	18.5	27.6		28.7	3.8		50	良好	擬格子目叩き目	同心円叩き目		
196	須恵器	甕	排水溝（前庭部）	19.2	31.0			3.0		33	不良	擬格子目叩き後カキ目	同心円叩き目		
197	須恵器	甕	包含層	21.0	45.1		41.3	3.7		25	良好	擬格子目叩き目後カキ目、脚部波状文	同心円叩き目		
198	須恵器	甕	排水溝（前庭部）	20.8	47.2			4.4		25	良好	擬格子目叩き目後カキ目	同心円叩き目		

7号墳

No.	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
199	須恵器	坏H蓋	石室内流入土？	13.8			4.0			50	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		

8号墳

No	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	現存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
200	須恵器	坏Ⅰ	石室埋土	10.7			3.8			100	良好	ヘラ切り不調整			
201	須恵器	坏Ⅰ	石室埋土	11.1			3.5			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
202	須恵器	坏Ⅰ	石室内流入土	10.9			3.6			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
203	須恵器	坏Ⅰ	石室埋土	11.4			3.9			50	不良	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
204	須恵器	坏Ⅰ	石室埋土	10.9			3.5			100	良好	ヘラ切り不調整		底部外面にヘラ記号	
205	須恵器	坏Ⅰ	石室埋土	10.6			4.1			100	良好	ヘラ切り不調整			
206	須恵器	台付鉢	石室埋土	10.1		7.5	9.7	7.4		50	良好	回転ヘラ削り(L)，口縁部ヨコナデ			
207	須恵器	無蓋高坏	石室内流入土	11.0		9.6	13.1	4.2		100	良好				
208	須恵器	台付長頸壺	石室埋土		16.2	10.5				0	良好	回転ヘラ削り(R)			後方形2方透かし
209	須恵器	台付長頸壺	石室埋土		17.0					0	良好	回転ヘラ削り(R)			胴部凹線間に列線文
210	須恵器	甕	石室内流入土	11.0						80	良好	胴部LはケラB後			胴部に2条の浅い凹線
211	須恵器	平瓶	石室埋土	7.2	14.6		12.2	3.7		75	良好	回転ヘラ削り(R)			胴部に1条の凹線
212	須恵器	三耳付壺	石室埋土	15.5	42.4			3.7		75	良好	頸部子B押さ後ヨコナデ	平板文押さB		口縁部に1条の凹線。
213	土師器	高坏	石室内流入土	16.5		9.9		5.0		100	良好		放射状暗文		

9号墳

No	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	現存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
214	須恵器	坏H蓋	石室埋土	14.3			3.4			66	良好	回転ヘラ削り(L)	口縁部浅い凹線		
215	須恵器	坏H蓋	石室埋土	14.0			3.1			75	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ，口縁部浅い凹線		
216	須恵器	坏H蓋	石室	13.0			3.7			20	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ，口縁部浅い凹線		
217	須恵器	坏H蓋	石室埋土	13.8			4.2			66	良好	粗い回転ヘラ削り(R)	同心円押さB，口縁部浅い凹線		
218	須恵器	坏H蓋	石室埋土	13.5			4.3			33	良好	外縁のヨコナデ後ヘラ削り(R)	同心円押さB，口縁部浅い凹線		
219	須恵器	坏H蓋	石室埋土	13.1			3.6			75	良好	外縁に回転ヘラ削り（L）	口縁部浅い凹線		
220	須恵器	坏H蓋	石室埋土	13.6			4.5			50	良好	粗い乱回転ヘラ削り	同心円押さB，口縁部浅い凹線		
221	須恵器	坏H蓋	石室埋土	13.9			4.7			75	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円押さB		
222	須恵器	坏H蓋	石室埋土	14.9			4.8			50	不良	回転ヘラ削り(L)	口縁部浅い凹線		
223	須恵器	坏H蓋	石室	15.0						50	良好	ヘラ切り不調整？	同心円押さB，口縁部浅い凹線		
224	須恵器	坏H蓋	石室内流入土	12.9			4.1			25	良好	ヘラ切り不調整？	同心円押さB，口縁部凹線		
225	須恵器	坏H蓋	石室	13.7						15	良好	回転ヘラ削り	口縁部凹線		
226	須恵器	坏H蓋	石室埋土	14.2			4.1			66	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円押さB		
227	須恵器	坏H蓋	石室埋土	14.1			4.1			50	良好	粗い回転ヘラ削り(L)	同心円押さB		
228	須恵器	坏H身	墳丘帯	13.7			3.9			10	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円押さB	天井部外面ヘラ記号	
229	須恵器	坏H蓋	石室埋土	13.6			4.2			100	良好	回転ヘラ削り(R)			
230	須恵器	坏H蓋	石室埋土	14.1			4.8			50	良好	回転ヘラ削り(L)			
231	須恵器	坏H身	墳丘帯	12.1	14.3			6.8		20	良好				
232	須恵器	坏H身	墳丘帯	12.4	14.7			1.0		66	良好	回転ヘラ削り			

233	須恵器	坏H身	石室	12.6	15.0		4.1	1.0		25	生地	回転ヘラ削り(L)			
234	須恵器	坏H身	石室床面	12.6	14.5		4.3	0.9		66	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
235	須恵器	坏H身	石室	12.8	14.6			1.1		25	良好				
236	須恵器	坏H身	石室床面	11.9	14.1		4.2	0.9		75	良好	外縁部回転ヘラ削り(L)			
237	須恵器	坏H身	石室	13.2	15.3		4.2	1.4		75	生地	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
238	須恵器	坏H身	石室	12.5	14.8			1.0		15	良好	回転ヘラ削り			
239	須恵器	坏H身	石室	13.0	15.3		4.0	0.9		75	良好	外縁部回転ヘラ削り	仕上げナデ		
240	須恵器	坏H身	石室床面	12.3	14.4		3.4	1.1		100	赤地	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目		
241	須恵器	坏H身	石室床面	13.1	15.0			1.2		25	良好	回転ヘラ削り(L)			
242	須恵器	坏H身	石室床面	13.1	15.0		4.0	1.1		75	良好	外縁部回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目		
243	須恵器	坏H身	石室	13.0	15.0		4.2	1.0		50	生地	回転ヘラ削り(L)			
244	須恵器	坏H身	石室	13.3	15.0			1.1		15	良好	回転ヘラ削り			
245	須恵器	無蓋高坏	玄室墓	12.2		10.8	16.6	4.1		100	良好			明点文，長脚2段3方透かし	
246	須恵器	無蓋高坏	石室床面	12.0		11.7	17.9	4.5		50	良好			底部明点文，長方形2段3方透かし	
247	須恵器	無蓋高坏	石室床面	12.0				4.1		66	良好	回転ヘラ削り(R)		明点文	
248	須恵器	有蓋高坏	石室床面	12.8	15.9				0.9	75	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円叩き目		
249	須恵器	有蓋高坏	石室床面	12.5	14.6				0.9	33	良好	回転ヘラ削り（R）	同心円叩き目		
250	須恵器	有蓋高坏	石室床面	12.7	14.8			3.4	1.1	66	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
251	須恵器	有蓋高坏	石室	13.2	15.6			3.4	1.0	50	良好	回転ヘラ削り	同心円叩き目		
252	須恵器	有蓋高坏	石室床面	11.9	13.9			4.2	1.0	66	良好	回転ヘラ削り（L）	仕上げナデ		
253	須恵器	有蓋高坏	石室床面	12.9	15.3			4.5	0.9	50	良好	回転ヘラ削り（L）			
254	須恵器	有蓋高坏	石室床面	12.2	14.4	9.3	8.9	4.7	1.2	100	良好	回転ヘラ削り(R)			
255	須恵器	有蓋高坏	石室床面	12.5	15.0	9.1	7.2	3.3	0.9	100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目，仕上げナデ		
256	須恵器	有蓋高坏	石室床面	13.4	16.1			4.9	1.0	15	良好	回転ヘラ削り（L）	同心円叩き目	長脚2段3方透かし	
257	須恵器	高坏脚部	石室床面			15.4				0	良好	カキ目		長脚2段3方透かし	
258	須恵器	有蓋高坏	石室床面	13.9	16.4	15.5	17.9	4.0	1.1	50	良好	回転ヘラ削り（R）、脚部上半カキ目	同心円叩き目	長脚2段3方透かし	
259	須恵器	有蓋高坏	石室床面	13.6	15.7	15.1	16.5	4.9	1.1	50	良好	回転ヘラ削り(R)、脚部カキ目		長脚2段3方透かし（長方＋三角）	
260	須恵器	高坏脚部	石室床面			15.6				0	良好	カキ目		長脚2段3方透かし（長方＋三角）	
261	須恵器	壺	石室床面	7.2						75	良好			受口式口縁部に3条の浅い沈線	
262	須恵器	提瓶	石室	5.1						75	良好	カキ目		口縁部に浅い2条の沈線	
263	須恵器	直口壺	石室床面	11.0						66	良好	カキ目			
264	須恵器	壺	石室内流入土		20.4					0	良好	回転ヘラ削り（L）		凹線間に2段の列線文	263と同一個体？
265	須恵器	蓋	石室床面	6.8	11.6		4.3	3.5		100	良好	回転ヘラ削り(L)		直口壺蓋	
266	須恵器	子持壺	石室床面	9.5	13.5		9.8	3.9		100	良好	カキ目	仕上げナデ	脚柱付壺小壺（口径5.1，高さ5.9）	
267	須恵器	子壺	石室内流入土	5.0						25	良好			鉢脚付壺小壺	
267	須恵器	子壺	石室	4.7						25	良好			脚柱付壺子壺	
267	須恵器	子壺	石室							0	良好			鉢脚付壺子壺	

268	須恵器	脚部	石室内流入土							0	良好	ヵキ目				脚飾付壺？、方形透かし、円錐脚に2段円孔文
269	須恵器	提瓶	石室床面	5.9	11.6		13.3	4.6	100	不良	回転ヘラ削り					
270	須恵器	提瓶	石室床面	7.2	17.2		20.5	3.9	20	良好	ヵキ目					
271	須恵器	横瓶	石室床面		40.0				0	良好	横槌手目巡る		同心円叩き目			
272	土師器	坏	石室床面	13.2			4.3		50							

10号墳

№	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	硬度	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
273	須恵器	坏蓋	石室内流入土	12.2			3.6			15	良好	ヘラ切り不調整			
274	須恵器	坏蓋	石室床面	13.0			3.6			100	良好	ヘラ切り不調整			
275	須恵器	坏蓋	石室床面	13.4			3.7			75	良好	ヘラ切り不調整			
276	須恵器	坏蓋	石室内流入土	13.4			3.9			66	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		歪み
277	須恵器	坏蓋	石室床面	13.9			3.7			75	良好	ヘラ切り不調整			
278	須恵器	坏蓋	石室床面	13.6			4.5			100	不良	ヘラ切り後ナデ			
279	須恵器	坏蓋	石室床面	13.7			4.7			100	良好	ヘラ切り不調整			
280	須恵器	坏蓋	石室内流入土	13.6			3.7			100	良好	外縁回転ヘラ削り(R)			
281	須恵器	坏蓋	石室床面	13.7			4.0			85	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
282	須恵器	坏蓋	石室床面	14.1			4.7			100	良好	ヘラ切り不調整			
283	須恵器	坏蓋	石室床面	14.4			4.2			100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
284	須恵器	坏蓋	石室床面	14.6			4.7			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目、仕上げナデ		
285	須恵器	坏蓋	石室床面	14.6			4.0			100	不良	ヘラ切り後ナデ	乱ナデ		天井部に粘土塊痕跡
286	須恵器	坏身	墓道巻	11.2	13.7			1.0		20	不良	回転ヘラ削り(R)			
287	須恵器	坏身	石室床面	12.2	14.6		4.3	0.8		100	良好	静止ヘラ削り	同心円叩き目		
288	須恵器	坏身	石室床面	11.8	13.6		2.9	0.8		100	良好	外縁回転ヘラ削り(R)			歪み
289	須恵器	坏身	石室床面	11.4	13.7		3.4	0.6		100	良好	回転ヘラ削り(R)			
290	須恵器	坏身	石室床面	12.8	14.7		3.3	0.8		75	良好	ヘラ切り不調整	乱ナデ（？）		
291	須恵器	坏身	石室内流入土	11.1	13.2		3.8	0.6		50	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		歪み
292	須恵器	坏身	石室床面	11.4	13.1		3.8	0.8		100	良好	ヘラ切り後ナデ	乱ナデ		
293	須恵器	坏身	石室床面	13.1	15.2		4.2	0.7		50	不良	ヘラ切り後ナデ	乱ナデ		
294	須恵器	坏身	石室床面	12.1	14.7		4.7	0.8		100	良好	ヘラ切り後ナデ			
295	須恵器	坏身	石室内流入土	12.7	15.4		4.6	0.6		33	良好	外縁回転ヘラ削り(L)			
296	須恵器	坏身	石室床面	13.2	15.4		4.2	0.8		100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円叩き目		
297	須恵器	坏身	石室床面	12.8	15.2		4.6	0.9		100	良好	ヘラ切り不調整	仕上げナデ		
298	須恵器	無蓋高坏	石室内流入土	11.6		11.8	18.0	4.9		25	良好				長脚2段3方透かし
299	須恵器	平瓶	墓道巻							0	良好	回転ヘラ削り(L)			
300	須恵器	平瓶	石室床面	5.2	13.8		11.5	2.6		100	良好	体部全面ヵキ目			

12号墳

№	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
301	須恵器	坏H蓋	開口石中	14.3			4.6			66	良好	回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ		
302	須恵器	坏H蓋	石室床面	13.6			4.9			100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
303	須恵器	坏H身	開口石中	12.6	14.8		4.4	1.1		100	良好	回転ヘラ削り(L)	同心円明き目、仕上げナデ		
304	須恵器	坏H身	石室床面	12.5	14.9		4.2	1.4		100	良好	回転ヘラ削り(R)	仕上げナデ		
305	須恵器	坏H身	石室床面	12.6	14.8		4.7	1.1		100	良好	外縁部回転ヘラ削り(L)	同心円明き目		
306	須恵器	坏H身	石室床面	12.9	15.3		4.8	1.6		100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円明き目		
307	須恵器	短頸壺	石室床面	8.2	14.8		7.6			100	良好	回転ヘラ削り(R)	底ナデ		

13号墳

№	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
308	須恵器	坏H蓋	石室床面	14.3			4.0			100	良好	回転ヘラ削り(R)	同心円明き目		
309	須恵器	坏H身	石室床面	12.4	14.3		4.2	1.2		25	良好	回転ヘラ削り(R)			
310	須恵器	坏H身	石室床面	12.4	14.6		4.5	1.2		100	良好	回転ヘラ削り(L)	仕上げナデ		

14号墳

№	種別	器種	出土位置	W1	W2	W3	H1	H2	H3	残存率	焼成	外面調整	内面調整	その他の特徴	備考
311	須恵器	壺		4.8	9.5	6.9	12.2	2.8		60	良好	回転ナデ、底部回転糸切			

表9　出土金属器　法量表

遺物番号	種別	分類	器種	出土古墳	出土位置	全長	幅	厚み	状態	木質
M1	鉄器	武器	鏃	2号墳	石室　床面	*12.9	0.65	0.45	欠　損	○
M2	鉄器	武器	鏃	2号墳	石室　床面	*14.2	1.15	0.7	欠　損	×
M3	鉄器	農工具	刀子	2号墳	石室　床面	*6.35	1.3	0.6	欠　損	○
M4	鉄器	農工具	刀子	2号墳	石室　床面	*9.2	1.1	0.5	欠　損	○
M5	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.75	3.05	0.85	完　存	×
M6	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.73	3.1	0.7	完　存	×
M7	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.55	2.88	0.61	完　存	×
M8	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.55	2.85	0.6	完　存	×
M9	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.6	2.9	0.7	完　存	×
M10	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.6	2.85	0.8	完　存	×
M11	その他	装身具	耳環	2号墳	石室　床面	2.0	2.2	0.6	完　存	×
M12	鉄器	その他	釘	2号墳	石室内流入土	2.6	0.4	0.35	ほぼ完存	×
M13	鉄器	その他	釘	2号墳	石室内流入土	*3.25	0.7	0.4	欠　損	×
M14	鉄器	その他	釘	2号墳	石室内流入土	*2.35	0.5	0.4	欠　損	×
M15	鉄器	その他	釘	2号墳	石室内流入土	*4.6	0.6	0.6	欠　損	×
M16	鉄器	その他	釘	2号墳	石室内流入土	*3.95	0.6	0.4	欠　損	×
M17	鉄器	その他	釘	2号墳	石室内流入土	*2.85	1.0	0.4	欠　損	×
M18	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	9.65	2.25	0.35	ほぼ完存	×
M19	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	*10.3	0.5	0.35	欠　損	×
M20	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	*4.9	0.5	0.35	欠　損	×
M21	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	*5.8	0.6	0.3	欠　損	×
M22	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	*2.8	0.65	0.3	欠　損	×
M23	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	3.3	0.75	0.3	欠　損	×
M24	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	*2.3	0.7	0.6	欠　損	×
M25	鉄器	武器	鏃	2号墳？	攪乱坑	*1.35	1.0	0.45	欠　損	×
M26	鉄器	武器	刀	3号墳	石室　床面	*34.0	2.75	0.8	欠　損	×
M27	鉄器	武器	鏃	3号墳	石室　床面	12.6	3.1	0.5	完　存	○
M28	鉄器	武器	鏃	3号墳	石室　床面	*12.1	1.4	0.4	欠　損	○
M29	鉄器	農工具	鎌	3号墳	石室　床面	12.3	14.6	0.9	完　存	×
M30	鉄器	その他	不明	3号墳	石室　床面	*4.1	0.8	0.25	欠　損	×
M31	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	14.55	3.4	0.65	完　存	○
M32	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*10.1	2.9	0.5	欠　損	×
M33	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*12.3	*3.7	0.4	欠　損	×
M34	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*6.15	*1.8	0.55	欠　損	○
M35	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*2.45	1.15	0.35	欠　損	×
M36	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*11.9	2.6	0.35	欠　損	×
M37	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*9.8	*2.7	0.45	欠　損	×
M38	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*3.3	*2.9	0.25	欠　損	×
M39	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*10.1	1.3	0.35	欠　損	×
M40	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*10.3	1.4	0.35	欠　損	×
M41	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*9.1	1.05	0.35	欠　損	×
M42	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*3.1	1.1	0.25	欠　損	×
M43	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*2.9	1.15	0.2	欠　損	×
M44	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*9.5	1.1	0.3	欠　損	×
M45	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*6.85	1.2	0.3	欠　損	×
M46	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*4.7	1.25	0.35	欠　損	×
M47	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*9.25	0.65	0.4	欠　損	○
M48	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*7.7	0.5	0.45	欠　損	×
M49	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*5.4	0.9	0.45	欠　損	○
M50	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*4.65	0.6	0.45	欠　損	○
M51	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*1.4	0.6	0.35	欠　損	×
M52	鉄器	武器	鏃	4号墳	石室　床面	*1.5	0.35	0.25	欠　損	×
M53	鉄器	農工具	刀子	4号墳	石室　床面	*9.9	2.1	0.8	欠　損	○
M54	鉄器	その他	鑿？	4号墳	墳丘攪乱土内	*8.55	1.9	1.6	欠　損	×
M55	鉄器	装身具	耳環	5号墳	石室　床面	2.45	2.5	0.8	完　存	×
M56	鉄器	装身具	耳環	5号墳	石室　床面	2.4	2.6	0.8	完　存	×
M57	鉄器	農工具	刀子	5号墳	石室　床面	*7.1	1.55	0.7	欠　損	○
M58	鉄器	武器	刀	6号墳	石室　第1床面	*57.6	3.75	0.9	欠　損	×
M59	鉄器	武器	刀装具	6号墳	石室　第1床面	7.8	*6.65	1.1	欠　損	×
M60	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室　第1床面	*13.0	2.55	0.45	完　存	○
M61	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室　第1床面	*12.55	2.2	0.45	ほぼ完存	○

特色番号	種別	分類	器種	出土古墳	出土位置	全長	幅	厚み	状態	木質
M62	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第1床面	*7.9	2.7	0.45	欠 損	×
M63	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第1床面	*13.3	0.9	0.35	欠 損	×
M64	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第1床面	*13.25	1.15	0.4	欠 損	×
M65	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第1床面	*2.45	1.15	0.35	欠 損	×
M66	鉄器	武器	鏃?	6号墳	石室 第1床面	*3.1	1.35	0.55	欠 損	×
M67	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第1床面	*5.5	1.5	0.75	欠 損	×
M68	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第1床面	*11.5	2.3	0.65	欠 損	×
M69	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第1床面	*13.55	1.35	0.8	欠 損	○
M70	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第1床面	*5.4	*2.85	0.3	欠 損	○
M71	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第1床面	*6.5	*1.1	0.65	欠 損	×
M72	鉄器	装身具	耳環	6号墳	石室 第1床面	2.6	2.9	0.75	完 存	×
M73	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	14.1	3.0	0.5	ほぼ完存	×
M74	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	14.4	2.0	0.45	ほぼ完存	×
M75	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	15.45	3.0	0.4	完 存	○
M76	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	13.25	1.85	0.45	ほぼ完存	○
M77	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*12.4	*2.15	0.45	欠 損	×
M78	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	13.65	2.7	0.4	完 存	×
M79	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*13.6	2.45	0.4	欠 損	×
M80	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*10.2	2.0	0.3	ほぼ完存	×
M81	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	15	2.4	0.35	ほぼ完存	×
M82	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*8.55	3.0	0.4	欠 損	×
M83	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*9.25	3.2	0.4	欠 損	○
M84	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*7.8	*1.9	0.4	欠 損	○
M85	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*13.1	1.6	0.35	欠 損	×
M86	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*10.8	1.4	0.4	欠 損	×
M87	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*11.25	2.7	0.45	欠 損	×
M88	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*10.15	2.8	0.7	欠 損	○
M89	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*6.7	3.1	0.35	欠 損	×
M90	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*17.3	0.85	0.4	欠 損	×
M91	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*14.25	0.65	0.45	欠 損	×
M92	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	18.9	1.1	0.45	ほぼ完存	×
M93	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*7.2	0.6	0.3	欠 損	×
M94	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*7.9	1.0	0.35	欠 損	○
M95	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*6.65	0.5	0.5	欠 損	○
M96	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	6.35	0.95	0.4	欠 損	○
M97	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*4.1	0.75	0.4	欠 損	×
M98	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*5.65	0.65	0.5	欠 損	○
M99	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*4.55	0.56	0.4	欠 損	○
M100	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	3.15	0.66	0.35	欠 損	×
M101	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*1.35	0.5	0.25	欠 損	×
M102	鉄器	武器	鏃	6号墳	石室 第2床面	*5.4	0.55	0.3	欠 損	×
M103	鉄器	馬具	鐙吊金具	6号墳	石室 第2床面	*5.75	2.4	*1.95	欠 損	○
M104	鉄器	馬具	鐙吊金具	6号墳	石室 第2床面	*4.1	1.7	*0.95	欠 損	○
M105	鉄器	馬具	鐙	6号墳	石室 第2床面	*5.4	*2.15	0.25	欠 損	○
M106	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	*2.0	*1.2	0.4	欠 損	○
M107	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	*2.75	*1.0	*0.25	欠 損	○
M108	鉄器	馬具	鞍金具	6号墳	石室 第2床面	*2.8	1.2	1.35	欠 損	×
M109	鉄器	馬具	鞍金具	6号墳	石室 第2床面	4.6	3.55	1.3	ほぼ完存	×
M110	鉄器	馬具	鞍金具	6号墳	石室 第2床面	4.8	3.7	1.4	ほぼ完存	×
M111	鉄器	馬具	鞍金具	6号墳	石室 第2床面	*3.65	*2.75	0.7	欠 損	×
M112	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	5.8	3.1	1.55	欠 損	×
M113	鉄器	馬具	鞍具	6号墳	石室 第2床面	6.35	2.8	0.8	欠 損	×
M114	鉄器	馬具	鞍具	6号墳	石室 第2床面	6.12	2.9	0.7	欠 損	×
M115	鉄器	馬具	鞍具	6号墳	石室 第2床面	5.4	3.65	0.55	欠 損	×
M116	鉄器	馬具	鞍具	6号墳	石室 第2床面	5.6	3.7	0.45	完 存	×
M117	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	4.15	0.66	0.3	欠 損	×
M118	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第2床面	14.9	2.06	1.35	ほぼ完存	○
M119	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第2床面	11.9	1.5	0.8	ほぼ完存	○
M120	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第2床面	*3.3	0.95	0.45	欠 損	×
M121	鉄器	農工具	刀子	6号墳	石室 第2床面	*8.75	1.6	0.5	欠 損	○
M122	鉄器	農工具	鎌	6号墳	石室 第2床面	*7.5	2.3	0.5	欠 損	×

報告番号	種別	分類	器種	出土古墳	出土位置	全長	幅	厚み	状態	木質
M123	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	*4.0	0.7	*0.25	欠損	×
M124	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	*5.05	*1.35	*0.5	欠損	×
M125	鉄器	その他	不明	6号墳	石室 第2床面	*6.3	0.85	0.5	欠損	○
M126	鉄器	馬具	鐙	6号墳	石室 第2床面	19.0	10.3	0.65	欠損	○
M127	鉄器	馬具	鐙	6号墳	石室 第2床面	16.6	15.35	0.65	欠損	×
M128	鉄器	馬具	轡	6号墳	石室 第2床面	22.25	20.25	1.0	完存	×
M129	鉄器	装身具	耳環	6号墳	石室 第2床面	2.1	2.15	0.25	完存	×
M130	鉄器	武器	鏃	8号墳	石室 床面	*8.15	2.1	0.45	欠損	×
M131	その他	装身具	耳環	8号墳	石室 床面	2.9	3.1	*0.8	完存	×
M132	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*10.2	3.2	0.5	欠損	×
M133	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*6.15	3.15	0.45	欠損	×
M134	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*8.95	2.65	0.25	欠損	×
M135	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*5.4	2.3	0.5	欠損	×
M136	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*5.6	4.1	1.0	欠損	×
M137	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*7.1	2.25	0.9	欠損	×
M138	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*9.8	3.0	0.6	欠損	×
M139	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	15.4	0.65	0.4	ほぼ完存	×
M140	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	15.6	2.2	0.75	ほぼ完存	○
M141	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*7.7	1.5	0.6	欠損	×
M142	鉄器	武器	鏃	9号墳	石室 床面	*8.7	0.95	0.4	欠損	×
M143	その他	武器	刀装具	9号墳	石室 床面	4.0	2.3	0.25	欠損	×
M144	鉄器	農工具	刀子	9号墳	石室 床面	*4.45	1.05	0.6	欠損	○
M145	鉄器	農工具	刀子	9号墳	石室 床面	*7.4	1.1	0.5	欠損	○
M146	鉄器	農工具	刀子	9号墳	墳丘包含層	*7.6	2.0	0.5	欠損	×
M146	鉄器	馬具	轡	9号墳	石室 床面	23.5	20.2	1.0	完存	×
M147	鉄器	馬具	鞍	9号墳	石室 床面	7.05	5.0	2.65	欠損	×
M148	鉄器	装身具	耳環	9号墳	石室 床面	1.85	1.95	0.25	完存	×
M149	鉄器	装身具	耳環	9号墳	石室 床面	*2.2	*1.32	*0.2	欠損	×
M150	鉄器	装身具	耳環	9号墳	石室 床面	*2.1	*1.6	0.2	欠損	×
M151	鉄器	その他	不明	9号墳	石室 床面	6.2	1.0	0.45	欠損	×
M152	鉄器	その他	不明	9号墳	石室 床面	2.65	*2.0	0.8	欠損	×
M155	鉄器	その他	不明	9号墳	石室 床面	*3.0	0.9	0.85	欠損	×
M153	鉄器	その他	不明	9号墳	石室 床面	*5.7	0.7	0.6	欠損	×
M154	鉄器	その他	不明	9号墳	石室 床面	*3.0	0.9	0.6	欠損	×
M156	鉄器	その他	不明	9号墳	石室 床面	*2.05	0.6	0.35	欠損	×
M157	鉄器	武器	鏃	10号墳	石室 床面	*5.1	0.85	0.35	欠損	×
M158	鉄器	農工具	刀子	10号墳	石室 床面	*5.2	1.4	0.5	欠損	○
M159	鉄器	農工具	刀子	10号墳	石室 床面	*4.1	1.2	0.5	欠損	×
M160	その他	装身具	耳環	10号墳	石室 床面	2.85	3.2	0.9	完存	×
M161	その他	装身具	耳環	10号墳	石室 床面	2.85	3.2	0.85	完存	×
M162	その他	装身具	耳環	10号墳	石室 床面	2.7	3.0	0.7	完存	×
M163	その他	装身具	耳環	10号墳	石室 床面	2.1	2.3	0.35	完存	×
M164	その他	装身具	耳環	10号墳	石室 床面	2.2	2.35	0.4	完存	×
M165	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	5.0	0.6	0.55	完存	○
M166	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	6.4	1.05	0.55	完存	○
M167	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	7.8	1.05	0.85	完存	○
M168	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	6.45	1.1	0.7	完存	○
M169	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	*3.0	0.75	0.5	欠損	○
M170	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	*3.05	1.1	0.6	欠損	○
M171	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	6.0	1.0	0.6	完存	○
M172	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	6.2	1.6	1.1	完存	○
M173	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	6.9	1.4	0.6	完存	○
M174	鉄器	その他	釘	木棺墓	墳土中	*6.9	0.95	0.75	欠損	○

表10　出土玉類　法量表

報告番号	種類	色調	古墳	整理遺構名	長さ/厚さ	幅/幅	孔径	備考
T1	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.30	0.80	0.25/0.15	
T2	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.40	0.80	0.25/0.05	
T3	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.00	0.80	0.25/0.10	
T4	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.25	0.90	0.30/0.10	
T5	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.50	0.90	0.30/0.10	
T6	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.10	0.90	0.35/0.10	
T7	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.20	0.85	0.25/0.10	
T8	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.30	0.85	0.35/0.15	
T9	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.15	0.80	0.40/0.10	
T10	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.00	0.90	0.35/0.10	
T11	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.05	0.80	0.30/0.15	
T12	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.55	0.85	0.25/0.15	
T13	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.75	0.85	0.45/0.10	
T14	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.80	0.85	0.35/0.25	
T15	管　玉	青　緑	4号墳	石室　床面	1.25	0.45	0.20	
T16	管　玉	青　緑	4号墳	石室　床面	1.85	0.70	0.20/0.10	
T17	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.05	0.70	0.25/0.10	
T18	管　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	2.10	0.85	0.40/0.10	
T19	管　玉	緑灰色	4号墳	石室　床面	*0.75	0.40	0.15	グリーンタフ製
T20	管　玉	青　緑	4号墳	石室　床面	*0.90	0.50	0.15	グリーンタフ製
T21	算盤玉	深　緑	4号墳	石室　床面	1.15	0.80	0.20/0.10	
T22	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.65	0.65	0.15	
T23	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.75	0.90	0.20	
T24	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.75	0.90	0.20	
T25	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.75	0.90	0.20	
T26	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.60	0.75	0.20	
T27	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.60	0.75	0.15	
T28	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.65	0.80	0.15	
T29	小　玉	赤　色	4号墳	石室　床面	0.20	0.30	0.15	
T30	小　玉	赤　色	4号墳	石室　床面	0.25	0.45	0.15	
T31	小　玉	透明青	4号墳	石室　床面	0.45	0.60	0.20	
T32	小　玉	透明青	4号墳	石室　床面	0.40	0.55	0.20	
T33	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.40	0.55	0.20	
T34	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.45	0.55	0.15	
T35	小　玉	透明青	4号墳	石室　床面	0.40	0.65	0.20	
T36	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.55	0.75	0.15	
T37	小　玉	深　緑	4号墳	石室　床面	0.45	0.70	0.20	
T38	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.80	0.80	0.25/0.20	
T39	小　玉	藍　色	4号墳	石室　床面	0.60	0.90	0.20	
T40	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.70	0.80	0.25	
T41	小　玉	透明青	4号墳	石室　床面	0.30	0.55	0.25	
T42	小　玉	透明青	4号墳	石室　床面	0.35	0.55	0.20	
T43	小　玉	群　青	4号墳	石室　床面	0.50	0.80	0.20/0.15	
T44	勾　玉	透明茶	6号墳	石室　第2床面	3.20	幅1.9	厚8-0.85	メノウ製
T45	管　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	2.45	0.90	0.35/0.15	
T46	管　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	2.45	0.85	0.4/0.1	
T47	管　玉	青　緑	6号墳	石室　第2床面	2.20	0.70	0.20/0.15	
T48	管　玉	緑灰色	6号墳	石室　第2床面	1.80	0.60	0.20/0.10	
T49	管　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	2.85	0.80	0.25/0.15	
T50	管　玉	青　緑	6号墳	石室　第2床面	2.15	0.80	0.30/0.15	
T51	管　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	2.30	0.85	0.30/0.10	
T52	管　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	2.40	0.85	0.20/0.10	
T53	管　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	2.70	0.90	0.35/0.1	
T54	小　玉	透明青	6号墳	石室　第2床面	0.45	0.70	0.10	
T55	切子玉	透明白	6号墳	石室　第2床面	1.35	1.05	0.40/0.20	水晶製
T56	算盤玉	透明白	6号墳	石室　第2床面	1.30	1.35	0.40/0.15	水晶製
T57	算盤玉	透明白	6号墳	石室　第2床面	1.25	1.20	0.30/0.15	水晶製
T58	小　玉	深　緑	6号墳	石室　第2床面	0.75	0.90	0.30/0.10	
T59	小　玉	藍　色	6号墳	石室　第2床面	0.60	0.80	0.20	
T60	小　玉	藍　色	6号墳	石室　第2床面	0.50	0.80	0.30	
T61	小　玉	青　色	6号墳	石室　第2床面	0.45	0.55	0.20	

遺物番号	種類	色調	古墳	整理遺構名	長さ/厚さ	幅/幅	孔径	備考
T62	小 玉	橙 色	6号墳	石室 第2床面	0.60	0.80	0.20	
T63	小 玉	橙 色	6号墳	石室 第2床面	0.55	0.80	0.15	
T64	小 玉	赤茶色	6号墳	石室 第2床面	0.55	0.80	0.20	
T65	小 玉	橙 色	6号墳	石室 第2床面	0.55	0.80	0.20	
T66	小 玉	群 青	6号墳	石室 第2床面	0.70	0.70	0.10	
T67	小 玉	群 青	6号墳	石室 第2床面	0.60	0.85	0.20	
T68	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.55	0.10	
T69	小 玉	灰 色	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.55	0.15	滑石製
T70	小 玉	深 緑	6号墳	石室 第2床面	0.45	0.65	0.10	
T71	小 玉	群 青	6号墳	石室 第2床面	0.60	0.80	0.15	
T72	小 玉	群 青	6号墳	石室 第2床面	0.60	0.70	0.20	
T73	小 玉	青 色	6号墳	石室 第2床面	0.50	0.65	0.20	
T74	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.65	0.10	
T75	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.35	0.50	0.15	
T76	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.50	0.15	
T77	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.35	0.55	0.15	
T78	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.50	0.10	
T79	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.45	0.55	0.15	
T80	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.45	0.50	0.15	
T81	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.35	0.50	0.20	
T82	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.50	0.10	
T83	小 玉	灰 色	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.50	0.10	
T84	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.45	0.55	0.15	
T85	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.45	0.55	0.15	
T86	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.40	0.15	
T87	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.55	0.15	
T88	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.55	0.10	
T89	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.40	0.50	0.15	
T90	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.35	0.55	0.10	
T91	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.40	0.10	
T92	小 玉	灰 色	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.45	0.10	
T93	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.35	0.50	0.15	
T94	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.55	0.15	
T95	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.50	0.15	
T96	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.15	0.30	0.10	
T97	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.30	0.10	
T98	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T99	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第1床面	0.40	0.50	0.10	
T100	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T101	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.40	0.10	
T102	小 玉	黄 色	6号墳	石室 第2床面	0.35	0.50	0.10	
T103	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T104	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T105	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T106	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.30	0.10	
T107	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T108	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.40	0.15	
T109	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.40	0.10	
T110	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T111	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T112	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T113	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T114	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.40	0.1	
T115	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.30	0.1	
T116	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T117	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.30	0.40	0.10	
T118	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.15	
T119	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T120	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.27	0.30	0.30	
T121	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.15	
T122	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.35	0.15	

報告番号	種類	色調	古墳	整理遺構名	長さ/厚さ	径/幅	孔径	備考
T123	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.20	
T124	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T125	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T126	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.40	0.10	
T127	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.40	0.10	
T128	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.35	0.15	
T129	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T130	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.30	0.10	
T131	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.40	0.15	
T132	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T133	小 玉	透明緑	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.15	
T134	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.15	0.35	0.10	
T135	小 玉	青 緑	6号墳	石室 第2床面	0.25	0.35	0.10	
T136	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.25	0.10	
T137	小 玉	透明青	6号墳	石室 第2床面	0.15	0.25	0.10	
T138	小 玉	透明緑	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T139	小 玉	透明緑	6号墳	石室 第2床面	0.10	0.25	0.10	
T140	小 玉	透明緑	6号墳	石室 第2床面	0.15	0.30	0.10	
T141	小 玉	透明緑	6号墳	石室 第2床面	0.20	0.35	0.10	
T142	勾 玉	水 色	8号墳	石室 床面	1.40	0.80	0.25	
T143	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.25	0.70	0.30/0.15	
T144	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.25	0.80	0.45/0.15	
T145	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.80	0.95	0.30/0.10	
T146	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.40	0.80	0.30/0.10	
T147	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.20	0.65	0.30/0.20	
T148	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.20	0.85	0.20/0.10	
T149	管 玉	濃 緑	8号墳	石室 床面	2.30	0.95	0.30/0.15	
T150	切子玉	透明白	8号墳	石室 床面	2.15	1.45	0.38	水晶製
T151	管 玉	濃 緑	9号墳	石室 床面	2.05	0.80	0.20/0.15	
T152	小 玉	群 青	9号墳	石室 床面	0.60	0.70	0.15	
T153	小 玉	群 青	9号墳	石室 床面	0.65	0.75	0.15	
T154	小 玉	群 青	9号墳	石室 床面	0.50	0.75	0.15	
T155	小 玉	群 青	9号墳	石室 床面	0.55	0.75	0.15	
T156	小 玉	藍 色	9号墳	石室 床面	0.70	0.90	0.20	
T157	小 玉	透明青	9号墳	石室 床面	0.35	0.50	0.15	
T158	小 玉	灰 色	9号墳	石室 床面	0.25	0.50	0.25	滑石製
T159	小 玉	透明青	9号墳	石室 床面	0.20	0.40	0.15	
S3	紡錘車	灰褐色	9号墳	石室 床面	1.90	4.10	0.65	滑石製
S4	紡錘車	灰褐色	10号墳	墳丘 表土中	2.25	3.85	0.80	滑石製

太市中古墳群　1号墳①

古墳全景
（南から）

開口部～石室内部
（南から）

墓墳全景
（南から）

太市中古墳群　1号墳②・2号墳①

石室遠景
（南西から）

石室左側壁
（西から）

左；2号墳
開口部土坑
（南から）

右；同　アップ
（南から）

太市中古墳群　2号墳②

古墳全景
（南から）

開口部～石室内部
（南から）

石室奥壁
（南から）

太市中古墳群　2号墳③

石室内部
（南から）

石室内遺物出土状況
全景
（南から）

石室内遺物
奥壁付近
（南から）

太市中古墳群　2号墳④

左；開口部
石材埋設土坑
（南から）

右；石室内遺物
袖部付近
（東から）

墓壙　石室
断ち割り
（南から）

墓壙　西側石基底
（南から）

太市中古墳群　3号墳①

古墳全景
（南から）

古墳全景
（西から）

石室近景
（南から）

太市中古墳群　3号墳②

石室内部
（南から）

石室内遺物出土状況
全景
（南から）

墓壙全景
（南から）

太市中古墳群　4号墳①

古墳全景
(南から)

古墳全景
(東から)

古墳全景
(北から)

太市中古墳群　4号墳(2)

左上：石室全景（南から）
左下：石室全景（北から）
右上：石室玄門付近（南から）
右中：石室奥壁（南から）
右下：石室袖部～玄門（北西から）

太市中古墳群　4号墳③

石室　羨道基部　閉塞石（南から）

石室　玄門付近（北から）

石室　羨道部　閉塞石除去（南から）

石室　右側壁（東から）

石室　玄門　左・右の袖石（北から）

石室　左側壁（西から）

石室　玄門　敷石（北から）

石室　棺床（南西から）

太市中古墳群　4号墳④

石室内遺物出土状況
全景
（西から）

石室内遺物出土状況
奥壁～右側壁付近
（東から）

石室内遺物出土状況
左側壁付近
（南西から）

太市中古墳群　4号墳⑤

石室内遺物　玄門付近（北から）

石室内遺物　奥壁付近（南から）

石室内遺物　左袖部コーナー（西から）

石室内遺物　右袖部コーナー（北から）

石室内遺物　左側壁中央（西から）

石室内遺物　検出作業（左側壁付近）

石室内遺物　奥壁左コーナー（南西から）

石室内遺物　奥壁右コーナー（南東から）

太市中古墳群　4号墳⑥

周溝内遺物出土状況（北から）

上：周溝内遺物　上層（東から）
下：周溝内遺物　下層（東から）

墓壙全景（南から）

上：墓壙北半部（南から）　下：墓壙正面　開口部～奥壁（南から）

太市中古墳群　5号墳①

古墳全景
（南から）

石室全景
（南から）

羨門～石室内部
（北から）

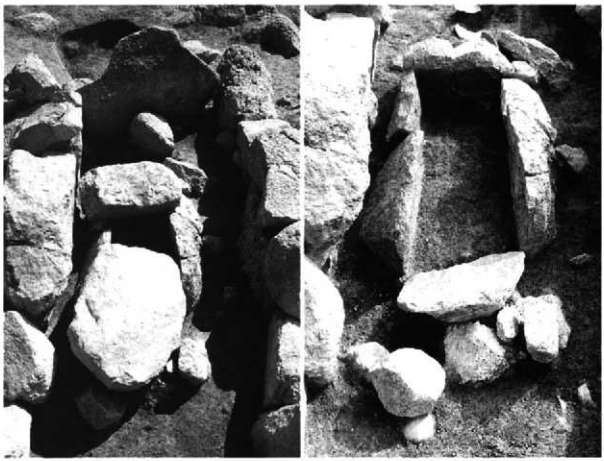
太市中古墳群　5号墳②

羨門　閉塞石
（南から）

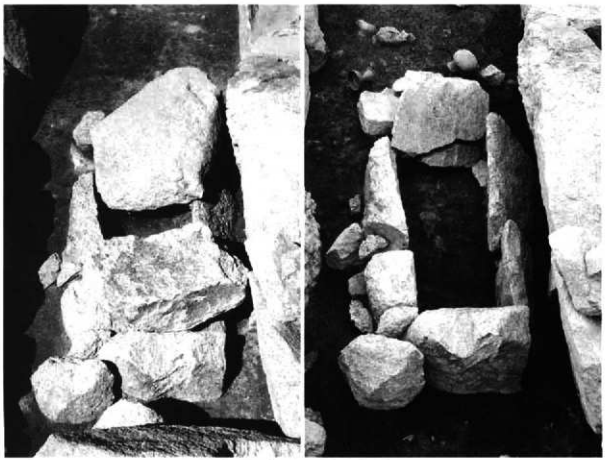
墳丘　外護列石
西側面
（西から）

墳丘　外護列石
北西側面
（北から）

太市中古墳群　5号墳③



石室内箱式石棺　左：蓋石　右：棺身（北から）



室内箱式石棺　左：蓋石　右：棺身（南から）

石室内遺物出土状況　北半（北から）

石室内遺物出土状況　南半（南から）

石室内遺物　土器

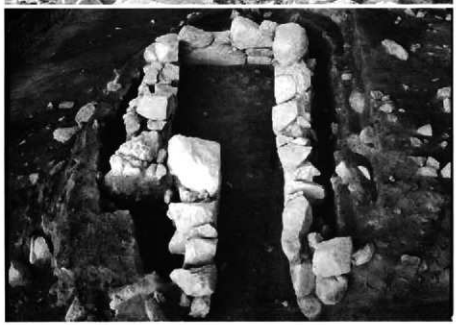
石室内遺物　耳環

石室内遺物　羨門付近（南から）

太市中古墳群　6号墳①

古墳全景
（南から）

古墳全景
（東から）



石室全景
（南から）

太市中古墳群　6号墳②

石室　羨門　閉塞石（南から）

石室　石袖石（北から）

石室　羨門　閉塞石（上から）

石室　石側壁（北東から）

石室　羨門　閉塞石除去後（南から）

石室　左側壁（北西から）

石室　玄門～羨道（北から）

石室　奥壁（南から）

太市中古墳群　6号墳③

遺物出土状況　第1床面（北から）

遺物出土状況　第2床面（北から）

遺物出土状況　第1床面（南から）

遺物出土状況　第2床面（南から）

第1床面遺物　玄門付近（北から）

第1床面遺物　袖部コーナー

第1床面遺物　奥壁付近（南から）

第1床面遺物　土器・鉄刀

第1床面遺物　奥壁左コーナー

第1床面遺物　耳環・鉄鏃

第1床面遺物　奥壁右コーナー

第1床面遺物　土器

太市中古墳群　6号墳⑤

石室第2床面遺物
左上1・右上；奥壁付近
左上2；馬具
左下1；羨道基部
左下2・右下1・右下2；玉類

太市中古墳群　6号墳⑥

前庭部　排水溝
（南西から）

周溝　墳丘東側
カット面
〔北東から〕

墓壙全景
（南から）

太市中古墳群　7号墳

古墳全景
（南から）

石室　左側壁残欠
（西から）

墓壙　残存部全景
（南から）

太市中古墳群　8号墳①

古墳全景
（南から）

古墳全景
（東から）

墓壙全景
（南から）

太市中古墳群　8号墳②

石室　奥壁（南から）

石室　右側壁（東から）

石室　玄門～羨道（北から）

石室　右袖石（北東から）

前庭部　石列（南から）

石室　左側壁（西から）

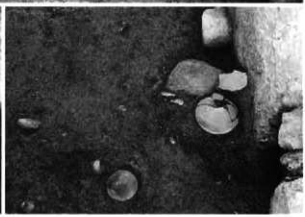
太市中古墳群

8号墳③

石室内遺物出土状況
全景
（南から）

石室内遺物
奥壁付近
（南から）

石室内遺物　羨道左側壁（西から）



石室内遺物　玄門左側壁（西から）

石室内遺物　土器

石室内遺物　管玉

太市中古墳群　9号墳①

古墳全景
(南から)

石室全景
(南から)

開口部～石室内部
(南から)

太市中古墳群　9号墳②

石室　右側壁（東から）

石室　左側壁（南西から）

石室　玄門～奥壁（南から）

石室　羨道全景（南から）

石室　羨道～右側壁（南東から）

閉口部　排水溝全景（南から）

墓壙全景（南から）

墓壙全景（東から）

太市中古墳群　9号墳③

石室内遺物出土状況
左上・右上；全景（南から）
左中；馬具
左下；土器
右中；玄室内部（北から）
右下；玄門付近（南から）

太市中古墳群　10号墳①

古墳全景
（南から）

石室全景
（南から）

墓壙全景
（南から）

太市中古墳群　10号墳②

石室　奥壁
（南から）

石室　右側壁（南東から）

石室　左側壁（南西から）

石室　右側壁（東から）

石室　左側壁（西から）

石室　右側壁（北東から）

石室　左側壁（北西から）

太市中古墳群　10号墳③

石室内遺物出土状況
左上・右上：全景（南から）
左中：開口部付近（東から）
左下：石室検出作業風景（南から）
右中：左側壁中央（西から）
右下：左側壁中央（東から）

太市中古墳群　12号墳①

古墳全景
(南から)

石室全景
(南から)

墓壙全景
(南から)

太市中古墳群　12号墳②

羨門～石室内部（南から）

石室近景（南西から）

石室　右側壁（南東から）

石室　左側壁（南西から）

太市中古墳群　12号墳③

石室内遺物出土状況　全景（南から）

石室　棺床（北西から）

羨門　閉塞石（南から）

羨道　閉塞石（北から）

石室内遺物　玄室内部（北から）

石室内遺物　奥壁石コーナー（南東から）

太市中古墳群　13号墳①

古墳全景
（南から）

前庭部～石室内部
（南から）

石室全景
（南から）

太市中古墳群　13号墳②

石室全景（南から）

墓壙全景（南から）

石室内遺物
閉塞石付近
（北から）

石室　検出作業

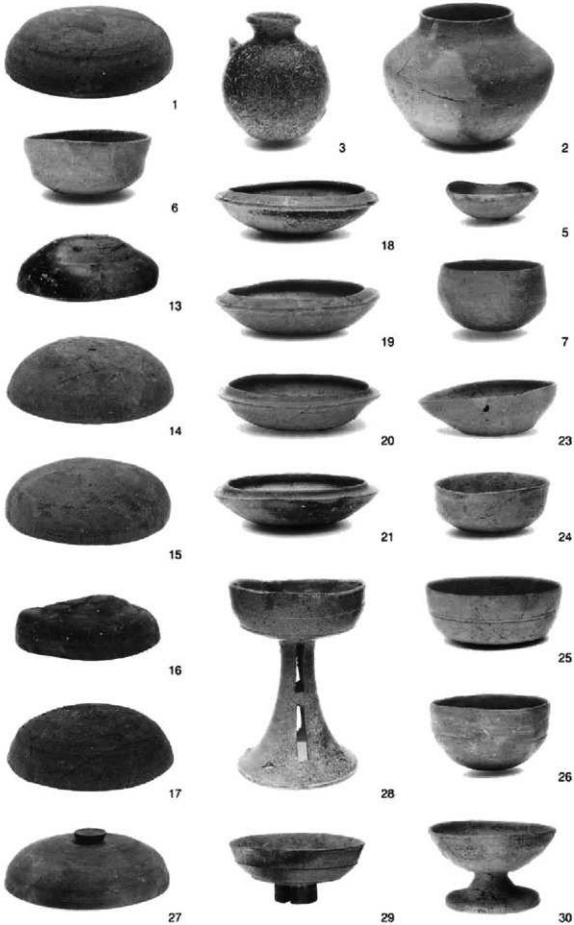
太市中古墳群　木棺墓

左；検出状況
全景（北東から）
右；出土遺物平取

遺物出土状況
（北東から）

完掘状況
（北東から）

出土遺物　土器①



出土遺物　土器②

8

32

34

9

31

36

40

37

38

33

39

出土遺物　土器③

10

12

43

11

44

45

46

47

63

64

48

49

66

67

65

出土遺物　土器④

62

51

52

53

54

57

56

55

58

59

60

61

68

69

70

71

72

50

76

73

75

77

74

出土遺物　土器⑤

78

83

81

96

79

82

80

97

95

出土遺物　土器⑥

84

88

89

90

85

86

87

91

92

93

99

98

105

104

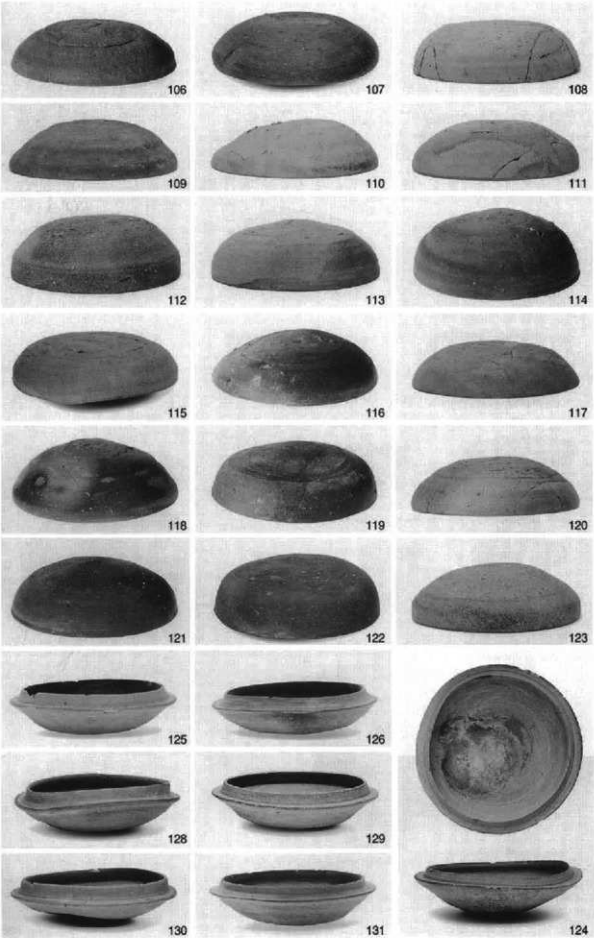
100

103

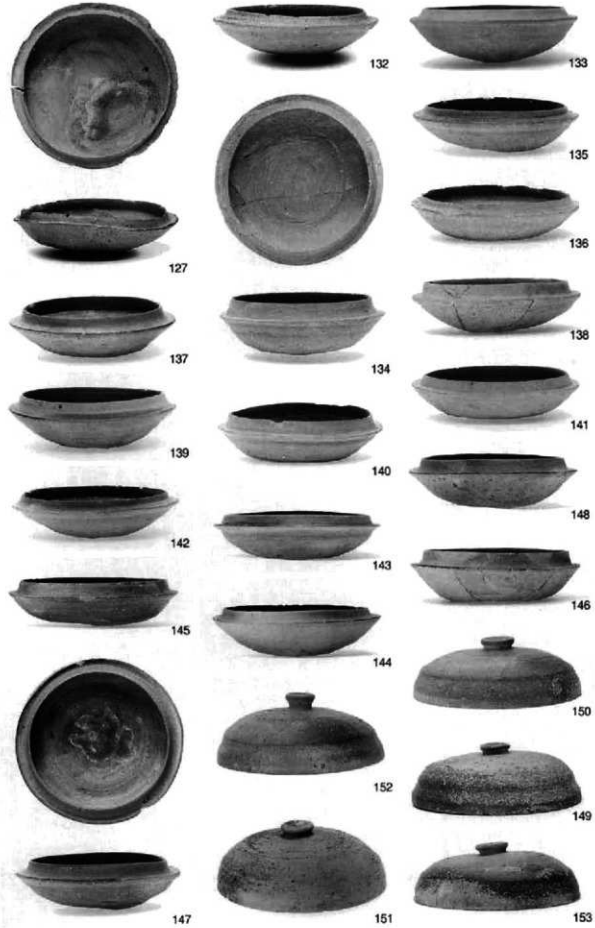
101

102

出土遺物　土器⑦


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
125
126
128
129
130
131
124

出土遺物　土器⑧


127
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153

出土遺物　土器⑨

154

157

158

156

155

159

160

161

164

162

163

174

169

165

170

出土遺物　土器⑩

166

168

167

171

173

172

出土遺物　土器⑪

175

176

177

178

179

180

181

183

182

184

185

186

190

187

189

191

188

192

193

出土遺物　土器⑫

194

197

195

198

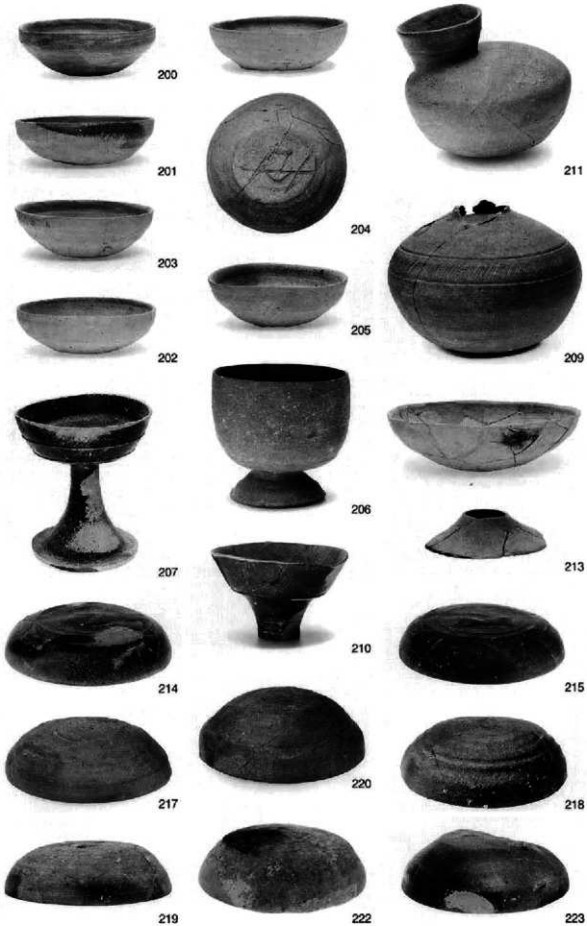
196

199

208

212

出土遺物　土器⑬


200
201
203
202
204
205
206
207
210
211
209
213
214
215
217
220
218
219
222
223

出土遺物　土器(24)

221

224

226

227

229

230

234

236

237

239

240

242

243

248

245

246

250

251

247

252

253

出土遺物　土器⑮

254

255

256

259

258

260

265

266

272

269

267

264

271

270

274

275

276

280

278

281

279

277

282

283

284

285

289

287

288

290

292

291

294

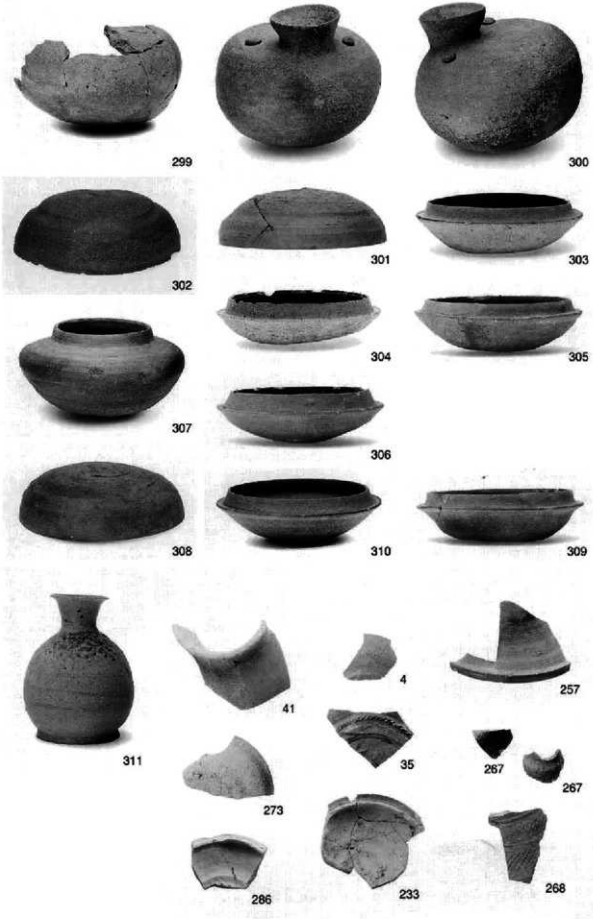
293

296

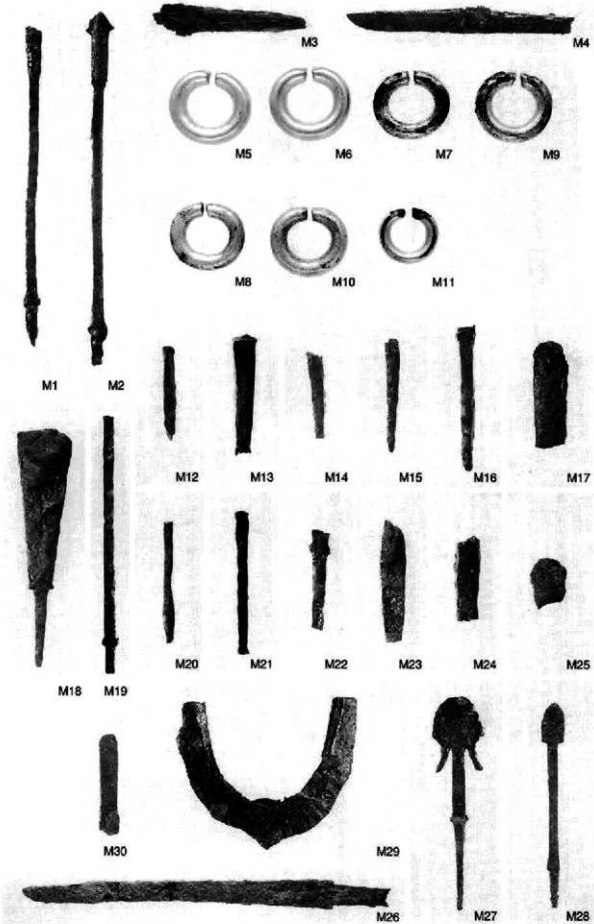
295

297

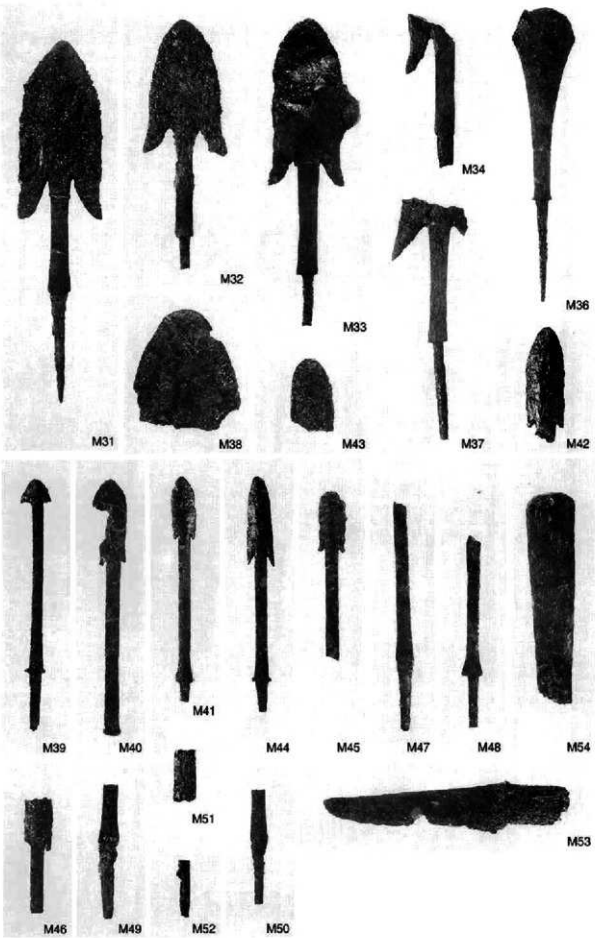
298


299
300
302
301
303
304
305
307
306
308
310
309
311
41
4
257
35
267
267
273
286
233
268

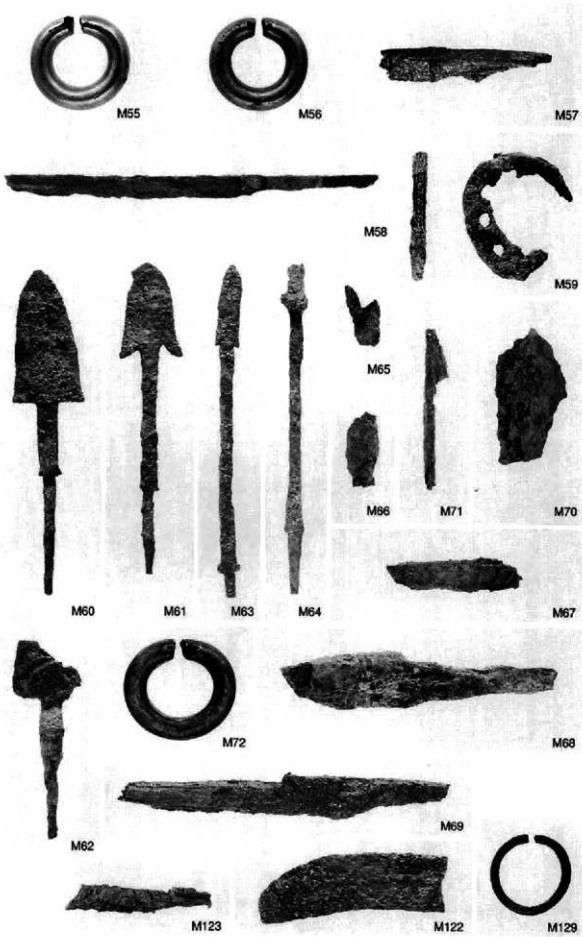
出土遺物　金属器①


M3
M4
M5
M6
M7
M9
M8
M10
M11
M1
M2
M12
M13
M14
M15
M16
M17
M18
M19
M20
M21
M22
M23
M24
M25
M30
M29
M26
M27
M28

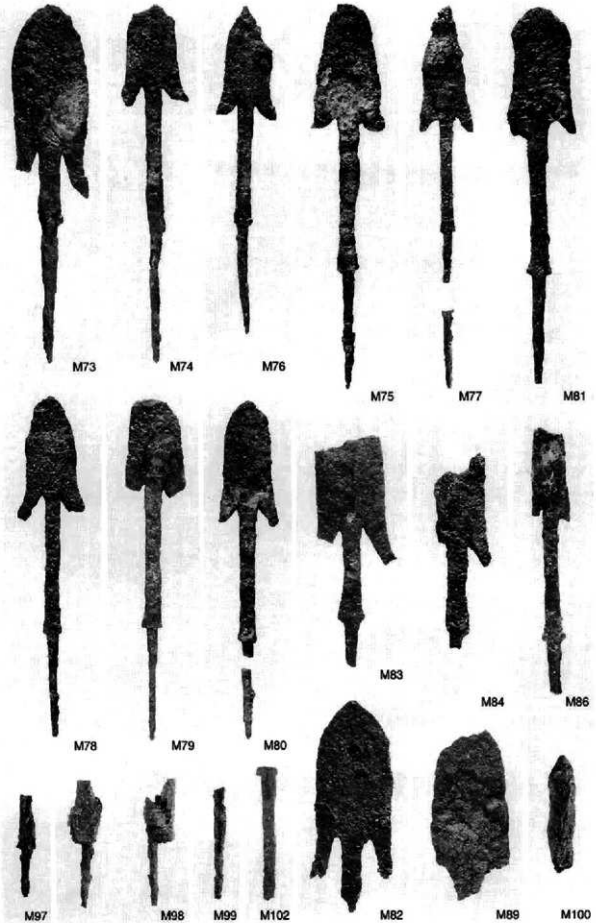
出土遺物　金属器②


M31
M32
M33
M34
M36
M37
M38
M39
M40
M41
M42
M43
M44
M45
M46
M47
M48
M49
M50
M51
M52
M53
M54

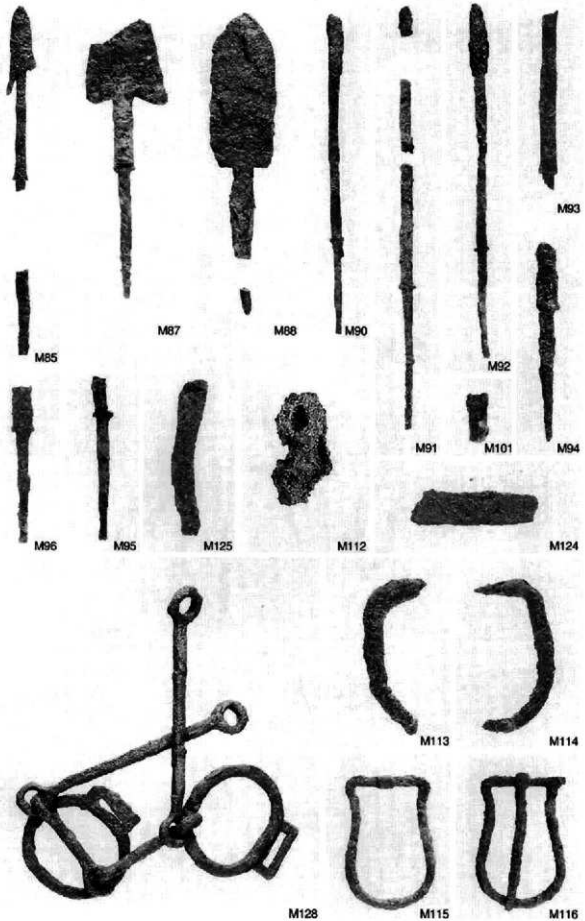
出土遺物　金属器③


M55
M56
M57
M58
M59
M65
M66
M71
M70
M60
M61
M63
M64
M67
M72
M68
M69
M62
M123
M122
M129

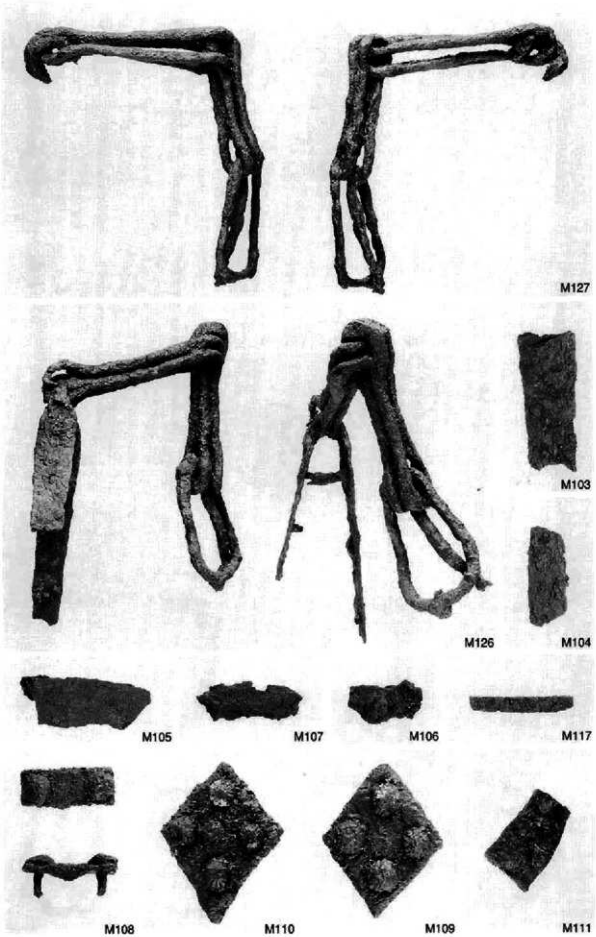
出土遺物　金属器④


M73
M74
M76
M75
M77
M81
M78
M79
M80
M83
M84
M86
M97
M98
M99
M102
M82
M89
M100

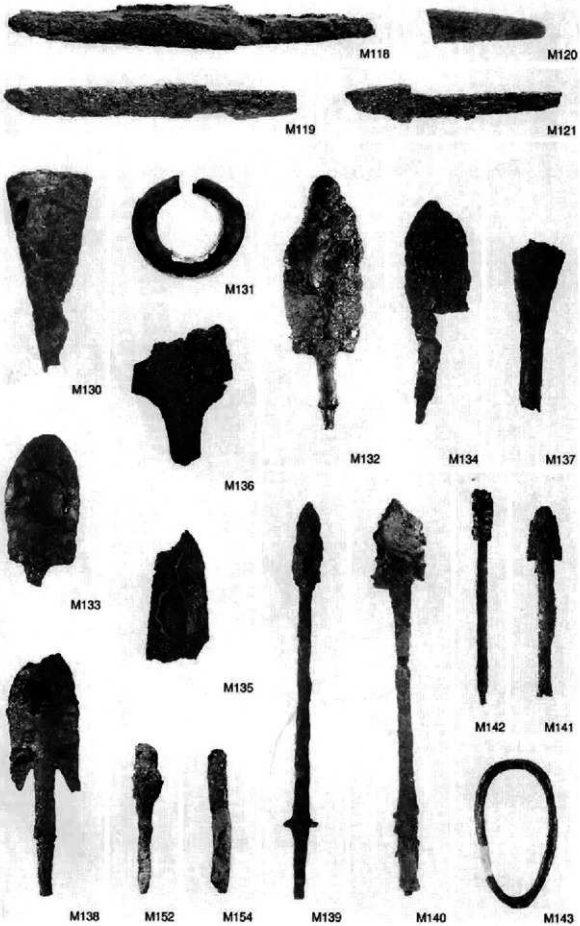
出土遺物　金属器⑤


M93
M87
M88
M90
M85
M92
M91
M101
M94
M96
M95
M125
M112
M124
M113
M114
M128
M115
M116

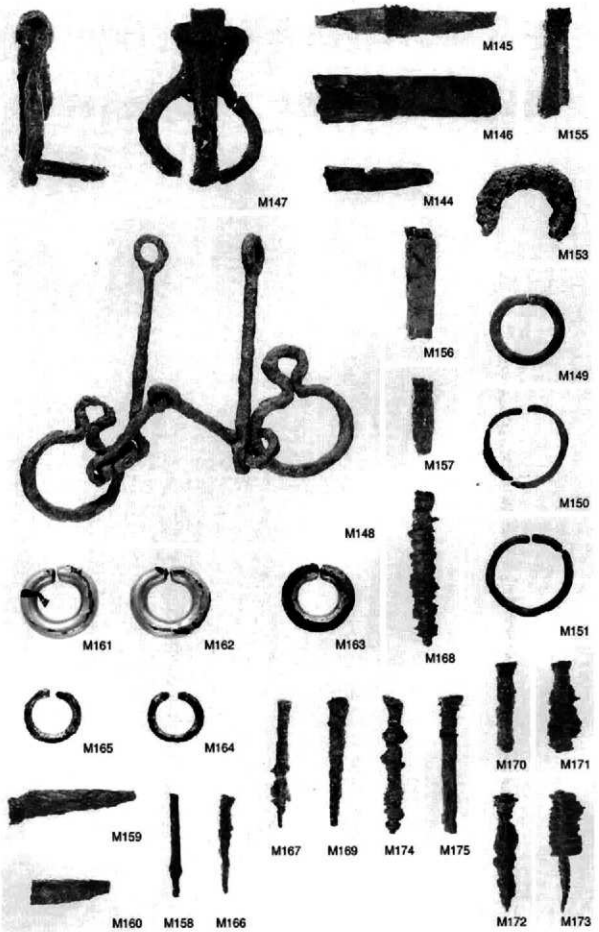
出土遺物　金属器⑥



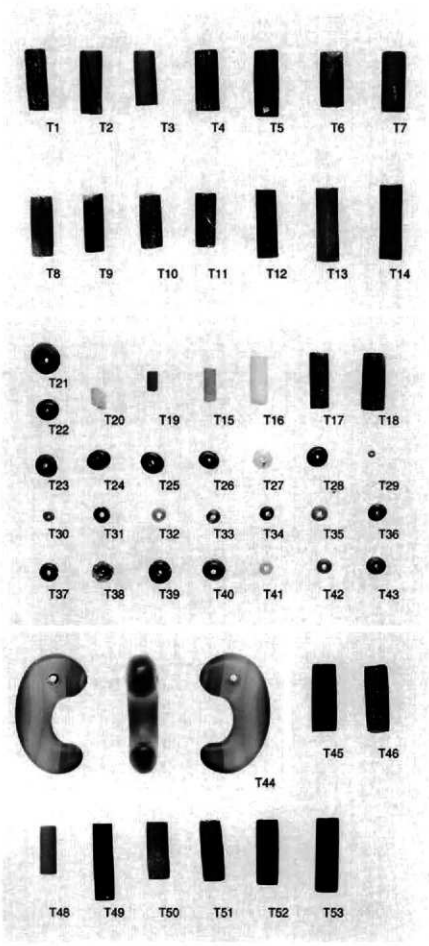
出土遺物　金属器⑦


M118
M120
M119
M121
M130
M131
M132
M134
M137
M136
M133
M135
M142
M141
M138
M152
M154
M139
M140
M143

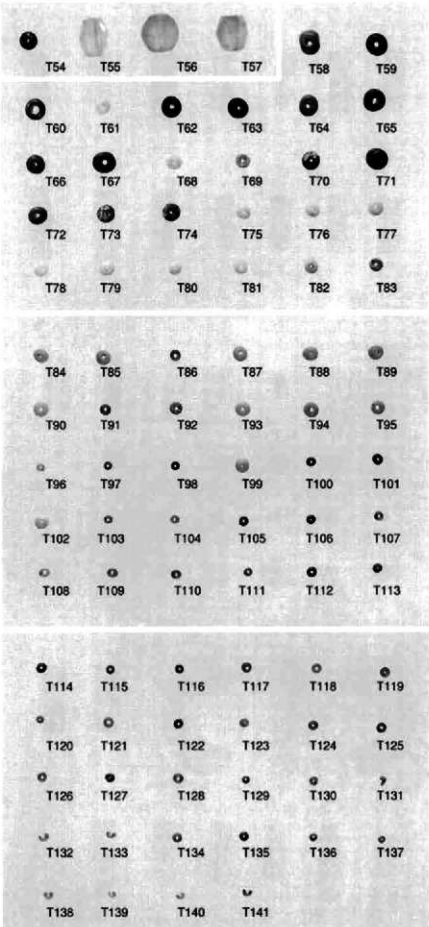
出土遺物　金属器⑧


M145
M146
M155
M147
M144
M153
M156
M149
M157
M150
M148
M151
M161
M162
M163
M168
M165
M164
M170
M171
M159
M167
M169
M174
M175
M160
M158
M166
M172
M173

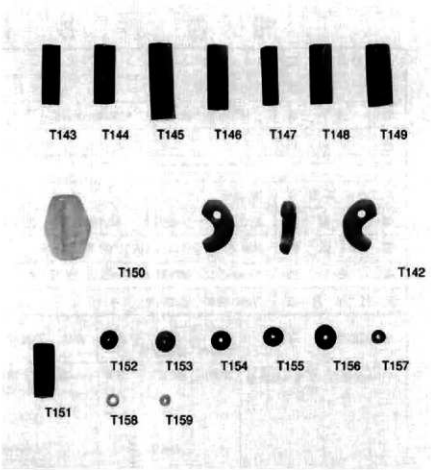
出土遺物　玉類①

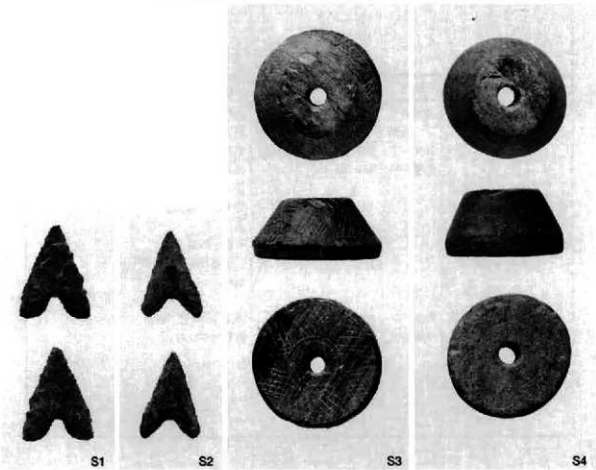

T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
T11
T12
T13
T14
T21
T22
T20
T19
T15
T16
T17
T18
T23
T24
T25
T26
T27
T28
T29
T30
T31
T32
T33
T34
T35
T36
T37
T38
T39
T40
T41
T42
T43
T44
T45
T46
T48
T49
T50
T51
T52
T53

出土遺物 土類②


T54
T55
T56
T57
T58
T59
T60
T61
T62
T63
T64
T65
T66
T67
T68
T69
T70
T71
T72
T73
T74
T75
T76
T77
T78
T79
T80
T81
T82
T83
T84
T85
T86
T87
T88
T89
T90
T91
T92
T93
T94
T95
T96
T97
T98
T99
T100
T101
T102
T103
T104
T105
T106
T107
T108
T109
T110
T111
T112
T113
T114
T115
T116
T117
T118
T119
T120
T121
T122
T123
T124
T125
T126
T127
T128
T129
T130
T131
T132
T133
T134
T135
T136
T137
T138
T139
T140
T141

出土遺物　玉類③


T143
T144
T145
T146
T147
T148
T149
T150
T142
T151
T152
T153
T154
T155
T156
T157
T158
T159


S1
S2
S3
S4

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおいちなかこふんぐん
書名	太市中古墳群
副書名	一般国道29号改築事業　発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第258冊
編著者名	柏原正民　井守徳男　深井明比古　渡辺智恵美
編集機関	兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL 078-531-7011
発行年月日	西暦2003年（平成15年）３月20日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
太市中古墳群（おおいちなかこふんぐん）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし）太市中（おおいちなか）	28561	930161 940202	35度 29分 47秒	134度 52分 05秒	全面調査 19910524 ～ 19910628 全面調査 20010511 ～ 20011115	1161㎡ 2032㎡	一般国道29号改築事業に伴う事前調査

所収遺跡	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太市中古墳群（おおいちなかこふんぐん）	古墳	古墳時代 後期 弥生～ 古墳時代	12基（1～10・12・13号墳） 横穴式石室・墳丘・周溝など。	土器（須恵器・土師器）金属器（武器・武具・馬具・農工具・装身具など） 玉類（勾玉・管玉・切子玉・算盤玉・小玉） 石器・石製品 〔滑石製紡車・打製石鏃〕	4号墳は、特異な石室形態をなす。
	墳墓	奈良～ 平安時代	木棺墓　1基	土器（須恵器平瓶） 金属器（鉄釘）	

兵庫県文化財調査報告　第258冊

太市中古墳群

－太子道野バイパス関係　発掘調査報告書－

2003（平成14）年3月20日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL　078-531-7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　野崎印刷紙業株式会社
〒603-8151 京都市北区小山下総町54-5